

京都府亀岡市

# 鹿谷古墳の研究

ーゴーランド調査古墳の研究2ー

ゴーランド・コレクション調査プロジェクト

2019年3月



京都府亀岡市

# 鹿谷古墳の研究

ーゴーランド調査古墳の研究2ー

ゴーランド・コレクション調査プロジェクト

2019年3月



## 例 言

1. 本書は、明治14（1881）年に地元民によって発掘され、ウィリアム・ゴーランド（William Gowland）が調査を行い、出土遺物を入手した京都府亀岡市鹿谷古墳の研究報告書である。なお本古墳については「鹿谷18号墳」などとも呼ばれてきたが、本書ではゴーランドが「Rokuya Dolmen」と呼んでいることなどをふまえ、「鹿谷古墳」に統一する（第3章第2節参照）。

2. Gowland の日本語表記については、「ゴーランド」以外に「ガウランド」とも呼ばれるが、本書では引用する場合を除き、「ゴーランド」に統一する。

3. 本書は、平成24年度～26年度科学研究費助成金基盤研究（B）「ゴーランドの古墳研究の総合的検証と古墳文化に対する国際的理解への活用」（課題番号：24320160 研究代表者：一瀬和夫）、平成27年度～30年度科学研究費助成金基盤研究（B）「ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築」（課題番号：15H03270 研究代表者：一瀬和夫）の研究成果の一部である。大英博物館での調査にあたって、一瀬和夫（京都橋大学）を代表とするゴーランド・コレクション調査プロジェクトを組織した（第1章参照）。

4. 鹿谷古墳の墳丘測量調査は、平成24・25（2012・2013）年にゴーランド・コレクション調査プロジェクトの一環として実施した（第3章第3節参照）。

5. 鹿谷古墳出土遺物はすべて大英博物館の所蔵品であり、平成23～29（2011～2017）年にゴーランド・コレクション調査プロジェクトチームが調査した（第3章第5・6節参照）。大英博物館での調査の概要や体制、協力者については第1章に記してある。

6. 鹿谷古墳に関する文書資料は大英博物館をはじめとする複数の機関が所蔵している（第2章参照）。京都国立博物館所蔵絵図の写真についてはすべて寿福写房・寿福滋氏により、大英博物館所蔵の文書資料および考古資料の写真についてはすべて菱田哲郎（京都府立大学）、森下章司（大手前大学）、忽那敬三（明治大学博物館）をはじめとするゴーランド・コレクション調査プロジェクトチームによるものである。

7. ゴーランド・コレクション調査プロジェクトチームが大英博物館で撮影した写真の著作権・使用权はすべて大英博物館に帰属する。転載を含む第三者による写真の利用に際しては、大英博物館の許可が必要となるので注意されたい。

8. 図版や表の遺物番号は図番号を用いる。

9. 本書の編集は森下章司の協力のもと、諫早直人（京都府立大学）・西村秀子（大手前大学史学研究所）が担当した。本書の執筆者は下記の通りである（執筆順。所属は2018年度末現在）。  
森下章司、土屋隆史（宮内庁）、奥田智子（大手前大学史学研究所）、諫早直人、前田俊雄（奈良県教育委員会）、ルーク・エジントン・ブラウン（Luke Edgington-Brown。京都府立京都学・歴史館、セインズベリー日本藝術研究所）、一瀬和夫、金宇大（京都大学白眉センター）、片山健太郎（奈良文化財研究所）、竹村亮仁（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、富山直人（神戸市図書館）、佐々木憲一（明治大学）

# 目次

例言	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

## 第1章 ゴーランド・コレクション調査プロジェクトの目的と成果

1. ゴーランドの調査・研究の特色	森下章司	1
2. ゴーランド評価のあゆみ		2
3. 本調査プロジェクトの目的		3
4. これまでの調査研究成果		4

## 第2章 鹿谷古墳の発見とその後の調査研究

1. 鹿谷古墳の発見と京都府による対応	土屋隆史	20
(1) 発見から見分に至る経緯		20
(2) 京都府による調査の内容—古墳見分日記—		21
(3) 絵図の作成		23
2. 鹿谷古墳出土遺物をめぐる中央官庁の対応		25
(1) 宮内省と農商務省の対応		25
(2) ゴーランドが出土遺物を入手した経緯		26
3. 鹿谷古墳に対するゴーランドの調査・研究		27
(1) 大英博物館、ロンドン古物学協会が所蔵するゴーランド文書資料	奥田智子・土屋隆史	27
(2) ゴーランドの調査活動	奥田智子・諫早直人	35
(3) ゴーランドの検討と評価		37
4. 大英博物館所蔵後の研究抄史	諫早直人	40
(1) 戦前		40
(2) 戦後		42
5. 鹿谷古墳関係文書資料		45
(1) 国内所蔵文書資料	土屋隆史	45
(2) ゴーランド文書資料	奥田智子・前田俊雄・ルーク エジントン・ブラウン・土屋隆史	62

## 第3章 鹿谷古墳とその出土遺物の調査

1. ゴーランド・コレクション調査プロジェクトによる鹿谷古墳の調査	諫早直人	84
2. 鹿谷古墳(1881年発掘墳)の名称について		84
3. 墳丘	一瀬和夫	89
(1) 立地		90
(2) 墳丘		91

(3) 外表施設と内部構造 .....	91
(4) 墳形について .....	93
(5) 絵図との比較検討 .....	93
(6) 小 結 .....	94
4. 横穴式石室の構造と出土状況の復元 .....	95
(1) 石室構造 .....	奥田智子 95
(2) 出土状況の復元 .....	奥田智子・諫早直人 97
5. 鹿谷古墳出土遺物 .....	98
(1) 出土遺物の概要 .....	諫早直人 98
(2) 刀剣類 .....	金宇大・土屋隆史 99
(3) 馬 具 .....	諫早直人・片山健太郎・金宇大 103
(4) 玉 類 .....	竹村亮仁・諫早直人 120
(5) 須恵器 .....	前田俊雄・富山直人 121
6. 関連遺物 .....	124
(1) 関連遺物の概要 .....	諫早直人 124
(2) 馬 具 .....	諫早直人・片山健太郎・金宇大 124
(3) 耳 環 .....	諫早直人 130
(4) 須恵器 .....	前田俊雄・富山直人 131
<b>第 4 章 考 察</b>	
1. 国内所蔵文書資料 .....	土屋隆史 137
2. 横穴式石室 .....	奥田智子 140
3. 刀剣類 .....	金宇大・土屋隆史 145
4. 馬 具 .....	片山健太郎 148
5. 須恵器 .....	前田俊雄 158
<b>第 5 章 総 括</b>	
1. ゴーランド・コレクション調査プロジェクトと鹿谷古墳 .....	諫早直人 164
2. 鹿谷古墳の発見とその後の調査研究 .....	165
(1) 鹿谷古墳の発見 .....	165
(2) 鹿谷古墳出土遺物をめぐる中央官庁の対応 .....	165
(3) 鹿谷古墳に対するゴーランドの調査・研究 .....	166
3. 鹿谷古墳とその出土遺物の調査・研究 .....	166
(1) 古墳の名称 .....	166
(2) 鹿谷古墳の基礎情報 .....	167
(3) 鹿谷古墳の築造年代と位置づけ .....	169
4. 今後の課題 .....	169
英文抄録 .....	173
英文目次 .....	177
図 版	

## 挿 図 目 次

図 1	宮 A「第三号 丹波国南桑田郡鹿谷村二於テ発掘ノ古墳ニ付キ、宮内卿へ上申ノ件（七月）」 『考証録 明治十四年』（宮内庁宮内公文書館所蔵）	21
図 2	英 C2「鹿谷古墳群の石柵を持つ石室図」[No.3（106）、No.6（107）]（The British Museum 所蔵）	33
図 3	英 C7-2「鹿谷古墳出土台付子持壺と「Kawachi」の台付三連壺の図」（The British Museum 所蔵）	34
図 4	英 D1「ゴーランド1897年論文に使用した馬具の図と類似する図」（The British Museum 所蔵）	34
図 5	ゴーランド1897年論文に掲載された鹿谷古墳出土遺物	39
図 6	若林論文に掲載された鹿谷古墳の横穴式石室と馬具	40
図 7	梅原論文に掲載された鹿谷古墳の横穴式石室	41
図 8	『ガウランド 日本考古学の父』に掲載された鹿谷古墳出土遺物および関連遺物の実測図	43
図 9	池上論文に掲載された鹿谷古墳の須恵器	44
図10	京 B-1「古墳群までの略地図」翻刻（京都国立博物館所蔵）（土屋隆史作成）	57
図11	京 B-2「古墳の分布図」翻刻（京都国立博物館所蔵）（土屋隆史作成）	57
図12	京 B-3「墳丘および石室図」翻刻（京都国立博物館所蔵）（土屋隆史作成）	58
図13	京 A「遺物の図面 1」翻刻（1）（京都国立博物館所蔵）（土屋隆史作成）	58
図14	京 A「遺物の図面 1」翻刻（2）（京都国立博物館所蔵）（土屋隆史作成）	59
図15	京 A「遺物の図面 1」翻刻（3）（京都国立博物館所蔵）（土屋隆史作成）	60
図16	京 A「遺物の図面 1」翻刻（4）（京都国立博物館所蔵）（土屋隆史作成）	61
図17	京 B-4「遺物の図面 2」翻刻（京都国立博物館所蔵）（土屋隆史作成）	62
図18	英 A1-1「古墳の分布図」翻刻（The British Museum 所蔵）（奥田智子作成）	63
図19	英 A1-2「鹿谷古墳墳丘図」翻刻（The British Museum 所蔵）（奥田智子作成）	64
図20	英 A1-3「鹿谷古墳墳丘・横穴式石室図」翻刻（The British Museum 所蔵）（奥田智子作成）	64
図21	英 B2「古墳群までの略地図」翻刻（The British Museum 所蔵）（土屋隆史作成）	77
図22	英 B3「古墳の分布図」翻刻（The British Museum 所蔵）（土屋隆史作成）	77
図23	鹿谷古墳群の位置	85
図24	鹿谷古墳の位置（1972年時点）	86
図25	鹿谷古墳の位置（1986年時点）	87
図26	鹿谷古墳の位置（2002年時点）	87
図27	鹿谷古墳の位置（2019年現在）	88
図28	行者山南麓における古墳の分布	89
図29	鹿谷古墳とその周辺における古墳の分布	90
図30	鹿谷古墳墳丘測量図	92
図31	鹿谷古墳横穴式石室図	96
図32	鹿谷古墳ほか出土遺物集合写真（英 C5合成、加筆）（The British Museum 所蔵）	99
図33	鉄刀実測図（金字大製図）	101
図34	振り環・双魚佩実測図（金字大・土屋隆史製図）	102



図35	双魚佩細部写真 (The British Museum 所蔵)	102
図36	f 字形鏡板轡実測図 (諫早直人製図)	104
図37	f 字形鏡板の計測位置	105
図38	八角形鏡板轡実測図 (諫早直人製図)	106
図39	鞍金具実測図 ( 1 ) (諫早直人製図)	108
図40	鞍金具実測図 ( 2 ) (諫早直人製図)	109
図41	鞍金具実測図 ( 3 ) (諫早直人・片山健太郎製図)	110
図42	剣菱形杏葉実測図 (金宇大製図)	111
図43	五角形杏葉実測図 (金宇大製図)	112
図44	鉢状雲珠実測図 (片山健太郎製図)	114
図45	鉢状辻金具実測図 ( 1 ) (片山健太郎製図)	115
図46	鉢状辻金具実測図 ( 2 ) (片山健太郎製図)	116
図47	透入方形飾金具実測図 ( 1 ) (片山健太郎製図)	117
図48	透入方形飾金具実測図 ( 2 ) (片山健太郎製図)	118
図49	爪形飾金具実測図 (片山健太郎製図)	120
図50	絵図に描かれた玉類 (京都国立博物館所蔵)	120
図51	絵図と対応する可能性のある土玉写真 (The British Museum 所蔵)	120
図52	須恵器実測図 (前田俊雄・富山直人製図)	122
図53	絵図に描かれた須恵器埴 (京都国立博物館所蔵)	123
図54	素環轡実測図 (諫早直人製図)	125
図55	素環轡復元展開図 (諫早直人製図)	126
図56	鏡鞞実測図 (片山健太郎製図)	126
図57	剣菱形杏葉実測図 (金宇大製図)	127
図58	鉢状辻金具実測図 (片山健太郎製図)	128
図59	方形飾金具実測図 (片山健太郎製図)	128
図60	そのほかの馬具実測図 (片山健太郎製図)	129
図61	集合写真に写る耳環 (The British Museum 所蔵)	130
図62	耳環実測図 (諫早直人製図)	130
図63	須恵器実測図 (前田俊雄・富山直人製図)	131
図64	ゴーランド文書資料にみえる鹿谷古墳群の石棚、仕切石を持つ横穴式石室 (The British Museum 所蔵)	140
図65	亀岡盆地の石棚、仕切石を持つ横穴式石室	141
図66	石棚上に遺物を有する横穴式石室	142
図67	双魚佩とその類例	146
図68	f 字形鏡板轡とその類例	149
図69	剣菱形杏葉とその類例	150
図70	八角形鏡板轡とその類例	151
図71	五角形杏葉とその類例	152
図72	鉢状辻金具 3 類とその類例	153
図73	鹿谷古墳出土主要馬具の編年的位置づけ (片山健太郎作成)	154
図74	鹿谷古墳 A セットの馬装復元 (片山健太郎作成)	154

図75	鹿谷古墳 Bセットの馬装復元 (片山健太郎作成) .....	155
図76	鹿谷古墳出土台付子持壺復元図 (前田俊雄作成) .....	158
図77	近畿地方出土台付子持壺 .....	159

## 表目次

表 1	鹿谷古墳出土遺物をめぐる経過 (土屋隆史・諫早直人作成) .....	22
表 2	大英博物館所蔵鹿谷古墳関係ゴーランド文書資料一覧 (奥田智子作成) .....	30
表 3	ゴーランドの調査した鹿谷古墳群の横穴式石室一覧 (諫早直人作成) .....	38
表 4	鹿谷古墳 (1881年発掘墳) の主な名称 (諫早直人作成) .....	86
表 5	鹿谷古墳出土遺物一覧 (諫早直人作成) .....	99
表 6	鉄刀の計測値 (金字大作成) .....	100
表 7	f字形鏡板の計測値 (諫早直人作成) .....	105
表 8	剣菱形杏葉の計測値 (金字大作成) .....	111
表 9	五角形杏葉の計測値 (金字大作成) .....	111
表10	透入方形飾金具の計測値 (片山健太郎作成) .....	119
表11	爪形飾金具の計測値 (片山健太郎作成) .....	120
表12	鹿谷古墳出土遺物の可能性を含む関連遺物一覧 (諫早直人作成) .....	124
表13	鏡鞆の計測値 (片山健太郎作成) .....	126
表14	剣菱形杏葉の計測値 (金字大作成) .....	127
表15	方形飾金具の計測値 (片山健太郎作成) .....	128
表16	吊金具の計測値 (片山健太郎作成) .....	129
表17	不明金具の計測値 (片山健太郎作成) .....	129
表18	集合写真に写る耳環とゴーランド考古資料の耳環計測値 (諫早直人作成) .....	130
表19	鹿谷古墳出土馬具一覧 (諫早直人作成) .....	132
表20	鹿谷古墳出土馬具の可能性を含む関連馬具一覧 (諫早直人作成) .....	133
表21	石棚上に遺物を有する横穴式石室 (奥田智子作成) .....	142
表22	分離式磯金具鞍の諸例 (片山健太郎作成) .....	153
表23	亀岡盆地における古墳出土土器組成 (前田俊雄作成) .....	160

## 図版目次

- 図版 1 鹿谷古墳関係文書資料 ( 1 )  
茶ノ木山ノ峯ニアル古墳直上ヨリ見ル図 (京 B-3、京都国立博物館所蔵)  
古墳ヲ右側面ヨリ見ル図 (京 B-3、京都国立博物館所蔵)
- 図版 2 鹿谷古墳関係文書資料 ( 2 )  
「墳丘および石室図」(京 B-3、京都国立博物館所蔵)  
石郭内古器所在ノ位置直上ヨリ見ル図、石郭内ヲ切斷シ側面ヨリ結構ヲ見ル図 (京 B-3、京都国立博物館所蔵)
- 図版 3 鹿谷古墳関係文書資料 ( 3 )  
「古墳の分布図」(京 B-2、京都国立博物館所蔵)  
「古墳の分布図」(英 B3、The British Museum 所蔵)
- 図版 4 鹿谷古墳関係文書資料 ( 4 )  
「古墳群までの略地図」(京 B-1、京都国立博物館所蔵)  
「古墳群までの略地図」(英 B2、The British Museum 所蔵)
- 図版 5 鹿谷古墳関係文書資料 ( 5 )  
「遺物の図面 1 」(京 A、京都国立博物館所蔵)
- 図版 6 鹿谷古墳関係文書資料 ( 6 )  
「遺物の図面 1 」(京 A、京都国立博物館所蔵)
- 図版 7 鹿谷古墳関係文書資料 ( 7 )  
「遺物の図面 1 」(京 A、京都国立博物館所蔵)
- 図版 8 鹿谷古墳関係文書資料 ( 8 )  
「遺物の図面 2 」(京 B-4、京都国立博物館所蔵)
- 図版 9 鹿谷古墳関係文書資料 ( 9 )  
「古墳の分布図」(英 A1-1、The British Museum 所蔵)  
墳丘、横穴式石室各部位と遺物出土状況の説明 (英 A1-2・A1-4、The British Museum 所蔵)
- 図版10 鹿谷古墳関係文書資料 (10)  
墳丘と横穴式石室図 (英 A1-3、The British Museum 所蔵)  
横穴式石室各部位と遺物の説明 (鉄刀、馬具) (英 A1-5・A1-6、The British Museum 所蔵)
- 図版11 鹿谷古墳関係文書資料 (11)  
遺物の説明 (馬具、振り環、双魚佩、玉類など) (英 A1-7・A1-8、The British Museum 所蔵)  
遺物の説明 (須恵器) (英 A1-9・A1-10、The British Museum 所蔵)
- 図版12 鹿谷古墳関係文書資料 (12)  
鹿谷古墳群の石柵を持つ横穴式石室 [Midozuka (No. 1)] (英 C1-5、The British Museum 所蔵)  
ゴーランドによる Midozuka 古墳の測量図 (英 C1-1、The British Museum 所蔵)
- 図版13 鹿谷古墳関係文書資料 (13)  
鹿谷古墳群の石柵を持つ横穴式石室 [No. 6] (英 C4-2、The British Museum 所蔵)  
鹿谷古墳群の石柵を持つ横穴式石室 [No. 3] (英 C3、The British Museum 所蔵)
- 図版14 鹿谷古墳関係文書資料 (14)  
鹿谷古墳ほか出土遺物集合写真 (英 C5合成、The British Museum 所蔵)

鹿谷古墳ほか出土遺物集合写真の一部（中左：英 C5-2、中右：英 C5-1のポジ、The British Museum 所蔵）

鹿谷古墳ほか出土遺物写真（下左：英 C6-2、下右：英 C7-1のポジ、The British Museum 所蔵）

- 図版15 鹿谷古墳出土遺物 刀剣  
鉄刀 33-1・2 振り環 34-1 双魚佩 34-2・3、細部（The British Museum 所蔵）
- 図版16 鹿谷古墳出土遺物 馬具（1）  
馬具 A セット（The British Museum 所蔵）
- 図版17 鹿谷古墳出土遺物 馬具（2）  
馬具 B セット（The British Museum 所蔵）
- 図版18 鹿谷古墳出土遺物 馬具（3）  
f 字形鏡板轡 36-1（The British Museum 所蔵）
- 図版19 鹿谷古墳出土遺物 馬具（4）  
八角形鏡板轡 38-1・3（The British Museum 所蔵）
- 図版20 鹿谷古墳出土遺物 馬具（5）  
剣菱形杏葉 42-1～3（The British Museum 所蔵）
- 図版21 鹿谷古墳出土遺物 馬具（6）  
剣菱形杏葉 42-4・5、斜めから・細部（The British Museum 所蔵）
- 図版22 鹿谷古墳出土遺物 馬具（7）  
五角形杏葉 43-2・5・6・7・9（The British Museum 所蔵）
- 図版23 鹿谷古墳出土遺物 馬具（8）  
鞍金具 39～41（The British Museum 所蔵）
- 図版24 鹿谷古墳出土遺物 馬具（9）  
鉢状雲珠 44 鉢状辻金具 45-3・5、細部（The British Museum 所蔵）
- 図版25 鹿谷古墳出土遺物 須恵器（1）  
台付子持壺 52-1・2・4・5 蓋 52-3（The British Museum 所蔵）
- 図版26 鹿谷古墳出土遺物 須恵器（2）  
台付子持壺 52-1 蓋 52-3（The British Museum 所蔵）
- 図版27 鹿谷古墳出土遺物 須恵器（3）  
台付子持壺蓋 52-3 杯蓋 52-6 杯身 52-7 広口壺口縁部 52-8（The British Museum 所蔵）
- 図版28 鹿谷古墳群遠景  
北東から  
西から
- 図版29 鹿谷古墳墳丘・石室付近状況  
墳丘 北東から  
石室付近 南から
- 図版30 鹿谷古墳出土遺物 刀剣  
鉄刀 33-1・2（The British Museum 所蔵）
- 図版31 鹿谷古墳出土遺物 振り環・双魚佩  
振り環 34-1 双魚佩上部金具 34-2 双魚佩魚形金具 34-3（The British Museum 所蔵）
- 図版32 鹿谷古墳出土遺物 馬具（1）  
f 字形鏡板轡 36-1（The British Museum 所蔵）

- 図版33 鹿谷古墳出土遺物 馬具 ( 2 )  
f 字形鏡板轡 36-1 引手壺 36-2 (The British Museum 所蔵)
- 図版34 鹿谷古墳出土遺物 馬具 ( 3 )  
八角形鏡板轡 38-1 (The British Museum 所蔵)
- 図版35 鹿谷古墳出土遺物 馬具 ( 4 )  
八角形鏡板轡 38-1 引手壺 38-2 吊金具 38-3 (The British Museum 所蔵)
- 図版36 鹿谷古墳出土遺物 馬具 ( 5 )  
洲浜金具・磯金具 (前輪側) 39-1 磯金具 (後輪側) 40-2・3、41-11 (The British Museum 所蔵)
- 図版37 鹿谷古墳出土遺物 馬具 ( 6 )  
洲浜金具・磯金具 (前輪側) 39-1 磯金具 (後輪側) 40-2・3、41-11 覆輪 41-4~10 (The British Museum 所蔵)
- 図版38 鹿谷古墳出土遺物 馬具 ( 7 )  
劍菱形杏葉 42-1・2 (The British Museum 所蔵)
- 図版39 鹿谷古墳出土遺物 馬具 ( 8 )  
劍菱形杏葉 42-3・4 (The British Museum 所蔵)
- 図版40 鹿谷古墳出土遺物 馬具 ( 9 )  
劍菱形杏葉 42-5、斜めから (The British Museum 所蔵)
- 図版41 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (10)  
五角形杏葉 43-1~3 (The British Museum 所蔵)
- 図版42 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (11)  
五角形杏葉 43-4~6 (The British Museum 所蔵)
- 図版43 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (12)  
五角形杏葉 43-7~9 (The British Museum 所蔵)
- 図版44 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (13)  
五角形杏葉 43-10 43-1・7吊金具 吊金具 43-11 (The British Museum 所蔵)  
馬具細部 (The British Museum 所蔵)  
1 f 字形鏡板轡銜 (36-1) 2 八角形鏡板裏側 (38-1) 3 磯金具鉸脚の折り曲げ・織物 (39-1)  
4 五角形杏葉鉸脚の折り曲げ (43-4)
- 図版45 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (14)  
鉢状雲珠 44 (The British Museum 所蔵)
- 図版46 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (15)  
鉢状辻金具 45-1~3 (The British Museum 所蔵)
- 図版47 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (16)  
鉢状辻金具 45-4・5 46-6 (The British Museum 所蔵)
- 図版48 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (17)  
鉢状辻金具 46-7~9 (The British Museum 所蔵)
- 図版49 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (18)  
鉢状辻金具 46-10・11  
透入方形飾金具 47-1~9 48-10 (The British Museum 所蔵)
- 図版50 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (19)

透入方形飾金具 48-11～22 (The British Museum 所蔵)

- 図版51 鹿谷古墳出土遺物 馬具 (20)  
爪形飾金具 49-1～4 (The British Museum 所蔵)  
馬具の有機質細部 (The British Museum 所蔵)  
1 覆輪内面の木質 (41-4) 2 五角形杏葉裏面の織物 (43-7) 3 鉢状雲珠の繫の織物 (44)  
4 鉢状雲珠の繫 (44) 5 透入方形飾金具の縁飾 (48-19) 6 透入方形飾金具の別材巻繫と縁飾 (48-19)
- 図版52 鹿谷古墳出土遺物 須恵器 (1)  
台付子持壺 52-1 (J.1・甲) (The British Museum 所蔵)
- 図版53 鹿谷古墳出土遺物 須恵器 (2)  
台付子持壺 52-2 (J.3・丁) (The British Museum 所蔵)
- 図版54 鹿谷古墳出土遺物 須恵器 (3)  
台付子持壺 52-4 (J.2) (The British Museum 所蔵)
- 図版55 鹿谷古墳出土遺物 須恵器 (4)  
台付子持壺 52-5 (J.1a・丙) (The British Museum 所蔵)
- 図版56 鹿谷古墳出土遺物 須恵器 (5)  
台付子持壺蓋 52-3 (J.1・乙) 杯蓋 52-6 (J.4) 杯身 52-7 (J.4) 広口壺口縁部 52-8 (The British Museum 所蔵)
- 図版57 関連遺物 馬具 (1)  
素環轡 54-1～4 (笹原古墳出土か) 鍔鞆 56-1～9 (56-9は芝山古墳出土か) (The British Museum 所蔵)
- 図版58 関連遺物 馬具 (2)  
剣菱形杏葉 57-1・2 (笹原古墳出土か) (The British Museum 所蔵)
- 図版59 関連遺物 馬具 (3)  
剣菱形杏葉 57-3 (笹原古墳出土か) 鉢状辻金具 58-1 (The British Museum 所蔵)
- 図版60 関連遺物 馬具 (4)  
方形飾金具 59-1～8 吊金具 60-1～4 (The British Museum 所蔵)
- 図版61 関連遺物 馬具 (5)・耳環  
吊金具ほか 60-5～9 耳環 62-1～3 (The British Museum 所蔵)
- 図版62 関連遺物 須恵器  
杯身 63-1 高杯杯部 63-2 高杯脚部 63-3 器台脚部 63-4 甕胴部 63-5 (The British Museum 所蔵)

# 第 1 章 ゴーランド・コレクション調査プロジェクトの 目的と成果

本書にまとめた鹿谷古墳に関する調査研究は、平成23（2011）年度から進めてきたゴーランド・コレクション調査プロジェクトの成果のひとつである。報告に先立ち、本プロジェクトの対象・目的・方法とこれまでの研究成果についてまとめておく。

## 1 . ゴーランドの調査・研究の特色

イギリスのウィリアム・ゴーランド（1842-1922年）は鉱山技師の技術と知識を買われ、明治4（1871）年に大阪に置かれた造幣寮（明治10年より造幣局に改称）勤務のいわゆる「お雇い外国人」として来日し、明治5～21（1872～1888）年の16年間滞在した。滞日期間中、日本の遺跡、とくに石室墳（Dolmen）に多大なる関心を抱き、数多くの調査を行った。

ゴーランドと日本考古学 ゴーランドの調査研究活動は、日本においては考古学や先史学が学問として成立する以前の時期に行われたものであった。その調査技術や内容は日本に留まらず、世界の考古学の歩みの中でも先端に位置づけられる。

19世紀は、日本だけでなくヨーロッパ考古学も黎明期であった。1836年にデンマークのクリスチャン・トムセンが三時代区分法を発表し、その英語版が1848年に発刊された。大英博物館では1866年、オーガスタス・フランクにより、三時代法にのっとった展示がなされたという〔ハリス2003〕。19世紀後半のヨーロッパは、年代論に基づいた科学的な考古学の研究方法が急速に進展・普及した時期であった。ゴーランドの著作には、日本の古代遺跡の年代に対する深い関心と考察が随処にうかがわれる〔森下2015〕。ゴーランドは新たな方法意識に基づいた考古学的な調査研究を、日本に導入した一人であるといえる。

調査・記録技術 ゴーランドの活動のもう1つの特色は、優れた調査・記録技術である。古墳の墳丘や石室の精密な図化は、とくに高く評価される場所である。奈良県コナベ古墳の測量図は、大型前方後円墳の平面形を初めて近代的な手法で正確に表現したのものとして知られている。絵図が記録の中心であった当時の日本において、突出した精度を備えた記録表現であった。

写真技術を駆使したことも特色である。日本においては写真撮影自体がようやく導入された時代に、ゴーランドは遺跡や遺物の記録方法として写真を多用した。ガラス乾板の普及が野外での撮影を可能とし、日本には1882年にもたらされた〔後藤1997a〕。光量の限られた横穴式石室内での撮影など、工夫を凝らした貴重な写真資料が多数残されている〔後藤2003〕。

こうした日本での調査成果は、イギリス帰国後に論文として発表された。代表作である‘The dolmens and burial mounds in Japan’〔Gowland1897〕はその集大成であり、明治10（1877）年に大森貝塚を発掘したエドワード・モースとともに考古学による日本研究の最初の成果と位置づけられる。

ゴーランド・コレクション ゴーランドが収集した膨大な考古資料、それに関わる調査記録・文献を総称して本プロジェクトでは「ゴーランド・コレクション」としている。その中で考古遺物を指す際には、ゴーランド考古資料（Gowland Objects）、記録・文献・写真資料について示すときには、ゴーランド文書資料（Gowland Documents）と表すことにする。本プロジェクトは各地域・時代にわたるゴーランド・コレクションの中で、彼がもっとも力を入れた古墳時代の資料を研究対象としている。

その資料は数が多いだけでなく、学術的な質が極めて高いことも特徴である。欧米に存在するほかの日本考古資料コレクションと異なるのは、芝山古墳の発掘品をはじめとして、資料の出土地など由来が確かなものを多く含む点にある。調査記録（ゴーランド文書資料）を参照することにより、出土古墳の情報も豊富に得ることが可能である。現在では亡失した遺跡に関わる重要資料も含まれており、単に欧米で所蔵された日本考古資料という以上の価値を有する。

## 2. ゴーランド評価のあゆみ

ゴーランドの調査研究成果は滞日中には発表されず、帰国後、英文雑誌に論文として掲載された。また調査研究成果のすべてが形になったわけではなく、帰国後も、論文には反映されていない様々な検討を行っていたことが文書資料からうかがえる。

膨大なコレクションの全体像も紹介されていない。収集資料は論文での引用という形で部分的に取り上げられており、カタログや資料報告などは刊行されなかった。また調査の手法も日本では伝授されることがなかった。

その結果、優れた調査法や研究成果はその後の日本の考古学の成立に直接にはつながらなかった。「学界がその実力を関知していなかったことは、その後のいわば20世紀の日本考古学、とくに古墳研究に大きなダメージを与え」た〔大塚2003〕。イギリスに持ち帰った膨大な考古資料や調査記録も、すぐに古墳研究に活用されたわけではなかった。

大正年間には濱田耕作や森本六爾などの考古学研究者が、ゴーランドの業績の評価や調査資料の利用を行ってはいる〔富山2015d〕。しかし日本において、ゴーランドの研究成果が各面において徐々に浸透し、評価が高まってゆくのは戦後のことである。以下、その過程を整理しよう。

**前方後円墳測量図** ゴーランドの調査成果のうち、早くから日本の研究者に引用されたのは、前方後円墳の測量図である。森本六爾は論文中にコナベ古墳や榎原丸山古墳の測量図を引用した〔森本1927・1929〕。天皇陵の測量図が公表されてはいなかった戦前において、大型前方後円墳の正確な形状を示すのに好適な図であった。

戦後も上田宏範は、大和6号墳の調査にちなんで、それまでウワナベ古墳のものと誤解されてきた測量図がコナベ古墳であることを確認し、前方後円墳の型式学的研究を進めていった〔上田1949・1969〕。

**芝山古墳** ゴーランドの実績が戦後の日本考古学で本格的な注目をあびるようになった契機は、大阪府芝山古墳にあるだろう。昭和37（1962）年に破壊されたが、その前の昭和34（1959）年には森浩一が中心となって調査が行われた〔森1978〕。

ゴーランドは芝山古墳の最初の発掘者であり、論文中で副葬品や出土位置について詳細な記述を行っている。再調査を契機に、その精密な調査方法に改めて評価がなされるに至った。

『日本古墳文化論』昭和56（1981）年には、上田宏範・稲本忠雄の尽力により、ゴーランドの主要論文を和訳した『日本古墳文化論』〔ゴーランド1981〕が刊行された。本書はゴーランドの研究の普及に大きな役割を果たした。現存する古墳との対照を主とした注による記述も充実しており、ゴーランドの調査対象の広さが、多くの人々に知られるきっかけとなった。

**出土遺物の調査** 大英博物館所蔵のゴーランド・コレクションの本格的な紹介は、大塚初重による芝山古墳出土遺物に関する論文であろう〔大塚1977〕。大塚は大英博物館に滞在して出土遺物の種類・数を確認し、精密な実測図もふくめて精細な報告を行った。海外の博物館の所蔵調査という様々な制約が



ある中で、日本考古学流の調査が実現した最初の例となる。須恵器の検討からは「田辺昭三氏による陶邑 MT15型式、あるいは大阪府教育委員会の調査になる陶邑・光明池第Ⅱ型式に対比してよい」と時期も明確に位置づけられ、近畿における古い横穴式石室であることが改めて注目された。

池上悟も須恵器、銅鏡、石製品、銅鏃など、芝山古墳以外の多くの出土遺物を実測・報告している〔池上2004〕。本プロジェクトメンバーの富山直人は、大英博物館における長期の調査を実現させ、鹿谷古墳出土遺物の多くを実測、報告している〔富山2009〕。

榎原（見瀬）丸山古墳 ゴーランドが調査した古墳の中で、芝山古墳と並んで注目されてきたのが榎原丸山古墳である。「見瀬丸山古墳」など様々な名称で呼ばれてきた、この古墳に関して、ゴーランドは明治15（1882）年7月24日と明治17（1884）年4月3日に「Mise」の調査に行っており、墳丘写真、側面・断面図の作成を行った。石室内は水没しており、写真撮影など詳細な調査はできなかったようである。

平成3（1991）年に石室内部の写真が公開され〔猪熊（編）1992〕、また宮内庁書陵部による実測調査〔福尾1994〕が行われるに至るまで、この古墳に関する重要な情報源の一つであった。

ヴィクター・ハリスと後藤和雄 以上のような個別の古墳や出土遺物に関連してゴーランドの調査研究が注目される一方、収集資料全体についての検討や紹介は遅れていた。その量や内容に関しては知られていなかったのである。

その全体像がようやく明らかにされたのは、朝日新聞社の後藤和雄と大英博物館日本美術部のヴィクター・ハリスの仕事による。『ガウランド 日本考古学の父』（以下『日本考古学の父』と略称）と題された書物において、ゴーランド・コレクションの主要な遺物、多数の撮影写真が公表された〔ハリス・後藤2003〕。

この書物を通じ、ゴーランド・コレクションの質と量、その活動の幅広さがあらためて認識されることとなった。芝山古墳や鹿谷古墳出土遺物だけでなく、天皇陵に関わる出土遺物やさまざまな方法で入手された膨大な量の遺物の存在が明らかとなった。論文で紹介された以外の古墳の写真も数多く紹介された。

アーネスト・サトウや、ロミン・ヒッチコックなど滞日外国人や日本人との交友関係、天皇陵古墳への関心など、調査活動のさまざまな側面についても明らかにされた。ようやくゴーランドの調査研究に対する全体的な評価の重要性・必要性が示されることとなったのである。

### 3. 本調査プロジェクトの目的

以上のような、ゴーランドの調査研究活動やゴーランド・コレクションに関する従来の調査研究成果を踏まえ、本プロジェクトにおいては、古墳資料を調査対象とし、以下の研究目標を掲げた。

コレクション全体像の把握 ゴーランド自身が作成したコレクションのリストや所蔵品の完全な目録などは確認されていない。大英博物館がインターネット上で公開している所蔵品データベースがあり、主要な出土遺物の写真を提示した書籍として先述の『日本考古学の父』があるが、破片やそれぞれの出土地、遺物の種類の詳しい同定まで行ったリストは完成していない。また大英博物館において、ゴーランド・コレクションが一箇所にまとめて収蔵されているわけではないことも判明した。一部の資料は館外に保管されており、コレクションの範囲を確認することも困難である。

本プロジェクトの第一の目標は古墳出土遺物に関する詳細なリスト、データベースの作成に置いた。上記の所蔵品データベースや書籍を参照しつつ、1点ずつ確かめながらリスト作成を進めてゆくとい

う方法をとることとなった。確認した古墳関係資料については、すべて写真を撮影、できる限り実測図も作成する。その過程で個体同定、出土地の情報などを確認してゆく。

コレクション遺物には注記やラベルなど由来を示す材料は多いものの、資料の出自の判断が難しいものも数多くある。また鉄器や土器の破片などは1点1点検討し、個体識別を行ってゆく必要もある。これらはゴーランドの論考やそのほかの資料を参照して検討してゆくことが重要である。

ゴーランドの調査研究の評価 日本におけるゴーランドの調査研究活動は孤立的なものではなかった。『日本考古学の父』でも示されたように、周囲の日本人や外国人との交流の中で資料の入手、遺跡の存在の確認などが進められたものである。優れた調査技術や研究視点も周囲との交流の中で育成された可能性が高い。ゴーランドの調査研究活動の実態、研究手法を明治期の社会状況の中で検討し、その先進性を明らかにする必要がある。

古墳研究への活用 今日の研究水準に基づいた調査検討を行うことにより、ゴーランド・コレクションを古墳研究の進展に活用する。精密な実測図の作成やレーザー3次元計測を進める。榎原丸山古墳や鹿谷古墳群など現在も残されている古墳の再調査も並行して行い、それらの重要古墳の再評価と古墳時代研究の新展開をはかる。

成果の国際発信 ゴーランド・コレクションは欧米の博物館所蔵の日本考古資料の中で質量ともに最大のものであり、また大英博物館日本展示室の主要な展示品として利用されている。この利点を活かし、古墳研究の成果を国際発信するために役立てる。

主要な調査研究がイギリスで行われることによって、活動自体が研究の国際交流につながることも期待される。日英両国におけるシンポジウムや刊行物、コレクションのデータベース作成と大英博への提供を通じて、研究成果を共有し、国内外に広める。

パブリック・アーケオロジー 調査研究成果を学術面だけでなく、広く市民に公開し、普及へと活用することも重要な目的である。ゴーランドが日本で得た資料が現在大英博物館にあるという点に関しては、鹿谷古墳の所在する亀岡など、関係地域では特別な関心をもたれている。また逆にイギリスからの「お雇い外国人」が日本で果たした役割に関しては、イギリス市民の興味を引いている。調査研究活動を広く共有し、国際的なパブリック・アーケオロジーの実践に結び付けてゆく。

調査研究体制 以上のような目的を達成するための調査組織として、一瀬和夫を代表として、古墳時代を専門とする研究者のほか、国内の関係資料所蔵機関の研究者やパブリック・アーケオロジー、分析科学の専門家を集めて調査チームを結成した。イギリス側では大英博物館の担当者・学芸員のほか、英日の考古学・学術交流に実績を持つセインズベリー日本藝術文化研究所の研究者の協力も得た。平成24年度からは科学研究費助成金も得て、末尾に付けた体制の元で調査研究を進めた。

#### 4. これまでの調査研究成果

コレクションの全体像 ゴーランド・コレクションの古墳資料については、それらがどのような形で入手されたものかという点から、以下のように分類・整理している。出土地や出土状況に関する情報の有無とも関係する指標である。

##### A 自ら発掘して得た遺物（芝山古墳）

自らの踏査・測量調査中に採取した遺物も含む（耳原古墳・山本古墳群・天皇陵古墳出土遺物ほか）

##### B 他者から譲渡された資料のうち、出土地情報が確認できる遺物（鹿谷古墳ほか ナウマン提供土器）

- C 他者から譲渡された資料のうち、出土地情報が伝聞に留まる遺物
- D 出土地不明遺物（購入品、寄贈品ほか）

本書で報告する鹿谷古墳はBに属する。不時の発見による出土遺物であり、また複数の古墳の出土遺物が混在している。しかし出土地ははっきりしており、また出土古墳や掘り出された状況に関する記録がイギリスと日本とに残されている。遺物だけでなく、こうした記録類も含めた総合的な検討が必要な資料である。

基礎資料の報告 実測・写真撮影や検討の終了した遺物、文書資料、あるいはゴーランドが調査した遺跡については、まとまりごとに報告を行ってきた。

- 島根・出雲の横穴式石室〔富山2016a〕
- 島根・安井横穴〔西村2013・2015・2016〕
- 高知・領石村古墳（笹原古墳）、朝倉古墳〔富山2012a・2018〕
- 兵庫・白鳥塚古墳〔岡本2016a、富山2016b、奥田（編）2017〕
- 兵庫・十善寺古墳〔富山2015b〕
- 兵庫・山本古墳群〔前田2017〕
- 大阪・芝山古墳〔金2015・土屋2012・2015、富山2012b・2015a〕
- 大阪・高安古墳群〔富山2015c〕
- 大阪・桜井谷窯跡群〔菱田2012・2015・2016〕
- 大阪・將軍塚古墳〔菱田2015〕
- 大阪・耳原古墳〔菱田2016〕
- 大阪・太古塚出土陶棺〔前田2012・2015〕
- 奈良・橿原丸山古墳〔一瀬2012b、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト2015〕
- 京都・鹿谷古墳〔出土馬具：諫早・片山2014、諫早2015・2016、古墳群と墳丘：一瀬・荒木2015、富山・笹栗2015、絵図・文書資料：土屋2017、宮川2016〕
- 京都・甲塚古墳〔岡本2016b〕
- 岐阜・美濃赤坂出土須恵器〔前田2014〕
  
- 銅鏡〔森下2012〕
- 玉類〔竹村2017〕
- 埴輪〔一瀬・岡本2016〕
- 天皇陵関係土器〔一瀬・富山・前田2016〕
- ゴーランド直筆ノート〔竹村2013・2015a・2015b・2016〕

新資料の発見 こうした基礎的な調査を進める中で、これまで存在が知られていなかった新たな資料の発見もいくつかあった。大阪・將軍塚古墳と耳原古墳から出土した須恵器片は横穴式石室の年代を検討する上で重要な手がかりとなった〔菱田2015・2016〕。

また桜井谷窯採取の須恵器片は、ゴーランドが墳墓のみならず古代の「生産」に関心を払っていたことを示す貴重な資料となった〔菱田2012・2015〕。そのほか太古塚古墳出土陶棺の栓の確認〔前田2012〕、芝山古墳の出土遺物に多数の振り環頭が含まれていること〔金2014〕など、主として土器や鉄製品の破片類の調査から新たな資料がいくつも確認された。

ゴーランドの調査研究活動の復元 ゴーランドが日本で行った調査の履歴〔富山2014a・b〕や交友関

係〔ハリス・後藤2003、宮川2016、富山2013・2014a・2014b・2015d・2018〕については多くの事実が判明しつつある。調査に当たっては地元の人々など多くの協力者があり、様々な資料が提供された。本書で鹿谷古墳群出土遺物の入手経緯について詳細に触れているように、「購入」によって資料を獲得する具体的な状況が明らかとなってきた。

研究手法に関してもアーネスト・サトウをはじめとした外国人や、日本の研究者からも様々な影響を受けて深化していったことがわかる。

また優れた調査技術の系譜についても判明しつつある。遺跡の測量法は、イギリスのピット・リバーズが採用した精密な測量技術の流れを引くものであろう。横穴式石室の石積みの図化や計測法は、エドワード・モースやハインリッヒ・ナウマンの手法を取り入れたものらしい〔富山2014a・2014b〕。

芝山古墳で実施されたグリッドによる遺物の原位置記録法などは、栃木県足利公園古墳で副葬品の原位置記録を提示した坪井正五郎、イギリスの洞窟遺跡の調査において3次元のグリッド記録を行ったウィリアム・ペングレイたちの試みと関係する〔Edgington-Brown 2018〕。

ゴーランドの学史的評価 以上のようなコレクションや古墳の研究を通じて、ゴーランドの研究体系を考古学史の中で位置づけてゆく必要がある。これについては文書資料の全体的な検討など、さらに詳細な作業が今後求められる。

今までも高く評価されてきた調査研究方法の先進性に加え、「年代」や「生産」といった後の考古学において基本となる視点が醸成されていたことが判明した。その研究の先進性と背景について、さらに究明することが可能である。

パブリック・アーケオロジーの実践 ゴーランドやそのコレクションの学術研究を元に、本プロジェクトでは、日英、そして日本の中でもゴーランドが調査に関わった地域において、その成果を広く発信してゆくことを重要な目標としている。日本の出土遺物が大英博物館の一角に一定の面積で展示されていること、日英双方にまたがる研究者であったことなど、ゴーランド・コレクションの存在は、日本と欧米の考古学研究を結びつける上でも重要である。また日本の各地で行った調査に関しては、極めて早い段階に外国人が地域の遺跡の調査研究に関わったという点で地元の関心も高い。

専門的な研究成果を様々な形で普及させてゆくパブリック事業として、日英両国、そして京都・島根・岐阜など関係地域でのシンポジウム・ワークショップを積極的に実施した。

コレクションのデータベース、写真・図面など調査記録はすべて大英博物館に写しを提供し、その一部は館の所蔵品データベースに反映されつつある〔森下・西村2017〕。またニュースレターを発行し、新発見・知見などを随時報告した〔菱田（編）2015・2016a・2016b・2017、HISHIDA (ed.) 2018〕。

このような活動を通じ、地域と国際とを結ぶ学術交流を今後さらに推進してゆくことに努めてゆきたい。  
(森下章司)

【研究体制】

○平成24年度～26年度科学研究費助成金

《ゴーランドの古墳研究の総合的検証と古墳文化に対する国際的理解への活用》

研究課題 / 領域番号 24320160

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2012-04-01－2015-03-31

研究機関 京都橘大学

研究代表者 一瀬 和夫 京都橘大学・文学部・教授

研究分担者・協力者 (順不同)

菱田 哲郎 京都府立大学・文学部・教授

佐々木 憲一 明治大学・文学部・教授

森下 章司 大手前大学・総合文化学部・教授

高橋 照彦 大阪大学・大学院文学研究科・准教授

諫早 直人 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

岡本 篤志 大手前大学・史学研究所・研究員

日高 慎 東京学芸大学・教育学部・准教授

宮川 禎一 独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部・考古室長

前田 俊雄 奈良県立橿原考古学研究所・研究員

山田 俊輔 独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・研究員

→千葉大学・文学部・准教授

塚本 敏夫 財団法人元興寺文化財研究所・研究部・研究員

小川 裕見子 大阪府教育委員会

○平成27年度～30年度科学研究費助成金

《ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築》

研究課題 / 領域番号 15H03270

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2015-04-01－2019-03-31

研究機関 京都橘大学

研究代表者 一瀬 和夫 京都橘大学・文学部・教授

研究分担者・協力者 (順不同)

菱田 哲郎 京都府立大学・文学部・教授

佐々木 憲一 明治大学・文学部・教授

森下 章司 大手前大学・総合文化学部・教授

高橋 照彦 大阪大学・大学院文学研究科・教授

諫早 直人 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

→京都府立大学・文学部・准教授

岡本 篤志 大手前大学・史学研究所・研究員

日高 慎 東京学芸大学・教育学部・准教授

宮川 禎一 独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部・考古室長

前田 俊雄 奈良県立橿原考古学研究所・調査部調査課・主任技師

初村 武寛 公益財団法人元興寺文化財研究所・研究部・研究員  
 忽那 敬三 明治大学・博物館事務室・専任職員  
 土屋 隆史 宮内庁・書陵部陵墓課・研究官  
 富山 直人 神戸市教育委員会・学芸員  
 西村 秀子 大手前大学・史学研究所・研究員  
 竹村 亮仁 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター・調査員  
 金 宇大 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・アソシエイト・フェロー  
 →京都大学・白眉センター・特定助教  
 内田 ひろみ 元・大英博物館・アジア部日本セクション・プロジェクト・マネージャー  
 片山 健太郎 京都大学・大学院文学研究科・博士後期課程  
 →独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・アソシエイト・フェロー  
 大賀 克彦 奈良女子大学・古代学学術研究センター・特任講師  
 奥田 智子 大手前大学・史学研究所・研究員  
 野田 優人 京都府立大学・大学院文学研究科・博士後期課程  
 土屋 範子 大英博物館・アジア部日本セクション・三菱商事キュレーター  
 矢野 明子 大英博物館・アジア部日本セクション・三菱商事キュレーター  
 吉田 泰幸 金沢大学・人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター・特任准教授

(イギリス)

ティモシー・クラーク (Timothy Clark)  
 大英博物館・アジア部日本セクション長  
 ニコル・クーリッジ・ルマニエール (Nicole Coolidge Rousmaniere)  
 大英博物館・アジア部日本セクション・キュレーター、セインズベリー日本藝術研究所・所長  
 サイモン・ケイナー (Simon Kaner)  
 セインズベリー日本藝術研究所・副所長 (考古・文化遺産学センター長)  
 ルーク・エジントン-ブラウン (Luke Edgington-Brown)  
 イーストアングリア大学・大英博物館共同博士号候補生  
 →京都府立京都学・歴彩館・京都学研究員  
 ステファニー・サンチ (Stephanie Santschi)  
 イーストアングリア大学  
 サム・ニクソン (Sam Nixon)  
 セインズベリー日本藝術研究所・上級研究員  
 松田 陽  
 イーストアングリア大学・准教授  
 →東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

【海外活動】

○2011年2月28日～3月4日 大英博物館 (The British Museum)

ゴーランド・コレクション調査

一瀬和夫、菱田哲郎、森下章司、小川裕見子、富山直人、前田俊雄、土屋隆史、高松 由  
・鏡（伝大和）、胡籙（芝山古墳）、馬具 - 剣菱（鹿谷古墳）、陶棺（太古塚古墳群）、須恵器（芝山古墳の器台、  
伝上野国の装飾付壺など）の実測・写真撮影

○2012年2月27日～3月2日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

一瀬和夫、菱田哲郎、森下章司、富山直人、前田俊雄、土屋隆史、西村秀子  
・胡籙（芝山古墳）、須恵器（美濃の提瓶、土佐の杯蓋、出雲の取手付壺など）、土師器（美濃の高杯など）、埴輪  
破片（仲哀天皇陵の円筒形埴輪、応神天皇陵の鞍形埴輪など）の実測・写真撮影

○2012年3月3日 大英博物館・サックラー室

ワークショップ「William Gowland Workshop, sponsored by the British Museum (BM) and Sainsbury  
Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures (SISJAC)」

一瀬和夫 「榎原丸山古墳の墳丘復元とゴーランドのドローイングの関係」

(Reconstructing the burial mound of the Maruyama kofun in Kashihara and its relationship to Gowland's  
drawings)

森下章司 「ゴーランド資料の銅鏡の占める位置」

(The significance of the bronze mirrors in the Gowland Collection)

前田俊雄 「太古塚古墳群出土の陶棺について」

(The ceramic coffin from the Taikozuka kofun)

土屋隆史 「芝山古墳出土の金属器とコロク金具の復元」

(The reconstruction of metal objects and koroku (quivers) fittings from the Shibayama kofun)

富山直人 「芝山・鹿谷古墳の遺物出土状況の再現」

(Revisiting the context of the artefacts from the Shibayama and Rokuya kofun)

菱田哲郎 「ゴーランドが集めた須恵器について」

(Gowland and Sueki (Sue ware) kilns)

忽那敬三 「現在日本に関係するゴーランドの残した書類と写真」(紙上発表)

(Kofun and Meiji Japan through the eyes of William Gowland - from archive documents and photographs)

ティモシー・クラーク、サイモン・ケイナー、ジェレミー・ヒル (Jeremy Hill)

○2012年8月20・21日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

忽那敬三

・文書資料の調査・撮影

○2013年3月4～8日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

一瀬和夫、菱田哲郎、森下章司、岡本篤志、富山直人、前田俊雄、土屋隆史、片山健太郎、金 宇大、  
野田優人、竹村亮仁、西村秀子

・3次元計測（鹿谷古墳群の馬具、人物埴輪、備前の装飾付脚付壺）

・鉄鏃（芝山古墳など）、馬具 - 杏葉・辻金具（鹿谷古墳）、馬具 - 雲珠（芝山古墳）、陶棺（山本古墳群）、須  
恵器（備前の装飾付脚付壺、備前の平瓶など）、埴輪（女性埴輪）、引き出し資料（土器破片）の実測・写真撮影

○2013年3月7・12日 ロンドン古物学協会 (Society of Antiquaries of London)

ゴーランド関連文書資料の調査

一瀬和夫・竹村亮仁

○2013年 8月15～21日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

忽那敬三、諫早直人

- ・文書資料の調査・撮影
- ・馬具 - 轡・鞍・杏葉（鹿谷古墳）の実測・写真撮影

○2013年 8月15・16日 国際交流基金ロンドン日本文化センター（The Japan Foundation, London）

Public Seminar - William Gowland: The 'Father of Japanese Archaeology'（15日）

Public Seminar - Oyatoi-Gaikokujin and the Modernisation of Japan（16日）

忽那敬三、一瀬和夫、菱田哲郎、ニコル・クーリッジ・ルマニエール、松田 陽（Chair）

○2014年 3月17～21日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

一瀬和夫、菱田哲郎、森下章司、富山直人、片山健太郎、金 宇大、竹村亮仁、西村秀子

- ・振り環（芝山古墳）、馬具 - 飾金具（鹿谷古墳）、馬具 - 吊金具（芝山古墳）、装身具（玉類）、須恵器（伝上野の装飾付脚付壺など）、土師器（出雲の高杯など）の実測・写真撮影

○2014年 3月19日 ロンドン古物学協会

ゴーランド関連文書資料の調査

竹村亮仁

○2014年 8月4～8日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

諫早直人、片山健太郎

- ・振り環（芝山古墳）、馬具 - 杏葉（鹿谷古墳）、馬具 - 鞍金具・轡・杏葉・雲珠（芝山古墳）の実測・写真撮影

○2015年 3月16～20日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

一瀬和夫、菱田哲郎、森下章司、富山直人、忽那敬三、片山健太郎、金 宇大、竹村亮仁、西村秀子

- ・馬具 - 鞍・杏葉（鹿谷古墳）、不明鉄器（芝山古墳）、装身具（耳輪、勾玉、鋸形石、車輪石、玉類）、埴輪（蓋の立飾り）、須恵器（河内の平瓶、大和の平瓶、大和の脚付壺など）、引き出し資料（土器破片）の実測・写真撮影

- ・文書資料の調査・撮影

○2015年 8月5～7日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

忽那敬三

- ・文書資料・ガラス乾板・大型図版等の調査・撮影

○2016年 3月11～18日 大英博物館

一瀬和夫、菱田哲郎、森下章司、富山直人、諫早直人、前田俊雄、土屋隆史、金 宇大、竹村亮仁、西村秀子

- ・鉄刀、魚佩（鹿谷古墳）、鉄鏃、馬具（芝山古墳、鹿谷古墳など）、装身具（鹿谷古墳の耳環、芝山古墳の腕輪）の実測・写真撮影

- ・土器の破片資料の実測・写真撮影調査

- ・文書資料（BOX1・2）の撮影



○2016年3月19日 大英博物館・サックラー室

ワークショップロンドン編「Official Workshop Treasures from the ancient Japanese mounded tombs: current research on the Gowland Collection」

富山直人 「ゴーランド・コレクション調査プロジェクトの調査経過」

(Progression of the William Gowland research project)

西村秀子 「ゴーランド・コレクション資料データベースの方法と進捗」

(Method and progress towards the Gowland materials database)

菱田哲郎 「ゴーランドの遺跡調査と土器研究」

(The site survey and ceramic research of William Gowland)

前田俊雄 「ゴーランド・コレクションの須恵器の調査」

(Research of stoneware ceramics in the Gowland collection)

諫早直人 「ゴーランド・コレクション馬具の調査」

(Survey of horse ornaments and harnesses in the Gowland collection)

ルーク・エジントン-ブラウン 「William Gowland in the context of Japanese and British archaeology」

サイモン・ケイナー、一瀬和夫

○2016年8月22～24日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

忽那敬三

・文書資料・ガラス乾板の調査・撮影

○2017年3月20～24日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

諫早直人、土屋隆史、金 宇大

・鉄刀、魚佩（鹿谷古墳）、刀子、三輪玉（芝山古墳）、胡籙（芝山古墳）、馬具（芝山古墳、鹿谷古墳）、装身具（銅釧、玉類）の実測・写真撮影

○2017年9月5～8日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

一瀬和夫、富山直人、大賀克彦

・文書資料の調査・撮影

・玉類の調査

・土器破片・器台（芝山古墳）

○2018年3月13・14日 大英博物館

ゴーランド・コレクション調査

忽那敬三

・文書資料の調査・撮影

#### 【国内活動】

○2010年8月1・8・13～15日、12月5日、2011年8月12・14・15日 京都府亀岡市・鹿谷古墳群  
鹿谷古墳群大市支群測量調査

○2011年11月20日 京都府亀岡市・穂田野町鹿谷公民館  
鹿谷古墳群シンポジウム

宮川禎一 「明治十四年に描かれた鹿谷古墳とその遺物」

富山直人 「大英博物館と鹿谷古墳出土品の現状」

龍谷大考古学研究会 「鹿谷の古墳群分布調査成果」

菱田哲郎・一瀬和夫・地元の方々 座談会「鹿谷古墳群の今」

○2011年 7月29日（下見）、8月18～25日 奈良県橿原市・橿原丸山古墳

橿原丸山古墳測量調査 後円部の測量調査、地上および航空レーザー 3次元計測

京都橘大学、京都府立大学、大手前大学による共同調査

猪熊兼勝氏指導

○2012年 2月12日、3月18～20日、11月23日、12月29・30日、2013年 3月23日 京都府亀岡

市・鹿谷古墳群

鹿谷古墳群茶ノ木山支群測量調査

○2013年10月19日 岐阜県大垣市

美濃赤坂地方現地調査（ゴーランドの足跡） 須恵器出土地検討、大垣地元研究者との研究会

竹村亮仁 「ゴーランド直筆ノートに書かれた美濃のコレクション」

前田俊雄 「大英博物館所蔵美濃出土土器について」

堀田一浩（大垣市教育委員会）「ガウランドと大垣～美濃関連ガウランド・コレクションから～」

中井正幸（大垣市教育委員会）、一瀬和夫、菱田哲郎、富山直人、前田俊雄、西村秀子

○2013年11月8・15・22日、12月6・13日 東京都千代田区・明治大学駿河台キャンパス

明治大学リバティアカデミー連続講座「考古学ゼミナール」

「大英博物館所蔵 ガウランド・コレクションの研究」

菱田哲郎「ガウランド・コレクションと須恵器研究」

後藤和雄「ガウランドが撮影した写真資料」

富山直人「ガウランドと黎明期の日本考古学研究者たち」

忽那敬三「ドキュメント資料からさぐるガウランドの調査と研究」

一瀬和夫「ガウランドの古墳調査―鹿谷古墳群・見瀬丸山古墳・芝山古墳」

○2014年 8月19日 京都府京都市・京都国立博物館

京都国立博物館所蔵絵図の調査

諫早直人・片山健太郎

○2014年 9月 6～28日 東京都千代田区・明治大学博物館・特別展示室

企画展「ウィリアム・ガウランドと明治期の古墳研究」

（主催）明治大学博物館・日英共同調査グループ Gowland Project

○2014年 9月20日 東京都千代田区・明治大学駿河台キャンパス

シンポジウム東京編「古墳研究のさきがけ・ガウランドを考える―これまでの研究成果と大英博物館所蔵資料に関する新知見―」

大塚初重 「ウィリアム・ガウランドの日本古墳研究」

忽那敬三 「ガウランドが残した古墳の写真と記録」

諫早直人 「ガウランド・コレクションの馬具」

土屋隆史 「ガウランド・コレクションの武具」

竹村亮仁 「2冊のガウランド直筆ノート」

ルーク・エジントン-ブラウン 「大英博物館のウィリアム・ガウランド・アーカイブとガウランドが受けた影響」

一瀬和夫 「Gowland project の研究成果と今後の活用に向けて」

富山直人 「芝山古墳出土土器」(紙上発表)

西村秀子 「ガウランドの出雲地方調査— YASUI Rock Tomb の土師器を中心に—」(紙上発表)

前田俊雄 「大英博物館所蔵陶棺の調査」(紙上発表)

一瀬和夫・荒木瀬奈 「鹿谷村民に発掘された古墳」(紙上発表)

竹村亮仁 「ガウランドが持ち帰った壺」(紙上発表)

菱田哲郎、風間信隆(明治大学博物館館長)、佐々木憲一(明治大学)

○2015年9月18日 島根県出雲市

出雲地方の古墳調査(ゴーランドの出雲の足跡)、地元研究者と情報交換

○2015年9月19日 島根県出雲市・古代出雲歴史博物館・講義室

ワークショップ出雲編「山陰古墳研究の黎明—近代考古学研究の父・英国人ガウランドの足跡—」

渡邊貞幸(出雲弥生の森博物館館長) 「出雲におけるウィリアム・ガウランドの足跡」

竹村亮仁 「ガウランド直筆ノート—出雲関連土器—」

富山直人 「出雲におけるガウランドの石室調査」

西村秀子 「ガウランド・コレクションの土器—出雲 YASUI Rock Tomb の土器を中心に—」

富山直人 「白鳥塚古墳測量調査報告書」(紙上発表)

岡本篤志 3次元計測の報告

一瀬和夫、忽那敬三、黒崎寿政(島根県立古代出雲歴史博物館)、仁木 聡(島根県立古代出雲歴史博物館、島根県教育庁古代文化センター)、吉松大志(島根県教育庁文化財課古代文化センター)、西尾克己(元島根県教育庁文化財課古代文化センター)、中川 寧(島根県立古代出雲歴史博物館)、大谷晃二(島根県立松江北高等学校)

○2015年10月4日 福岡県京都郡みやこ町・みやこ町中央公民館

歴史文化カレッジ講演会

忽那敬三

「ガウランドの古墳調査とその研究—大英博物館所蔵のみやこ町所在古墳の記録を中心に—」

○2016年3月30日 京都府京都市・甲塚古墳

甲塚古墳石室のレーザー3次元計測調査

岡本篤志、一瀬和夫

○2016年5月29日 東京都小金井市・東京学芸大学・芸術館1階ホール

日本考古学協会 第82回(2016年度)総会

諫早直人、片山健太郎、金字大、サイモン・ケイナー、一瀬和夫

「大英博物館ゴーランド・コレクション京都府鹿谷古墳出土馬具の調査」

○2016年6月18日 京都府京都市・キャンパスプラザ京都・5階第1講義室

ワークショップ京都編「大英博物館所蔵ゴーランド・コレクション調査プロジェクト」

サイモン・ケイナー 「イギリスに影響を与えたゴーランドの日本古墳時代研究」

宮川禎一 「鹿谷古墳の絵図」

諫早直人 「鹿谷古墳の馬具」

森下章司・岡本篤志 「中山寺白鳥塚横穴式石室の検討」

菱田哲郎 「ゴーランドのみた淀川流域の古墳時代遺跡」

一瀬和夫(ファシリテーター)

○2016年8月29日 京都府京都市・同志社大学今出川キャンパス

世界考古学会議(WAC)第8回京都大会

菱田哲郎 「The Beginning of Survey of Giant mounds in Japan with comparative view - the research of William Gowland」

○2017年 3月 5日 東京都千代田区・明治大学駿河台キャンパス・アカデミーホール

「世界に伝えたい飛鳥・藤原の魅力 外から見た『飛鳥・藤原』」

忽那敬三 「お雇い外国人・ガウランドが見た飛鳥の古墳—大英博物館に残された記録から—」

○2018年 1月19日 東京都文京区・公益財団法人東洋文庫

梅原考古資料鹿谷古墳関連資料の調査

諫早直人、土屋隆史

○2018年10月13日～12月 2日 明治大学博物館・特別展示室

特別展「ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究」

(協力) 日英共同調査グループ・Gowland Project

○2018年10月26日、11月 9・16・30日 東京都千代田区・明治大学駿河台キャンパス

明治大学リバティアカデミー連続講座「考古学ゼミナール」

「ウィリアム・ガウランドと古墳研究—大英博物館に残された“学術の遺産”」

忽那敬三 「ウィリアム・ガウランド—その生涯と古墳研究」

諫早直人 「ガウランドが伝えた「遺産」—京都府鹿谷古墳群の記録と調査資料」

富山直人 「ガウランドの「ドルメン」研究とその協力者たち」

一瀬和夫 「日本の古墳研究第一人者としてのガウランド」

○2018年10月30日 東京都千代田区・明治大学駿河台キャンパス・グローバルフロント4021教室

特別展「ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究」開催記念特別講演会

サイモン・ケイナー「大英博物館とガウランド・コレクション」

○2019年 3月 2日 京都府亀岡市・亀岡市文化資料館

「大英博物館所蔵ゴーランド・コレクション調査プロジェクト(亀岡編)—鹿谷古墳の新知見—」

富山直人 「鹿谷古墳研究のあゆみ—プロジェクト以前」

森下章司 「大英博物館蔵ゴーランドの記録からみた鹿谷古墳」

諫早直人 「大英博物館蔵ゴーランド・コレクションからみた鹿谷古墳」

一瀬和夫 「鹿谷古墳の再発見」

菱田哲郎、一瀬和夫(コーディネーター)

## 【ゴーランド・コレクション調査プロジェクトの成果物】

(刊行物)

奥田智子(編) 2017 『兵庫県宝塚市 白鳥塚古墳・山本古墳群—ゴーランド調査古墳の研究 1—』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト

菱田哲郎(編) 2015 『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト

菱田哲郎(編) 2016a 『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』  
News Letter No.1、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト

菱田哲郎(編) 2016b 『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』  
News Letter No.2、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト

菱田哲郎(編) 2017 『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』  
News Letter No.3、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト

HISHIDA Tetsuo (ed.) 2018 *New Aspects of Kofun Period and Archaeological History of Japan from the results of survey on Gowland Collection, News Letter No.4, Project for Researching Gowland's Collection*

(英語論文)

HISHIDA Tetsuo, and Luke Edgington-Brown 2018 Report of trip tracing Gowland's footsteps through Korea, *New Aspects of Kofun Period and Archaeological History of Japan from the results of survey on Gowland Collection, News Letter No.4, Project for Researching Gowland's Collection*, pp.21-24

ICHINOSE Kazuo 2018 Project to Investigate the Gowland Collection, *New Aspects of Kofun Period and Archaeological History of Japan from the results of survey on Gowland Collection, News Letter No.4, Project for Researching Gowland's Collection*, pp.3-5

KIM Woodae 2018 The pommel of a ring-pommel sword with central decoration missing, *New Aspects of Kofun Period and Archaeological History of Japan from the results of survey on Gowland Collection, News Letter No.4, Project for Researching Gowland's Collection*, pp.25-26

Luke Edgington-Brown 2018 The excavations of William Gowland : Shibayama, Osaka to Stonehenge, Wiltshire, *New Aspects of Kofun Period and Archaeological History of Japan from the results of survey on Gowland Collection, News Letter No.4, Project for Researching Gowland's Collection*, pp.12-20

Simon Kaner 2018 William Gowland (1842-1922) , Pioneer of Japanese Archaeology, *New Aspects of Kofun Period and Archaeological History of Japan from the results of survey on Gowland Collection, News Letter No.4, Project for Researching Gowland's Collection*, pp.6-11

(日本語論文)

荒木瀬奈 2012 「鹿谷古墳群墳丘測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大学 文化財調査報告 2011』、京都橘大学文学部、pp.17-24

荒木瀬奈 2013 「鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群墳丘測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2012』、京都橘大学文学部、pp.16-27

荒木瀬奈 2014 「鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2013』、京都橘大学文学部、pp.24-34

諫早直人 2015 「ゴーランドの持ち帰った馬具」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.12-13

諫早直人 2016 「鹿谷古墳の馬具—絵図との同定作業を中心に—」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.2、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.10-13

諫早直人・片山健太郎 2014 「ゴーランド・コレクションと絵師遠藤茂平～鹿谷18号墳出土花文付雲珠・辻金具の紹介～」『古代学研究』第204号、古代学研究会、pp.35-37

諫早直人・片山健太郎・金 宇大・サイモン＝ケイナー・一瀬和夫 2016 「大英博物館ゴーランド・コレクション京都府鹿谷古墳出土馬具の調査」『日本考古学協会第82回総会研究発表要旨』、日本考古学協会、pp.52-53

一瀬和夫 2012a 「2012年ゴーランド・コレクション調査に伴うワークショップの開催について」『古代学研究』第196号、古代学研究会、pp.1-2

一瀬和夫 2012b 「橿原市丸山古墳墳丘ドローイングの検討」『古代学研究』第196号、古代学研究会、pp.3-4

一瀬和夫 2016 「ゴーランド・コレクション調査プロジェクトのこれまでの活動」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.2、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.3-6

一瀬和夫・荒木瀬奈 2012 「橿原丸山古墳墳丘測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大

- 学文化財調査報告 2011』、京都橘大学文学部、pp.6-12
- 一瀬和夫・荒木瀬奈 2013 「榎原丸山古墳測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2012』、京都橘大学文学部、pp.6-15
- 一瀬和夫・荒木瀬奈 2015 「鹿谷村民に発掘された古墳」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.16
- 一瀬和夫・岡本篤志 2016 「大英博物館所蔵ゴーランド・コレクションの埴輪調査」『京都橘大学大学院研究論集』文学研究科第14号、京都橘大学大学院、pp.1-15
- 一瀬和夫・富山直人・前田俊雄 2016 「大英博物館所蔵ゴーランド・コレクションの天皇陵古墳関係の土器」『古代学研究』第209号、古代学研究会、pp.42-45
- 岡本篤志 2016a 「SfM を用いた多視点デジタル写真測量による白鳥塚古墳三次元計測」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.1、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.20-23
- 岡本篤志 2016b 「多視点デジタル写真測量による甲塚古墳三次元計測」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.2、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.14-17
- 奥田智子 2017 「白鳥塚古墳の位置づけ」『兵庫県宝塚市 白鳥塚古墳・山本古墳群—ゴーランド調査古墳の研究 1—』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.28-32
- 金 宇大 2014 「大阪府芝山古墳の掘り環」『古代学研究』第204号、古代学研究会、pp.33-34
- 金 宇大 2015 「掘り環の「発見」」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.11
- 忽那敬三 2012 「ゴーランドが見た古墳と明治期の日本—記録類と写真から—」『古代学研究』第196号、古代学研究会、pp.16-17
- 忽那敬三 2015 「ガウランドの登山記録と古墳の調査」『明治大学博物館研究報告』第20号、明治大学博物館、pp.1-12
- 忽那敬三 2016 「ワークショップ 『山陰古墳研究の黎明—近代考古学の父・ガウランドの足跡—』 参加記」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.1、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.14
- 忽那敬三（編） 2019 『ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究』、明治大学博物館
- ゴーランド・コレクション調査プロジェクト 2015 「榎原丸山古墳の再検討」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.17-18
- サイモン・ケイナー 2013 「大英博物館とゴーランド・コレクションに伴うワークショップに思うこと」『古代学研究』第197号、古代学研究会、pp.1-2
- 田口五基 2011 「鹿谷古墳群大市支群墳丘測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大学 文化財調査報告 2010』、京都橘大学文学部、pp.17-20
- 竹村亮仁 2013 「古物学協会蔵のノートに記された大英博物館所在日本古物コレクションとの関係」『古代学研究』第197号、古代学研究会、pp.7-10
- 竹村亮仁 2015a 「ロンドン古物学協会ゴーランド・ノートと大英博物館ゴーランド・コレクションとの比較・照合」『京都橘大学大学院研究論集』第13号、京都橘大学大学院文学研究科、pp.1-133
- 竹村亮仁 2015b 「ゴーランドが持ち帰った壺」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.6-7
- 竹村亮仁 2016 「ゴーランド直筆ノート—出雲関連土器」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本

- 古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.1、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.3-5
- 竹村亮仁 2017 「ゴーランド・コレクション報告 玉類について」『京都橘大学大学院研究論集』文学研究科第15号、京都橘大学大学院、pp.33-47
- 土屋隆史 2012 「大阪府芝山古墳出土の胡籥金具について」『古代学研究』第196号、古代学研究会、pp.8-10
- 土屋隆史 2015 「芝山古墳出土の胡籥」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.10
- 土屋隆史 2017 「明治期の公文書にみる鹿谷古墳出土品一発見から海外流出までの経緯—」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.3、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.13-16
- 富山直人 2012a 「ゴーランドとナウマン」『古代学研究』第194号、古代学研究会、pp.28-31
- 富山直人 2012b 「大英博物館におけるゴーランド・コレクション 芝山古墳と鹿谷古墳」『古代学研究』第196号、古代学研究会、pp.11-12
- 富山直人 2013 「ゴーランドと山縣修」『古代学研究』第197号、古代学研究会、pp.11-14
- 富山直人 2014a 「ゴーランドと黎明期の古墳研究（上）」『古代学研究』第203号、古代学研究会、pp.29-39
- 富山直人 2014b 「ゴーランドと黎明期の古墳研究（下）」『古代学研究』第204号、古代学研究会、pp.24-32
- 富山直人 2015a 「芝山古墳出土土器」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.4
- 富山直人 2015b 「ゴーランドと六甲登山口所在十善寺古墳の埴輪」『古代学研究』第206号、古代学研究会、pp.44-45
- 富山直人 2015c 「ゴーランドによる高安古墳群の調査とその成果」『古代学研究』第207号、古代学研究会、pp.35-38
- 富山直人 2015d 「ゴーランドの研究に対する評価と取り扱われ方」『古代学研究』第207号、古代学研究会、pp.39-45
- 富山直人 2016a 「出雲におけるゴーランドの石室調査」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.1、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.6-11
- 富山直人 2016b 「白鳥塚古墳測量調査報告」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.1、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.15-19
- 富山直人 2018 「ナウマンと土佐の古墳」『日本考古学』第45号、日本考古学協会、pp.57-68
- 富山直人・笹栗拓 2015 「鹿谷古墳群石室実測調査報告」『古代学研究』第206号、古代学研究会、pp.38-43
- 西村秀子 2013 「ゴーランドと出雲—YASUI Rock Tombの土器—」『古代学研究』第197号、古代学研究会、pp.3-6
- 西村秀子 2015 「ゴーランドの出雲地方調査」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.5
- 西村秀子 2016 「ゴーランド・コレクションの土器—出雲 YASUI Rock Tombの土器を中心に—」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.1、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.12-13
- 菱田哲郎 2012 「ゴーランドと須恵器研究」『古代学研究』第196号、古代学研究会、pp.13-15
- 菱田哲郎 2015 「ゴーランドと須恵器窯跡の調査」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.9
- 菱田哲郎 2016 「淀川周辺におけるゴーランドの調査と研究」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.2、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.18-21
- 菱田哲郎 2017 「京都でのワークショップについて」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳

- 時代像・研究史の再構築』News Letter No.3、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.17
- 前田俊雄 2012 「大英博物館所蔵須恵質四注式陶棺について」『古代学研究』第196号、古代学研究会、pp.6-7
- 前田俊雄 2014 「大英博物館所蔵美濃出土土器について」『古代学研究』第203号、古代学研究会、pp.22-27
- 前田俊雄 2015 「大英博物館所蔵陶棺の調査」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.8
- 前田俊雄 2017 「山本古墳群出土の陶棺」『兵庫県宝塚市 白鳥塚古墳・山本古墳群』—ゴーランド調査古墳の研究 1— ゴーランド・コレクション調査プロジェクト
- 宮川禎一 2016 「明治14年の鹿谷古墳の図面—考古学の黎明期—」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.2、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.7-9
- 森下章司 2012 「ゴーランド・コレクションの鏡」『古代学研究』第196号、古代学研究会、p.5
- 森下章司 2015 「ゴーランドの年代研究」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.14-15
- 森下章司・西村秀子 2017 「ゴーランド・コレクション古墳資料の内容と整理」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.3、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.4-12

### 【ゴーランド発表論文】

- William Gowland 1890 Exhibition of Photographs of Megalithic Remains from Japan, *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland vol.19*, p.64
- William Gowland 1894a A Japanese pseudo-Speise (Shiromé), and its Relations to the Purity of Japanese Copper and the Presence of Arsenic in Japanese Bronze, *Journal of the Society of Chemical Industry 31*, pp.463-470
- William Gowland 1894b On the Art of Casting Bronze in Japan, *Annual Report of the Board of Regents of the Smithsonian Institution*, pp.609-651
- William Gowland 1895 Notes on the Dolmens and other Antiquities of Korea, *Journal of the Anthropological Institute Vol.24*, pp.316-330
- William Gowland 1897 The dolmens and burial mounds in Japan, *Archaeologia 55*, pp.439-524
- William Gowland 1899a The dolmens of Japan and their builders, *Transactions and Proceedings of the Japan Society 4*, pp.128-183
- William Gowland 1899b The early metallurgy of copper, tin, and iron in Europe, as illustrated by ancient remains, and the primitive processes surviving in Japan, *Archaeologica 56*, pp.267-322
- William Gowland 1902 Recent excavations at Stonehenge, *Archaeologica 58*, pp.106-118
- William Gowland 1907 The burial mounds and dolmens of the early emperors of Japan, *Journal of the Anthropological Institute Vol. 37*, pp.10-46
- W・ゴーランド（上田宏範（校注）・稲本忠雄（訳））1981 『日本古墳文化論—ゴーランド考古論集』、創元社

### 【上記以外の引用・参考文献】

- 池上 悟 2004 「大英博物館所蔵のゴーランド・コレクションについて」『立正考古』第41号、立正大学考古学研究会、pp.7-24
- 井上信隆 2011 「ウィリアム・ガウランドの古墳調査と明治4年の太政官布告について—豊前北部にみられる明治期の古墳調査記録から—」『別府大学文化財学論集』1、後藤宗俊先生古希記念論集刊行会、pp.105-130
- 猪熊兼勝（編）1992 『見瀬丸山古墳と天皇陵』季刊考古学別冊2、雄山閣



- 上田宏範 1949 「ゴーランド氏の小奈邊古墳の調査について」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査抄報』第4輯、奈良縣、pp.21-35
- 上田宏範 1969 『前方後円墳(第二版)』、学生社
- 上田宏範 2003 「写真が語る W. ガウランドの軌跡」『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.151-165
- 上田宏範 2006 「幻の“合作ウツナベ古墳計測図”を巡る諸問題」『ロマイン・ヒッチコック—滞日二か年の足跡—』、橿原考古学協会、pp.134-140
- 大塚初重 1977 「大阪府芝山古墳の出土遺物をめぐる諸問題」『考古論集』、松崎寿和先生退官記念事業会、pp.313-334
- 大塚初重 2003 「ガウランドと古墳研究」『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.166-178
- 古代学研究会 2010 「特集・芝山古墳の調査」『古代学研究』第186号、古代学研究会、pp.1-24
- 後藤和雄 1997a 「ウィリアム・ガウランドの業績(1) —発掘した一世紀前の古墳写真—」『月刊考古学ジャーナル』No.412、ニューサイエンス社、pp.42-46
- 後藤和雄 1997b 「ウィリアム・ガウランドの業績(2) —天皇陵の出土品など300点—」『月刊考古学ジャーナル』No.417、ニューサイエンス社、pp.40-45
- 後藤和雄 1997c 「ウィリアム・ガウランドの業績(3) —コレクションの全貌と今後の発見—」『月刊考古学ジャーナル』No.420、ニューサイエンス社、pp.38-43
- 後藤和雄 2003 「ガウランド・コレクションとの出会い」『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.179-187
- 後藤和雄・忽那敬三 2008 「ウィリアム・ガウランドと上野博物館」『明治大学博物館研究報告』第13号、明治大学博物館、pp.1-26
- 後藤守一 1946 「ガウランドの古墳研究」『あんとろぼす』第2号、山岡書店、pp.20-21
- 出口保夫 2005 『物語 大英博物館』中公新書1801、中央公論社
- 富山直人 2009 「ガウランドと鹿谷古墳—大英博物館所蔵資料の調査から—」『日本考古学』第28号、日本考古学協会、pp.41-54
- 濱田耕作 1922 「日本考古学界の恩人 ゴーランド氏(上・下)」『東京朝日新聞』8月25・26日付朝刊、東京朝日新聞
- 福尾正彦 1994 「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号、宮内庁書陵部書陵部、pp.82-109
- 間壁葎子 1988 「大英博物館像装飾(舟付)須恵器と文化八年の古陶器図」『倉敷考古館研究集報』第20号、倉敷考古館、pp.24-32
- 宮川禎一 2005 「描かれた古墳出土品—明治十四年の発掘調査」『學叢』第27号、京都国立博物館、pp.91-100
- 森 浩一 1965 『古墳の発掘』中公新書65、中央公論社
- 森 浩一 1978 「古墳文化と古代国家の誕生」『大阪府史』第1巻、大阪府、pp.551-976
- 森本六爾 1927 「前方後円墳の外形の起源」『日本上代文化の研究』、四海書房、pp.203-235
- 森本六爾 1929 『川柳將軍塚古墳の考究』、岡書院
- 渡邊貞幸 1979・1980 「ガウランド氏と山陰の古墳(上・中・下)」『八雲立つ風土記の丘』No.37・39・40、島根県立八雲立つ風土記の丘
- 渡邊貞幸 1993 「ガウランドと出雲の古墳」『考古学の世界』第4巻、ぎょうせい、pp.224-225
- ヴィクター・ハリス/後藤和雄(編) 2003 『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館

## 第 2 章 鹿谷古墳の発見とその後の調査研究

大英博物館が所蔵する京都府鹿谷古墳出土遺物は、ゴーランド考古資料の中でも大阪府芝山古墳出土遺物とともに一括性の高い資料群として知られるが、芝山古墳出土遺物と違い、ゴーランドが自ら発掘したものではない。では、ゴーランドはどのようにして鹿谷古墳出土遺物を入手したのであろうか。鹿谷古墳出土遺物とゴーランドの関わりについては、大英博物館やロンドン古物学協会が所蔵するゴーランドの直筆ノート〔後藤1997c、竹村2015〕や手紙〔ハリス2003〕、メモ〔富山2009〕といったゴーランド文書資料と、京都国立博物館が所蔵する鹿谷古墳とその出土遺物を描いた絵図・拓本類（以下、絵図とする）〔宮川2005、富山2009、諫早・片山2014、諫早2016〕をもとに研究がなされてきた。また、時枝務によって東京国立博物館が所蔵する『埋蔵物録』の中にも、鹿谷古墳出土遺物へのゴーランドの関与を示す公文書が存在することが明らかとなった〔時枝2001〕。

本プロジェクトではこれら既知の文書資料に加えて、当時の公文書について広く探索を行い、宮内庁宮内公文書館と東京国立博物館に鹿谷古墳に関係する公文書がさらに所在することを突き止めた<sup>1</sup>。また大英博物館所蔵ゴーランド文書資料についても、鹿谷古墳と関わる資料に対する悉皆的な調査を実施した。以下では、これまでに存在の知られていなかった国内外の文書資料も加えつつ、鹿谷古墳の発見以後の調査研究の歩みを整理する。

なお文書資料については、宮内庁宮内公文書館：宮、東京国立博物館：東、京都国立博物館：京、大英博物館：英、ロンドン古物学協会：古、と所蔵機関ごとに略称を用いて表記する。

### 1. 鹿谷古墳の発見と京都府による対応

鹿谷古墳が発見された後に京都府による実地調査が行われたが、その詳しい経緯については宮内庁宮内公文書館所蔵公文書（宮A～C）と東京国立博物館所蔵公文書（東A、B）に記されている。資料の詳細については本章第5節で紹介することとし、ここではこれらの国内所蔵文書から読み取れる事実について整理する。

#### （1）発見から見分に至る経緯

明治14（1881）年4月、地元民によって鹿谷古墳が発掘され、「古刀及轡祝瓮の類」が発見された（表1①（以下、表1は省略）、宮A、東B-2）。その知らせを受けた京都府庶務課社寺掛は、5月6～9日にかけて主任の半井真澄と絵師の遠藤茂平を鹿谷村に派遣し、状況を調査した（②、東B-2）。そして、「古墳見分日記」とする報告書と絵図正本が宮内省へ上申された（⑤、宮A）。これは、明治13（1880）年11月15日付宮内省達乙第3号（…自然風雨等ノ為メ石槨土器等露出シ、又ハ開墾中不図古墳ニ掘当リ候様ノ次第有之候ハ、口碑流伝ノ有無ニ不拘、凡テ詳細ナル絵図面ヲ製シ、其地名並近傍ノ字等ヲモ取調、当省へ可申此旨相達候事）に応じたものである。

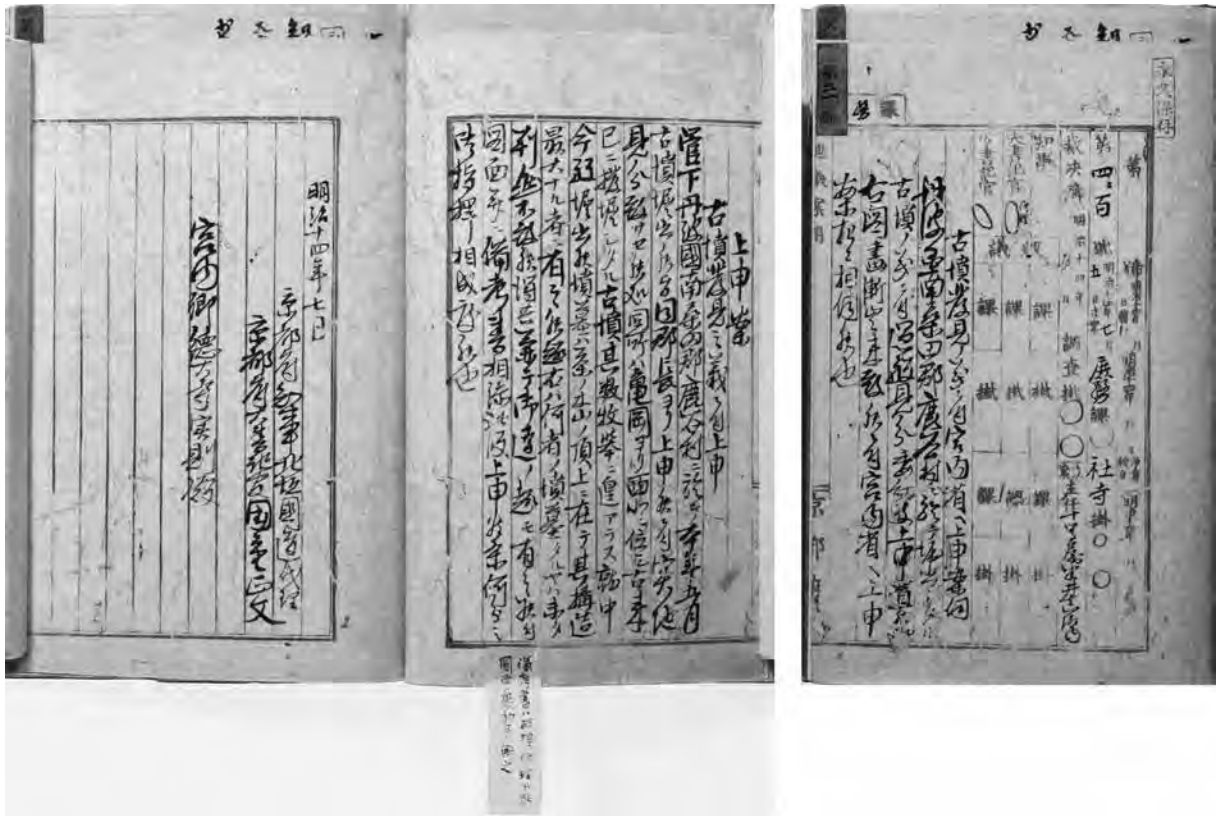


図1 宮A「第三号 丹波国南桑田郡鹿谷村二於テ発掘ノ古墳二付キ、宮内卿へ上申ノ件（七月）」『考証録 明治十四年』（宮内庁宮内公文書館所蔵）

(2) 京都府による調査の内容—古墳見分日記—

見分内容については、半井が作成した「古墳見分日記」（東B-2別紙）に詳しく記載されている。「古墳見分日記」は、当時の鹿谷古墳の様相を知る上で貴重な記録であり、遠藤が絵図をどのような状況で描いたのかを知るための情報も含まれている。ここではまず「古墳見分日記」の内容を現代語訳し、重要な情報を整理したい。

丹波国南桑田郡第七組鹿谷村の竹岡利左衛門ほか18人の者が鹿谷村の中の共有山（茶木山）字清水谷山上で埋蔵物を掘り出したという上申が、南桑田郡長から寄せられた。そのため、5月6日に、実地見分として御雇画工遠藤茂平とともに京都を出発した。この日は雨がひどく降っており、正午に亀岡に到着した。郡役所で郡長に面会し、かねてより鹿谷村関係の者へ通知していたことを依頼した。郡長はこれを承諾した。郡長の言うところによると、ここから鹿谷村へはまだかなり距離があるため、鹿谷村に近い吉田村に宿泊すればよいということであった。そこでまず亀岡分署へ行き、同署に預けられていた埋蔵物を借りることを約束してから吉田村に向かい、佐藤某の家に宿泊した。午後4時、亀岡分署から埋蔵物が送られてきたため、遠藤茂平にこれを写させた。

5月7日の暁に猛烈な風雨に見舞われ、濡れた水が路を浸して湖面のようであった。午前9時、鹿谷村惣代理の小瀬治郎助という者が村民3人を従えてやってきた。当時の状況を聞いたところ、皆言うことが異なっており、模糊曖昧なところが多かった。また、古墳の所在地は茶木山の頂上であるため、今日の風雨では登ることができないとのことであった。翌8日に訪れることを約束して、各々村に帰った。その後、近所の古老を集め、其の伝説の有無について聞き、考証すべき書類を探索してみたが、一つも見つけることができなかった。

5月8日は曇りであった。午前8時に吉田村を出発し、鹿谷村総代の高田彦六の家に到着した。さらに関係者3～

表1 鹿谷古墳出土遺物をめぐる経過

時 期		出 来 事 ・ 資 料 名
<b>明 治 14 (1881) 年</b>		
①	4月	竹岡利左衛門ほか18人の地元民により、鹿谷古墳が発掘される。
②	5月6日～9日	京都府社寺掛半井真澄による調査（絵師遠藤茂平も随行）。
③	5月10日	半井真澄、「古墳見分日記」を作成。
④	7月4日	遠藤茂平、絵図・拓本類の草稿を作成。（京A、B）
⑤	7月5日起案 7月6日付	京都府知事北垣国道代理京都府大書記官国重正文から宮内卿徳大寺実則宛 「第三号 丹波国南桑田郡鹿谷村ニ於テ発掘ノ古墳ニ付キ宮内卿へ上申ノ件」（宮A） 「古墳発見ノ義ニ付上申」（宮C） 「第十八号 京都府丹波国南桑田郡鹿谷村ニテ古墳発見之儀ニ付上申」（東A）
⑥	12月	ゴーランド、亀岡へ。鹿谷古墳群を調査。（英A2）
<b>明 治 15 (1882) 年</b>		
⑦	2月付	諸陵寮から京都府宛に陵墓ではない旨の指令が出される。（宮B）
⑧	6月5日付	京都府知事北垣国道から農商務卿西郷従道宛「埋蔵物発見ノ義ニ付上申」（別紙 明治十四年五月十日付十等属半井真澄「古墳見分日記」）（東B-2）
⑨	7月付 7月5日達	博物館長代理田中大書記官から北垣京都府知事宛 「京都府下丹波国南桑田郡鹿谷村発掘品ノ儀ニ付御照会案伺」（東B-1）
⑩	7月18日付	京都府知事北垣国道から農商務卿博物館長代理大書記官田中芳男宛（件名なし）（東B-3）
⑪	12月	遺失物取扱規則により、鹿谷古墳出土遺物が土地共有者へ下付される。（東B-5）
<b>明 治 16 (1883) 年</b>		
⑫	2月11日	ゴーランド、アストンに宛てた手紙でアストンを鹿谷訪問に誘う。（英D2）
⑬	2月	ゴーランド、この頃再び鹿谷古墳群を調査か
⑭	5月	鹿谷古墳出土遺物がゴーランドに50円で売却される。（東B-5）
⑮	8月付 8月2日達	野村博物館長代理田中議官から北垣京都府知事宛「掘出品之義ニ付京都府江御照会案伺」（東B-4）
⑯	9月6日付	京都府知事北垣国道から博物館長代理大書記官田中芳男宛（件名なし） （別紙 明治十六年八月十八日付 南桑田郡鹿谷村戸長小瀬次郎郎から亀岡分署警部補伊藤正一宛「答書」）（東B-5）
⑰	9月付 9月29日達	博物館長野村清から京都府知事北垣国道宛「発掘品ノ義ニ付京都府へ御照会案伺」（東B-6）
⑱	9月付 10月11日達	農商務卿から京都府宛「掘出品之義ニ付京都府へ御指令案伺」（東B-7）
⑲	10月22日付	京都府知事北垣国道から博物館長野村靖宛 件名なし（東B-8）
⑳	10月30日付	京都府知事北垣国道から農商務卿西郷従道宛「埋蔵物ノ義ニ付上申」（東B-9）
㉑	11月13日起案 11月付	農商務卿「埋蔵物之義ニ付京都府へ御指令案伺」（東B-10）
㉒	12月付 12月22日達	農商務卿から京都府宛「埋蔵物之義ニ付京都府へ御指令案伺」（東B-11）
<b>明 治 21 (1888) 年</b>		
㉓	12月	ゴーランド帰国。
<b>明 治 22 (1889) 年</b>		
㉔	4月15日	ゴーランド、鹿谷古墳出土遺物を含むコレクションをフランスに譲渡。

5人を従えて、東面の山をおよそ6、7町登った。頂上は、円周約1町ほど別に土が盛られ、その形はあたかも釜をさかさまにしたような状態であった。これが古墳の所在地であるという。古墳をみると、中央に深さおよそ1間、幅もこれと同じで長さ1間半の範囲が掘られていた。直下前後には石櫛が陥没して穴となっていた。ここから出入りしたのであろう。しかし、過日の降雨によって周囲の土砂が崩潰してその大半が埋まっており、中に入ることができなかった。そのため、櫛内の状況を皆に諮問したところ、露出して出入りが自在であるほかの石櫛が数箇所あり、内部の構造は全て同じであることから、ほかの石櫛について説明したいと皆が言った。そこで下山し、村の北にある石櫛を訪れた。中に入ってこれを見ると、前が口細くてわずかに一人が出入りすることができた。ようやく進んだところ、およそ畳4枚を敷くことができる広い所に出た。左右に石を積み、上部は円形で、陶窯のように奥に一枚の石櫛があった。ここが轡のあった所であるという。

そもそも鹿谷村の地形は、南面で三方が山で囲われており、後ろの丘を狼峯山、右の丘を娑婆山（又は獨活他山）、左の丘を茶木山と言う。そしてこの山麓には場所によって古墳があり、その数は実に数十であるという。すでに発掘され

て石槨が露出しているものもあれば、まだ露出していないものもある。あるいは中間が陥没して、その状態が変容したもの等もある。大きいものは畳 8 枚を並べることができ、小さいものでも畳 1、2 枚を敷くことができる。完全なもの、全て釜をさかさまにしたような形をしており、周囲には溝を巡らせている。古墳の最も多い所では、一つの丘の上に累々として大小のものが雑然としており、あたかもオレンジを散布したかのようである。上世の墓地であろう。掘り出したものを見てみると、皆異様であって中世以後のものではない。おそらく1000年余り前のものであろう。しかれども、誰の墳墓であるかは、地名であっても伝聞であっても、考証することができない。午後 4 時、亀岡に帰って宿泊し、物品は再び亀岡分署へ返還した。

5 月 9 日晴、午前 9 時に亀岡を出発し、午後 1 時に帰京した。

明治14年 5 月10日

十等属半井真澄

「古墳見分日記」に書かれている鹿谷古墳に関する情報を整理すると、以下の通りである。

- ・所在地は茶木山の頂上にある。
- ・墳丘は釜を逆様にしたような形で、円周約 1 町（約110m）、すなわち直径約35mほどの範囲で盛土されているようにみられた。
- ・墳頂の深さ約 1 間（約1.8m）、幅約 1 間（約1.8m）、長さ 1 間半（約2.7m）の範囲が掘られており、石室が陥没して穴になっていた。
- ・周囲の土砂が崩潰してその大半が埋まっており、石室の中に入ることができなかった。
- ・石室の構造は、周辺の古墳の石室と同様であるという。これをふまえると、石室の羨道は口細くてわずかに一人が出入りすることができる大きさであり、石室の玄室はおおよそ畳 4 枚を敷くことができるくらいの大きさである。左右に石を積み、上部は円形で、陶窯のように奥に一枚の石柵がある。
- ・石柵の上には轡が置かれていた。

### （3） 絵図の作成

#### ①「古墳見分日記」から読み取れること

京都府による調査の際に、「古墳見分日記」とともに、絵図が作成された。東 B-2別紙とともに農商務省に提出された絵図（「図面一葉」。以下、絵図正本とする）は現在所在不明だが、その草稿が京都国立博物館に存在することが宮川禎一の調査によって明らかとなっている〔宮川2005〕。

まずは「古墳見分日記」の内容から、絵図の作成過程を整理する。

- ・ 5 月 6 日の午後 4 時、亀岡分署から埋蔵物（出土遺物）が送られてきたため、遠藤は埋蔵物の絵図を描き始めた。
- ・ 遠藤が絵図を描いた場所は、おそらく吉田村の佐藤某の家である。
- ・ 埋蔵物を亀岡分署に返還したのは、5 月 8 日の午後 4 時頃である。

以上の情報からわかることは、まず遠藤が遺物の絵図を描いた期間が長く見積もっても 5 月 6 日午後 4 時から、5 月 8 日の午後 4 時までの 2 日間に過ぎないということである。絵図には墳丘や石室も描かれており、5 月 8 日は午前 8 時から半井とともに鹿谷古墳を訪れていたはずである。そうすると遠藤が遺物を描くことができたのは、5 月 6 日の午後 4 時からと 5 月 7 日ということになる。彩色などは後日したとしても、かなり短期間で絵図が作成されたことがわかる。

また、半井と遠藤は鹿谷古墳の石室内には入っておらず、同じ内部構造を持つというほかの古墳の石

室内で説明を受けたという点も重要である。遠藤が描いた墳丘の絵図は、細部の特徴が現存する鹿谷古墳と一致することから（第3章第2節参照）、鹿谷古墳そのものを描いたものとみられる。一方で石室の絵図については、遠藤自身が石室の中に入って描いたわけではない。絵図に描かれた石室は、後述するように若林論文や梅原論文にも引用されてきたが（本章第4節参照）、鹿谷古墳の石室を正確に描いたものではないということに注意しておく必要がある。

## ②絵図から読み取れること

宮川によって公表された京都国立博物館所蔵絵図（京A「丹波南桑田郡鹿谷村発掘古刀模本」（J乙59）、京B「丹波南桑田郡鹿谷村発掘古刀轡祝瓮搦本」（J乙58））は、図面・拓本類5点が2件にわかれて保存されている〔宮川2005：91〕。本書では、これらをそれぞれ京B-1「古墳群までの略地図」、京B-2「古墳の分布図」、京B-3「墳丘および石室図」、京A「遺物の図面1」、京B-4「遺物の図面2」と呼称する。

「遺物の図面1」（京A）の冒頭部には遠藤茂平の署名があり、「明治十四年四月丹波国南桑田郡鹿谷村山中古墳ヨリ古刀及轡祝瓮之類ヲ掘出シタルニ付、右写生ノ為メ社寺係半井真澄氏ニ随行シ、帰府ノ上浄写二本ヲ製ス右御用現品ヨリ写シ得ル所ノ草稿ナリ」とある。宮川も指摘している通り、これらは半井真澄に随行した絵師遠藤によって作成された絵図であり、公文書（古墳見分日記）に添付された絵図の草稿であったと考えられる〔宮川2005：92〕。

この書き込みによれば、絵図正本は2本清書されたはずであるが、現状では発見できていない。ただ、公文書には元々絵図正本が添付されていたことをうかがわせる記述が複数認められた。1つは、『京都府 明治十四年 考証録 諸陵寮出張所』に綴られた「第三号 丹波国南桑田郡鹿谷村ニ於テ発掘ノ古墳ニ付キ宮内卿へ上申ノ件（七月）」（宮A）で、鹿谷古墳が発掘されたことが報告されている。文中に、「…右図画漸出来致候ニ付宮内省へ上申案左ニ相伺候也」、「…図面并ニ備考書相添此段上申候条何分之御指揮相成度候也」とあり、明らかに鹿谷古墳に関する絵図が存在していたことがわかる。しかし、この公文書には付箋がついており、そこには「備考書ハ破損修理不能図面最初ヨリ無之」と書かれている。絵図正本は何らかの事情で失われたようである。

もう一つは、農商務省博物館『埋蔵物録』明治十六年に綴られた「第三五号 京都府南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山古墳ヨリ発掘ノ古器物差出方ニ付キ京都府ト照復ノ件（十二月）」（東B）である。明治15（1882）年6月5日付京都府知事北垣国道から農商務卿西郷従道宛「埋蔵物発見ノ義ニ付上申」には、「明治十四年五月十日付半井真澄による古墳見分日記」が添付されていた（東B-2別紙）。「古墳見分日記」は半井真澄による調査報告書であり、そこには「御雇画工遠藤茂平」が絵図面を描いたことが記されている。また、「埋蔵物発見ノ義ニ付上申」には、「…現場へ出張官吏ノ日記及ヒ絵図面相添一応上申仕候間至急何分ノ御指揮相成度候也」とある。この「絵図面」はまさに絵図正本にあたる。なお、「古墳見分日記」には付箋がついており、「図面壱葉庶務局ニ保蔵ス」と書かれていた。ある時期まで庶務局で、絵図正本が保管されていたことがわかる。

この農商務省へ提出された2つ目の絵図正本は、本章第4節で詳しくみるように明治時代から大正時代にかけて少なくとも3人の研究者が閲覧していたようである。1人目は若林勝邦であり、この絵図の石室図面を使って石柵のある古墳として紹介した〔若林1898〕。2人目は梅原末治であり、若林同様に石室に言及した〔梅原1924〕。注目すべきは、「後藤守一君恵与の図に依りてこれを見るに…」とあり、当時、東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）に勤めていた後藤守一からの情報提供があったことがわかる。つまり、3人目は後藤守一であり、1920年代頃まで東京帝室博物館に絵図正本が確実に保管されていたことを示すものである。『埋蔵物録』などの東京国立博物館所蔵公文書には絵図正本は含まれていなかったが、未知の公文書に絵図正本が綴じられていた可能性は極めて高いといえるだろう。

このように、2本の絵図正本は宮内省と農商務省博物館に宛てられた公文書に添付されていたと考えられる。京都国立博物館所蔵絵図は草稿ではあるが、公文書の記載と矛盾はなく、それらに添付されていたであろう絵図正本とほぼ同じ内容のものであったといえる。

## 2. 鹿谷古墳出土遺物をめぐる中央官庁の対応

ここでは先述した公文書をもとに、京都府による見分後の中央官庁の対応、そしてどのような経緯でゴーランドが出土遺物入手するに至ったのかについて述べる。

### (1) 宮内省と農商務省の対応

明治14(1881)年7月6日付で「古墳見分日記」とする報告書と絵図正本が宮内省へ上申されてから約半年後、宮内省から京都府にあてて鹿谷古墳は陵墓ではない旨の回答が出された(⑦、宮B)。

また、宮内省へ上申された後、次は京都府から博物館(現在の東京国立博物館)を所管していた農商務省に、鹿谷古墳から出土遺物が発見されたことが上申された(⑧、東B-2)。これは明治10(1877)年9月27日付内務省布達甲第20号「遺失物取扱規則中埋蔵物ヲ掘得ル者処分方」(…右物品ノ中古代ノ沿革ヲ徴スルモノモ有之候ニ付、処分前一応当省へ届出検査ヲ可受、其品ニヨリ相当代価ヲ以テ購求シ、官私中分ニ係ルモノハ其価格ノ半高ヲ発掘人へ下附シ、該物品ハ永ク博物館へ陳列可致候条、此旨布達候事。但、物品ハ先ツ掘出地名及形状等ヲ詳記シ、及ヒ模写スルモノヲ郵送シ、其見込アルモノニテ送付方相達候後、本文ノ通可取計候事)に応じたものである(明治8(1875)年3月30日から明治14(1881)年4月6日までは、内務省が博物館を所管していた)。

農商務省から知らせを聞いた博物館は、必要なものであることからこれらを買上げようと京都府に値段を問い合わせた(⑨、東B-1)。それに対して京都府は、鹿谷古墳の埋蔵物は犯罪(おそらくは盗掘)に関係している可能性があり、そうであるとすれば官没となり購入する必要がなくなることから、其筋(おそらくは警察署)に問い合わせしているところである旨を上申した。そこからの指令が届き次第、改めて返答するとのことであった(⑩、東B-3)。

ところが、その後1年が経過しても京都府から返答がなかったようであり、博物館は京都府に返答の催促をしている(⑪、東B-4)。その約1ヵ月後、ようやく京都府からの上申が届いた。それは、取扱主任が手続きを怠っていたため、鹿谷古墳出土遺物が明治16(1883)年5月に売却されてしまったことがわかったという内容であった(⑫、東B-5)。

これに対して博物館は京都府に、鹿谷古墳の出土遺物は考証が必要なものであるから手続きをした上で差し出すよう依頼した(⑬、東B-6)。また、博物館を所管する農商務省から京都府に、鹿谷古墳の出土遺物を博物館へ差し出すよう指令を出した(⑭、東B-7)。京都府からの上申により、鹿谷古墳出土遺物がすでに売却されてしまったことは把握していたはずであるから、実質的には京都府側の責任を追及しようとしたものであろうか。

この指令を受けた京都府は博物館に、すでにほかの管轄(大阪府)に在留の外国人(ゴーランド)に売却してしまった後であり、京都府が買い戻しまたは借り入れをするのは難しいことから、博物館側で取り計らってほしい旨を上申した(⑮、東B-8)。また、農商務卿に対しては、不都合なことではあるが今更仕方ないことであるので、聞き置いてほしいという旨を上申した(⑯、東B-9)。

この京都府からの上申に対する農商務省の対応については以下の3つの公文書が認められる。

- ・明治16年11月付 農商務卿「埋蔵物之義ニ付京都府へ御指令案伺」(起案文)(⑰、東B-10)

内務省布達甲第20号に違反しており、出土遺物は外国人に売却されて取り戻すこともできない。甚だ不都合であるため、厳しく処分されて然るべきである。今回に限り聞き置くが、以後不都合のないようにすること。ただし、担当者の主任官吏には相当の処分を下すことという指令案が作成された。時枝務が指摘するように、農商務卿の怒りが伝わってくるような文章である〔時枝2001〕。なお、この主任官吏とは、宮内公文書館が所蔵する公文書(⑤、宮A)をみると、「立案主任 十等属半井真澄」とあることから、半井真澄であった可能性がある。ただ、明治16年までに異動していた可能性もあるので、確定はできない。

・明治16年12月付 農商務卿から京都府宛「埋蔵物之義ニ付京都府へ御指令案伺」(②、東B-11)

専断で掘出人に出土遺物を戻したことは不都合なことであるが、今回に限り聞き置くこととするという指令がなされた。「契」の割り印があることから、この案の通りに指令が出されたのであろう。上記の起案文よりも穏便であり、主任官吏の処分には言及されていない。

・書記局「埋蔵物ノ件」(東B-11別紙)

京都府知事に責任はあるが、古器物に関することであり、行政に影響はないことから責任は追及しない。主任官吏の処分は京都府知事の権限内のことであるから、農商務省から指令を出すことはしないということである。付箋には、野村博物館長には説明済みであり、書類は一先差し戻すと書かれている。この「埋蔵物ノ件」は、厳しい処分が下された明治16年11月付の起案文(東B-10)を差し戻し、穏便な明治16年12月付の指令にした経緯が書かれたものであろう。

## (2) ゴーランドが出土遺物を入手した経緯

鹿谷古墳出土遺物がゴーランドに売却されたのは、警察署で保管されていた出土遺物が明治9(1876)年4月19日付太政官布告第56号「遺失物取扱規則」により、1年が経過した後に土地共有者へ下付されてしまったことに起因するようである。その結果、明治16(1883)年5月某日、出土遺物は土地共有者によってゴーランドに50円で売却されてしまった(⑭、東B-5)。明治15(1882)年7月18日付の京都府から農商農省に宛てた公文書(⑩、東B-3)では、鹿谷古墳の埋蔵物は犯罪(おそらくは盗掘)に関係している可能性があり其筋(おそらくは警察署)に問い合わせている旨が報告されたが、その後、其筋からどのような返答があったのかを京都府は博物館に改めて上申しなかった。後日、出土遺物が土地共有者へ下付されているから、おそらく犯罪に関係するものではないと判断されたのであろう。だが、もともと博物館は購入するつもりで値段を聞いていたから、京都府からその旨の上申があれば、土地共有者へ下付される前に、改めて購入の手続きを進めていたはずである。たしかに、京都府の担当である主任官吏が手続きを怠ったことが原因であったようだ。これは、時枝が指摘するように、内務省布達甲第20号をはじめとした法令が定められてはいたものの、地方における埋蔵物行政への取り組みが博物館の意図とは無関係な状態に置かれていたことも背景にあったと考えられる〔時枝2001〕。あるいは、ゴーランドに出土遺物を売却するという一方で、関係者の間で既に話がまとまっていたのかもしれない。

半井が作成した古墳見分日記や遠藤茂平が作成した絵図は、明治期の埋蔵物行政に関わる公文書に付されたものとしては高い水準にあり、現在の我々にも多くの情報を提供してくれる。だがその一方で、事務的なミスによって出土遺物の海外流出を招いてしまっている。当時の埋蔵物行政の実態をよく示す事例であろう。

(土屋隆史)



### 3. 鹿谷古墳に対するゴーランドの調査・研究

鹿谷古墳に対するゴーランドの調査活動を示す資料としては、大英博物館所蔵のゴーランド文書資料のほかに、ロンドン古物学協会 (Society of Antiquaries of London。以下、古物学協会) 所蔵品にも遺物リスト (直筆ノート) がある。以下、文書の内容の概要を紹介し、それらからゴーランドの調査・研究活動を復元する。なお主要な文書資料の写真については挿図や図版で示し、翻刻文については本章第5節に掲載している。

#### (1) 大英博物館、ロンドン古物学協会が所蔵するゴーランド文書資料

大英博物館所蔵の大量のゴーランド文書資料は、様々なサイズのメモや文書、絵図、写真、図面、手紙などからなり、現在、大型の紙箱9箱 (BOX1~9) にわけて収納されている。これらの中から約50点の鹿谷古墳関係資料を確認した。また、ガラス乾板については別箱に保管されており (GBOX1~7)、鹿谷古墳関係のものとしては6点を確認した。表2に示したように本プロジェクトでは文書資料全体について、BOXごとにわけてゴーランド文書整理番号をつけている。鹿谷古墳・鹿谷古墳群に関係する文書資料は、次の4種類に大別することができる。

英A (ゴーランドの鹿谷古墳・鹿谷古墳群の調査・検討記録) : 半井真澄の記録などを参考にゴーランドが検討したメモ。

英B (半井真澄の鹿谷古墳見分記録) : 半井真澄の「古墳見分日記」の草稿やその英訳など。

英C (ゴーランド作成の図面や写真・ガラス乾板類) : ゴーランドが作成した石室や遺物などの図面や写真・ガラス乾板類。

英D (論文資料・そのほか) : ゴーランドが論文で使用した図と類似する図や手紙、記事など。

以上の区分に基づき、さらに内容のまとまりや形式などから整理し、枝番号を付けて示す。

なお古物学協会所蔵のゴーランド文書資料には「直筆ノート (A)」(須恵器のリスト) と「直筆ノート (B)」(金属製品のリスト) がある〔竹村2015〕<sup>2</sup>。これらの直筆ノートと類似するものが大英博物館にも存在することが知られているが〔後藤1997b・1997c〕、本プロジェクトの調査において直接確認できたのは「直筆ノート (A)」のみである。大英博物館所蔵の直筆ノートは翻訳が公表され〔直筆ノート (A) : 後藤1997b、直筆ノート (B) : 後藤1997c〕、古物学協会所蔵の直筆ノートはAのみ翻刻がなされている〔竹村2015〕。ここではそれらを引用し、鹿谷古墳関係の出土遺物に関する箇所のみを取り上げる。

#### 大英博物館所蔵文書資料

##### 英A ゴーランドの鹿谷古墳・鹿谷古墳群の調査・検討記録

ゴーランドが鹿谷古墳を検討した内容のメモ (英A1・2)、メモをもとにまとめたもの (英A3・4)、そのほかゴーランドの見解や分類などを記したメモ (英A5~7) などがある。

英A1-1~10「鹿谷古墳の検討メモ」(図18~20、図版9~11) 文章や図を含む用紙10枚に黒字の筆記体で書かれたもので、鹿谷古墳に関して詳述する。内容としては半井真澄の調査記録 (英B) などをもとに、ゴーランドが整理・作成したものと考えられる。

英A1-1 (図18、図版9上) は、縦約26cm、横約40cmの用紙に線のみで簡単な地形と古墳の分布を描い

た図である。図は京 B-2「古墳の分布図」(図11、図版3上)や、英 B3「古墳の分布図」(図22、図版3下)とほぼ同一内容であるが、やや簡略化されている。地名などはすべて英語表記に変えられ、また地名を省略したところや読み方が異なる箇所もみられる。なお、説明文や茶ノ木山への道が記されているなどの差異も認められる。

英 A1-2 (図19、図版9下左)は、縦約26cm、横約21cmの用紙に鹿谷古墳の墳丘平面図と説明文を記述したものである。墳丘平面図は京 B-3「墳丘および石室図」(図12、図版2上)などから写したものとみられる。その際に各地点名の十干表記を大文字のアルファベットに変えている。また各地点の説明はこちらの方が詳しい。

英 A1-3 (図20、図版10上)は、縦約26cm、横約21cmの用紙に鹿谷古墳の横穴式石室図を描いたものである。墳丘と石室の立面図と、石室の平面図および片側の立面図を描いている。英 A1-2と同様に、京 B-3「墳丘および石室図」に描かれた絵図と共通する。京 B-3の各地点名のいろは表記は、小文字のアルファベットに変えている。また注記などに省略がある。そのほか、英 A1-3は平面図の復元部分を表現していないこと、石棚の輪郭は破線で描くが仕切石<sup>3</sup>の表現がないこと、立面図で玄門付近の床面の敷石が描かれていないなど、京 B-3とは細部に異なるところがみられる(第3章第4節参照)。

英 A1-4~10 (図版9~11)は、縦約26cm、横約21cmの用紙に書いたもので、鹿谷古墳石室の石棚・仕切石の構造や遺物の出土位置、遺物などについて詳述する。石室内の状況は英 A1-3の石室図(図20)の地点名と対応した説明文がある。遺物に関しては説明文とともに略図も一部添えられている。なお、この略図は京 A「遺物の図面1」に描かれている図(図13~16、図版5~7)と類似していることから、これは絵図をもとに描かれた可能性が高いと考えられる。

このように、英 A1は京都国立博物館所蔵絵図(京 A・B)などと内容は共通するが、絵図に記された各記号の説明や遺物の詳述など京都国立博物館所蔵絵図にはみられない情報が含まれている。絵図正本は2本が清書されており(本章第1節参照)、そのうちの1つをもとに作成された可能性がある。

英 A2-1~5「鹿谷古墳・鹿谷古墳群の検討メモ」 縦約34cm、横約22cmの罫紙 5枚に赤字の筆記体で記述したものである。この資料には、「1881 Dec」と日付が記してあり、鹿谷古墳出土遺物と6基のドルメン、6基のマウンドについての記録をリスト形式で記載する。

鹿谷古墳については、出土遺物や石室内での出土状況を記入している。遺物に関しては形状と個数、材質について記しており、木質や繊維質など有機物の付着についても触れている。出土状況に関しては、聞き取りや「古墳見分日記」の絵図などを参考に書いたものと考えられる。ただし、絵図正本を写したと考えられる英 A1と比べると、刀と土器の出土位置の関係が異なり、この資料にのみガラス玉の出土位置などの記述があるなど、両者の内容は厳密には一致しない(第3章第4節参照)。

このほか6基のドルメンについては、Midozukaの詳述と、5基のドルメン(No.2~6)の立地や状態、墳丘の形状、石室の規模や天井石、石棚などについて書いてある。6基のマウンド(A~F)については、その規模や構造などについて記述している。また、13基の墳丘が認められるが、ドルメン、すなわち横穴式石室の有無は言及しがたいことなどが書いてある。

これらの資料はゴーランドが1881年12月に鹿谷古墳群を訪れた際の調査記録と考えられる。「photo」や「Lantern slide」などの注記は、後述する英 C「図面や写真・ガラス乾板類」に関するものと考えられる。なお、これらの注記は欄外に書かれており、ゴーランドがガラス乾板を入手したのは1882年頃とみられることもふまれば〔後藤1997a〕、後から書き足された可能性が高い。

英 A3-1~3「鹿谷古墳報告の草稿」 縦約33cm、横約21cmの罫紙 3枚に黒字の筆記体で書いたもので、赤字で修正を加えたところもある。鹿谷古墳群の立地や石室構造などの特徴から始まり、鹿谷古墳の墳丘や発掘調査、石室構造や遺物の出土状況など順を追って記述されており、メモではあるが鹿谷古

墳の報告文を意識した体裁となっている。刀や土器の出土位置情報は現地調査のメモ（英A2）と一致するが、仕切石の規模や、人骨や歯は見つかっていないとする記述は、英A1・英A2のいずれの資料にもみられない情報である。

なお、鹿谷古墳の立地や半井真澄の調査記録のことなど一部分に関しては、1883年2月11日付（ヴィクター・ハリスは7月11日とみる）でW.G. アストンに宛てた手紙（㉒）の内容〔ハリス2003：15・23〕と一致していることから、この資料はそれまでに作成されたものと考えられる。亀岡で鹿谷古墳の報告書や図面、出土遺物を発見し、鹿谷村の村長から細かい説明を受けたことを記す内容は、明治14（1881）年12月の出来事（㉓）について触れたものであろう。

英A4-1～4「鹿谷古墳・鹿谷古墳群報告の草稿」縦約15cm、横約22cmの用紙1枚と、縦約34cm、横約21cmの用紙3枚に赤字の筆記体で書いたものである。丹波鹿谷村の地理的位置や13基の古墳群の分布、墳丘、石室構造、出土遺物などについて記述する。石室に備え付けられた石柵や、「石棺」のようなものと表現している仕切石、金属製品の出土遺物などを他地域の古墳と比較する。鹿谷古墳の石室はゴーランドが鹿谷を訪問する前に長時間の豪風雨が数日間続いたため石室の調査をできなかったこと（英A4-3）、鹿谷古墳の出土遺物を購入し、それらが現在、大英博物館の所蔵となっていること（英A4-4）なども記している。

英A3は鹿谷古墳を中心にまとめたものであるのに対し、この資料では他地域の古墳と比較しつつ鹿谷古墳群および鹿谷古墳の石室構造や出土遺物の位置づけを行っている。また、鹿谷古墳の出土遺物が大英博物館に所蔵されているとの記述もみられることから、この文書はゴーランドがイギリスへ帰国し、コレクションを譲渡した明治22（1889）年4月（㉔）以後に書かれたものである可能性が高い。

英A5-1・2「鹿谷古墳の被葬者・古代の信仰に関するメモ」縦約14cm、横約13cmの用紙2枚に書いたもので、英A5-1は「Tamba dolmen」というタイトルを黒字、本文を赤字の筆記体で書き、英A5-2は「The celebration of the religious rites ceremonies of religion」というタイトルを赤字、本文を黒字の筆記体で記述している。英A5-1には鹿谷古墳の石柵を持つ石室構造の特異性や出土遺物などから被葬者の階層について触れており、英A5-2はそこから推定される信仰や石室を築造した人々などその時代背景について記しているようである。

英A6「丹波のドルメン分類」縦約21cm、横約20cmの用紙1枚に黒字の筆記体で書いたものである。丹波のドルメンを立地や墳丘規模、石室構造などから4つに分類している。

英A7-1～3「石柵を持つ古墳例に関するメモ」英A7-1は縦約20cm、横約13cmの用紙に黒字の筆記体で書いたもので、英A7-2は縦約13cm、横約20cmの用紙、英A7-3は縦約12cm、横約18cmの用紙に赤字の筆記体で記述している。いずれも、他地域の石柵を持つ古墳例に関するメモで、英A7-1は東京人類学会の若林勝邦によるものと書いてあり、筑後の3基のドルメンの名前をあげている<sup>4</sup>。英A7-2と英A7-3の内容は同じである。『東京人類学会雑誌』第26号の香川論文から得た情報で〔香川1888〕、阿波の1基のドルメンについて記している。英A7-2のみ「半田」と日本語表記がみられる。また、英A7-1にはハリスが書いたとみられる付箋が貼られている。（奥田智子）

## 英B 半井真澄の鹿谷古墳見分記録

英Bは半井真澄の「古墳見分日記」の草稿の文章（英B1）や絵図（英B2・3）、その草稿の文章を英訳したもの（英B4）である。

英B1-1～6「古墳見分復命書」縦約26cm、横約18cmの京都府の罫紙に黒字の日本語表記で書かれている。明治14（1881）年5月10日付けで庶務課社寺掛十等属の半井真澄によって作成された復命書である。鹿谷古墳への見分を終えた後に京都府に提出された出張報告書であるが、取り消し線や朱書きが

表2 大英博物館所蔵鹿谷古墳関係ゴーランド文書資料一覧

資料分類	枝番	形態と法量	内 容
<b>英A ゴーランドの鹿谷古墳・鹿谷古墳群の調査・検討記録（半井真澄の調査記録を写したものを含む）</b>			
A1 鹿谷古墳の検討メモ （半井真澄の調査記録を整理・作成したもの）	1	メモ(約26cm×約40cm)	古墳分布図
	2	メモ(約26cm×約21cm)	墳丘図
	3	メモ(約26cm×約21cm)	墳丘と横穴式石室図
	4	メモ(約26cm×約21cm)	横穴式石室各部位と遺物出土状況の説明
	5	メモ(約26cm×約21cm)	横穴式石室各部位の説明 遺物の説明(鉄刀)
	6	メモ(約26cm×約21cm)	遺物の説明(鉄刀、馬具)
	7	メモ(約26cm×約21cm)	遺物の説明(馬具)
	8	メモ(約26cm×約21cm)	遺物の説明(馬具、振り環、双鱼佩、玉類など)
	9	メモ(約26cm×約21cm)	遺物の説明(須恵器)
	10	メモ(約26cm×約21cm)	遺物の説明(須恵器)
A2 鹿谷古墳・鹿谷古墳群の検討メモ （1881年12月の現地調査メモ）	1	メモ(約34cm×約22cm)	鹿谷古墳の遺物リストと出土状況
	2	メモ(約34cm×約22cm)	鹿谷古墳の遺物リストと出土状況
	3	メモ(約34cm×約22cm)	鹿谷古墳群(ドルメン)
	4	メモ(約34cm×約22cm)	鹿谷古墳群(ドルメン)
	5	メモ(約34cm×約22cm)	鹿谷古墳群(マウンド)
A3 鹿谷古墳報告の草稿	1	メモ(約33cm×約21cm)	
	2	メモ(約33cm×約21cm)	
	3	メモ(約33cm×約21cm)	
A4 鹿谷古墳・鹿谷古墳群報告の草稿	1	メモ(約15cm×約22cm)	
	2	メモ(約34cm×約21cm)	
	3	メモ(約34cm×約21cm)	
	4	メモ(約34cm×約21cm)	
A5 鹿谷古墳の被葬者・古代の信仰に関するメモ	1	メモ(約14cm×約13cm)	
	2	メモ(約14cm×約13cm)	
A6 丹波のドルメン分類		メモ(約21cm×約20cm)	
A7 石棚を持つ古墳例に関するメモ	1	メモ(約20cm×約13cm)	筑後の石棚を持つドルメン
	2	メモ(約13cm×約20cm)	阿波の石棚を持つドルメン
	3	メモ(約12cm×約18cm)	英A7-2と同じ内容
<b>英B 半井真澄の鹿谷古墳見分記録</b>			
B1 古墳見分復命書	1	文書(約26cm×約18cm)	
	2	文書(約26cm×約18cm)	
	3	文書(約26cm×約18cm)	
	4	文書(約26cm×約18cm)	
	5	文書(約26cm×約18cm)	
	6	文書(約26cm×約18cm)	
B2 古墳群までの略地図		絵図(約25cm×約35cm)	
B3 古墳の分布図		絵図(約25cm×約35cm)	
B4 古墳見分復命書の翻訳	1	メモ(約33cm×約21cm)	
	2	メモ(約33cm×約21cm)	
	3	メモ(約33cm×約21cm)	
<b>英C ゴーランド作成の図面や写真・ガラス乾板類</b>			
C1 鹿谷古墳群の石棚を持つ石室図と写真 [Midozuka (105)]	1	紙焼(約25cm×約35cm)	墳丘と石室、石室平面図・立面図
	2	紙焼(約28cm×約36cm)	墳丘と石室、石室平面図・立面図
	3	紙焼(約22cm×約26cm)	石室平面図・立面図
	4	ガラス乾板	石室平面図・立面図
	5	ガラス乾板	石室写真(奥壁付近)
C2 鹿谷古墳群の石棚を持つ石室図 [No. 3 (106)、No. 6 (107)]		紙焼(約30cm×約38cm)	石室平面図・立面図、墳丘図
C3 鹿谷古墳群の石棚を持つ石室写真 [No. 3 (106)]		紙焼(約22cm×約28cm)	石室写真(奥壁付近) 裏にメモあり
C4 鹿谷古墳群の石棚を持つ石室写真 [No. 6 (107)]	1	ガラス乾板	石室写真(奥壁付近)
	2	紙焼	石室写真(奥壁付近)
C5 鹿谷古墳ほか出土品集合写真	1	ガラス乾板	
	2	紙焼(約22cm×約29cm)	
	3	紙焼(約24cm×約22cm)	
C6 鹿谷古墳出土鏡板鐔の写真	1	ガラス乾板	
	2	紙焼(約29cm×約20cm)	
C7 鹿谷古墳出土台付子持壺と「Kawachi」の台付三連壺の写真と図	1	ガラス乾板	
	2	紙焼(約26cm×約33cm)	
<b>英D 論文資料・そのほか</b>			
D1 1897年論文に使用した馬具の図と類似する図		紙焼(約21cm×約21cm)	
D2 アストンへの手紙の一部(1883年2月11日)	1	手紙(約21cm×約13cm)	
	2	手紙(約21cm×約13cm)	
D3 ゴーランドの日本の石室写真展示に関する記事		紙(約22cm×約14cm)	

※このほかにも「直筆ノート(A)」〔後藤1997b、竹村2015〕と「直筆ノート(B)」〔後藤1997c・竹村2015〕、横穴式石室のリスト〔Gowland1897・1899、ゴー

ゴーランド文書 資料整理番号	挿図 番号	図版 番号	備 考	文 献
4-63-10	18	9上		ハリス・後藤2003:15 [6]
4-63-11	19	9下左		
4-63-12	20	10上		
4-63-14		9下右		
4-63-15		10下左		
4-63-13		10下右		
4-63-16		11上左		
4-63-17		11上右		
4-63-18		11下左		
4-63-19		11下右		
4-20-1-4				
4-20-1-5				
4-20-1-6				
4-20-1-7				
4-20-1-8				
4-63-4			英A3は〔ハリス2003〕のアストンへの手紙の一部と一致	ハリス2003 : 23
4-63-5				
4-63-6				
4-20			別紙(英A4-2に付随)、英A4はイギリス帰国後に執筆か	
4-20-1-1				
4-20-1-2				
4-20-1-3				
4-20-2				
4-20-2-B				
4-63-3				
4-63-1				
4-63-2				若林1895を参照か
5-6-(12)~(14)				香川1888
3-208-A				
3-208-B				
3-208-C				
3-208-D				
3-208-E			草稿	
3-208-F				
3-208-H	21	4下		
3-208-G	22	3下		
4-63-7				
4-63-8			草稿の翻訳	
4-63-9				
7-10		12下	用紙色付	
3-205			文字入り	
3-115				Gowland1899:147 (Fig. 10) . ゴーランド1981:184 (挿図48)
G1-5				
G5-26・27		12上		ハリス・後藤2003:75 [148]
4-4	2			富山2007 : 167 (図3) (富山トレース)
2-9		13下	裏にメモあり	
G6-4				
2-12		13上		ハリス・後藤2003:75 [149]
G1-11		14中右	紙焼きを写したもの	ハリス・後藤2003:83 [160]
8-29		14中左	集合写真の一部 (左側)	Gowland1899:PlateXII (Fig. 2) . Gowland1907:41 (FIG. 21) . ゴーランド1981:II-8・写真24
2-29			集合写真の一部 (右側)	
G1-12				
8-27		14下左		Gowland1899:PlateXII (Fig. 1)
G1-15		14下右	写真 左右:鹿谷古墳出土、中央:「Kawachi」	Gowland1899:PlateXIV (Fig. 1)
3-79	3			
3-75	4			Gowland1897:50 (Fig. 30・31) . ゴーランド1981:76・77 (挿図25・26)
4-65-3			ハリス掲載のゴーランドの手紙の一部と一致	ハリス2003 : 20
4-65-3-B				
4-20-5-13			専門雑誌に掲載	Gowland1890

ンド1981)、大英博物館に譲渡した際の見積書〔竹村2015 : 123 (図29) などがある。

みられることから、正本ではなく草稿であろう。明治15（1882）年6月5日付けで京都府知事北垣国道から農商務卿西郷従道宛に提出された「古墳見分日記」（東B-2別紙）と比べると、内容は同一であるが、一部の用語が異なるところもある（翻刻の太字部分が異なる箇所）。清書した際に、文章表現がさらに調整されたのであろう。「但シ、絵図ノ如キハ遠藤茂平清書ノ上、直チニ一旦之差出處。」との記載もあり、明治14年5月10日の時点では遠藤茂平の絵図は完成していなかったこともわかる。

英B2「古墳群までの略地図」（図21、図版4下）縦約25cm、横約35cmの薄紙に描かれた古墳群までの略地図である。地名などの文字の横には、アルファベット表記で漢字の読み方が記されている。アルファベット表記には、活字体の部分と筆記体の部分とがみられるが大部分は活字体である。ほかのゴーランド文書資料の筆跡と比較すると、筆記体の方はゴーランドが記したものであろう。朱色の点線は、ゴーランドが自ら調査の際に辿った道を示したものであると考えられる。図の中央付近、「丸ヶ城」の下にはひときわ大きな塚の表記と、朱色の点線がある。場所から考えて、これは「鹿谷古墳」の場所を示したものであろう。そのほかの地名のアルファベット表記は、ゴーランドが雇ったという通訳〔ハリス2003：15〕によるものであろうか。

この絵図は、京B-1「古墳群までの略地図」（図10、図版4上）と類似する。地形がより丁寧に描かれており、地名の情報量も豊富である。地名に取り消し線が引かれていることから正本とは考えられないが、京B-1の略地図より正本に近いものと考えられる。地名にアルファベットで漢字の読み方が記されたのは、ゴーランドが自身の検討資料として加工したことによる。

英B3「古墳の分布図」（図22、図版3下）縦約25cm、横約35cmの薄紙に描かれた古墳の分布図である。英B2「古墳群までの略地図」と同様に文字の横には、アルファベット表記で漢字の読み方が記されている。アルファベット表記には、活字体の部分と筆記体の部分とがみられ、活字体の部分は主に地名、筆記体の部分は、図面標記の凡例にあるように土地の現状を示した部分にみられる。地名のアルファベットはゴーランドが雇ったという通訳が記載したものであろうか。

この絵図は、京B-2「古墳の分布図」（図11、図版3上）とほぼ同一であり、図としてはほぼ重なる。おそらく共通の正本から写されたものであろう。京B-2との違いとしては、「丹波国南桑田郡第七組鹿谷村山地面處絵図面也」とあること、記号の凡例があること、地名などの横に、アルファベット表記があることなどである。地名の中には、一部はこちらの絵図にのみみられるものもある。この絵図のほうが京B-2よりも正本に近いといえるだろう。英A1-1「古墳の分布図」（図18、図版9上）はこの図を簡略化したものである。

英B4-1～3「古墳見分復命書の翻訳」縦約33cm、横約21cmの罫紙3枚に黒字の筆記体で書かれているが、筆跡からみてゴーランドが書いたものではない。赤字の筆記体で修正が加えられている部分は、ゴーランドによるものであろう。その内容は省略している部分や表現方法を変えている部分などがみられるが、英B1を英語に翻訳したのと考えられる。なお、後半部分に関してはその内容が公表されており、ゴーランドが雇った日本人通訳による翻訳であるという〔ハリス2003：23〕。 （土屋・奥田）

## 英C ゴーランド作成の図面や写真・ガラス乾板類

ゴーランドが鹿谷古墳群を調査した際に記録した図面や写真・ガラス乾板類である。合計15点を確認した。その内容は、石柵を持つ3基の横穴式石室（Midozuka（No.1）、No.3、No.6）の図面や写真・ガラス乾板（英C1～4）と、鹿谷古墳ほか出土遺物の集合写真（英C5）や、鏡板轡（英C6）、台付子持壺（英C7）などの遺物写真である。

英C1～4 石柵を持つ横穴式石室（図2、図版12・13）石柵を持つ3基の石室（Midozuka、No.3、No.6）の資料にはそれぞれ、石室の平面図と片側の立面図、奥壁付近を写した写真やガラス乾板がある。

英C1のMidozukaの石室図は同じ図面をもとに作成した3枚の図面(英C1-1~3)と、図面を写した1枚のガラス乾板がある<sup>5</sup>(英C1-4)。英C1-1の図面(図版12下)は墳丘や石の稜線を描くなど丁寧な作図となっている。また、スケールが入っていることから、石室図を正確に描いたものであることがわかる。石室の写真にはガラス乾板が1枚ある(英C1-5)(図版12上)。

英C2のNo.3とNo.6の石室の図面は略測図(図2)で、石室の平面・立面の外形と石柵を表現し、石室長の数値が書かれている。また、鹿谷古墳群における典型的な墳丘の側面図も描かれている。

英C3はNo.3の石室の写真で(図版13下)、裏にあるゴーランドのメモからこの写真がNo.3の石室であることが確認できる<sup>6</sup>。

英C4はNo.6の石室の写真で、ガラス乾板(英C4-1)と紙焼きのもの(英C4-2)(図版13上)がある。

これら3基の石室の写真のうち2枚の写真(英C1-5・C4)(図版12上・13上)はすでに公表されており[ハリス・後藤2003:75]、もう1枚の写真(英C3)(図版13下)は今回新たな資料として報告するものである。これら3基の横穴式石室は仕切石を持たないことなどから、鹿谷古墳とは別の古墳とみられ、後述するゴーランド1897年論文に掲載されている鹿谷古墳群の石室一覧(表3)の中の石柵を持つ横穴式石室や、英C2のNo.3やNo.6の石室と対応することがわかっている(図2)[富山2007]。すなわち、Midozuka(No.1)の石室が表3の105の古墳、No.6の石室が表3の107の古墳、そして今回新たに報告するNo.3の石室は表3の106の古墳にそれぞれ該当する。

英C5~7 鹿谷古墳ほか出土遺物の写真・図面(図3、図版14) 鹿谷古墳出土遺物の資料にはガラス乾板3枚と写真3枚がある。

英C5は馬具など金属製品を写したものである。これまで「鹿谷古墳群出土品一括」[ハリス・後藤2003:83]などとして紹介されてきた馬具類などの集合写真の乾板(英C5-1)(図版14中右)は、鹿谷古墳出土遺物だけでなく、土佐の領石村の古墳(現、高知県笹原古墳)から出土した遺物も含まれていることが今回の調査で明らかとなった(第3章第5・6節参照)。この乾板は木製イーゼルに立てかけた紙焼きを複写したもので、背景に磁器などが並ぶ展示台が写り込んでいる。また複写の左端部分が途切れている。この途切れた部分の続きが英C5-2であるが、紙焼きしか残されておらず(図版14中左)、両者を合わせても左上部分は埋まらない。英C5-3は集合写真の右側を紙焼きにしたものである。なお、英C5-1の裏側には「18/4/96 Mr.Gowland」という書き込みがある。

これらの資料は鹿谷古墳および領石村出土の馬具等を並べた1枚の集合写真に由来するものであるが、ゴーランドは複写の形でしか所有せず、また一部を欠いた不完全なものであったことが、今回の調査を通じて明らかとなった。また、英C5-2はゴーランドの論文の中で、“ORNAMENTAL APPENDAGES OF HORSE-TRAPPINGS FROM THE ROKUYA DOLMEN.”[Gowland1899:PlateXII(Fig.2)]と題して掲載されている<sup>7</sup>。

以上のことから、これらの写真はゴーランドが撮影したものではないと考えられる。この集合写真は俯視撮影されたものであるが、当時の撮影機で、こうした大きさの集合写真を直上から撮影するには相当な設備が必要であることは想像に難くない。つまり、オリジナルの写真は、資料を所蔵していた大英

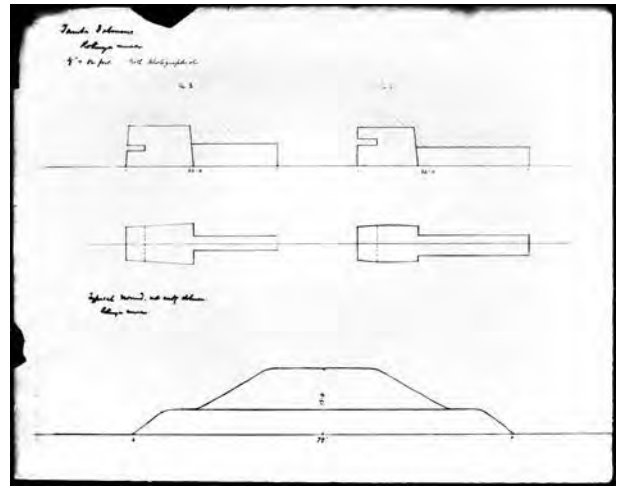


図2 英C2「鹿谷古墳群の石柵を持つ石室図」  
[No.3(106)、No.6(107)](The British Museum 所蔵)



図3 英 C7-2「鹿谷古墳出土台付子持壺と「Kawachi」の台付三連壺の図」(The British Museum 所蔵)

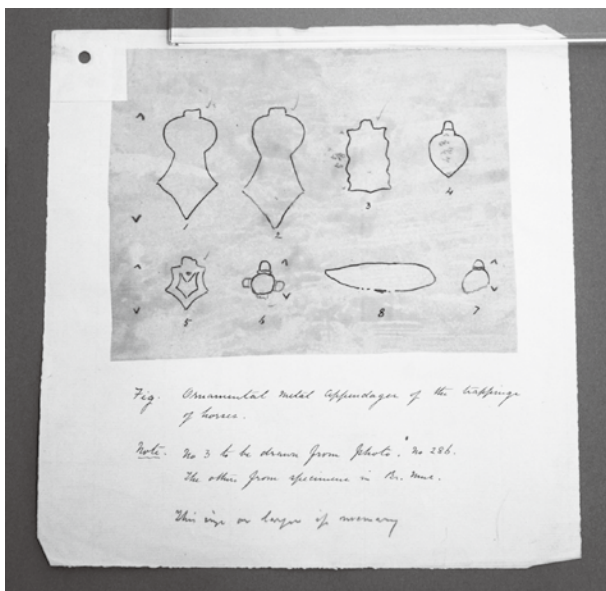


図4 英 D1「ゴーランド 1897 年論文に使用した馬具の図と類似する図」(The British Museum 所蔵)

博物館で撮影されたもので、ゴーランドはそれを複写の形で入手した可能性が高い。ガラス乾板の裏に書かれた「18/4/96」はゴーランドがこの複写を入手した日付をさすのだろうか。この1年後の1897年には、ゴーランドは鹿谷古墳について初めて言及した論文〔Gowland 1897〕を公表している。

英 C6は鹿谷古墳の鏡板轡 2 点を撮影したものでガラス乾板 (英 C6-1) と写真 (英 C6-2) (図版14下左) がある。ゴーランドの論文ではこの鏡板轡の組み合わせの図面が掲載されている〔Gowland 1897 : 49 (Fig.29)〕。

英 C7は須恵器の台付子持壺と台付三連壺のガラス乾板 (英 C7-1) (図版14下右) と図 (英 C7-2) (図 3) である。ゴーランドの論文にはガラス乾板 (英 C7-1) をトレースしたとみられる図が掲載されている〔Gowland 1897 : PlateXLI〕。また、ガラス乾板に写る土器 3 点のうち、1 点は「Kawachi」のものである<sup>8</sup>。図には鹿谷古墳出土の台付子持壺と「Kawachi」の台付三連壺が描かれている。台付子持壺は底部の表現が実物のものより短くなっている。

#### 英 D 論文資料・その他

馬具の図 (英 D1) (図 4) や手紙の一部 (英 D2)、日本のドルメン関連写真の展示に関する情報を書いた 1 枚の紙 (英 D3) などがある。

英 D1はゴーランドが論文に使用した馬具の図〔Gowland 1897 : 50、ゴーランド 1981 : 76・77〕と類似する図で、1・5～8は鹿谷古墳出土のものを描いている。

英 D2はゴーランドからアストンへ送った手紙で、1883年 2 月11日の日付が記されている。なお、この手紙はハリスが掲載したゴーランドの手紙の一部と内容が一致しており、その翻刻と翻訳が公表されている〔ハリス 2003 : 11・20〕。ただし、先述のようにハリスは日付を1883年 7 月11日としている。

英 D3は1890年に出版された『The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland』に掲載された記事で〔Gowland 1890〕、ゴーランドが共同研究者であるアストンとの関係を通じて撮影した、日本のドルメン関係の写真展示が行われたことが書いてある。ただし、展示が開催された場所や日付などの記載はない。

#### ロンドン古物学協会所蔵文書資料

「直筆ノート (A)」の須恵器のリストは古墳ごとにおおむねまとめて並べられ、基本的には通し番号



で統一している。鹿谷古墳出土のものは1・1a・2・3・3a・4にあたる。

「直筆ノート (B)」の金属製品のリストは黒字の筆記体で書かれ、赤字の筆記体で追記・修正がみられる。部分的に遺物の略図を載せている。リストは古墳ごとにまとめられており、基本的には通し番号がつくが、修正のために切り貼りをしているところがあり、番号の入れ替わりがみられる。鹿谷古墳出土遺物は42・43、47～56、58にあたり、馬具や刀などを掲載している。鹿谷古墳出土遺物一覧の前には土佐の領石村の古墳（笹原古墳）出土遺物の一覧があり、36～41、44～46がそれにあたる。通し番号の入れ替わりがみられることから、初期の段階では、鹿谷古墳出土遺物と土佐の領石村の古墳出土遺物の記載が混在していたものと考えられる。(奥田)

## (2) ゴーランドの調査活動

ここからは既知の資料や今回明らかとなったゴーランド文書資料に基づいて、ゴーランドの鹿谷古墳や鹿谷古墳群に対する調査活動の復元を試みる。ただし、ゴーランドの行動の実態を示す資料は依然限られており、不明な点が多い。

まずゴーランドが亀岡を訪れ鹿谷古墳群を調査した時期については、明治14(1881)年12月(⑥)と明治16(1883)年2月(⑬)の2度が確認できる。

### ①明治14(1881)12月の調査

英A2には「1881 Dec」の日付とともに亀岡から3.5マイルにて遺物が発見されたとの記載がある。そこには、鹿谷古墳出土遺物と出土位置を記したリスト(英A2-1・2)や、鹿谷古墳群の6基のドルメン(英A2-3・4)、6基のマウンドについての記録があり(英A2-5)、ゴーランドが実際に亀岡を訪れ鹿谷古墳群を調査した際のメモと考えられる(⑥)。この時、ゴーランドは村長の案内で鹿谷古墳へ訪れているが(英A4-2・3)、鹿谷古墳の副葬品が「取り出されて間もなく来た嵐で、石室は完全に崩壊してしまったために、石室の計測はできなかった」と記しており〔ハリス2003:16、後藤1997c:40〕(英A4-3)、半井真澄らと同様、ゴーランドも石室には入れていないようである。

また、亀岡で鹿谷古墳の報告書や図面、出土遺物を実見し、鹿谷村の村長から細かい説明を受けたことを記す1883年2月11日付のアストンに宛てた下記の手紙は(⑱)(英A3-1・2の一部と一致)、1881年12月の出来事について触れたものであろう。

「丹波のドルメン群(京都府亀岡市、鹿谷古墳群)は、古い城下町である亀岡市の北西約4マイル(約6キロ)にある鹿谷という小さな村の近くにあります。大きな古墳が一つ、村の北東、村より約500フィート(約150メートル)登った茶ノ木山という丘の山頂に存在しています。そして、13基からなる古墳の集団は、田んぼよりは少し高い荒野に散らばっています。なお、人により数が異なりますが、30から50基というかなりの数の古墳が、村の一部を取り囲む丘陵の低い麓のあちこちに見られます。

茶ノ木山の頂上にある大きな古墳は、2段からなる整った形の円墳で、高さは20～25フィート(約6～7.5メートル)、基部の円周は約382フィート(約115メートル)に及びます。その周辺には、日本の紋章の梅鉢紋の花びらのように、小さな5基の陪塚が並んでいます。羨道の存在は、外からは窺い知れません。事実、深い穴が墳頂から石室の天井石まで掘られていて、いくつかの天井石は剥き出しになっていました。これらの天井石も、石室内の壁石などが崩れているため、かなり動いていて、従って、石室内の中央部は、これらの側石と天井石で埋められているぐらいです。そこで作業員たちは、石室には石と石の隙間から入り、狭い石室内でとても苦勞しましたが、1881年4月には、作業を完了しました。

鹿谷村の村長の立ち会いのもと、ドルメン内より作業員たちは、剣、馬具、あとで説明します土器等を持ち出してお

ります。この発見が京都府の知事に報告されると、画家を従えた役人のナカライが遺物とドルメンを調べに派遣されてきました。そして、寛大にも、報告書も図面も、すべて私たちにを見せてくれました。遺物そのものの検証は、京都府の地方事務所の好意ある配慮により、亀岡で行うことができ、しかも鹿谷村の村長がさらに細かい説明をしてくれました……。〔ハリス2003：15〕

先行研究ではゴーランド文書資料に「古墳見分復命書」の草稿（英B1～3）や京都国立博物館所蔵絵図（京B-2）とほぼ同一内容の分布図（英B3）などが残されていることから、ゴーランドは12月の調査以前に半井真澄に会い、あらかじめ古墳の発掘についての情報を知っており、12月の調査自体、半井の計らいによって行われた可能性も指摘されてきたが〔富山2009：44〕、半井との直接の接触を示す資料は見当たらなかった。しかし、ゴーランド文書資料に「古墳見分復命書」の草稿が含まれていることからみて、いずれかの時点で半井本人との接触があったものと考えられる。

また、鹿谷古墳出土遺物のリスト（英A2-1・2）や、鹿谷古墳の検討メモ（英A1）には、墳丘や石室の説明、遺物の出土位置といった京都国立博物館所蔵の絵図（京B-3）にはない情報が含まれており、絵図正本をみていることは確かである。

## ②明治16（1883）年の調査

ゴーランドが共同で調査を行っていたアストンに宛てた、1883年2月11日の日付入りの手紙の一部に、この時の調査を示唆する内容がある。

「……天気によければ、今度は土曜と日曜にかけて丹波まで強行軍しようかと考えています。この次の土曜日の1時23分に、大阪駅で合流しませんか。〔中略〕」〔ハリス2003：11〕（英D2-2）

1883年2月11日は日曜日であり、「この次の土曜日か日曜日」というのは一週間後の2月17、18日にあたる。しかし実際にゴーランドはアストンとともに鹿谷を訪れたかについては記録がない。ハリスはこの手紙の日付を7月11日としているが、その日は水曜日にあたる。この次の土曜日か日曜日は3、4日後の14日、15日にあたり、郵送にかかる時間を考慮してもスケジュールとしては厳しい。また富山は1883年7月6日からの3日間にゴーランドが鹿谷古墳で調査を行っているとは推測しているが〔富山2014a〕、今回検討した資料からはそのことを確認することができなかった。

なお、ゴーランド文書資料には石柵を持つ3基の横穴式石室（Midozuka (No.1)、No.3、No.6）の図面（英C1-1～3、英C2）やガラス乾板、写真<sup>9</sup>（英C1-5・C4-1・C3）がある。これらもいつ作成・撮影されたのか明確ではない。ただしゴーランドがガラス乾板を入手したのは1882年頃とみられることから〔後藤1997a〕、撮影時期はそれ以降、おそらくは1883年2月の訪問時の可能性が考えられる。

## ③鹿谷古墳出土遺物の購入と大英博物館への譲渡

ゴーランドの文書資料にある鹿谷古墳・鹿谷古墳群の報告の草稿（英A4）の中に、鹿谷古墳出土遺物を入手し、実に7年という歳月を経て、現在は大英博物館にあるという記述がみられる（英A4-3）。

鹿谷古墳出土遺物は、ゴーランドが明治16（1883）年5月に50円で購入していたことが『埋蔵物録』から確かめられる（⑩）。国内の公文書やゴーランド文書資料には、鹿谷古墳出土遺物を購入するまでの具体的な活動を示すものはない。ただ、明治15（1882）年12月に鹿谷古墳出土遺物が遺失物取扱規則に基づいて土地共有者へ下付されてからわずか5ヶ月後にゴーランドがそれらを入手していることからみて、ゴーランドが鹿谷古墳出土遺物を購入する道筋は、明治14（1881）年12月と明治16（1883）

年2月の2度に渡る訪問の段階ですでにできていたとみるべきであろう。

ガラス乾板の中には上述の石室写真のほかに、鹿谷古墳出土遺物の集合写真(英C5)や、鏡板轡(英C6)、台付子持壺(英C7)の写真がある<sup>10</sup>。また大英博物館やロンドン古物学協会が所蔵するゴーランド直筆のノートには遺物に関する記載があり、遺物の観察結果や計測値などが書き込まれている〔後藤1997b・1997c、竹村2015〕。ゴーランドが鹿谷古墳群や鹿谷古墳出土遺物に対する調査成果を公にするのはイギリス帰国後のことであるが、以下にみるように帰国後速やかにコレクションを譲渡していることからみて、出土遺物についての基礎的な整理は、日本滞在中に済ませていたのである。

明治21(1888)年12月、ゴーランドが17年に及ぶ日本での生活を終えて帰国する際に(23)、鹿谷古墳・鹿谷古墳群出土遺物、撮影したガラス乾板やメモ、「古墳見分日記」の草案などをイギリスに持ち帰った。遺物と文書資料の大部分は大英博物館に納められ、一部の文書資料はロンドン古物学協会にも収蔵された。それらの文書資料の中には明治22(1889)年4月15日、大英博物館のA.W. フランクスに鹿谷古墳群出土遺物を含むゴーランド・コレクションを譲渡した際の明細書の写しも残っている(24)〔後藤1997c、竹村2015〕。それによれば鹿谷古墳出土遺物には90円の値がつけられたようである。

### (3) ゴーランドの検討と評価

ゴーランドは自ら調査を行った鹿谷古墳・鹿谷古墳群の石室や出土遺物についてまとまった報告はしていないが、論文の中ではしばしば言及している。そうした記述をもとに、これらの古墳に対するゴーランドの評価・位置づけについて検討する。なお引用文には、上田宏範(校注)・稲本忠雄(訳)『日本古墳文化論—ゴーランド考古論集』〔ゴーランド1981〕の訳文を利用する。

#### ①鹿谷古墳・鹿谷古墳群のドルメンに関するゴーランドの評価

ゴーランドが「丹波のドルメン」の中で石柵を持つ横穴式石室に特に注目していたことは、ゴーランド文書資料に残る図面やガラス乾板の記録などからもうかがえる。これらのほかにも、帰国後も日本の考古学関連雑誌などから他地域の石柵を持つ横穴式石室の所在について情報を得ていたこと(英A7)、丹波のドルメンを4つに分類する中で、1～3は立地や墳丘規模などからわけているのに対し、「奥壁に石柵をもつドルメン」として4を設定していることなどから、石柵を持つ横穴式石室をとりわけ重視していたことがみとれる(英A6)。また、鹿谷古墳で石柵上に馬具が副葬されていた事実などをもとに、石柵を持つ横穴式石室の被葬者が上位階層であったことや、そこから推定される当時の信仰や時代背景などについても言及を試みている(英A5)。

1897年論文では、ドルメン<sup>11</sup>(横穴式石室)を4グループに分類する中で、第3のグループ(両袖式の横穴式石室)の変形として、「奥壁から突き出て室のいっばいにわたっている、どっしりとした自然石の柵」を持つ「亀岡近くにある鹿谷のドルメン」を挙げている〔Gowland1897:31、ゴーランド1981:50〕。先述のようにゴーランドが鹿谷古墳群で実際に観察し、計測や写真撮影を行った6基の横穴式石室(写真撮影を行ったのは3基の石柵を持つ横穴式石室のみ)の中には、明治14(1881)年に発掘された鹿谷古墳は含まれていない(表3)。しかしながら「この群中の、もう一つ同じようなドルメンには、長細い自然石でできた厚さ10インチ(補注:約25cm)ばかりの板石が柵の縁下に床を横切って置いてあって、柵下にシストのような空間を作っている。この空間は、約1マイルほどの所にある川の川床から持って来た黒い粘板岩の丸石から選り出した丸石の層で覆ってあった。この層の上に人骨、小玉、そのほかの個人用装飾品の遺物があった。これから見て、この素朴な方法は埋葬棺のつもりだったことが明らかである。その古めかしさから、一見したところ、相当初期のドルメン時代のもので、荒削りの石で作った棺

表3 ゴーランドの調査した鹿谷古墳群の横穴式石室一覧（ゴーランド1981：表1をもとに作成）

番号	地域	室			羨道			全長	入口の方向	墳丘	参考	ゴーランド 文書資料
		長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ					
105	丹波 (亀岡 近くの 鹿谷)	4.4	2.1	2.7	2.7	1.1	1.2	7.1	南29度西	二段丘付円墳	幅1.6m、厚さ33cmの自然石の棚が奥壁より突出、室天井石二個	Midozuka (No. 1)
106		3.5	2.0~ 2.4	2.4	5.6	1.5	1.3	9.1	南	単円墳。破壊	幅1.1m、厚さ36cmの自然石の棚が奥壁より突出、室天井石二個	No. 3
107		3.7	2.2	2.3	6.7	1.2	—	—	西5度北	単円墳。破壊	幅1.2m、厚さ38cmの自然石の棚が奥壁より突出、室天井石二個	No. 6
108		3.6	2.0	2.6	1.2	0.9	—	—	南5度西	単円墳。破壊	室天井石三個	No. 5
109		4.1	1.5	—	不完全	0.9	—	—	南23度西	単円墳。破壊	室天井石二個	No. 4
110		3.3	1.8	2.1	不完全	4.2	1.5	—	南23度東	単円墳。破壊	室天井石一個	No. 2

〔凡例〕単位：m（原文の単位はインチ、フィートであるため数値は概数）

を使った時代に先行しているように見えるが、棚の上や室内で見つかった金属品のすばらしさと細工の見事さから考えれば、時代はもっと下がることになる。〔Gowland1897：32、ゴーランド1981：51〕という記述は、後にみる若林勝邦や梅原末治の記載とほぼ同内容といってよく、明治14（1881）年に発掘された鹿谷古墳に関するものとみてまず間違いない。後日の聞き取り調査や「古墳見分日記」の記載から、ゴーランドは石室構造や出土状況についてかなり正確に把握していたことがわかる。また、石棚を持つ横穴式石室が地域的に遍在する特殊なものであるという認識<sup>12</sup>や、副葬品（金属製品）から古墳の時期を相対的に新しくみている点などは、今日においても首肯できる指摘であろう。

1899年論文の鹿谷古墳・鹿谷古墳群に関する記載も1897年論文とほぼ同じ内容だが、「鹿谷（丹波）にある棚付きのドルメン」として石室の平面図と立面図を新たに提示している（図版12下）。「この棚は室の奥壁から5フィート3インチ（補注：約1.6m）飛び出していて、厚さ1フィート1インチ（補注：約33cm）、床から2フィート8インチ（補注：約0.8m）の高い所にあり、両側および奥壁の中へ差し込まれている〔Gowland1899：145-147、ゴーランド1981：185〕」という記載からも、表3の105、「Midozuka」の横穴式石室の図面とみて間違いない。

## ②鹿谷古墳出土遺物に対するゴーランドの評価

ゴーランドは、ドルメンの代表的な副葬品として鹿谷古墳出土遺物についてたびたび言及している。その中でも刀剣には、「ドルメン出土の重要な遺物中、鉄剣が一番大切な位置を占める〔Gowland1897：44、ゴーランド1981：68〕」と、とりわけ高い評価を与えている。鹿谷古墳から出土した鉄刀については、図面や写真を紹介することはなかったものの、1897年論文で肥後のドルメン（熊本県江田船山古墳）から出土した鉄刀を紹介する中で、大英博物館所蔵として「私は同じような長さで形の刀を鹿谷（丹波）のドルメン群の一つから手に入れた〔Gowland1897：45、ゴーランド1981：69〕」という記述がある。

馬具については「ドルメンで見つかるすべての金属製品の中で、刀剣をふくめてすらも、装飾が最も見事な点では、武人が所有した馬銜をはじめとする馬具のすばらしさには及ばない〔Gowland1897：49、ゴーランド1981：74〕」、「刀も含めて、埋葬墳出土の金属製副葬品全部の中で、馬銜やそのほかの馬具は、概して装飾が豊かである〔Gowland1907：41、ゴーランド1981：156-157〕」と、さらに高い評価を与えている。1897年論文には轡、杏葉、鞍金具、雲珠・辻金具の図面が大英博物館所蔵として掲載され、それぞれについて簡単な説明がなされている。まず轡からみると、f字形鏡板轡（図5-1）については「鏡板は外側が見事に彎曲した平らな鉄板である。左右いずれも槌でたたいて鍛造した鉄板で作っており、その外側には、酸化するのを防ぐと同時に人に誇示するために、金銅の板が貼られ、その縁をめぐる飾り釘で止めてある」、八角形鏡板轡（図5-3）についてはf字形鏡板轡と「似たような構造をしているが、もっとこみ入っている。鏡板は八つの角のある星形で、打ち抜きの透かし彫り細工がしてあり、飾り釘で飾ってある」とする。鏡板が鍛造であることを看破するとともに、鉄地金銅張に装飾だけでなく酸化

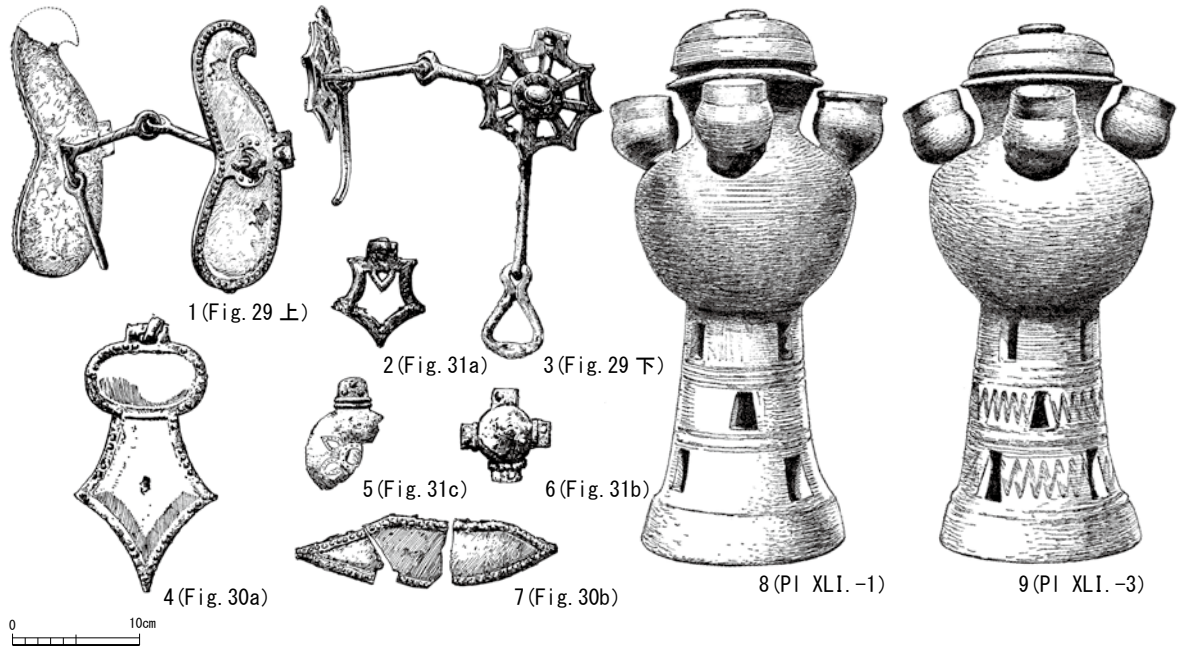


図5 ゴーランド1897年論文に掲載された鹿谷古墳出土遺物 (S=1/6、1・8・9は縮尺不同)  
 ([ゴーランド1981]より転載。括弧内は1897年論文の図番号)

を防ぐという実用的な意味があったと想定している点は今なお新鮮である。「奥壁から飛び出した自然石の柵の上で見つけたのだが、その下には、かつて武人の遺体が置かれてあった」と2点の轡の出土状況についても言及がなされている〔以上、Gowland1897: 49、ゴーランド1981: 74-75〕。次いで杏葉についてみると、上述の轡とともに「鹿谷(丹波)のドルメンの柵で見つかった六つ<sup>13</sup>のうちの一つ」として剣菱形杏葉(図5-4)が紹介されている。同じ図版に「高知(土佐)近くの領石にあるドルメンで見つかった」剣菱形杏葉を図示しつつ、地理的に離れた複数の地域から同じ形態のものが出土することから「ドルメン時代には広域にわたって使われていたもの」と推測している〔Gowland1897: 50、ゴーランド1981: 76-77〕。これら以外に「鹿谷にあるドルメンで出土した二つのうちの一つ」として鞍金具(図5-7)が、「鹿谷のドルメンで相当数見つけたもの」として五角形杏葉(図5-2)、辻金具(図5-6)、雲珠(図5-5)がそれぞれ図示されている。「下部の表面にくっつけている酸化鉄の構造からみて、a(補注:五角形杏葉)は皮帯に、ほか(補注:雲珠・辻金具)は織物、たぶん麻のものに付けてあったようである〔Gowland1897: 50、ゴーランド1981: 77〕」という記述は、その成否はさておき古墳時代馬具の有機質に注目した最初のものといえよう<sup>14</sup>。

このほか1899年論文ではf字形鏡板轡と八角形鏡板轡の写真や、鹿谷古墳から出土した馬具を中心とする金属製品の集合写真(「鹿谷(丹波)のドルメン出土の馬具及び装飾用付属品」)が掲載されており、ゴーランド自身が鹿谷古墳出土遺物をどのように把握していたかを知る上で貴重な情報となっている。

最後に須恵器については、1897年論文において「装飾用土器(埋葬室の飾り用に特別に作られた容器)」として鹿谷古墳から出土した2点の台付子持壺の図面が紹介され(図5-8・9)、次のように紹介されている。「丹波のドルメンで手にいれた三つの蓋付き壺のうちの一つである。それは、先述した豪華な馬具や金属細工と一緒に出土したものである。これらは高さ1フィート4インチ(補注:約41cm)で、最大の高杯にあったような孔のあいた台座があり、小型の壺が4個、その肩にくっつけている。これらの容器は遺体を納めたシスト状の空間の側で見つかった〔Gowland1897: 60、ゴーランド1981: 91-92〕」。1899年論文では、1897年論文に掲載された台付子持壺2点の写真が掲載されている〔Gowland1899: Fig.1〕。図面はやや俯瞰で描かれており、写真と透孔などの向きが完全に一致することから、写真をト

#### 4. 大英博物館所蔵後の研究抄史

ここからはゴードンによる発表以後、現在までの鹿谷古墳・鹿谷古墳群、およびその出土遺物に関する先行研究を、戦前と戦後にわけて整理する。

##### (1) 戦前

明治14(1881)年に発掘された鹿谷古墳について、国内で最初に言及したのは若林勝邦である。ゴードンの最初の論文(1897年論文)に遅れることわずか1年、明治31(1898)年に刊行された論文には、「石柵ある石室」の一例として鹿谷古墳が石室図面(図6-1)とともに以下のように紹介されている。

「此古墳は丹波国南桑田郡第二組鹿谷村字茶の木山にあり、石室は一室と羨道あり奥壁の正面に石の柵あり、柵の幅は石室の幅丈にて柵の奥行は狭し第一図に其側面及平面を示す、石柵の下にあたる床には板石にて堰板の如く区画す、床に平石を敷き其下に栗石を敷く、此石柵の左方には轡ありし、石柵の下なる床の中央より少しく右方には刀、鍍金せし銅片、珠の碎片ありし、石柵の下なる堰板の如き平石の外には左の隅に刀を立掛けありし、平石の外中央及び右方には祭器の台付き土器等ありし〔若林1898:255〕」

若林が1897年論文の存在を知っていたかは定かでないが、1897年論文にはなかった鹿谷古墳の石室図面が提示されていること、出土状況などの記述もより詳細であることから、本論文が1897年論文ではなく、「古墳見分日記」や絵図正本を直接参照していることは明らかであろう。若林は「古代の馬具」という論文の中でも、「丹波国南桑田郡鹿谷村の古墳より発見せしもの」としてf字形鏡板轡と八角形鏡板轡を着色木版刷り図面とともに紹介している<sup>15</sup>(図6-2・4)(若林1900)。なお若林の石室や馬具の図面は、1897年論文の図面(馬具のみ)はもちろん、京都国立博物館所蔵絵図とも一致しない。未発見の絵図正本に京都国立博物館所蔵絵図とは異なる図面が存在した可能性を示唆するものといえよう。

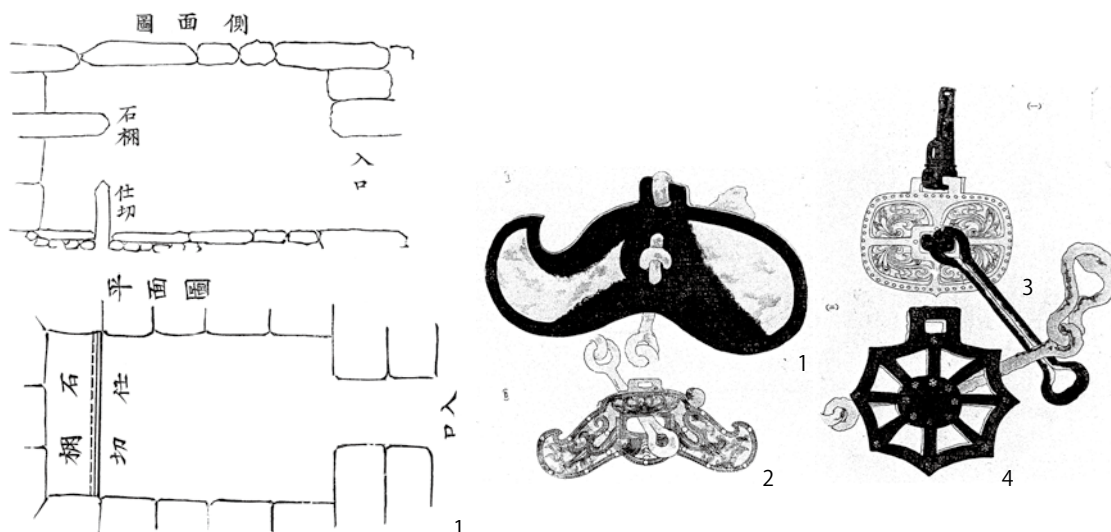


図6 若林論文に掲載された鹿谷古墳の横穴式石室(1)と馬具(2・4)(縮尺不同)  
〔若林1898・1900〕より転載

若林に次いで鹿谷古墳について言及したのは梅原末治〔1924〕である。实地調査の成果に基づいて、鹿谷古墳とは別の古墳についても図面を提示するなど、鹿谷古墳群全体について初めてまとまった記述を行った。以下、冗長ではあるが鹿谷古墳に関する記述のみ抜粋しておく。

「該古墳今は全く破壊せしも小字茶ノ木山にありしものにして、当時の届書に依るに周囲に湍の址をとどめたる二段築成の稍々大なる丸塚なりしが如く、その中央に南面の横穴式石室あり、明治二十年代に石材採掘の為これを穿てるものなりと云ふ。石室の構造は既に早く故若林勝邦氏に依りて学会に紹介せられしが（考古学会雑誌二ノ七）今は後藤守一君恵与の図に依りてこれを見るに発掘当初既に玄室の中央に崩壊せる部分ありしが如きも構造は上述の現存石室と相似たる室と羨道との区別ある系統に属せること容易に察せらるるも、其の奥壁面より扁平な石材を挺出して石柵を作り、またこれと対応する底面には隔壁を立て、敷くに栗石と扁平石を以てせる特殊の設備を加へたるものなり。（図参照）

発見の当時此の石柵の西隅に轡あり、柵の下、槲壁内に直刀及び金銅珠片等を存し、また壁の前に陶質器を置き、室の西壁には直刀一口を立懸けありしと云ふ。此の遺物の配列より見るに遺骸は槲壁内に置かれしものにして上述特殊の装置は蓋し、其の為に作られたるものと解せらる〔梅原1924：290〕

「該古墳今は全く破壊せし」、「ただ早く破壊して今は存するなきを憾となす〔梅原1924：291〕」とあるように、大正13（1924）年の段階では明治14（1881）年に地元民によって発掘された鹿谷古墳はすでに消滅したと認識されていたようである。しかしながら梅原の記述はゴーランドや若林の論文よりも詳細であり、当時、東京帝室博物館にいた後藤守一から図をもらい受けたとあることから、梅原も「古墳見分日記」や絵図正本を直接参照したとみてよい<sup>16</sup>。

このように若林、梅原いずれの論文も「古墳見分日記」と絵図正本に基づいて書かれており、ゴーランドの論文が参照された形跡は認められない。この経緯については様々な推測が可能かもしれないが<sup>17</sup>、基本的には当時の研究者にとって「古墳見分日記」と絵図正本こそが鹿谷古墳に関する唯一無二の一次資料とみなされていたことを示すとみるべきだろう。またゴーランドの論文がいずれもイギリス帰国後に、イギリスで出版されたため、入手自体が困難であったこともゴーランドの研究が長らく顧みられなかった主たる要因であったことも間違いない<sup>18</sup>。梅原以後、「古墳見分日記」と絵図正本を参照した研究はなく、鹿谷古墳は消滅したという認識とともに、梅原論文の記載や石室図面（図7）が戦後長らくの間、明治14（1881）年に発掘された鹿谷古墳に関する一次資料としての役割を果たしていくこととなる。

なおこれらの既知の資料のほかにも、東洋文庫の梅原考古資料の中に、鹿谷古墳群に関する資料が3件あることを今回確認した<sup>19</sup>〔東洋文庫1988：94〕。目録の記載事項と内容は下記の通りである。

- ・調査録 記録 鹿谷古墳群 京都府亀岡市葎田野町鹿谷 NK-737 3300  
梅原論文第49図（鹿谷古墳群の石柵にある石室形状図）の版下および「丹波鹿谷の古墳群」と題した草稿。
- ・石室 図面 鹿谷古墳群 京都府亀岡市葎田野町鹿谷 NK-737 3301  
梅原論文第48図（鹿谷古墳群の一石室実測図）の版下。
- ・石室 図面 鹿谷古墳群 京都府亀岡市葎田野町鹿谷 NK-737 3302

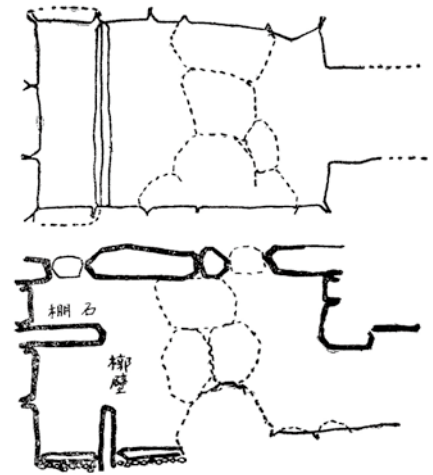


図7 梅原論文に掲載された鹿谷古墳の横穴式石室（縮尺不同）（〔梅原1924〕より転載）

梅原論文第48図（鹿谷古墳群の一石室実測図）の下図。

NK-737 3300の草稿は下記の通りで、鹿谷古墳とは別の古墳に関するものである。梅原論文の内容とほぼ同じであるが、筆跡からみて梅原のものとは考えにくい。

「丹波鹿谷の古墳群

南桑田郡種田野村大字鹿谷の北東方山腹にあり。何れも横穴式石室を有する丸塚の形式に属せるが、石材採掘の為多くは破壊されて封土の一部を留むるのみ。唯一基村落の北方約五丁の山腹（此の所標高約百十米突）にあるもの畧石室の形体を存せり。此の塚に在りては今封土の上部を削りて畑地となせるを以て外部の形を知るべからず。石室は南三十度東に面して開口し構造附図に示すが如し。（左側に「イキ」の表記あり：筆者補）玄室は長方形の平面を有し、花崗岩の割石を用ひて断面梯形を呈する如く側壁を積み成し大石一個を以て天井を覆ふ。構造の手法巧みなり。羨道部は殆んど破壊して原形を窺ふべからず然れども現状より見るに比較的長きものなりしが如し。開口古くして遺物の微すべきなく亦傳説なし。

此の石室亦た近く破壊すべしと云ふ依りて記録上に詳細なる調査を遺すべく別図を作製せり。」

## （２） 戦 後

戦後、鹿谷古墳・鹿谷古墳群について触れたものとしては、安井良三による『亀岡市史』上巻の記述をまず挙げることができる〔安井1960〕。しかしながら「近年、此の附近は大谷鑛山の廃石処理のため、殆ど埋没してしまったと云っても過言ではない」とし、『南桑田郡誌』を引用するのみで特に目新しい知見はみられない。このほかにも、大塚初重によるゴーランド・コレクションの先駆的調査〔大塚1977〕<sup>20</sup>や、上田宏範と稲本忠雄によるゴーランドの主要な論文の邦訳版の刊行〔ゴーランド1981〕によって、ゴーランド自体の再評価は進んでいったものの、その流れが鹿谷古墳や鹿谷古墳群にまで及んだ形跡は認められない。

戦後の鹿谷古墳・鹿谷古墳群に関する研究において1つのエポックとなったのは、朝日新聞社の記者であった後藤和雄によって、大英博物館に眠っていた212枚のガラス乾板が調査され、鹿谷古墳群の一古墳とみられる石柵を持つ石室の写真が存在することが明らかとなった平成4（1992）年11月の新聞報道であろう<sup>21</sup>。亀岡市文化資料館では『亀岡 発掘40年』という企画展図録の中で「ウィリアム・ゴーランドがみた鹿谷の古墳」という項目を設け、ゴーランドの調査を振り返るとともに「ゴーランドがみた鹿谷の古墳（想像図）」と題して石室内の出土状況を復元している〔亀岡市文化資料館1995〕。また同書の中で土井孝則はゴーランドも注目した石柵を持つ古墳の亀岡盆地における研究動向を整理している〔土井1995〕。平成9（1997）年には後藤和雄によってガラス乾板リストや、ゴーランドの直筆ノート（A）、直筆ノート（B）の概要が公にされ、鹿谷古墳出土遺物をはじめとする大英博物館ゴーランド・コレクション考古資料が、豊富なガラス乾板や文書資料とともに保管されていることが初めて明らかとなった〔後藤1997a～c〕。

平成12（2000）年に刊行された『新修亀岡市史』資料編第1巻においても、ゴーランドの調査に焦点があてられ、彼が調査し、現在は「消滅した」3基の石柵を持つ古墳を18～20号墳として紹介するなど、それまでの『南桑田郡誌』や『亀岡市史』とは内容を大きく変えている〔河野2000〕。しかしながらガラス乾板や文書資料の全貌が明らかでなかったこともあってか、後述するように古墳番号については混乱をきたしている（第3章第2節参照）。このほかにも、土井孝則が南丹波の横穴式石室の導入を



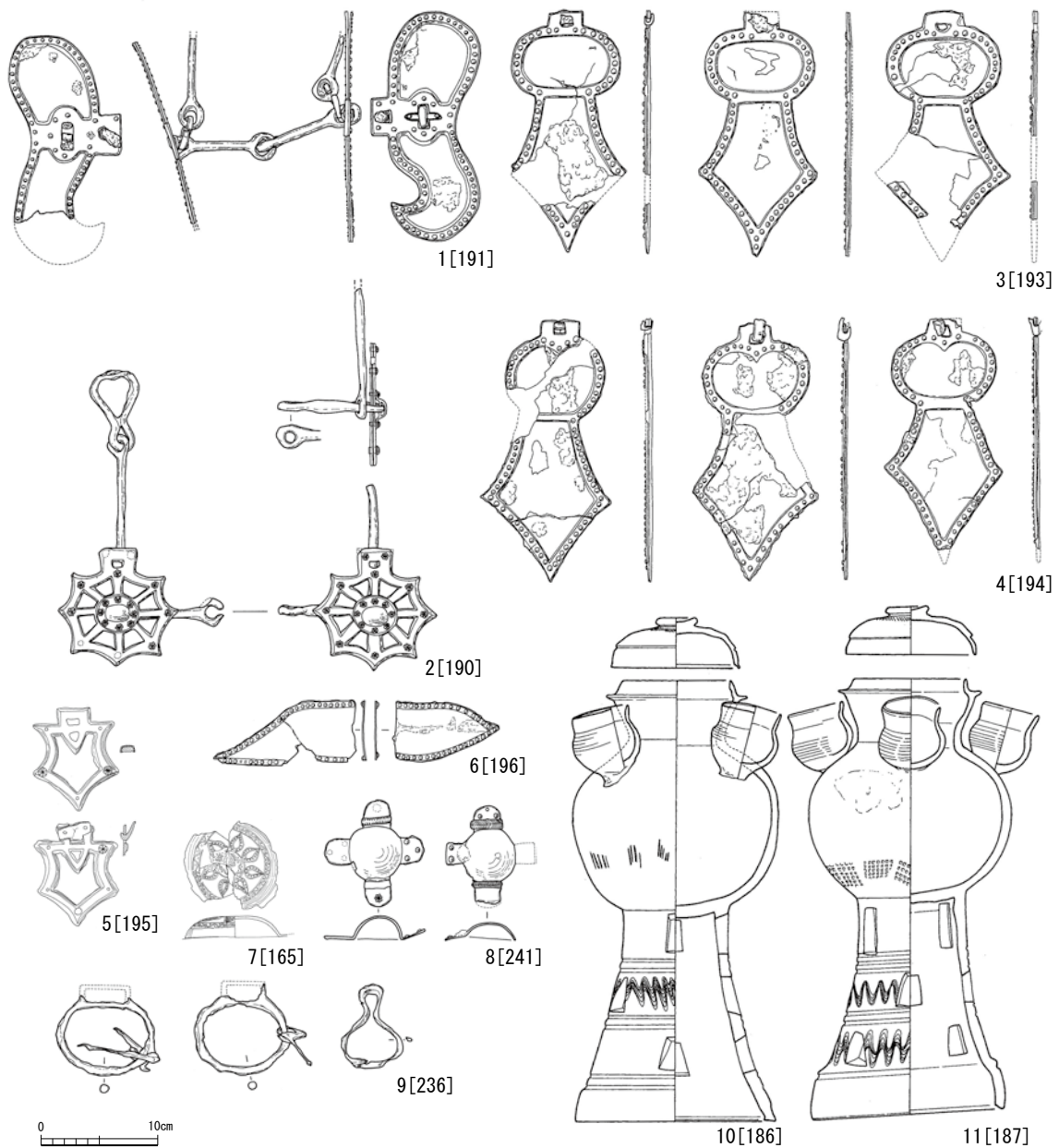


図8 『ガウランド 日本考古学の父』に掲載された鹿谷古墳出土遺物および関連遺物の実測図 (S=1/6) ([大塚 2003] より転載)

整理する中で、岩橋型石室を導入する首長墓の1つとして鹿谷古墳を挙げているほか〔土井2001〕<sup>22</sup>、時枝務によって『埋蔵物録』に対する精緻な研究成果が公表され、鹿谷古墳出土遺物をめぐる当時の行政的なやり取りが紹介されている〔時枝2001〕。

平成15(2003)年、『ガウランド 日本考古学の父』が刊行され、ガラス乾板やゴーランド・コレクションの多くが公開されたことにより、鹿谷古墳・鹿谷古墳群の研究は一気に加速していく〔ハリス・後藤2003〕。同書に掲載されたゴーランド自身によって撮影したとみられる鹿谷古墳群の石室写真や彼の残した直筆メモの解析の結果、ゴーランドは鹿谷古墳の中には入れていないことが事実となった〔ハリス2003、上田2003〕。またゴーランドが1899年論文に掲載した鹿谷古墳出土遺物の集合写真に写っているものの多くが、ほとんど当時と変わらない状態で現在も大英博物館に保管されていることも明らかとなった。残念ながら依然、出土地には一部混乱がみられるものの<sup>23</sup>、大塚初重によるゴーランド・コレクションの実測図がまとまった形で掲載されたことも重要である(図8)〔大塚・後藤2003〕。同書の

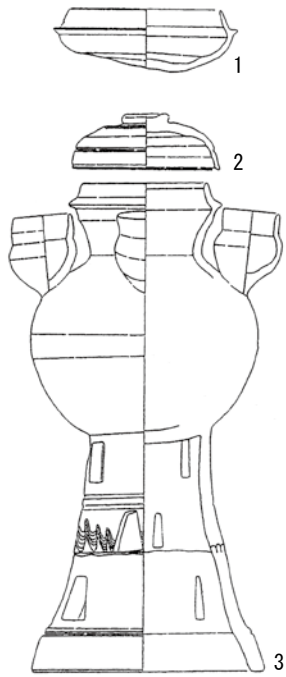


図9 池上論文に掲載された鹿谷古墳の須恵器（〔池上2004〕より転載）

刊行を受け、池上悟も平成6（1994）年に行った調査成果を公表し、鹿谷古墳出土遺物として3点の須恵器を紹介している（図9）〔池上2004〕。

『ガウランド 日本考古学の父』の刊行を受けて、宮川禎一は京都国立博物館が所蔵し、明治14（1881）年に地元民によって発掘された直後に絵師遠藤茂平によって作成された2件の絵図・拓本類を紹介し、それらがゴーランドや若林勝邦、梅原末治が参照した「古墳見分日記」に添付された図面の草稿であること、それらに描かれた多くの遺物が『ガウランド 日本考古学の父』に掲載された鹿谷古墳出土遺物の集合写真にも見いだせることなど極めて重要な事実を明らかにした〔宮川2005〕。また平成16（2004）年以來、ゴーランド・コレクションの調査を進めていた富山直人は、この絵図・拓本類とコレクションの同定作業を行い、出土地に一部混乱のみられるコレクションの中から鹿谷古墳出土遺物の主だったものを抽出することに成功した〔富山2007・2009〕。絵図・拓本類だけでなくゴーランドの直筆メモに基づいた出土状況の復元や、鹿谷古墳群の現地踏査を通じて、土井孝則〔2010〕らとともに梅原末治以來、消滅したと考えられてきた鹿谷古墳や、ゴーランドが調査したとみられる古墳を「再発見」するなど、平成23（2011）年から始まる本プロジェクトの基盤となる重要な成果を上げている。

富山らによって「再発見」され、龍谷大学考古学研究会の分布調査によって新たに設定された鹿谷古墳群大市支群については〔龍谷大学考古学研究会2011〕、本プロジェクトによる墳丘と石室の測量調査の結果〔田口2011、荒木2012・2013、富山・笹栗2015〕、ゴーランドの調査した古墳が現在も残されている可能性が高まった<sup>24</sup>〔富山・笹栗2015：43〕。平成24（2012）年からは茶ノ木山の山頂に所在する古墳の測量調査が行われ、絵図との比較を通じて、明治14（1881）年に地元民によって発掘され、その後消滅したと考えられてきた鹿谷古墳であることがほぼ確定したことも大きな成果であろう〔荒木2013・2014、一瀬・荒木2015〕（第3章第3節参照）。

ほかにも本プロジェクトによる渡英調査に関わるものとして、竹村亮仁によってロンドン古物学協会が所蔵するゴーランド直筆ノート（古物A）が整理され、大英博物館が所蔵し、後藤和雄が整理した直筆ノート（A）と比較する中で、鹿谷古墳出土須恵器についても検討がなされている〔竹村2015〕。竹村には鹿谷古墳群について基礎的整理を行ったものもある〔竹村2016〕。あわせて土屋隆史によって鹿谷古墳出土遺物の帰属をめぐる京都府と中央官庁の間のやり取りが記された国内所蔵公文書の調査が進められたほか〔土屋2017〕、筆者らも大英博物館所蔵鹿谷古墳出土馬具に対する調査成果の一部を紹介してきた〔諫早2014～2016、諫早・片山2014、諫早ほか2016〕。

このほかにも、平成24（2012）年3月3日に大英博物館において本プロジェクトのワークショップが開かれ、富山直人によって『ガウランド 日本考古学の父』刊行後、日本で進められた鹿谷古墳に関する研究の現況が紹介された〔富山2012〕。平成28（2016）年6月18日にはキャンパスプラザ京都にて「大英博物館所蔵ゴーランド・コレクション調査プロジェクト（京都編）」が開かれ、鹿谷古墳を中心とする本プロジェクトの調査成果が紹介された〔菱田（編）2016〕。また明治大学博物館において本プロジェクトとの共催で平成26（2014）年9月6～28日に企画展「ウィリアム・ガウランドと明治期の古墳研究」、平成30（2018）年10月13日～12月2日に特別展「ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究」がそれぞれ開催され、大英博物館で行った3次元計測データをもとに製作された鹿谷古墳出土遺

物のレプリカなど本プロジェクトの成果の一部が展示された。本報告書は、当然のことながらこれらの様々な取り組みの1つの帰結として位置づけられる。(諫早)

## 5. 鹿谷古墳関係文書資料

### (1) 国内所蔵文書資料

ここでは、鹿谷古墳に関して国内の各機関が所蔵する文書や絵図について、その概要と翻刻文を示す。なお翻刻に際して、字体は常用漢字に改め、適宜句読点を追加した。また判読が困難な場合には、推定される字数を■で示した。

#### ①概要と性格

国内所蔵文書資料は、宮内庁宮内公文書館が所蔵する3件と東京国立博物館が所蔵する2件の公文書と、京都国立博物館が所蔵する2件の絵図・拓本類からなる。

宮内庁宮内公文書館所蔵文書(宮A～C)は、京都府から宮内省に送られたもので、宮内省達乙第3号に応じて陵墓の可能性があるかどうかを問い合わせたものである。いずれもこれまでに紹介されたことのない資料である。

東京国立博物館所蔵文書(東A・B)は、京都府と農商務省(とくに博物局)がやりとりした文書で、内務省布達甲第20号に応じて博物局が出土遺物を買上げようとしたものである。ゴーランドがどのような状況下で出土遺物を購入したのかを知ることができる。東Bの『埋蔵物録』は時枝務によって紹介された資料であり〔時枝2001〕、東Aはこれまでに紹介されたことのない資料である。

京都国立博物館所蔵絵図(京A・B)は鹿谷古墳およびその出土遺物を描いたもので、宮内省と博物局に送られた絵図正本の草稿である。宮川禎一によって詳細に報告されている〔宮川2005〕。

#### 宮内庁宮内公文書館所蔵文書

宮A「第三号 丹波国南桑田郡鹿谷村ニ於テ発掘ノ古墳ニ付キ、宮内卿へ上申ノ件(七月)」『考証録 明治十四年 京都府 大阪府』(作成部局：諸陵寮出張所、識別番号：2506)

これは、明治14(1881)年7月付の京都府から宮内省に宛てた(差出人と宛先の詳細は表1参照。以下、同じ)の起案文書の写しである。京都府の罫紙に書かれていることから、宮内省の求めに応じて京都府で作成されて送付されたものであろうか。

宮B「第五号 京都府南桑田郡鹿谷村及乙訓郡第五組沓掛村、愛媛県久米郡高井村、島根県神門郡鷺浦地内元荒神廢跡地、福島県麻直郡敷地村ニ於テ発見ノ古墳ハ御陵墓ノ見込ナキ旨各府県へ指令ノ件(二月)」『考証録一 明治十五年二月第五号 京都』(作成部局：諸陵寮)

これは、大正12(1923)年9月1日の関東大震災により焼失したため現存しない。宮内庁宮内公文書館が所蔵する『陵墓資料(法規目録) 諸陵寮公文書類件名録一(明治)』(識別番号：40073)によってその目次のみが確認できる。件名から推測すると、明治15(1882)年2月付で宮内省から京都府に宛てた、鹿谷古墳は陵墓の見込みがないことを伝える文書であったようである。

宮C「古墳発見ノ義ニ付上申」『陵墓資料(公文書写) 諸陵寮回議冊 甲五』(識別番号：41623)

明治14（1881）年7月6日付の京都府から宮内省に宛てた本書の写しである。宮内省の罫紙に書かれている。内容は宮Aと同じである。京都府から送ってもらった起案文書の写しを、さらに宮内省で写したものであろうか。

### 東京国立博物館所蔵文書

東A「第十八号 京都府丹波国南桑田郡鹿谷村ニテ古墳発見之儀ニ付上申（明治十四年七月）」『古墳墓及掘出器物図』

明治14年7月6日付の京都府から宮内省に宛てた本書の写しである。内容は宮A、Cと同じである。農商務省の罫紙に書かれていることを考慮すると、京都府から宮内省へ送られた文書を、農商務省において参考資料として写したものであろうか。

東B「第三五号 京都府南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山古墳ヨリ発掘ノ古器物差出方ニ付キ京都府ト照復ノ件（十二月）」『埋蔵物録 明治十六年』 農商務省博物館

明治15（1882）年6月5日から明治16（1883）年12月にかけて、農商務省博物館と京都府の間で交わされた公文書群（博物館が出したものは起案文書の写し、京都府が出したものは本書の写し）である。農商務省の罫紙に書かれていることから、農商務省で写したものであろう。

### 京都国立博物館所蔵絵図

京A「丹波南桑田郡鹿谷村発掘古刀模本」（J乙59）（図13～16、図版5～7）

京B「丹波南桑田郡鹿谷村発掘古刀轡祝瓮搦本」（J乙58）（図10～12・17、図版1～4・8）

絵図・拓本類5点が2件にわかれて保存されており、宮川による詳細な報告がある〔宮川2005：91〕。宮川の整理に基づき、これらを京B-1「古墳群までの略地図」、京B-2「古墳の分布図」、京B-3「墳丘および石室図」、京A「遺物の図面1」、京B-4「遺物の図面2」と呼称して、以下概要を述べる。

京B-1「古墳群までの略地図」（図10、図版4上）和紙に墨書された、保津川沿いの亀岡盆地から鹿谷村付近が描かれた略地図である。図の中央付近に「ロクヤ」の表記が確認できる。宮川も指摘するように、図そのものは清書されたものではない〔宮川2005：92〕。図右下に「土田所在シラへ」とあることから、土田に所在する人物に聞きとりをしながら描かれたものである。地名の文字は「遺物の図面1」の冒頭の文字と類似していることから、遠藤が記したものであろう。

なお、先述の通り、ゴーランド文書資料（英B2「古墳群までの略地図」）にもこの図面に類似したものがみられる。これとの比較をふまえると、この絵図は正本を作成するための参考資料である可能性が考えられる。

京B-2「古墳の分布図」（図11、図版3上）和紙に墨書された、鹿谷古墳周辺の古墳群と地形の図面である。小字名や地区境界などが細かく記されており、地元の地籍図が原図であろうと指摘されている〔宮川2005：93〕。たしかに、「鹿谷村惣代ノ代理小瀬治郎助ノ作図写」とあることから、小瀬が地元の地籍図をもとに地形と地名を描いたことがわかる。筆跡からみて小瀬の描いた地籍図を遠藤が写したのであろう。

なお、「古墳群までの略地図」と同様に、ゴーランド文書資料（英B3「古墳の分布図」）にもこの図面に類似したものがみられ、これとの比較をふまえると、この絵図は正本を作成するための参考資料であった可能性が考えられる。

京B-3「墳丘および石室図」（図12、図版1・2）「茶ノ木山ノ峯ニアル古墳直上ヨリ見ル図」、「古墳ヲ右側面ヨリ見ル図」、「石郭内古器所在ノ位置直上ヨリ見ル図」、「石郭内ヲ切斷シ側面ヨリ結構ヲ見ル図」の4つの図が描かれている。和紙であり、前二者は彩色、後二者は墨書である。それぞれ、墳丘

平面図、墳丘側面図、石室平面図、石室立面図である。図面右下には「廊」、「渠」、「壕」などと落書きのような文字がみられ、これらは「石郭」と「堀」の語を書く際に、遠藤が思案した痕跡であると指摘されており〔宮川2005：97〕、この図面が草稿であることを示す1つの根拠となっている。

京A「遺物の図面1」（図13～16、図版5～7）和紙に墨・彩色がなされている。絵図を描いた経緯、鹿谷古墳から出土した大刀、馬具、双魚佩、玉、須恵器などの遺物が描かれた図面である。絵図を描いた経緯には、「明治十四年四月、丹波国南桑田郡鹿谷村山中古墳ヨリ古刀及轡祝瓮之類ヲ掘出シタルニ付、右写生ノ為メ、社寺係半井真澄氏ニ随行シ、帰府ノ上、浄写二本ヲ製ス。右御用現品ヨリ写シ得ル所ノ草稿ナリ。十四年七月四日落成 遠藤茂平」とあり、「草稿」であることが明記されている。

それぞれの遺物には詳細な注記が記載されている。詳細は図13～16を参照いただくとして、ここでは特徴的な部分を紹介しておきたい。第一に、形状と寸法に関する詳細な情報がある点である。形状については表面に加えて側面や裏面も描かれており、馬具には模式図を用いて構造をわかりやすく示した箇所や、記号を用いて接合関係を示している箇所がある。台付子持壺には、破片から全形を推考した復元図が示されている。また寸法についても、全形はもちろん、各部位の大きさが「分」、すなわちミリ単位の精度で記録されている。適宜拓本をつけるなど、遺物の正確な情報を伝えるための工夫が随所にみられる。

第二に、色に関する注記が多い点である。大刀の一部や馬具のf字形鏡板付轡など、部分的に色付けされている箇所もあるが、そのほか大部分は墨で描かれており、色付けされていない。そのため、色の情報を補うために、「赤サヒ」、「丹ノ具」、「黄土」、「白六」などが各部位に多く書き込まれている。赤色は、「丹」と「朱」が使い分けられており、中には「ベンガラ」という記載もある。これらは、後で清書する際にも必要となる情報であり、実物をみながら遠藤が詳しく書き込んだのであろう。

第三に、遺物の材質や製作技法が詳しく認識されている点である。金属器は、金、銀、銅、鉄、金銅といった材質を識別して注記されており、錆の部分についても詳しく記載されている。八角形鏡板付轡には「…鉄二枚ヲ鋌ニテ合シタルモノト見ユ」とあり鋌留技法を認識しているし、八角形鏡板付轡と五角形杏葉にみられる花形鋌は、ほかの円頭鋌と同じではないことを示すために模式図で描かれている。双魚佩には「毛彫ノ文アリ」とあり、彫金技法を認識していることがわかる。辻金具にみられる貴金具には、「外面ヨリ振りタル金具」とあり、振り技法によって製作されたとみていたようだ。また、有機質についても、大刀や馬具には「紫檀」、「木質」、「糸目（イトメ）」といった表現がみられ、木材と織物を認識した上で注記されている。微細な特徴をも残さずに伝えようとする遠藤の意志に加えて、これらを識別することができる遠藤の観察力の鋭さがうかがえる。

京B-4「遺物の図面2」（図17、図版8）和紙に墨で描かれている。冒頭に注記があり、「十四年四月、丹波国南桑田郡第二組鹿谷村山中古墳ヨリ掘出シタル古刀之摺シ本」とある。またその左側には、鹿谷古墳出土大刀の拓本、馬具の拓本とスケッチ、須恵器のスケッチが描かれている。この図面は、現地での簡単な憶えの図、あるいは遠藤とは別人の手によるものではないかと推測されている〔宮川2005：98〕。しかし、拓本の後ろに模式図を付けるという描き方は京A「遺物の図面1」と同じであり、京B-4には京Aにはない拓本と模式図がみられる。両者はもともと一連のものであった可能性も考えられる。

## ②個別翻刻

### 宮内庁宮内公文書館所蔵文書

#### 宮A

第四百号 明治十四年七月五日立案 庶務課 ○ 社寺掛 ○ ○ 調査掛 ○ ○ 小書記官 ○ 大書記官 代理 ○

立案主任 十等属半井真澄 ○

古墳発見ノ義ニ付、宮内省へ上申案伺

丹波国南桑田郡鹿谷村ニ於テ堀出シタル古墳ノ義ニ付、過般見分委細及上申置候処、右図画漸出来致候ニ付、宮内省へ上申案左ニ相伺候也。

上申案

古墳発見ノ義ニ付、上申

管下丹波国南桑田郡鹿谷村ニ於テ、本年五月古墳堀出候旨、同郡長ヨリ上申候ニ付、実地見分致サセ候処、同所ハ亀岡ヨリ西北ニ位シ、古来已ニ発掘シタル古墳其数枚拳ニ違アラス。就中今般堀出候墳墓ハ茶ノ木山ノ頂上ニ在テ、其構造最大ナル者ニ有之候趣、右ハ何者ノ墳墓タルヤハ未タ判然不致候得共、兼テ御達ノ趣モ有之候付、図面并ニ備考書相添此段上申候条、何分之御指揮相成度候也。

明治十四年七月

京都府知事北垣国道代理

京都府大書記官国重正文

宮内卿徳大寺実則殿

\*付箋あり 備考書ハ破損修理不能、図面最初ヨリ無之

翻刻者註：○は押印箇所、写しにより省略。以下同じ。

## 宮 B

京都府南桑田郡鹿谷村、及乙訓郡第五組沓掛村、愛媛県久米郡高井村、島根県神門郡鷺浦地内元荒神廃跡地、福島県麻直郡敷地村ニ於テ発見ノ古墳ハ、御陵墓ノ見込無キ旨、各府県へ指令ノ件。(大正十二年九月一日焼失)

## 宮 C

庶第一号

古墳発見ノ義ニ付、上申

管下丹波国南桑田郡鹿谷村ニ於テ、本年五月古墳堀出候旨、同郡長ヨリ上申候ニ付、実地見分致サセ候処、同所ハ亀岡ヨリ西北ニ位シ、古来已ニ発掘シタル古墳其数枚拳ニ違アラス、就中今般堀出候墳墓ハ茶ノ木山ノ頂上ニ在テ、其構造最大ナル者ニ有之候趣、右ハ何者ノ墳墓タルヤハ未タ判然不致候得共、兼テ御達ノ趣モ有之候付、図面并ニ備考書相添此段上申候条、何分之御指揮相成度候也。

明治十四年七月六日

京都府知事北垣国道代理

京都府大書記官国重正文

宮内卿徳大寺実則殿

## 東京国立博物館所蔵文書

### 東 A

写

庶第壹号 古墳発見ノ義ニ付、上申

管下丹波国南桑田郡鹿谷村ニ於テ、本年十二月古墳堀出候旨、同郡長ヨリ上申候ニ付、実地見分致サセ候処、同所ハ亀岡ヨリ西北ニ位シ、古来已ニ発掘シタル古墳其数枚拳ニ違アラス、就中今般堀出候墳墓ハ茶ノ木山ノ頂上ニ在テ、其構造最大ナル者ニ有之候趣、右ハ何者ノ墳墓タルヤハ未タ判然不致候得共、兼テ御達ノ趣モ有之候ニ付、図面并ニ備考書相添此段上申候条、何分之御指揮相成度候也。

明治十四年七月六日

京都府知事北垣国道代理  
京都府大書記官国重正文  
宮内卿徳大寺実則殿

## 東 B

### 東 B-1

博物館第四二七号 十五年七月五日博物館達済

明治十五年七月三日 七等属 多田親愛 多田 印 (以下、印は全て写し：筆者追記)

博物館長代理 田芳 印 黒川 印 史伝課 柏 印

牛岡 印 庶務課 野村 印

京都府下丹波国南桑田郡鹿谷村発掘品ノ儀ニ付、御照会案伺

貴府御管下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ発掘致シ候古代ノ品物図面ヲ以テ、本省へ御届相成候右ノ品物ハ、発掘人ヨリ売却致候而不苦候ハハ、於当館入用ノ品モ有之候間、品物悉皆ニテ売却直段何程ニ候哉、及御問合条、否御回答相成度、此段及照会候也。

博物館長代理 田中大書記官

明治十五年七月

北垣京都府知事殿

### 東 B-2

往復課 十五年六月八日甲四九号

警第壹号 田芳 印

埋蔵物発見ノ義ニ付、上申

当府下北波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ古墳発掘候ニ付、一応宮内省へ進達仕候処、御陵墓ノ墓見込ニ無之旨御指令有、之就テハ何等ノ墳墓タルヤ沿革ヲ徴スル備考モ無之候得共、該墓ヨリ発掘シタル物品ハ古代ノ物品ニ被相考、明治十年内務省甲第二十号布達ノ次第モ有之候条、現場へ出張官吏ノ日記及ヒ絵図面相添、一応上申仕候間、至急何分ノ御指揮相成度候也。

明治十五年六月五日 京都府知事北垣国道

農商務卿西郷従道殿

## 別紙

### 古墳見分日記

丹波国南桑田郡第七組鹿谷村竹岡利左衛門外十八人ノ者、同村内共有山茶木山字清水谷山上ニ於テ、埋蔵物堀出シタル者、同郡長ノ上申ニ付、実地見分トシテ御雇画工遠藤茂平ヲ随ヒ、五月六日京地ヲ発ス。此日雨甚シ。正午亀岡ニ着、郡役所ニ到リ、郡長ニ面シテ、兼テ鹿谷村関係ノ者へ通知アランコトヲ乞。郡長之ヲ諾シ、且云当所ヨリ同村へハ路程尚遠シ、其近村吉田村ニ宿シナハ大ニ弁ナラント。因テ亀岡分署ニ到リ、同署ニ預リ有ル所ノ埋蔵物ヲ借ランコトヲ約シ、直チニ吉田村ニ到リ、佐藤某ノ家ニ宿ス。午後第四時分署ヨリ物品ヲ送り来ルヲ以テ、遠藤茂平ヲシテ之ヲ写サシム。

七日曉来風雨最烈、湛水路ヲ浸シテ湖面ノ如シ。午前第九時鹿谷村惣代々理小瀬治郎助ナルモノ村民三人ヲ従へ来ル。依テ当時ノ景況ヲ聞クニ、人々口ヲ異ニシ模糊曖昧タルヲ多シ。且云、古墳ノ所在ハ茶木山ノ絶頂ナレハ今日ノ風雨ニテハ登ルヲ得ヘカラスト。翌八日ヲ約シテ各歸村ス。後近傍ノ古老ヲ集メ其伝説ヲ聞、或ハ考証トナスヘキ書類ヲ索

ルニ、一モ取ルニ足ルヲナシ。

八日曇。午前第八時吉田村ヲ發シ、鹿谷村總代高田彦六ノ家ニ到リ、更ニ關係ノ者三五人ヲ隨從シテ東面ノ山ニ登ル  
凡六七町ニシテ、頂上別ニ土ヲ封シ、周壺町計其形恰モ釜ヲ倒マニシタルノ状ヲナセリ。是即古墳ノ所ナリト云。到  
テ之ヲ見ルニ、其中央深サ凡壺間、巾之ニ同シク、長サ壺間半計ヲ堀タリ。直下前後礫石凹陷シテ穴ヲ現ス。此処ヨリ  
出入セシナリト。然レ共、過日来ノ降雨ニテ側ノ土砂崩潰シ、其半ヲ埋メ復タ入ルヲ得ス。依テ礫内ノ狀況ヲ諮問ス  
ルニ、皆云、此他石礫ノ露出シテ出入自在ナル所数処アリ、其内部ノ構造尽ク同一ナレハ、願クハ他ニ付テ之ヲ説明セ  
ント。山ヲ下リ、村ノ北後一石礫ノ処ニ到リ、内ニ入テ之ヲ見ルニ、前口細クシテ僅ニ一人ノ出入スルヲ得ヘリ。漸ク  
進メハ其廣キ凡壺四枚ヲ敷クニ足ル。左右石ヲ積ミ、上部円形ニシテ陶窯ノ如ク、奥ニ一枚ノ石柵アリ。此所即子轡  
ノアリタル所ナリト云。抑、鹿谷村ノ地形タル南面ニシテ、三方山ヲ環ラシ、後ヲ狼峯山ト云。右ヲ娑婆山又獨活他山、  
左ヲ茶木山トス。而シテ此山麓、所トシテ古墳アラサルナリ。其数實ニ幾十ナルヲ不知。已ニ發掘シテ石礫ノ露出シタ  
ルモノアリ、或ハ未タ全然ナルモノアリ、或ハ中間凹陷シテ其状ヲ變シタルモノ等アリテ、其大ナルハ壺八枚ヲ並フヘ  
リ。其小ナルモ、一二枚ヲ敷クニ足ル。且、全キモノハ皆彼ノ倒釜ノ状ヲナシ、周圍溝ヲ廻ラシタリ。其最多キ所ハ  
一丘上ニ累タトシテ、大小相雜ノ恰モ橙子ヲ散布シタルモノニ似タリ。上世ノ墓地タリシヲ知ルヘシ。今堀出シタル物  
ヲ見ルニ、皆異様ニシテ中世以後ノモノニ非、必千有余年前ノモノタルヘシ。然レ共、其何人ノ墳墓タルハ地名ニ因  
ルモ、伝聞ニ依ルモ、更ニ考フヘキナシ。午後第四時、亀岡ニ歸リ宿シ、物品ハ再ヒ分署ヘ返還ス。

九日晴。午前第九時亀岡ヲ發シ、午後一時歸京ス。

明治十四年五月十日

十等属半井真澄

図面壹葉庶務局ニ保藏ス

### 東 B-3

博物館第四二七号ノ内

警第六百二十九号

府下丹波国南桑田郡鹿谷村茶ノ木山ニ於テ發掘セシ物品値段ノ額、貴局乙第四二七号ヲ以テ御照会之趣了承、右物品  
ノ義ハ犯罪ニ関シタルモノニシテ官没ニ属スヘキ或否ヤノ義、当時其筋ヘ伺中ニ付、指令到達次第何分之御決答ニ可及  
候得共、府不取敢此旨、一応及御報候也

明治十五年七月十八日

京都府知事北垣国道 印

農商農省博物館長代理

大書記官田中芳男殿

### 東 B-4

博物館第五四七号

十六年八月二日博物館達濟

明治十六年八月一日 九等属山邊光一 ヤマヘ

黒川 印 史伝課 多田 印 鈴木 印

庶務課 野村 印

博物館長代理 田芳 印

堀出品之義ニ付、京都府江御照会案伺

貴府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山發掘品代償御問合之件者、右物品犯罪ニ関シタルモノニシテ官没ニ属スヘキ



ヤ否御伺中ニ付、指令到達次第御答可有之旨、客年七月中警第六百二十九号ヲ以テ御報有之候処、其後何等之御決答無之候、未指令済ニ不相成儀ニ候哉、承知致度、此段御照会ニ及候也。

野村博物局長代理  
田中 議官

明治十六年八月  
北垣京都府知事殿

### 東 B-5

博物局第五四七号ノ内  
警第六〇〇号 田芳 印

府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ヨリ発掘セシ物品代償ノ義ニ付、貴局乙第五四七号ヲ以テ御照会ノ趣、了承取調候処、右一件ハ内務卿ノ指令ニ因リ、客年十二月中遺失物規則ニ依リ、土地共有者ヘ下付シ有之。然ルニ其際、物品ノ代償ヲ尋子、売却ヲ止メ置キ、貴局ヘ其旨可申進ノ処、取扱主任者ニ於テ此手續ヲ漏シ有之。因テ当時現品ノ有無取調候処、右ハ既ニ去五月中売却シタル趣、別紙戸長答書ヲ通り申出、右ハ必竟主任官吏ノ粗漏ヨリ斯ク不都合ヲ生シ候義ニ有之。此旨御承知有之度、此段及御回答候也。

明治十六年九月六日 京都府知事北垣国道 印  
博物局長代理  
大書記官田中芳男殿

別紙 写

答書

明治十四年四月、南桑田郡鹿谷村竹岡利左衛門ヲ始メ十八名カ、同村共有山字清水谷ニ於テ掘得タル埋蔵物、去ル十五年十二月、園部警察署ニ於テ、遺失物取扱規則ニ因リ、共有者還付相成候。物品現存ノ有無御尋ノ趣、了知仕候。該品ハ、本年五月日ハ不詳、英国人当時大阪造幣局御雇入「ガランド」ト申者ニ、金五拾円ヲ以テ売却仕候間、当村共有者ノ手ニ無之候、此段御答仕候也。

明治十六年八月十八日  
南桑田郡鹿谷村  
戸長 小瀬次郎助 印

亀岡分署  
警部補伊藤正一殿

### 東 B-6

博物局第五四七号ノ内 十六年九月二十九日博物局達済  
明治十六年九月十九日 七等属多田親愛 多田 印

黒川 印 史伝課 鈴木 印

博物局長 野村 印 牛岡 印 庶務課

発掘品ノ義ニ付、京都府ヘ御照会案伺

貴府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ埋蔵物発掘之件、昨明治十五年六月中、本省ヘ御上申相成候ニ付、該書面并絵図面共熟覧候処、其品物ハ古代ヲ考証スヘキモノト勘考候間、同年七月五日右品物ハ発掘人ヨリ売却致候、而不苦候ハハ於当館入用之品モ有之候間、品物悉皆ニテ売却直段何程ニ候哉云々、及御照会候処、同月十八日、貴府警第六百二十九号ヲ以テ、右物品ノ義ハ犯罪ニ関シタルモノニシテ、官没ニ属スヘキヤ否ヤノ義、当時其筋ヘ伺中ニ付、指

令到達次第何分ノ御決答ニ可及云々、之旨御報答有之候間、該件落着ノ節ハ其旨御返答可有之義ト存、相待居候得共、其後御答モ無之、既ニ歲月ヲ經過スレトモ尚何等之御決答モ無之、延引之余リ去月二日付ヲ以テ及御催促候処、貴府警第六〇〇〇号ヲ以テ、右一件ハ内務省ノ指令ニ因リ、客年十二月中、遺失物規則ニ依リ、土地共有者へ下付シ有之。然ルニ、其際物品ノ代償ヲ尋子、売却ヲ止メ置、貴局へ其旨可申進ノ処、取扱主任者ニ於テ此ノ手續ヲ漏シ有之。因テ當時現品ノ有無取調候処、右ハ既ニ去五月中売却シタル旨云々、御答之趣ニ候得共、右物品ハ考証ニ可備必要ノモノト相考候間、相当ノ手續ヲ以テ一応当局ニ御差出相成候様、御取計有之度、此段及御照会候也。

明治十六年九月 博物館長 野村清

京都府知事北垣国道殿

### 東 B-7

博物館第九二号

十月十五日決判 田芳 京都府へ 十月十一日達済

明治十六年九月二十九日 七等属多田親愛 多田 印

黒川 印 史伝課 印

牛田 印 庶務課 野村 印

脚

輔 品川 印

達済脚輔可仰捺印 書記官 宮島 印 大槻 印

博物館長 野村 印 田芳 印

庶務局長 宮島 印 属 進藤 印 村田 印 ■■■ 印 ■■■ 印 ■■■■■ 印 ■■■ 印

堀発品之義ニ付、京都府へ御指令案伺

京都府下丹波国丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ、発堀致候品物図面相添上申書一覽致候処、考古ノ一端トモ可相成品ト被存候間、該品当局へ為差出熟見致度候、因而左案ノ通御指令相成度、此段相伺候也。

京都府へ御指令案

(契の割り印あり) 書面之物品当省博物館へ可差出事

明治十六年九月 農商務卿

### 東 B-8

博物館第五四七号ノ内

警第七二一号

明治十四年四月中、当府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ発堀セシ埋蔵物ノ義ニ付、去月中警第六〇〇号ヲ以テ御回答致置候処、今回貴局乙第五四七号ヲ以テ、該物品ハ相当ノ手續ヲ以テ一応貴局へ差出方取計候様、御照会之趣致承知候。然ルニ右物品ハ、前御回答致置候通り、他管在留ノ外国人へ売却セシ後ノ事ニ付、今之ヲ当府ヨリ買戻シ、又者借入等ヲ為スノ順序聊相運兼候間、右者貴局ニ於テ直チニ相当ノ御取計相成度、此段及御回答候也。

明治十六年十月二十二日 京都府知事北垣国道 印

博物館長野村靖殿

### 東 B-9

十六年十一月二日 乙一二九号

甲 博物館第九二号ノ内

警第四号 埋蔵物ノ義ニ付、上申

明治十五年六月中、警第壹号ヲ以テ上申致置候、府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ発掘セシ埋蔵物ノ義ニ付、今回該物品博物館へ可指出旨、御指揮ノ趣敬承、然ルニ該物品ニ付テハ、同年七月中別紙壹印ノ通り、御省博物館ヨリ照会有之、因テ其際式印ノ通り回答致置候。其後本年八月中三印ノ通り、同局ヨリ照会有之、因テ取調候処、客年十二月中内務卿ノ指令ニ依リ、該物品下附致候義ニ有之。最モ此際、該物品売却ヲ止メ置キ、代償ヲ尋子、同局へ通知スヘキノ処、主任官吏此手續ヲ漏シ候ヨリ、既ニ他管在留ノ外国人へ売却致候次第ニ有之、因テ不得止四印ノ通り、同局へ回答致置候処、尚又今回五印ノ通り照会有之候間、六印ノ通り回答致置候義ニ有之。右ハ不都合ノ事ニ候得共、今更致方無之候間、此旨宜敷御聞置相成度、此段上申候也。

明治十六年十月三十日

京都府知事北垣国道

農商務卿西郷従道殿

別紙

壹印

乙第四二七号

貴府御管下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ発掘致候古代ノ品物図面ヲ、以テ本省へ御届相成候。右ノ品物ハ発掘人ヨリ売却致候、而不苦候ハ、於当館入用ノ品モ有之候間、品物悉皆ニテ売却直段何程ニ候哉、及御問合候条、否御回答相成度、此段及御照会候也。

町田博物館長代理

明治十五年七月五日 田中大書記官 印

北垣京都府知事殿

式印

警第六二九号

府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ発掘セシ物品直段ノ額、貴局乙第四式七号ヲ以テ御照会ノ趣了承。右物品ノ義ハ犯罪ニ関スルモノニシテ、官没ニ属スヘキヤ否ヤノ義当時其筋へ伺中ニ付、指令到達次第何分ノ御決答ニ可及候得共、不取敢此旨一応及御報候也。

十五年七月十八日 京都府知事北垣国道

博物館長代理 大書記官田中芳男殿

三印

乙第五四七号

貴府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山発掘品代償御問合ノ件ハ、右物品犯罪ニ関シタルモノニシテ、官没ニ属スヘキ哉、否御伺中ニ付、指令到達次第御答可有之旨、客年七月中警第六百二十九号ヲ以テ御報有之候処、其後何等ノ御決答無之候。未指令済ニ不相成候哉、承知致度、此段及御照会候也。

明治十六年八月二日 野村博物館長代理 田中芳男 印

北垣京都府知事殿

四印

警第六〇〇号

府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ヨリ発掘セシ物品代償ノ義ニ付、貴局乙第五四七号ヲ以テ御照会ノ趣了承。取調候処、右一件ハ内務卿ノ指令ニ依リ、客年十二月中遺失物規則ニ依リ、土地共有者へ下附シ有之。然ルニ其際、物品ノ代償ヲ尋子、売却ヲ止メ置、貴局へ其旨可申進ノ処、取扱主任者ニ於テ此手續ヲ漏シ有之。因テ当時現品ノ有無為取調候処、右ハ既ニ去五月中売却シタル趣、別紙戸長答書ノ通り申出。右ハ必竟主任官吏ノ粗漏ヨリ斯不都合ヲ生シ候義

二有之。此旨御承知有之度、此段及御答候也。

十六年九月六日 京都府知事北垣国道  
博物館長代理 大書記官田中芳男殿

別紙 答書

明治十四年四月、南桑田郡鹿谷村竹岡利左衛門ヲ始十八名カ、同村共有山字清水谷ニ於テ掘得タル埋蔵物、去十五年十二月、園部警察署ニ於テ、遺失物取扱規則ニ依リ、共有者へ還付相成候。物品現在ノ有無御尋ノ趣、了知仕候。該品ハ本年五月日ハ不詳、英国人当時大阪造幣局御雇入（ガランド）ト申者ニ金五十円ヲ以テ手売却仕候間、当村共有者ノ手ニ無之候、此段御答仕候也。

十六年八月十八日 南桑田郡鹿谷村 戸長小瀬次郎助 印  
亀岡分署 警部補伊藤正一殿

五印

乙第五四七号ノ内

貴府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ、埋蔵物発堀ノ件、昨明治十五年六月中、本省へ御上申相成候ニ付、該書面并ニ絵図面共熟覽候処、其品物ハ古代ヲ考証スヘキモノト勘考候間、同年七月五日、右品物ハ発堀人ヨリ売却致候、而不苦候ハ、於当館入用ノ品モ有之候間、品物悉皆ニテ売却直段何程ニ候哉云々、及御照会候処、同月十八日、貴府警第六百二十九号ヲ以テ、右物品ノ義ハ犯罪ニ関シタルモノニシテ、官没ニ属スヘキヤ否ノ義、当時其筋へ伺中ニ付、指令到達次第何分ノ御決答ニ可及云々ノ旨、御報答有之候間、該件落着ノ節ハ、其旨御返答可有之義ト、存相待居候得共、其後御答モ無、之既ニ歳月ヲ経過スレトモ尚何等ノ御決答モ無之。延引ノ余り去月二日付ヲ以テ、右一件ハ内務省ノ指令ニ因リ、客年十二月中遺失物規則ニ依リ、土地共有者へ下付シ有之。然ルニ其際物品ノ代償ヲ尋子、売却ヲ止メ置、貴局へ其旨可申進ノ処、取扱主任者ニ於テ此手續ヲ漏シ有之。因テ当時現品ノ有無取消候処、右ハ既ニ去五月中売却シタル旨云々、御答ノ趣ニ候得共、右物品ハ考証ニ可備必用ノモノト相考候間、相当ノ手續ヲ以テ一応当局へ御差出相成候様、御取計有之度、此段及御照会候也。

明治十六年九月二十九日 野村博物館長 印  
北垣京都府知事殿

六印

警第七二一号

明治十四年四月中、当府下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ発堀セシ埋蔵物ノ義ニ付、去月中警第六〇〇号ヲ以テ御回答致置候処、今回貴局乙第五四七号付ヲ以テ該物品ハ相当ノ手續ヲ以テ一応貴局へ差出方取計候様、御照会ノ趣、致承知候。然ルニ右物品ハ前御回答致置候通、他管在留ノ外国人へ売却セシ後ノ事ニ付、今之ヲ当府ヨリ買戻シ又ハ者借入等ヲ為スノ順序相運兼候間、右ハ貴局ニ於テ直ニ相当ノ御取計相成度、此段及御回答候也。

十六年十月二十二日 京都府知事北垣国道  
博物館長野村靖殿

東 B-10

明治十六年十一月十三日 七等属多田親愛 多田 印  
中 印 史伝課 ヤマヘ 印 鈴木 印  
牛岡 印 庶務課

卿

輔

書記官

博物館長 野村 印 田芳 印

埋蔵物之義ニ付、京都府へ御指令案伺

京都府管下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ発掘セシ埋蔵物之義ニ付、昨明治十五年七月ヨリ当年十月ニ至ル迄、別紙之通、往復数ケ度ニ及ヒ候中、十五年七月乙第四二七号ヲ以、当局ヨリ照会之趣ニモ不拘、該当品掘出人へ下附致候旨、京都府警第七二一号ヲ以テ上申ノ書面一覽致候処、存外不都合ノ義ニ候。原来埋蔵物取扱順序ハ明治十年九月内務省甲第二十号布達之通可有之処、其成規ニ触レ、既ニ埋蔵物ハ掘出人へ下附候、其末外国人へ売却シ最早取戻ノ義モ相成兼候趣、甚以不都合之義ニ付、己来ノ為メ嚴敷御下令相成候方、可然ト被存候。依而左案之通り、御指令相成度、此段相伺候也。

御指令案

上申之趣、此度限間置。以後不都合無之様可致事。

但、主任官吏取扱不都合之廉、相当ノ処分可有之事。

明治十六年十一月 農商務卿

写

甲第二十号

明治九年四月太政官第五拾六号ヲ以、遺失物取扱規則中、第六条、埋蔵物掘得ル者処分ノ義公布相成候処、右物品ノ中古代ノ沿革ヲ徴スルモノモ有之候ニ付、処分前一応当省へ届出検査ヲ可受、其品ニヨリ相当代償ヲ以テ購求シ、官私中分ニ係ルモノハ、其價格ノ半高ヲ発掘人へ下附シ、該物品ハ永ク博物館へ陳列可致候條、此旨布達候事。

但シ、物品ハ先ツ掘出地名及形状等ヲ詳記シ、及ヒ模写スルモノヲ郵送シ、其見込アルモノニテ、通送方相達候後、本人ノ通可取計候事。

明治十年九月二十七日 内務卿大久保利通

## 東 B-11

博物館第九二号 十二月二十日決判 田芳 印

京都府へ十二月二十二日達済

明治十六年十二月十三日

七等属多田親愛 多田 印

中 印 史伝課 ヤマヘ 印

牛岡 印 庶務課 野村 印

卿 西郷従道 印

輔

書記官 宮島 印 大槻 印

博物館長 野村 印 田芳 印

埋蔵物之義ニ付京都府へ御指令案伺

京都府管下丹波国南桑田郡鹿谷村字茶ノ木山ニ於テ発掘セシ埋蔵物之義ニ付、昨明治十五年七月ヨリ当年十月ニ至ル迄、別紙之通り、往復数ケ度ニ及ビ候中、十五年七月、乙第四二七号ヲ以テ当局ヨリ照会之趣ニモ不拘、該物品掘出人へ下附致候旨、京都府警第七二一号ヲ以テ回答有之候。猶又、同府ヨリ警第四号ヲ以テ上申之書面一覽致候処、存外不都合之義ニ候。原来埋蔵物取扱順序ハ、明治十年九月内務省甲第二十号布達之通可有之処、其成規ニ触レ既ニ埋蔵物ハ掘出人へ下附候。其末外国人へ売却シ最早取戻ノ義モ相成兼候趣、甚以不都合之義ニ付、左之通御指令相成度、此段相伺候也。

御指令案

(契の割印) 上申ノ趣、昨十五年六月五日付、何分ノ指揮相成度旨上申ノ末、専断ヲ以テ下附取計候段、不都合ニ候へ共、此度限り聞置候事。

明治十六年十二月

農商務卿

別紙

埋蔵物ノ件

本議審査候処、博物館長ヨリ数次ノ往復モ有之候へ共、当初京都府知事ヨリ上申文中ニ内務省布達ノ次第モ有之候間、何分ノ御指揮相成度云々ト有之。府知事自ラ指揮ヲ乞ヒナカラ、其指揮ヲ俟タスシテ専断下付ニ及ヒ候段ハ、尤モ不都合ノ次第ニ有之候へハ、府知事ソノ責ニ任セサルヲ得ス。然レ共、其専断処分ノ事柄タル古器物ノ我邦ニ存スレト不存トニアリテ行政上別ニ患害アルニモ無之候へハ、御譴責相成候ニモ及間布候へハ、左案ノ通り御指令相成方可然ト存候也。

但、主任官処分云々ハ固ヨリ府知事ノ権内ニ在ルモノナレハ、当省ヨリ御指令相成候モノニ無之儀ト存候。

御指令案

上申ノ趣、昨十五年六月五日付、何分ノ指揮相成度旨上申ノ末、専断ヲ以テ下付取計候段、不都合ニ候へ共、此度限り聞置候事。

書記局 大槻 印

付箋 別紙之儀ニ付、野村局長殿へ御談済ニ付、書類一先返戻候也

書記局 書記官 宮島 印

京都国立博物館所蔵絵図

京 A、B

図10～17では、文字の箇所のみ翻刻を行った。

(土屋)

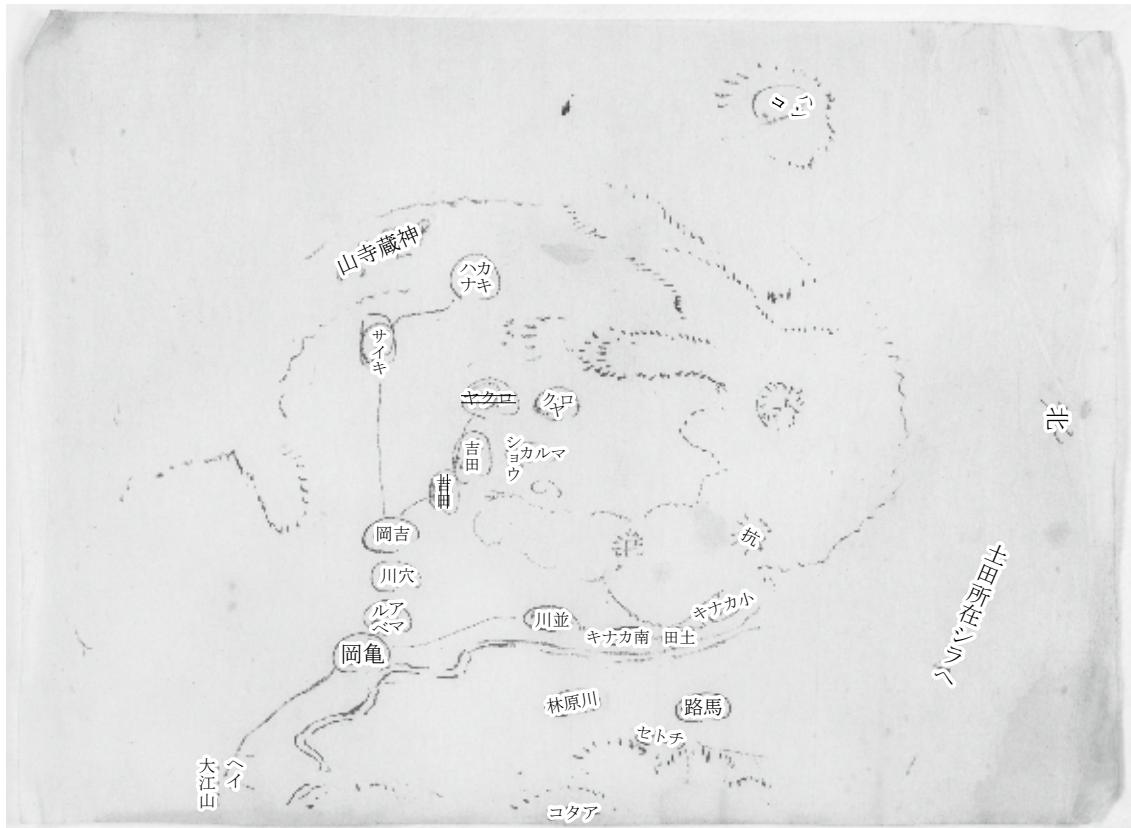


図10 京B-1「古墳群までの略地図」翻刻（京都国立博物館所蔵）

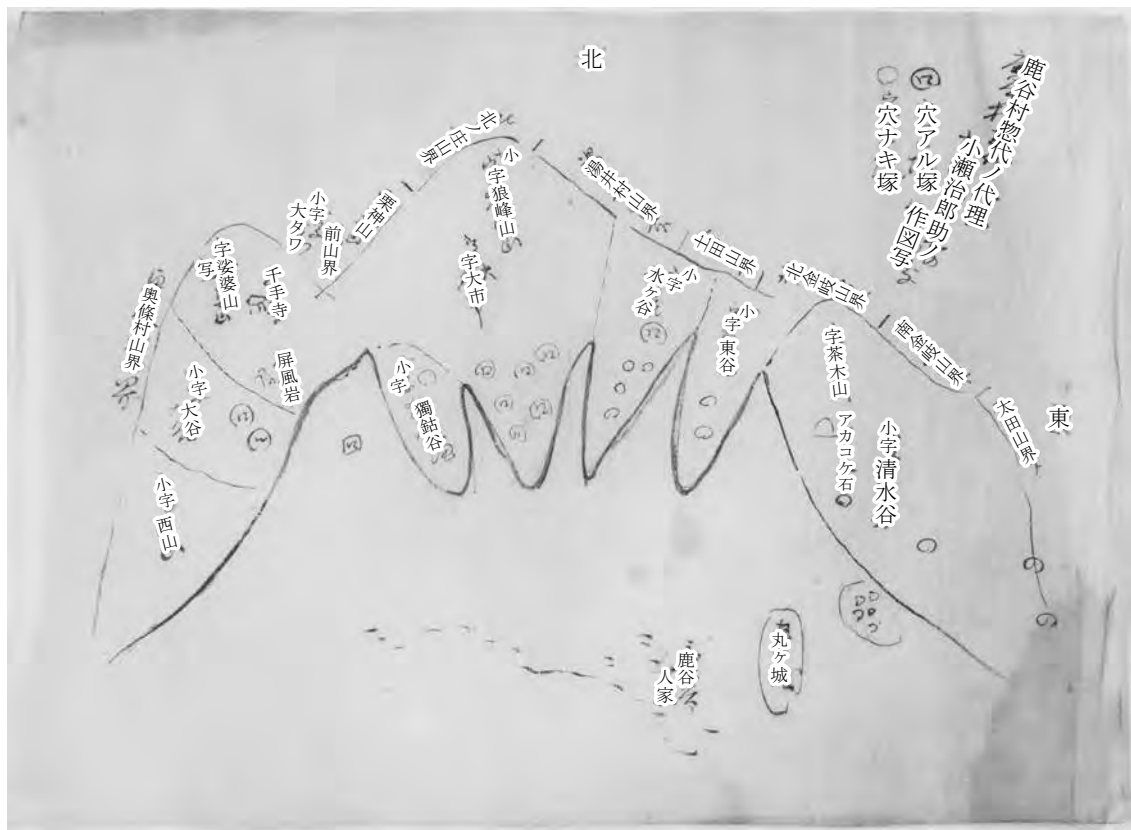


図11 京B-2「古墳の分布図」翻刻（京都国立博物館所蔵）

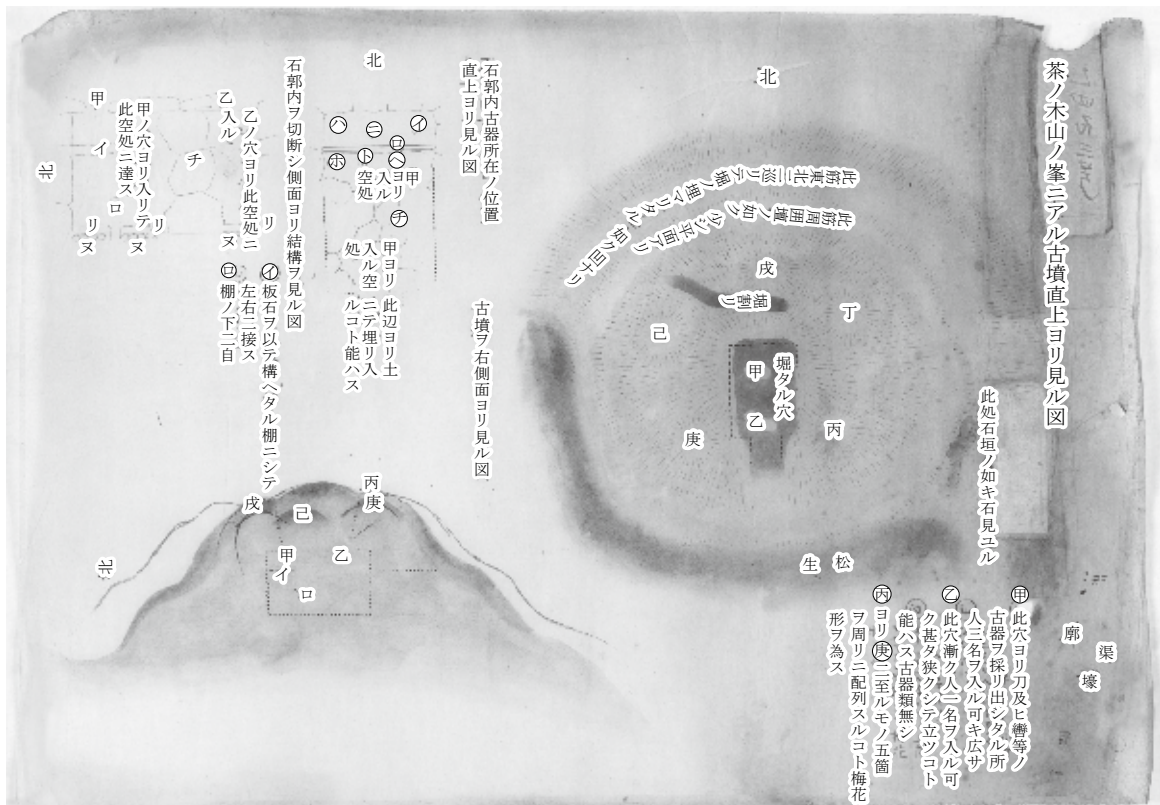


図 12 京 B-3「墳丘および石室図」翻刻 (京都国立博物館所蔵)

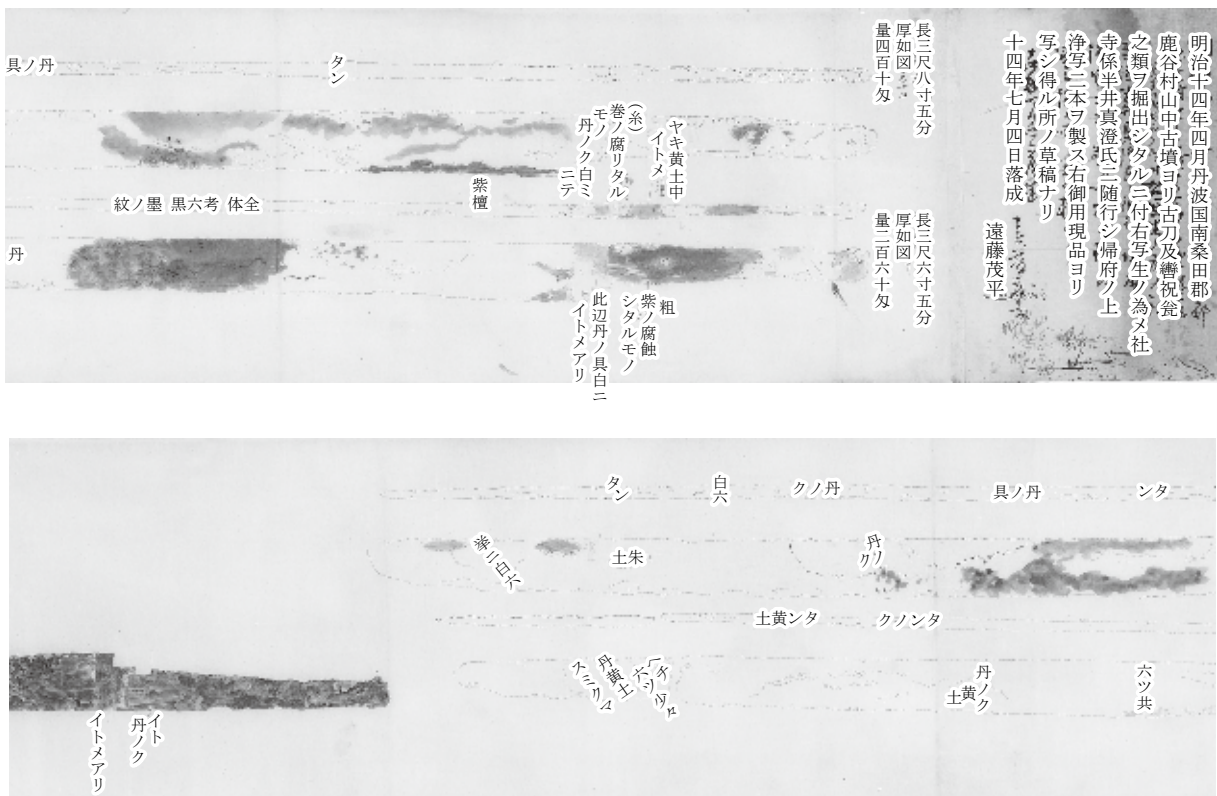


図 13 京 A「遺物の図面 1」翻刻 (1) (京都国立博物館所蔵)



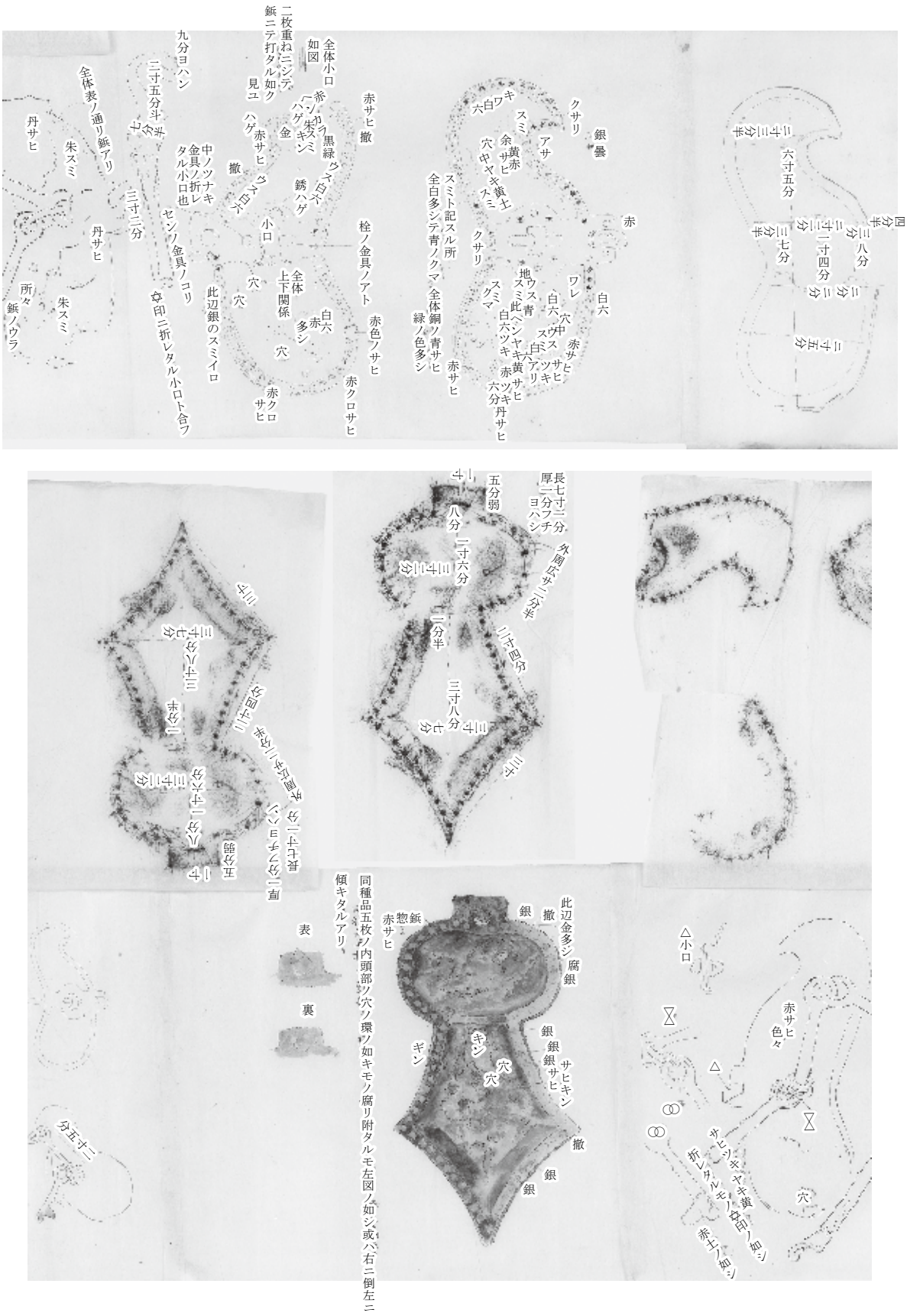


図 14 京 A「遺物の図面 1」翻刻（2）（京都国立博物館所蔵）



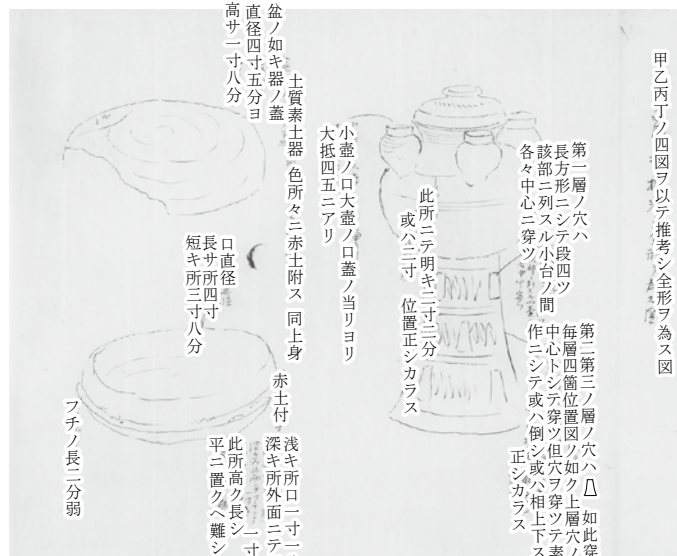
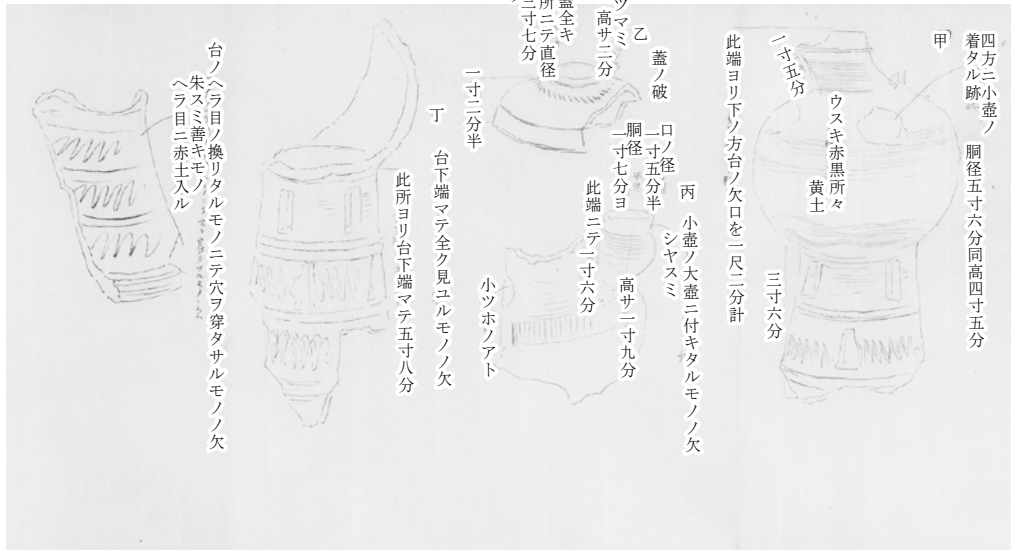
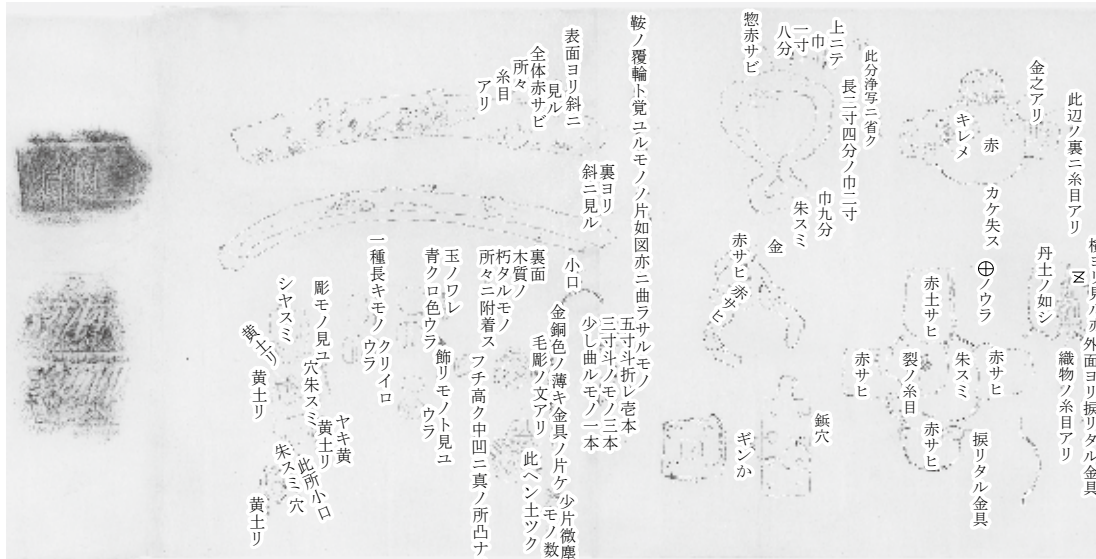


図16 京A「遺物の図面1」翻刻(4) (京都国立博物館所蔵)

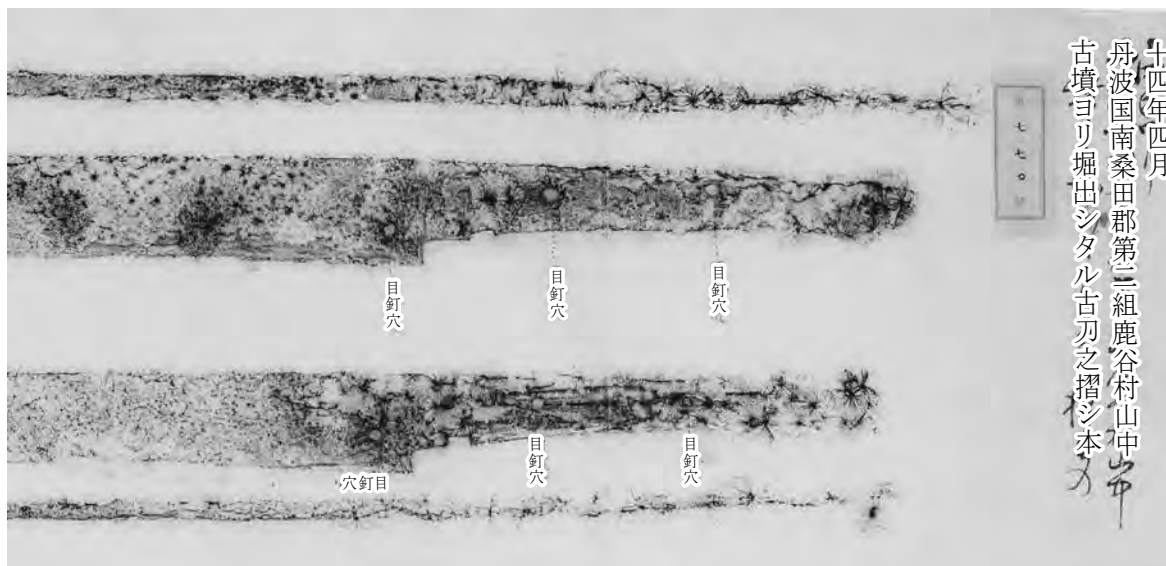


図17 京B-4「遺物の図面2」翻刻（京都国立博物館所蔵）

## （2） ゴーランド文書資料

以下に、大英博物館所蔵のゴーランド文書資料の翻刻を掲載する。英文の翻刻に関しては本文を中心に行い、本文以外の文字は必要に応じて{ }をつけて掲載した。ゴーランドが用いる略語（v: &、c: with など）はそのまま反映させ、また文字が判読できなかったものや、訳読があいまいなものは〈 〉を、挿入箇所が不明な文については[ ]をつけた。

英文翻刻は、ルーク・エジントン - ブラウンの教示を得て、前田俊雄、奥田智子が担当した。日本文の翻刻に関しては土屋隆史が担当した。（奥田）

### 英 A1-1～10「鹿谷古墳の検討メモ」（図18～20、図版9～11）

#### 英 A1-1「古墳の分布図」翻刻（図18）

#### 英 A1-2

Plan of the spot where ancient objects were dug out of an old tomb on Azana Chano ki yama near the village of Rokuya, district of Minami Kuwabara province of Tamba in the month of April 1881. This plan shows the mound as seen from above.

※墳丘平面図（図19）あり

The dotted lines show the position of the chamber.

A. Here a hole has been dug in a slanting direction from the south side of the mound to a depth of six feet and the same width. This hole passes between the stones which form the roof of the stone chamber to above the stone shelf which has been constructed within it, and from there is in a slanting direction reaches quite into the chamber. This is the hole where the antiquarian objects were found. It is large enough to hold three men.

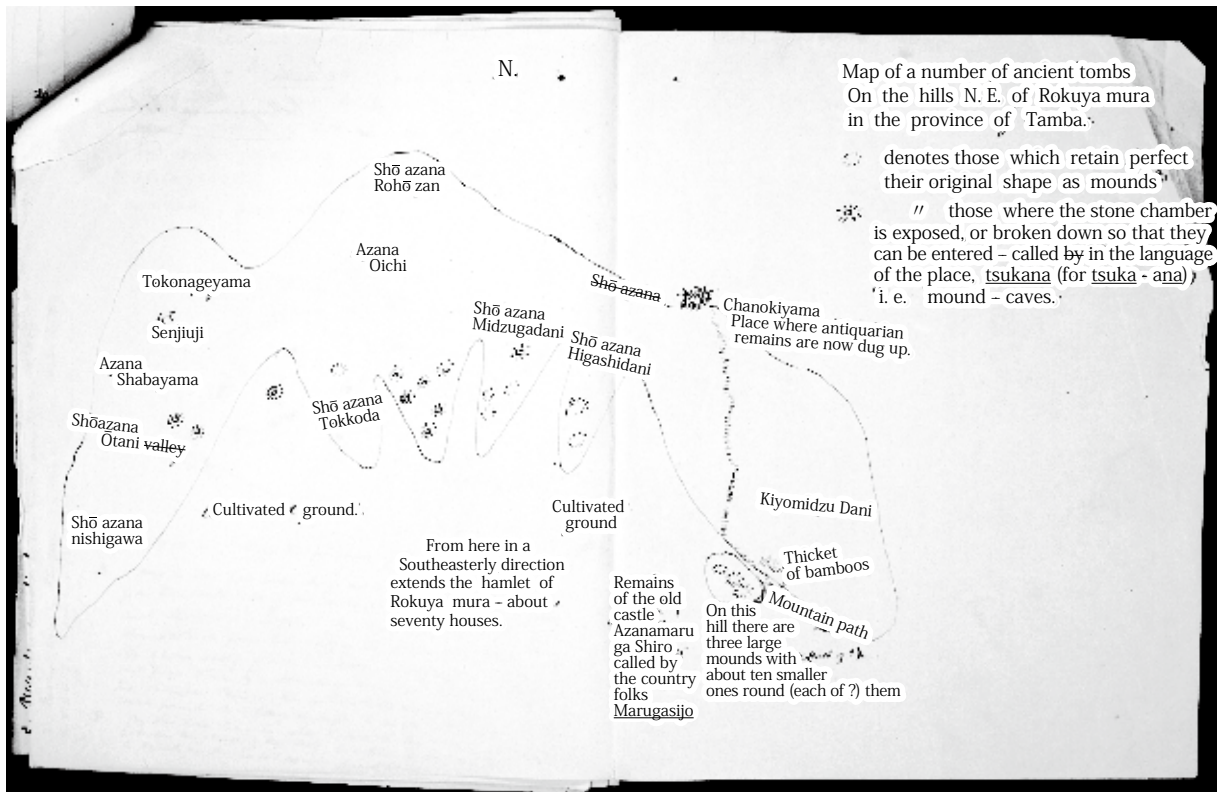


図18 英 A1-1「古墳の分布図」翻刻 (The British Museum 所蔵)

B. By this hole there is also access to the interior of the chamber between the stones of the roof, but there is only room for one man to <stand> in it. No relics were found here.

C. Place where excavation has been made from the south side.

D. Excavation in the form of a trench from N.W. to F.

E.F.G.H.I. Small mounds ranged in a circle in the shape of a plum blossom.

英 A1-3「鹿谷古墳墳丘・横穴式石室図」翻刻 (図20)

英 A1-4

a. is a shelf formed of a <load> flat stone in its natural condition placed across the chamber just where it is entered by hole A. It is let into the stones (of the wall) on three sides in the manner shown by the dotted lines on the plan.

b. Below this shelf, a sort of coffer has been formed by means of a flat unhewn stone in its natural con which extends to right and left so as form a partition of the chamber

c. This is where the bit was found below on the stone shelf.

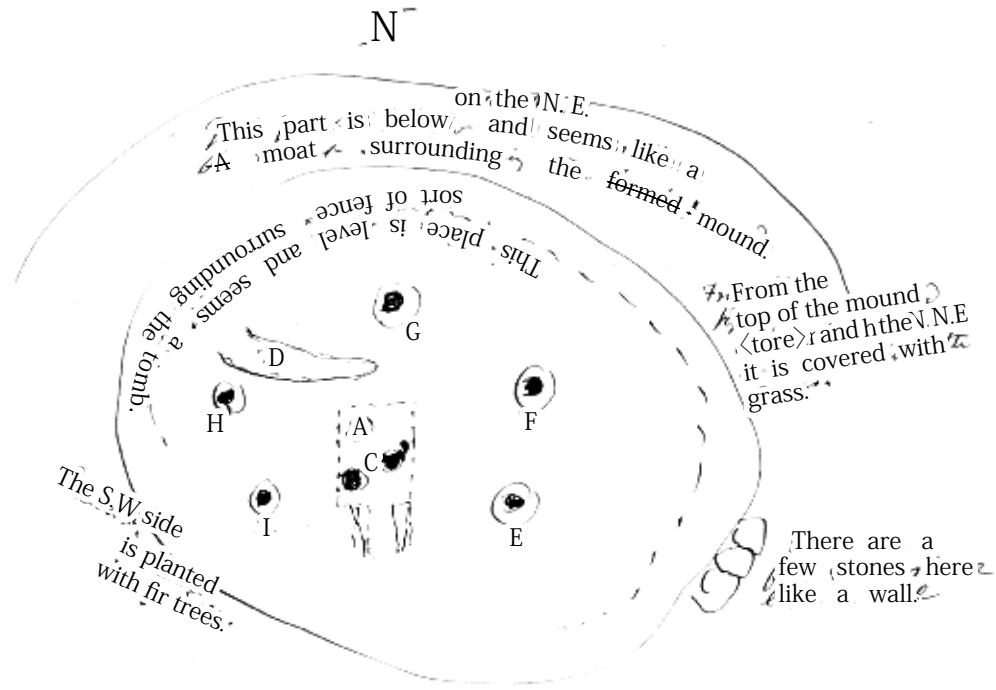
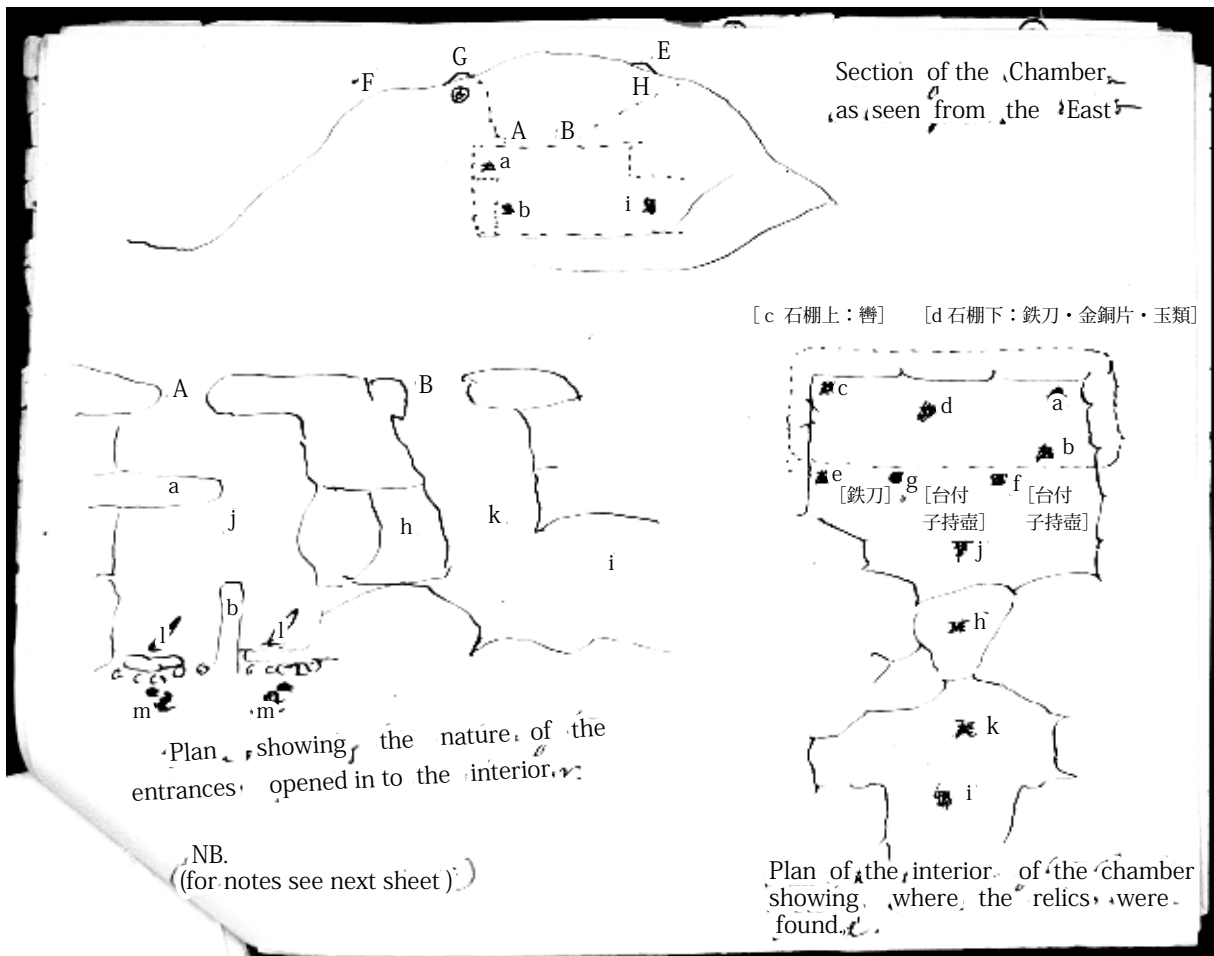


图 19 英 A1-2 「鹿谷古墳墳丘図」翻刻 (The British Museum 所蔵)



※ [ ] で出土遺物を記した

图 20 英 A1-3 「鹿谷古墳墳丘・横穴式石室図」翻刻 (The British Museum 所蔵)

- d. Here, under the stone shelf were found a one of the swords and fragments of gilt copper, and beads.
- e. Here one of the swords was found <set> up ~~against the wall~~. in a leaning position.
- f. g. Here were found the earthen vessels with vases attached resembling sacrificial vessels.
- h. Shown where the large stones on the right and left have fallen in, separating the chamber into the two parts
- ~~j. k. The two parts into which the chamber has been separated by this accident.~~
- i. This seems to be a sort of small entrance to the chamber, but it is piled up with earth, and there is no access by it.
- j. ~~The Chamber to which entrance is obtained~~

英 A1-5

through hole A

k. Chamber to which entrance is obtained through hole B.

l. Flat stones with which the bottom of the chamber is paved.

m. Pebbles in which there flat stones rest.

---

Drawings of the articles found in an ancient tomb on ㊦ Chanoki yama in Rokuya mura, Kuwado gōri, Tamba.

Sword no 1.

Length. 3ft 8 1/2 inches (Japanese measure)

Breadth, and thickness as in the drawing.

Weight. 410 ~~measure~~ me.

※図あり {In both there are here holes to attach the hilt by (menuki ana)}

Sword no 2.

Length 3ft 6 1/2 inches (Jap. measure)

Breadth and thickness as in the drawing

Weight. 260 me.

### 英 A1-6

The decayed remains of the < > look like Shitan (a hard wood imported from China) wood.

In the rust something like traces of silk thread ~~are~~ is visible.

The blade is broken near the ~~sword~~ point.

Bit. No 1. Size as in the drawing. ~~of Front~~ Outer side of copper plated with ~~silver and~~ gold and silver. ~~Back of~~  
Inner side of iron much rusted as shown in the drawing. In parts ~~the~~ traces of gold and silver are visible.

※図あり This ~~seem~~ is of the same style of manufacture as the bit, and seems to be an harness ornament. ~~of~~  
~~horse <bit> harness~~ The It is one of 5 complete articles of this kind which were found. The dimensions are <rusty>  
appearances as in the drawings showing the front and back.

Fragments of similar articles to the last, ~~shape~~ dimensions and rusts appearances as in the drawing. Many other  
small pieces were found – not shown in the drawings.

A side view of one shows the thickness.

### 英 A1-7

Bit No: 2

The dimensions [(front v back)] and rusted appearance as in the drawings; The manufacture similar to the bit  
shown above. One drawing shows the thickness which varies according to the degree to which it is rusted. <→>  
[Same is viewing] The part coloured dark shows where ~~one of~~ the copper <portions> having been left. <→>

The following articles seem to belong to the above bit. The upper ~~one~~ i one of 5 complete articles which have  
been preserved: the lower is one of 2 smaller articles which have been preserved. Many fragments of similar  
articles were found.

~~These gold~~ Several kinds of metal Objects of ~~three sizes~~ were formed different sizes which look like half spherical  
bells ~~of the sizes shown in the drawing~~. Of <drawing> ~~three are three sizes~~ only three objects were ~~many similar~~  
nearly complete. They look like furnishings of a horse saddle-cloth.

{?}

※図あり {Half is wanting}{Carved here}

※図あり {Damaged on this side}

※図あり {Opposite side.}

※図あり {Something like a connecting cord here}

※図あり {Side view}

### 英 A1-8

3 kinds of broken articles the shape of which is complete.

※図あり

One of 5 broken pieces of what seems to have been a saddle iron.

Length as in the drawing.



※図あり {~~no~~ hole seen from End.}

※図あり {Front view <sidewise> from one side.}

A number of small gold- coloured fragments of ~~small~~ thin metal objects were found. Engraved with a fish scale pattern. Size as in the drawing

※図あり is like a stud, but has no hole.

Two fragments of a dark ~~red~~ blue (or green) bead resembling Emerald. front and back views.

Fragment of a dark red bead - front and back views.

Object in horse - front back and end view, is carved. And pierced with a hole.

### 英 A1-9

Form of a number of objects resembling fragments of sacrificial vases.

A There are marked where 4 small vases have been broken off.

Breadth of body of vase. about 5 1/2 inches (Jap.)

Height of do 4 1/2 inches.

Total height ~~of from~~ of fragments 1. ft 2 inches Jap.

B. Fragment of lid.

Height 1 1/5 inches

Height of back 1/5 of an inches

Diameter 3 7/10 inches

C. One of the small vases attached to the body of the large ves.

Breadth. of mouth 1 1/2 inch.

Diameter of body 1. 7/10 inches

Height within 1. 6/10 inches

Outside 1. 9/10 inches.

D. Fragment knowing the form of the lower Edge. Form the lower part of the body to the lower beneath 5 8/10 inches in a perpendicular line

### 英 A1-10

Shape as Reconstructed from the above form fragments

Fragment of a similar vessel with holes pierced in it, but with a different waved pattern.

Drawing of what seems a B

'Gov' body (~~above~~ below) lid (~~below~~ above)

英 A2-1~5 「鹿谷古墳と鹿谷古墳群の検討メモ」

英 A2-1

1881 Dec

Dolmens of Tamba. Rokuya mura c 3 1/2m. from Kameoka

Articles found.

{Drg or photo}

3 Tall sacrificial vases with  
covers v small vases on shoulder  
all more or less imperfect  
Ht=

On floor in front of shelf v  
between the swords.

4 or 5 Several beads of blue glass

Below shelf at W end

2 Covered shallow pot. (Futa mono)  
D. 5 3/8"

near mid. of chamber.

1 Str. long iron sword. }

1 " " " " . }

standing upright agt shelf

{Lantern slide}

1 Horse bit c cheeks of iron plated c Cu v gilt v silvered. }

1 Horse bit c Wheel like cheeks of above metals. }

On Shelf.

Horse orn<sub>t</sub>s various in iron, Cu+Au as above. All on shelf.

Halberd shaped

Saddle bow.

Half Sizes shaped

Buckle like

Strips of metal.

Their

英 A2-2

Their copper foil, gilt v with  
designs in lines of <punched> dots.

Below the shelf in the  
cist like <part> compartment

〈Mid7〉 parts of ornamental appendages of dress. at W. end.

Cist portion covered c a layer of small black rounded pebbles from neighbouring river.

Decayed wood v putrefied woven materials fabric adherent to some of the objects.

英 A2-3

Tamba Dolmens

.....Dolmen just described from which remains taken.

{See drg.}

Midozuka. The stones of this dolmen v also of all the others are granite of which there are 〈outcrop〉 at several places all yielding the stone in looks as layers of varying thickness with totally parallel surfaces.

None are hewn

The structure of this dolmen is illustrated in the drg.

(Fig ) The dimensions of the chamber at the floor line are Chamber L 14 - 6. B 6 - 9 v its height 9' - 0" v of the gallery " 9 - 0 " 3 - 6. v at with a ht of 4ft.

The shelf is let into the walls v back v is very massive being 5' - 3" broad v from 1 - 0 - 1 - 6 in thickness v its bottom is 2 - 8 above the floor.

[which seems about 11'-7" above]

[v 21ft high] is 21ft high & the roof of the dolmen is 〈cov c > ]

The mound which it has been very much cut away for the purposes of cultiv is about 21ft high but remains of two v terraces are distinctly seen on its SE side.

There has been no moat

2. Adjacent mound v dolmen, no shelf. Tot. L. 15' - 9"

{See photo}

3. In bamboo grove. 2 stones for roof. Mound damaged shapeless.

With shelf 3' - 7" × 1' - 2" to 1' - 6" Tot L. 29 - 10

Bottom of shelf 2-8 2 - 10 above floor

4 Broken down entrance ( a little N of E ?)

英 A2-4

Dolmen in bamboo grove.

2 stones for roof. No others <containing> large <encg> back wall

v main gallery stone.

Mound broken down

←すべて取り消し線か

No(5) Dolmen On hill side. No shelf. Mound ~~cut~~ partially levelled v cult < >

Walls built in irreg. courses.

~~Largest ch~~

No(5a). One stone for roof

{Photo}

No 6. Imperf. Shelf. 6' - 5" × 4' - 2" × 1' - 3" . Bottom 4' - 2" above floor

英 A2-5

Tamba. Rokuya mura

Mounds on small plateau at edge of pl.

A. Circumf 196 ft. Top diam 19 ft. Ht 10ft One terrace ft 4'.

Moat a few ft broad.

32

{6.8}

B. }  
C. } Dug away. Small. only.

D. Med size.

E. Terrace, moat v dimensions similar to A.

F. ~~Sa Two~~ Terraces v moat ~~as A~~ as A. Circumf 226 ft.

Terrace 5ft H. Md 8ft higher. Top 21ft broad.

About of their 13 mounds here, difficult to say if contain  
dolmen, probly not. All have been dug into

=

(奥田・ルーク エジントン - ブラウン)

## 英 A3-1～3 「鹿谷古墳報告の草稿」

## 英 A3-1

Tumuli v Dolmens. Province of Tamba.

These dolmens of Tamba are situated in ~~village district~~ the neighbourhood of Rokuya a small village about 3-1/2 5 4 miles NW of the old castle town of Kamioka. They consist of one large mound on the summit of Cha no Ki yama a hill rising some 500 ft above the village on its NE side

A group of ~~seven~~ 13 ~~adjoining~~ on a low tract of heath but little higher than the rice plains.

A considerable number variously estimated at from 30 - 50 scattered irregularly over the lower slopes of the range of hills which at ~~bound the towards the head of~~ partially encircles the ~~village~~

The stone chambers of some of these sepulchral < > ~~present~~ <possess> a ~~of~~ characteristic, v important feature which so far as our observation have gone is <peculiar> to this locality: These consists of a rude broad shelf ~~of~~ at their <hinder> wall formed of a single <huge> unhewn ~~stone~~ rough manufacture slab of stone let into the side walls at either end.

{Whether this peculiarity marks the work of builder of a late age than those whose usual form was that of the simple chamber or it is char c of the rank of the occupant of the tomb ~~dose not~~ or had <other> significance ~~dose not~~ is difficult to determine. It The use ~~of the shelf~~ to which it was put in}

The dolmen ~~of~~ on the summit of Cha no Ki yama consists of a well formed mound ~~surely no almost two tiers~~ circular rising in two [~~some~~ rather ill defined] tiers to a [the basal circumf of the lowest] height of 20 - 25 ft, v measured approximately tiers being 382 ft c 125 diam. in circum at its base. Upon ~~the~~ its upper part there are five small subsidiary mounds arranged in the form of ~~the japan~~ the ~~more~~ plum flower of the Japan plum crest. ( ) On the side there are ~~on one end~~ doubtful traces of a trench. ~~which partly who~~ No trace of the ~~entrance~~ mouth of the entrance gallery can be seen but ~~the~~ a deep trench (5 ft) has been cut down from the ~~summit~~ top of the mound to the roof stones of the chamber v several of these are exposed laid bare

~~The cham~~ These stones have been displaced owing ~~to~~ to the collapse of the sides v the middle part of the chamber ~~being~~ is filled ~~rises up~~ with an irregularly piled ~~near~~ heap of the ~~side~~ side v roof stones.

## 英 A3-2

~~So that~~ It was only possible [for the workmen] to enter through <apertures> between the displaced stones the outer ~~<of>~~ the inner part of the dolmen chamber v that with difficulty when this excavation was completed in < > of 1881. At present on account of a still further collapse the dolmen ~~can~~ is in ruins v ~~cannot be~~

~~The cham chamber~~ <his> as ~~nearly as could be ascertained~~ or The entrance of the chamber faced ~~approx~~ approx SSE as ~~nearly as could be ascertained~~, its ~~accounts~~ bearing could not be ascertained accurately on acct of ~~the~~ its ruined condn. Its dimensions were however probably similar to no in the Table.

~~Shortly after the~~

~~The workemen on entering the main half of the dolmen found a a most valuable.~~

From the inner half of the dolmen the workmen took out in the presence of the Kocho of Rokuya the swords, horse furniture v pottery subseq - described Upon this discovery being reported to the Gov of Kiyo ~~to~~ <delight> an

officer Mr Nakarai <accompanied> by an artist was sent to make an exam of the ancient articles v of the dolmen from ~~to~~ which they were taken v to his report v its illustrations which have been most generously placed at our disposal by ~~the~~ NE Gov of Kin Fu we are indebted for for the ~~illustration v for the~~ surveys which <illustrate> this v for <painter> details <respects> the positions they occupied in the ~~tom~~ tomb.

A personal ~~visit~~ exam of the articles themselves through the kind permission of the Gov Mr. was made at Kamioka v some additional details were furnished by the Kocho of Rokuya ~~where not~~

Notwithstanding its prominence v size neither name nor tradition is attached to it

### 英 A3-3

~~The chamber of this dolmen presents an surface peculiar characteristic v important feature which so far as our researches have gone is peculiar to this locality it' s ; a rude broad shelf at its hinder wall found of a simple huge <unhewn> stone let into the side walls at either end.~~

The dolmen chamber has projecting from its back wall a rude stone shelf.

In the sectional diagram this shelf is ~~and~~ probly shown too small as in ~~the several~~ v smaller dolm the others of these char likely due' later on ~~the none occur so~~ all are much larger ~~than~~ (Diagram made from descript given by the men who had entered this tomb tho artist v ( ) being unable to get in).

Below the shelf ~~the~~ a single upright slab of stone about 10" high forms a rude kind of cist without cover. Upon the shelf itself the two ~~bits~~ horse bits (fig ) positions of horse ornaments, were found.

The swords (fig ) were standing upright resting againsts the shelf v between them ~~it~~ on the floor of the chamber the two vases.

The covered pot was <adj> found on the floor some few little distance away from v in front of the vases.

The floor of this cist was covered strewn with a layer of rounded black pebbles such as are found in the bed of the Oigawa ~~river~~ a few miles distant

The ~~glass beads~~ small fragm of ornaments gilt copper ~~supposed to be pers~~ supposed to have formed part of some personal ornament was ~~p~~ found on there pebbles v <also> the glass beads there at the W. end. ~~Probably personal ornaments; No bones were seen or teeth were seen.~~

Note page 171 Lubbok

Even no late as in 1781

Frederick Casimir was laid in his grave with his slaughtered horse. Horse ferales p 66.

### 英 A4-1~4 「鹿谷古墳・鹿谷古墳群報告の草稿」

#### 英 A4-1

※別紙 ◎ Besides the mounds containing dolmens there is a group of 13 others - ~~not conty those stone chambers~~ - ~~in which summit burial~~ on a low heath on the margin of the plain. in which "summit burial" only has been practiced. They are all conical mounds from 12 - 20 ft high three being much larger than the others having bases of 60 - 75 ft diam v being encircled both with a terrace v a moat.

## 英 A4-2

Prof Prov. of Tamba.

In the prov of Tamba at the village of Rokuya about 4 miles from the town of Kameoka there is a group of dolmens of considerable importance altho none are of the magnitude of many which occur in the adjacent provs of Settsu v Yamashiro. One which is of special interest on account of the remains which were found in it ~~as~~ which will be described subsequently - is situated in a commanding position on the top of a <spur> about 500 ft above the plain. The others about 30 in ~~all~~ number are scattered over the lower slopes of the adjoining hills, v with the exception of two the mounds of all have been reduced by cultiva to a state of complete ruin.

※別紙 ◎

A typical mound with the dolmen contained in it is shown in section in fig. The mound is 22 ft high, the diam of its base being 96 ft, v altho much cut away the remains of two terraces are distinctly visible on its SE side. There are no traces of a moat. The structure of the dolmen will be seen in the drg v ~~<Fig>~~ its dimensions v other particulars as well as similar details ~~of~~ relating to 5 others of the best preserved of the group will be found in the table. ( Nos to )

{Drawing v diagrams}

Sections v plans of 2 are shown diagrammatically in (diag no ).

A curious feature in several of these dolmens is the massive rude shelf of unhewn stone

{Lantern slide}

which projects from the back wall v extends across the whole breadth of the chamber. It is built into the walls both at its ends v back v is placed from 2' - 8" to 4' - 2" above the floor. ~~This shelf~~ Since my discovery of this form of dolmen I have ascertained that altho rare it is not peculiar to this prov. as it is also found in one in Shikoku Awa Handa mura v in 2 examples in Kyu shu Chikugo Asada mura Yama no uchi In

## 英 A4-3

In the dolmen on the summit of the <spur> a long slab of rough stone 10" high is set up ~~to~~ across the floor <forming> a ~~rude coffin~~ cist like space below the shelf v ~~in which this the body of the warrior chief had been placed.~~ This rude arrangement which was doubtless originally present in the other was evidently intended [to take the place of the] as a substitute for ~~the~~ sarcophagus which ~~are~~ is common in Settsu, the hardness of the local granite making it diff to cut blocks into that form. ※挿入 A That the rudeness of the ~~substitute~~ arrgt is not ~~due~~ to a sign of greater age than the latter is proved by the character of the remains which accompany it which ~~demonstrate that are of the~~ [not of certain] ~~in fact same~~ age as than <those> fd in the stone sarcophagi of Izumo, Settsu v or in the wooden sarcoph of Kozuke v Kawachi.

This dolmen is contained in a ~~terraced~~ well formed circular mound ~~v on the~~ about 22 ft with one ~~the~~ terrace (125 ft diam ) upon which are 5 small mounds ~~about~~ ft placed at equal distances from one another

{Note} The interior of the dolmen is as above described v its size is ~~are about the~~ similar to No. in the Tables. altho probly it may have had a large gallery.

(Note I was unable to make a plan of, or to measure it as during a prolonged rain storm a few days before my visit its sides collapsed v one of its roof stones full in.)

※挿入 A

In point of antiquity. ~~this rude arrangement~~ it might seem to belong to the earlier times of the dolmen age but the splendid metal objects found  $\longleftrightarrow$   $\longleftrightarrow$  in this dolmen mark it as belonging rather to a more advanced period when the race had become  $\langle$ import $\rangle$  in  $\langle$ metal $\rangle$  v in the art of working metals.

No trace of the entrance is visible on the outside of the mound but from the trench formed by ~~the~~ its collapse of its faced approxy SSE.

~~The following articles~~ ~~The remains which~~ The remains which it contained were taken out a short time before I visited it by the owner of the

#### 英 A4-4

ground in the presence of the head man of the village the chamber being entered through an aperture ~~in the roof~~ formed by the partial displacement of ~~the~~ a huge roof stone which afterwards ~~completely~~ fell in. The objects obtained are of great archaeological interest v constitute one of the most important finds yet made in a Jap. dolmen. After considerable difficulties ~~the large~~ v a (patiently waiting for ) (delay of ) seven years, ~~during come~~ I was ~~at~~ last able to purchase them v they are now in the Br. M. where they form part of the G. Coll.

The chief objects are briefly described v their positions in the chamber noted in the following list.

List on appended blue paper to be filled up.

× × × × × × × ×

The metallic ~~ornaments~~ objects, swords v horse furniture resemble in their forms v technical execution those of Izumo, Musashi, Kozuke, Mino, Kawachi v doubtless belong to the  $\langle$ goldenest $\rangle$  most flourishing part of the dolmen age when the race had completed the conquest of the chief parts of the island, had settled in several great centres, v ~~were~~ had leisure to  $\longleftrightarrow$  give to the  $\langle$ prose $\rangle$   $\langle$ sutrim $\rangle$  of the ornamental arts.

(前田俊雄・エジントン - ブラウン)

#### 英 A5-1・2 「鹿谷古墳の被葬者・古代の信仰に関するメモ」

##### 英 A5-1

##### Tamba dolmen

The chambers of some present a peculiar v import feature which as far as we can ascertain is peculiar to this locality  $\langle$   $\rangle$  , -. a rude broad ~~heavy~~  $\longleftrightarrow$  shelf at the hinder end formed of of a single huge undressed stone ~~And~~ upon this shelf the bits, ~~v~~ horse furniture v ornaments of the departed chief were placed as we shall in the discr of the mound of Cha no Ki yama

~~Who~~ it

This peculiarity may ~~mark~~ character the work of builders of a later age than those whose  $\longleftrightarrow$  ~~form~~  $\langle$ usual $\rangle$  structure was that of the simple chamber as it ~~probably~~ be char c of the rank of the interred That this form ~~was~~ ~~Cha was~~ is that which occurs in the Cha no Ki

That the Cha no Ki yama dolmen ~~is of this form~~  $\langle$ type $\rangle$  } [which  $\langle$   $\rangle$  ] is the sep c mound of a man of high position should be of this  $\longleftrightarrow$  type, tends to support the latter supposition.



英 A5-2

The celebration of this religious rites ceremonies of religion

Again its rudeness v the < > of the unchiseled stones of any do not necessarily prove either the great <antiquity> age of these monuments or that their builders whose were ignorant [were savages] ignorant of the art of v [or do not posses] not without the metal tools necessary required for the working of stone, < > as in other countries as Fergusson has it, it was sought to attain the wished for end by mass v the expression of power -

(奥田・エジントン - ブラウン)

英 A6 「丹波のドルメン分類」

Tamba Dolmens

In the village of Rokuya scattered over the lower slopes of the adjacent hills - one only being on this summit - there is an extensive collection of tumuli.

They may be divided into 4 classes; -

1. An unusually large mound on the top of a hill about 500 ft above the village.
2. A group of five on the lower ground near the village. These are of medium size but with trenches (moats?)
3. Ordinary dolmens of varying sizes.
4. Dolmens with a massive shelf projecting from the back wall

英 A7-1・2 「石棚を持つ古墳例に関するメモ」

英 A7-1

Dolmens with shelf at back wall.

Chikugo. Kodzuma gori. Yama no uchi mura one dolmen only.

” Ikuha gori, Asada mura,

Two dolmens together one with v one without shelf

Seen by Mr Wkabayashi of Tokyo Anthropol. Soc.

英 A7-2

Awa no Kuni. Mima gori. v H

Hunda mura { 半田

Dolmen with back shelf.

T. A. Soc. No 26 pg 186

(前田・エジントン - ブラウン)

英 B1-1～6 「古墳見分復命書」

英 B1-1

丹波国南桑田郡鹿谷村ノ古墳見分候処、凡千有余年前ノ物トハ相見エ候得共、何人ノ墳墓タルヤ

候。別紙

ハ判然不仕於府誌編輯部ニ於テ考証ノ上宮内省へ上申可相成義ト勘考仕候条右。見分日記并略図相添、此段復命仕候也。

但シ、絵図ノ如キハ遠藤茂平清書ノ上、直チニ一旦之差出處。

明治十四年五月十日

庶務課社寺掛

十等属半井真澄

#### 古墳見分日記

丹波国南桑田郡第七組鹿谷村竹岡利左衛門外十八人ノ者、同村内共有山茶木山字清水谷山上ニ於テ、埋蔵物堀出シタル旨、同郡長ノ上申ニ付、実地見分トシテ御雇画工遠藤茂平ヲ従ヘ、五月六日京地ヲ発ス。此日雨甚シ。正午亀岡ニ着。郡役所ニ到リ、郡長ニ面シテ兼テ鹿谷村関係ノ者ヘ通知アランコトヲ乞。郡長之ヲ諾シ、且云、当所ヨリ同村ヘハ路程猶遠シ、其近村吉田村ニ宿シナハ大ニ弁利ナラント。依テ亀岡分署ニ到リ、同署ニ預リ有ル所ノ埋蔵物ヲ借ランコトヲ約シ、直ニ吉田村ニ到リ、佐藤某ノ家ニ宿ス。午後第四時、分署ヨリ物品ヲ送リ来ルヲ以テ、遠藤茂平ヲシテ之ヲ写サシム。

七日暁、来風雨最烈、湛水路ヲ浸シテ湖面ノ如シ。午前九時鹿谷村惣代々理小瀬治郎助ナルモノ村民三人ヲ随ヘ来ル。因テ其景況ヲ聞クニ、人々異口ニシテ云ク、模糊曖昧タルコト多シ。且云、古墳ノ所在ハ茶木山ノ絶頂ナレハ、今日ノ風雨ニテハ登ルコトヲ得ヘカラスト。仍テ翌八日ヲ約シテ之ヲ帰ラシム。後近傍ノ古老ヲ集メ其伝説ヲ聞、或ハ考証トナスヘキ書類ヲ索ルニ、一モ取ルヘキコトナシ。

八日曇午後晴。今朝第七時、吉田村ヲ発シ、鹿谷村惣代高田彦六ノ家ニ到リ、更ニ関係ノ者三五人ヲ随從シテ東面ノ山ニ登ルコト凡六七丁ニシテ、頂上ニ到レハ別ニ土ヲ封シ周圍壺丁計其形恰モ釜ヲ倒ニシタル状ヲナシテセリ。周圍丹壺丁計ノ物ヲ見ル是即古墳ノ所ナリト云。到テ之ヲ見ルニ、其中央深サ凡壺間、巾壺間、長サ壺間半計ヲ堀リタリ。直下前後柳石凹陷シテ穴ヲ現ス。此処ヨリ出入セント云。然レ共、過日来ノ降雨ニテ土砂崩潰シテ其半ヲ埋メ、復入ルコトヲ得ス。依テ柳内ノ状況ヲ諮問スルニ、皆云、此他石柳ノ現出シテ出入自在ナル処数所アリ。其内部ノ構造尽ク同一ナレハ、願クハ他ニ付テ説明セント。山ヲ下リ、村ノ北後一石柳ノ処ニ到リ、内ニ入テ之ヲ見ルニ、前口細クシテ僅ニ一人ノ出入スルヲ得ヘリ。漸ク進メハ、其廣キコト凡壺四枚ヲ敷クニ足ル。左右石ヲ積、上部円形ニシテ陶窯ノ如ク奥ニ一枚ノ石棚アリ。此処即チ轡ノアリタル処ナリト云。抑、鹿谷村ノ地形タル南面ニシテ三方山ヲ環ラシ、後ヲ狼峯山ト云。右ヲ娑婆山一ニ独鉆拋山、左ヲ茶木山トス。今般堀出シタル古墳ノ有ル所、而シテ此山麓処トシテ古墳アラサルナリ。其数幾十ナルヲ不知。已ニ發掘シテ石柳ノ露出シタルモノアリ、或ハ未タ全然タルモノアリ、或ハ中間凹陷シテ其形ヲ損シタルモノ等アリテ、其大ナルハ壺八枚ヲ並フヘリ。其小ナルモ一ニ枚ヲ敷クニ足ル。且全キモノハ皆彼ノ倒釜ノ状ヲナシ、周圍溝ヲ廻ラシタリ。其最モ多キ処ハ一丘上ニ累々トシテ大小相雜リ、恰モ橙子ヲ散布シタルモノニ似タリ。上世ノ墓地タリシコト知ルヘシ。今掘出シタル物品ヲ見ルニ、皆異様ニシテ中世以下ノモノニ非。凡千有余年前ノモノタルヘシ。然レ共、其何人ノ墳墓タルコトハ、地名ニ因ルモ伝聞ニ依ルモ更ニ考フヘキナシ。午後第四時、亀岡ニ帰り宿シ、物品ハ再ヒ分署ニ返還ス。

九日曇、午前第九時亀岡ヲ発シ、午後一時帰京ス。

明治十四年五月十日

庶務課社寺掛

十等属半井真澄

翻刻者註：原文の赤文字は斜線で表記した。また、東 B-2 と異なる箇所は太字で示した。

英 B2 「古墳群までの略地図」 翻刻 (図21)

英 B3 「古墳の分布図」 翻刻 (図22)

(土屋)

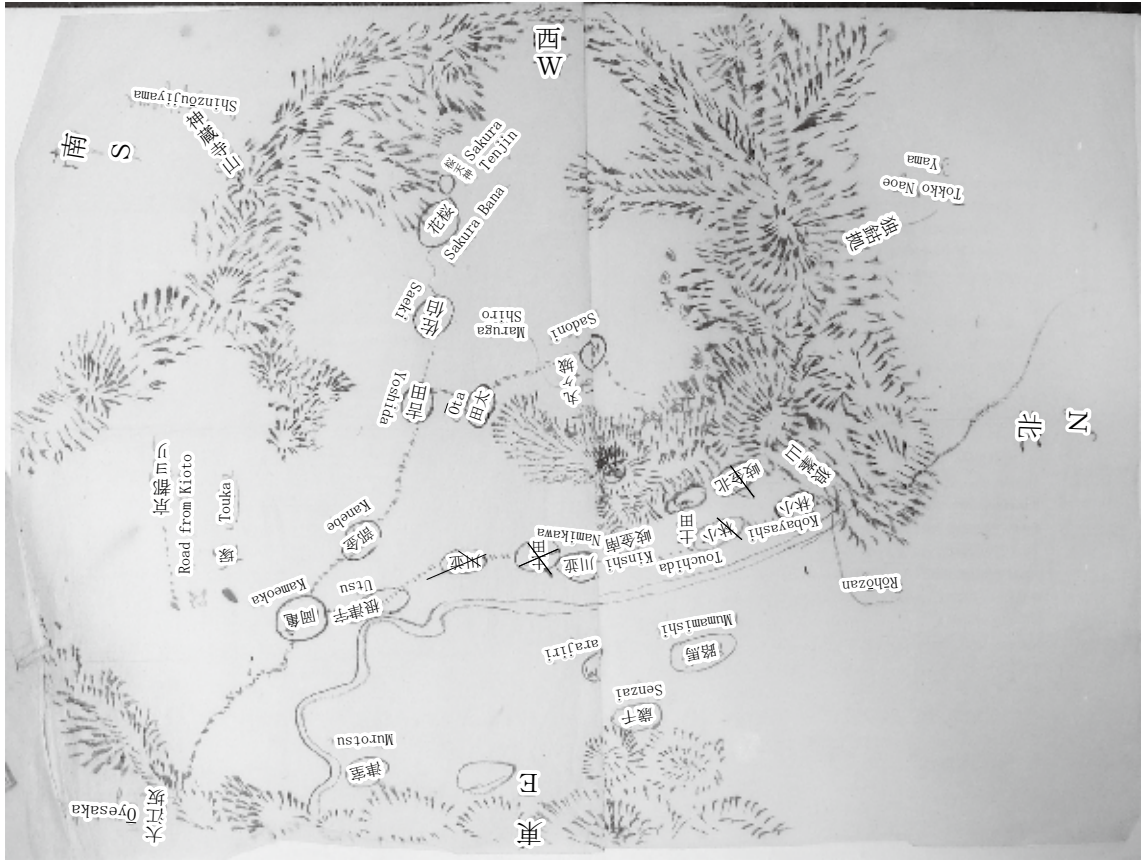


図21 英B2「古墳群までの略地図」翻刻 (The British Museum 所蔵)

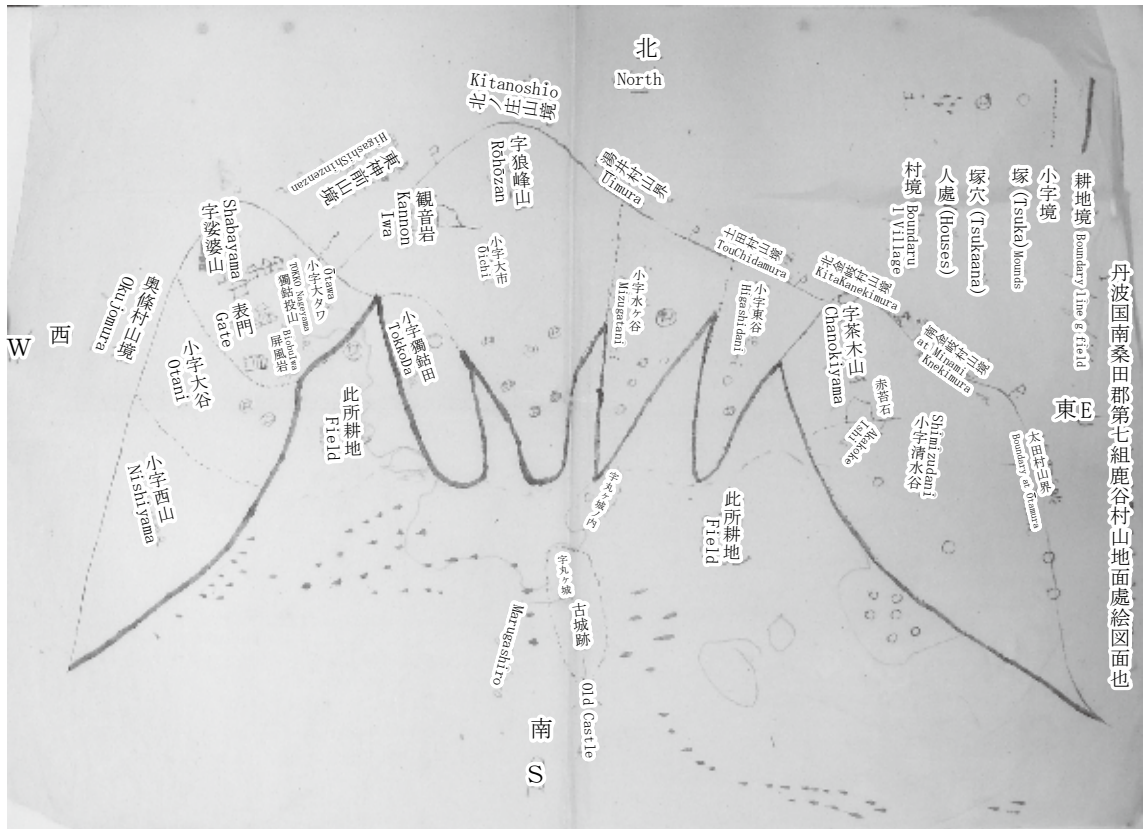


図22 英B3「古墳の分布図」翻刻 (The British Museum 所蔵)

### 英 B4-1～3 「古墳見分復命書の翻訳」

#### 英 B4-1

##### Tamba

Visit to the Old mounds.

I have made a visit to the old mounds at the village called ~~Shikatanimura~~ Rokuya mura in the Minami Kuwata gōri of Tamba. It seems that they are the mounds of more than one thousand years ago, but as to ~~their~~ for whom they were nothing could be heard. I hereby fulfill your request by giving a brief account v rough map of the spot.

As Takemura Rizaemon and eighteen other people reported their discovery of the buried things at the tea-field called Shimizudani of the Minami Kuwadagori, Tamba. I started for looking at the spot on the 6th day of May. It rained very severely, v I could get Kameoka at 12<sup>2</sup>-00 o' clock, and I saw local chief (?) He told me that it was rather ~~very~~ far from here to the spot and it would be very convenient to have a lodging at the place called Yoshida mura. I went to the police-station where there were things dug up. I ~~st~~ went and stayed in the house of Sato at Yoshidamura. About 4 o' clock, things were sent from the police station, v they were copied by the painter who came with me.

Next day was very ~~of wind~~ windy ; at 9 o' clock, Kose Jirosuke and three other men came, v I asked many questions about the place, their answers were very various one differing from the other. They said as the place ~~where there is mound~~ is the very summit of Cha-nokiyama, we are not able to go up on such windy day. I told them then that they should come again tomorrow morning to ~~mts~~ guide me. After they returned I collected many old men, v asked them about the mounds, but unfortunately no referable in-

#### 英 B4-2

formation was obtained.

Next day was cloudy in the morning, but fine in the afternoon. I set off at 7 o' clock in the morning, and went to the house of Takata Hikoroku of Shikatanimura, and hired three other men, and went up Eastern mountain. In about 6 or 7 chos. up, there is place shaped like Kama (rice kettle) placed up side down ~~wh~~ the circum-ference of which is about one cho. This is the very spot. At about the middle part we dug the ~~p~~ hole one ken deep, one ken broad, v one ken v half long, and there ~~was~~ we found boundary fence (as it looked) v hole which is said to be entrance to the mound. As it had been raining for some days, the ground ~~get~~ became very muddy, v I we could not get in. They said that ~~they~~ there are many places like this which admit free entrance, the construction of which ~~is~~ are all under the ~~one~~ same design. So we will go another place. We went down the hill, v at the northern part of the village, we saw one stone fence, and we went in. It was very ~~small~~ narrow at the entrance, only one man ~~can~~ could go at a time. Deeper we go in, the wider it becomes v at last we reached to the place, ~~where~~ which is about 4 mats wide, the sides are made of stone, it ~~is~~ has an arched ceiling looked like a furnace for pottery, at the back there is a stone shelf which is said to be the e shelf for putting bridle.

Shikatanimura is the place founded by hills the back one is called Rōhozan or Okami mine yama; right one - Shiyabayama; left one - Chiyanoki yama, the spot in question.

At the top v foot there are many hundreds of

## 英 B4-3

mounds, some are already made <apparent> and some hidden under ground. Some are as large as 8 mats wide, some only 2 mats. All unbroken ones are shaped like Kama v are bounded by ditches. Where there are <most> mounds the place seems as if many oranges distr were scattered over.

The things dug up are strange ones, they must be more than 1,000 years ago old. As before said, they we could not got in any idea whatever as to whose mounds they were, by either names of the locality or the old men's talkings. I returned at 4 o' clock to Kameoka.

From Kameoka to the Kiyoto it is 4 hour's walking.

(前田・エジントン-ブラウン)

## 注

- 1) 宮内庁宮内公文書館と東京国立博物館の公文書の探索にあたり、宮内庁書陵部の加藤一郎氏にご協力をいただきました。また公文書の翻刻にあたっては、宮内庁書陵部の有馬伸氏、的場匠平氏にもご教示をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。
- 2) 竹村亮仁は大英博物館所蔵の「直筆ノート (A)」「直筆ノート (B)」に対応させて、古物学協会所蔵の遺物に関するノートを「直筆ノート (古物A)」、を「直筆ノート (古物B)」と呼んでいるが、ここでは「直筆ノート (A)」「直筆ノート (B)」に統一する。
- 3) 鹿谷古墳の石柵先端部直下の床面上に奥壁に並行して立てられた板石については、これまで石障と呼ばれてきた。石障は熊本県周辺を中心にみられる「横穴式石室の主室の内部に板状の加工された石材を方形にたためぐらして、遺骸安置の場所をかこむ施設」を示すため〔小林1959〕、本書では区別し、仕切石と呼ぶこととする。
- 4) ゴーランドのメモでは石柵を持つ横穴式石室は筑後の Yama no uchi mura に 1 基、Asada mura の 2 基あるドルメンの内の 1 基にあると書かれている。内容に一致をみないが、若林勝邦は明治28 (1895) 年刊行の史学雑誌で筑後の山内村 (現、福岡県八女市) の童男山古墳群の 3 基の横穴式石室 (石屋形の構造を持つ童男山 1 号墳と石柵を持つ 2 基の石室) の事例を報告しており、また朝田村 (現、福岡県うきは市) の石柵を持つ横穴式石室 (重定古墳) についてもふれている〔若林1895〕。
- 5) 英 C1-4 のガラス乾板の左端には、「阿部村 (大和) の石棺のあるドルメン [艸墓古墳]」〔Gowland1897 : fig.8、ゴーランド1981 : 27、挿図 6〕が写り込んでいる。
- 6) この写真の裏には、「Interior of dolmen (No.3) show ny rude stone shelf at midn end. Tamba Rokuya 7 miles from Kamioka, Chamber Length 11' - 6" Breadth 6' - 6" to 8' - 0" Height 8' - 0" Roof of 2 stones, Gallery Length 18' - 4" Breadth 4' - 9" Height Almost full of earth.」(翻刻：忽那敬三・エジントン-ブラウン) というメモがある。
- 7) この写真はゴーランド1907年論文にも再録されている。
- 8) 「直筆ノート (A)」に記載があり、(J.059) の番号がついている。
- 9) 後藤和雄のリストにある1071・1072・1182が該当する〔後藤1997a〕。
- 10) 後藤和雄のリストにある1073~1075が該当する〔後藤1997a〕。
- 11) ゴーランドは「粗雑な巨石構造でできた埋葬石室」をドルメン (Dolmen) と呼び、シスト (Cist) と区別している〔Gowland1897 : 4、ゴーランド1981 : 10〕。
- 12) ゴーランドは類例として「筑後の山内、朝田と阿波 (四国) の半田」を挙げている〔Gowland1897 : 31、ゴーランド1981 : 50〕。
- 13) ゴーランドは鹿谷古墳から 6 点の剣菱形杏葉が出土したとするが、京都国立博物館所蔵絵図に「同種品五枚」と書

かれているように 5 点の誤りである〔富山2009〕(第 3 章第 5 節参照)。

- 14) 明治14 (1881) 年に作成された京都国立博物館所蔵絵図(京 A)には金属製馬具に付着した有機質に対する遠藤茂平の詳細な注記がある〔諫早・片山2014〕。京都国立博物館所蔵絵図(京 B-2)とゴーランド文書資料(英 B3)の鹿谷古墳群の分布図の共通性から、ゴーランドは「エンドウという絵師」〔ハリス2003: 15〕に会っている可能性があり、少なくとも確実に「ナカライの報告書」(英 B1)を入手していることをふまえれば、この所見も遠藤、あるいは彼の図面から何らかの影響を受けている可能性は否定できない。
- 15) f 字形鏡板轡については「乙字形」、八角形鏡板轡については「車形」としている〔若林1900: 2〕。
- 16) 「当時の届書」とは半井真澄の「古墳見分日記」を指している可能性が高い。
- 17) 富山直人はゴーランドの研究が黙殺された背景として、明治時代後半の日本考古学における国粹主義的傾向を指摘している〔富山2014b〕。
- 18) 奈良文化財研究所が所蔵する梅原末治文庫の中には、「梅原末治文庫」と捺印されたゴーランド1897年論文が所蔵されており、表紙の右上隅には梅原自身によるものとみられる「Presented by Ms Kingsford. 22th, Feb, 1928. London」というメモ書きがある。大塚初重は「ガウランド・コレクションは私の知る限り1924年(大正13)頃に、京都大学の梅原末治博士が資料見学をされている〔大塚2003: 172〕」とするが、梅原が初めて渡欧し、大英博物館を訪れたのは大正15(1926)年のことであり〔梅原1973〕、上述のメモ書きからも梅原は少なくとも大正13(1924)年に刊行された『南桑田郡誌』の執筆時点ではゴーランド1897年論文を入手していなかった可能性が高い。なお梅原末治が論文の中でゴーランドについて言及し始めるのは昭和 7 (1932)年以降のことである〔梅原1932: 9-10〕。
- 19) 東洋文庫所蔵梅原考古資料の調査にあたっては、公益財団法人東洋文庫図書部の篠崎陽子氏のご高配をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。
- 20) 大塚初重は昭和42~43(1967~68)年のイギリス滞在中に、日本人としては初めてゴーランド・コレクションに対する本格的な調査を行い、帰国後、「芝山古墳出土遺物」についての調査成果を公表している〔大塚1977〕。しかしながら大塚自身も指摘しているように、当時「芝山古墳出土遺物」として保管されているものの中には、五角形杏葉や雲珠など明らかに鹿谷古墳出土遺物とみられるものが含まれている。ゴーランド・コレクションがフランスによって大英博物館に持ち込まれたこと、フランスがゴーランドよりも先に死亡したこと、2 度の世界大戦によって大英博物館の収蔵品を避難、移動させたことなどが重なり、保管状況に混乱が生じたとみられている〔竹村2015: 168〕。
- 21) 平成 4 (1992)年11月27日付の朝日新聞。なお発見の経緯については、後藤和雄本人によってまとめられている〔後藤2003〕。
- 22) 土井孝則は表 3 の105~110の 6 基の古墳を順に鹿谷茶ノ木山 1 ~ 6 号墳とした上で、2 号墳(表 3 の106)を明治14(1881)年に地元民によって発掘された鹿谷古墳とみているが誤りである〔土井2001: 79〕。
- 23) 図8-7は大阪府芝山古墳出土遺物、図8-8・9は出土地不明遺物として扱われている。
- 24) なお大市支群IV-1号墳は当初、石柵を持つことからゴーランドが調査した 3 基の石柵を持つ古墳の 1 つではないかとして注目されたが〔龍谷大学考古学研究会2011〕、石柵の下に仕切石を持つ構造であることが判明し、ゴーランドが調査した石柵を持つ古墳ではないことが明らかとなっている〔富山・笹栗2015: 41〕。

#### 参考文献(発行年順)

William Gowland 1890 Exhibition of Photographs of Megalithic Remains from Japan, *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* vol.19, p.64

William Gowland 1897 The dolmens and burial mounds in Japan, *Archaeologia* 55, pp.439-524.

William Gowland 1899 The dolmens of Japan and their builders, *Transactions and Proceedings of the Japan Society* 4,

- pp.128-183.
- William Gowland 1907 The burial mounds and dolmens of the early emperors of Japan, *Journal of the Anthropological Institute Vol. 37*, pp.10-46.
- 香川樟三郎 1888 「阿波美馬郡半田村塚穴」『東京人類学会雑誌』 3 巻26号、日本人類学会、pp.186-187
- 若林勝邦 1895 「筑後に於ける古墳の構造」『史学雑誌』 第6 編第6 号、史学会、pp.74-80
- 若林勝邦 1898 「古墳内部の構造」『考古学会雑誌』 第2 編第7号、考古学会、pp.25-28
- 若林勝邦 1900 「古代の馬具」『好古類纂』 第1 集2 号、好古社事務所、pp.1-3 (斎藤忠(編)『日本考古学史資料 集成3 明治時代二』、吉川弘文館、pp.192-193所収)
- 梅原末治 1924 「第八 鹿谷の古墳群」『南桑田郡誌』、京都府教育会南桑田郡部会、pp.289-291
- 梅原末治 1932 「大阪府下に於ける主要な古墳墓の調査(其一) 一序説」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』 第三輯、大阪府、pp.1-12
- 小林行雄 1959 「石障」『図解考古学辞典』、創元社、p.541
- 安井良三 1960 「K 葦田野町鹿谷の古墳群」『亀岡市史』 上巻、亀岡市役所、pp.100-102
- 梅原末治 1973 『考古学六十年』、平凡社
- 大塚初重 1977 「大阪府芝山古墳の出土遺物をめぐる諸問題」『考古論集』、松崎寿和先生退官記念事業会、pp.313-334
- W・ゴーランド(上田宏範(校注)・稲本忠雄(訳)) 1981 『日本古墳文化論—ゴーランド考古論集』、創元社
- 東洋文庫 1988 『東洋文庫所蔵梅原考古資料目録 日本之部・朝鮮之部・中国之部 II』
- 亀岡市文化資料館 1995 『第20回企画展 亀岡 発掘40年』
- 土井孝則 1995 「石柵古墳の研究(一) —亀岡盆地に分布する石柵古墳について」『第20回企画展 亀岡 発掘40年』、亀岡市文化資料館、pp.26-27
- 後藤和雄 1997a 「ウィリアム・ガウランドの業績(1) —発掘した一世紀前の古墳写真—」『考古学ジャーナル』 No.412、ニューサイエンス社、pp.42-46
- 後藤和雄 1997b 「ウィリアム・ガウランドの業績(2) —天皇陵の出土品など300点—」『考古学ジャーナル』 No.417、ニューサイエンス社、pp.40-45
- 後藤和雄 1997c 「ウィリアム・ガウランドの業績(3) —コレクションの全貌とその後の発見—」『考古学ジャーナル』 No.420、ニューサイエンス社、pp.38-43
- 河野一隆 2000 「48 鹿谷古墳群(遺跡番号32)」『新修亀岡市史』 資料編第1 巻、亀岡市、pp.172-175
- 土井孝則 2001 「南丹波における横穴式石室の導入について」『花園大学考古学研究論叢』、花園大学考古学研究室、pp.73-85
- 時枝 務 2001 「近代国家と考古学—「埋蔵物録」の考古学史的研究—」『東京国立博物館紀要』 第36号、東京国立博物館、pp.79-149
- ヴィクター・ハリス 2003 「ウィリアム・ガウランドの日本における足跡」『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.8-24
- ヴィクター・ハリス/後藤和雄(編) 2003 『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館
- 上田宏範(解説) 2003 「ガウランドが撮った日本の古墳」『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.25-80
- 大塚初重 2003 「W.ガウランドと古墳研究」『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.166-178
- 大塚初重(解説)/後藤和雄(撮影) 2003 「ガウランド・コレクション」『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.81-149

- 後藤和雄 2003 「ガウランド・コレクションとの出会い」『ガラウンド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.179-187
- 池上 悟 2004 「大英博物館所蔵のゴーランド・コレクションについて」『立正考古』第41号、立正大学考古学研究会、pp.7-23
- 宮川禎一 2005 「描かれた古墳出土品—明治十四年の発掘調査—」『学叢』第27号、京都国立博物館、pp.91-100
- 富山直人 2007 「京都丹波の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』、横穴式石室研究会、pp.163-174
- 富山直人 2009 「ガウランドと鹿谷古墳—大英博物館所蔵資料の調査から—」『日本考古学』第28号、日本考古学協会、pp.41-54
- 土井孝則 2010 「石棚古墳の研究(三)—ガウランドが撮影した鹿谷古墳とその所在—」『亀岡古墳研究』No.1、亀岡古墳研究会、pp.1-3
- 田口五基 2011 「鹿谷古墳群大市支群墳丘測量調査(ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)」『京都橘大学文化財調査報告 2010』、京都橘大学文学部、pp.17-20
- 龍谷大学考古学研究会 2011 「京都府亀岡市所在鹿谷古墳群大市支群分布踏査」『古代学研究』第192号、古代学研究会、pp.44-50
- 荒木瀬奈 2012 「鹿谷古墳群墳丘測量調査(ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)」『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2011』、京都橘大学文学部、pp.17-24
- 富山直人 2012 「大英博物館におけるゴーランド・コレクション 芝山古墳と鹿谷古墳」『古代学研究』第196号、古代学研究会、pp.11-12
- 荒木瀬奈 2013 「鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群墳丘測量調査(ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)」『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2012』、京都橘大学文学部、pp.16-27
- 荒木瀬奈 2014 「鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳測量調査(ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)」『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2013』、京都橘大学文学部、pp.24-34
- 諫早直人 2014 「ガウランド・コレクションの馬具」『シンポジウム 古墳研究のさきがけ・ガウランドを考える—これまでの研究成果と大英博物館所蔵資料に関する新知見—』、明治大学博物館・日英共同研究調査グループ Gowland Project、pp.13-22
- 諫早直人・片山健太郎 2014 「ゴーランド・コレクションと絵師遠藤茂平—鹿谷18号墳出土土花文付雲珠・辻金具の紹介—」『古代学研究』第204号、古代学研究会、pp.35-37
- 富山直人 2014a 「ゴーランドと黎明期の古墳研究(上)」『古代学研究』第203号、古代学研究会、pp.29-39
- 富山直人 2014b 「ゴーランドと黎明期の古墳研究(下)」『古代学研究』第204号、古代学研究会、pp.24-32
- 諫早直人 2015 「ゴーランドの持ち帰った馬具」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.12-13
- 一瀬和夫・荒木瀬奈 2015 「鹿谷村民に発掘された古墳」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.16
- 竹村亮仁 2015 「ロンドン古物学協会ゴーランド・ノートと大英博物館ゴーランド・コレクションとの比較・照合」『京都橘大学大学院研究論集』第13号、京都橘大学大学院文学研究科、pp.1-133
- 富山直人・笹栗 拓 2015 「鹿谷古墳群石室実測調査報告」『古代学研究』第206号、古代学研究会、pp.38-43
- 諫早直人 2016 「鹿谷古墳の馬具—絵図との同定作業を中心に—」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.2、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.10-13
- 諫早直人・片山健太郎・金 宇大・サイモン=ケイナー・一瀬和夫 2016 「大英博物館ゴーランド・コレクション京都府鹿谷古墳出土馬具の調査」『日本考古学協会第82回総会研究発表要旨』、日本考古学協会、pp.52-53



- 菱田哲郎（編） 2016 『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』  
News Letter No.2、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト
- 竹村亮仁 2016 「亀岡・鹿谷古墳群に関する一考察」『京都府埋蔵文化財論集』第7集、（公財）京都府文化財調査研究センター、pp.153-160
- 土屋隆史 2017 「明治期の公文書にみる鹿谷古墳出土品一発見から海外流出までの経緯―」『ゴーランド・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.3、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.13-16

## 第3章 鹿谷古墳とその出土遺物の調査

### 1. ゴーランド・コレクション調査プロジェクトによる鹿谷古墳の調査

本プロジェクトでは大英博物館ゴーランド・コレクション鹿谷古墳関連資料の調査とともに、京都府亀岡市に所在する鹿谷古墳群の測量調査を行ってきた（第1章参照）（図23）<sup>1</sup>。本章ではそれらの成果の中でも、明治14（1881）年に遺物が掘り出された鹿谷古墳およびその出土遺物に関わる調査成果について報告する。なお本章で報告する出土遺物のほとんどは、遠藤茂平やゴーランドによって鹿谷古墳出土遺物として紹介されてきたものであるが、本プロジェクトによる調査の結果、ゴーランドが鹿谷古墳出土遺物として紹介した資料の中には鹿谷古墳ではないものも含まれることが判明した。ただし、破片資料まで含めて、個々の資料を厳密に同定することは難しいため、関連遺物として併せて報告することとしたい。

### 2. 鹿谷古墳（1881年発掘墳）の名称について

明治14（1881）年に地元民によって発掘され、ゴーランドが「Rokuya Dolmen」として出土遺物とともに紹介した鹿谷古墳（ここではひとまず1881年発掘墳と呼ぶ）については、大正13（1924）年に梅原末治によって消滅したと報告されて以来、近年「再発見」されるに至る過程で複数の名称が用いられ、若干の混乱を招いている。混乱は1881年発掘墳のみならず鹿谷古墳群全体に及んでいるが、ここでは1881年発掘墳に焦点を絞り、その経緯を整理しておく。

表4はこれまで1881年発掘墳がどのように呼ばれてきたかをまとめたものである。戦前は個別の古墳名がなく、近年では鹿谷18号墳という呼称が定着していることがわかる。ここで注目したいのは18号墳などの名称が、研究者による学術的な動きの中ではなく、戦後の埋蔵文化財行政の中で行政的につけられてきたことである。その契機となったのは、1986年の京都府教育委員会、1987年の亀岡市教育委員会の遺跡地図において〔京都府教育委員会1986、亀岡市教育委員会1987〕、1881年発掘墳が「位置不詳」の18号墳として一覧表に記載されたことである。

鹿谷18号墳という名称は、2000年に刊行された『新修亀岡市史』資料編第1巻においても用いられている〔亀岡市2000、河野2000〕。しかしながら富山直人〔2009〕が指摘しているように古墳番号について新たな混乱が生じている。というのも「消滅」とされた18～20号墳は〔河野2000：表4〕に記載される石室の計測数値をみる限り、ゴーランドが調査した表3の105～107の古墳、ゴーランド文書資料のNo.1・3・6の石室にそれぞれ該当し、1881年発掘墳とは別の古墳であるにも関わらず<sup>2</sup>、表3の105の古墳、すなわちゴーランド文書資料のMidozuka古墳（No.1の石室）が18号墳に比定され、そこから金銅装馬具をはじめとする様々な副葬品が出土したようになってしまっているのである。『新修亀岡市史』資料編第1巻の付録である『亀岡市の遺跡』に掲げられた「亀岡市の遺跡一覧」の表も、18号墳については石室の計測数値が載っておらず断定はできないが、19号墳、20号墳は計測数値からみてゴーランドが調査した表3の106・107の古墳（ゴーランド文書資料のNo.3・6の石室）にあたる点は同じである〔亀岡市2000〕。同様の誤りは、2002年の『京都府遺跡地図〔第3版〕』にも認められる〔京都府教育委員会2002〕。

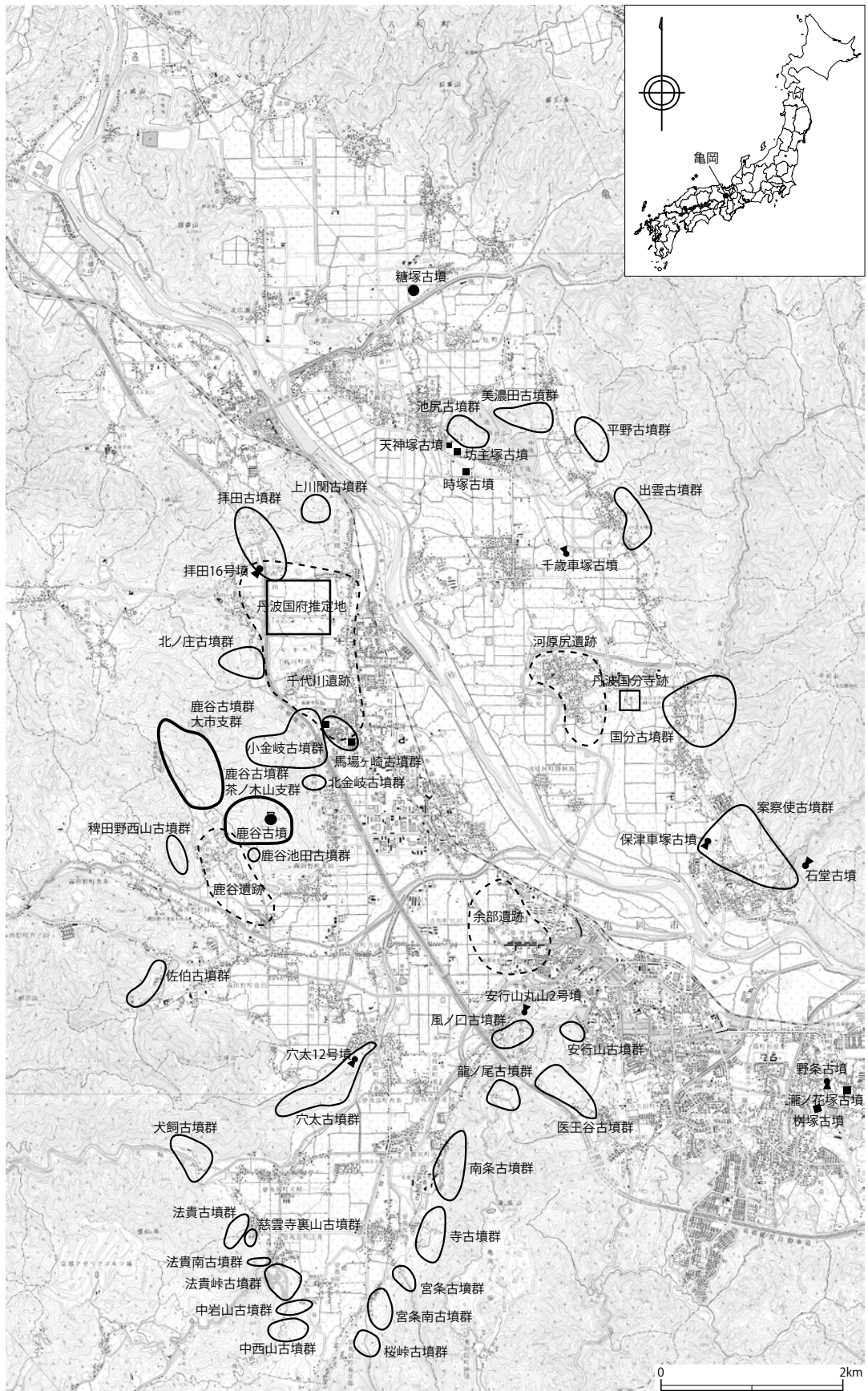


図 23 鹿谷古墳群の位置

2003年、『ガウランド 日本考古学の父』の刊行後、ゴーランド文書資料や京都国立博物館所蔵絵図などの検討を通じて、消滅したと考えられてきた1881年発掘墳が現存することが明らかとなった後も混乱は続く。まず富山直人は1881年発掘墳を、1986・1987年時点で「位置不詳」とされた鹿谷18号墳であるとする〔富山2009〕。これに対し土井孝則は、「再発見」した1881年発掘墳が実は京都府教育委員会が1972年に作成した遺跡地図に鹿谷5号墳<sup>3</sup>として記載されていることを重視し〔京都府教育委員会1972〕、鹿谷5号墳と呼ぶことを提唱する〔土井2010〕。また本プロジェクトによる鹿谷古墳の測量報告においては、龍谷大学考古学研究会による鹿谷古墳群大市支群の設定を受け、新たに茶ノ木山支群を設定し、1881年発掘墳を茶ノ木山支群18号墳と呼んできたところである〔荒木2013・2014、一瀬・荒木2015〕。

表4 鹿谷古墳（1881年発掘墳）の主な名称

	時 期	名 称	備 考
遠藤茂平	1881	茶ノ木山ノ峯ニアル古墳	
Gowland	1897・1899など	Rokuya Dolmen	
若林勝邦	1900	鹿谷村の古墳	
梅原末治	1924		消滅
京都府教育委員会	1986	鹿谷18号墳	位置不詳
亀岡市教育委員会	1987	鹿谷18号墳	位置不詳
河野一隆	2000	鹿谷18号墳	消滅。Midozukaと混同
亀岡市	2000	鹿谷18号墳	消滅
京都府教育委員会	2002	鹿谷18号墳	消滅。Midozukaと混同
ハリス・後藤	2003	鹿谷古墳	
富山直人	2007・2009など	鹿谷18号墳	1881年発掘墳を再発見
土井孝則	2010	鹿谷5号墳	鹿谷5号墳が1881年発掘墳であることを指摘
荒木瀬奈	2013・2014など	鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳	本プロジェクトによる測量
京都府・市町村共同統合型地理情報システム (GIS)		鹿谷15号墳	2019年1月15日現在

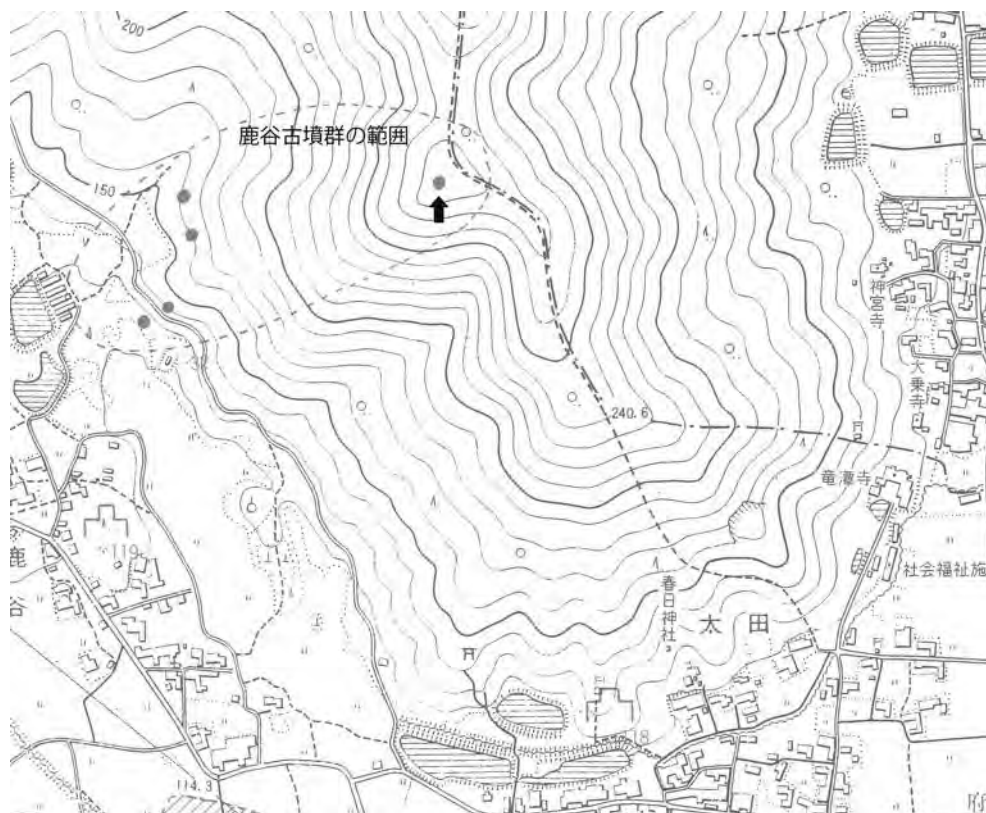


図24 鹿谷古墳の位置（1972年時点）（S=1/10000）（〔京都府教委1972〕に加筆）

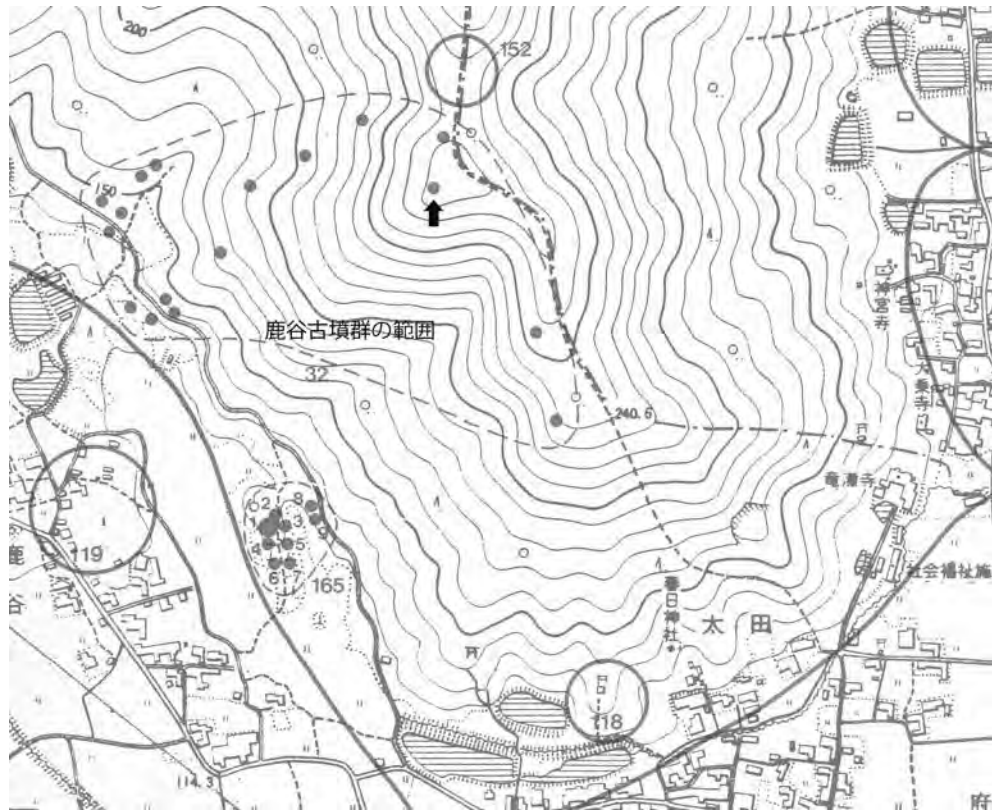


図25 鹿谷古墳の位置（1986年時点）（S=1/10000）（〔京都府教委1986〕に加筆）

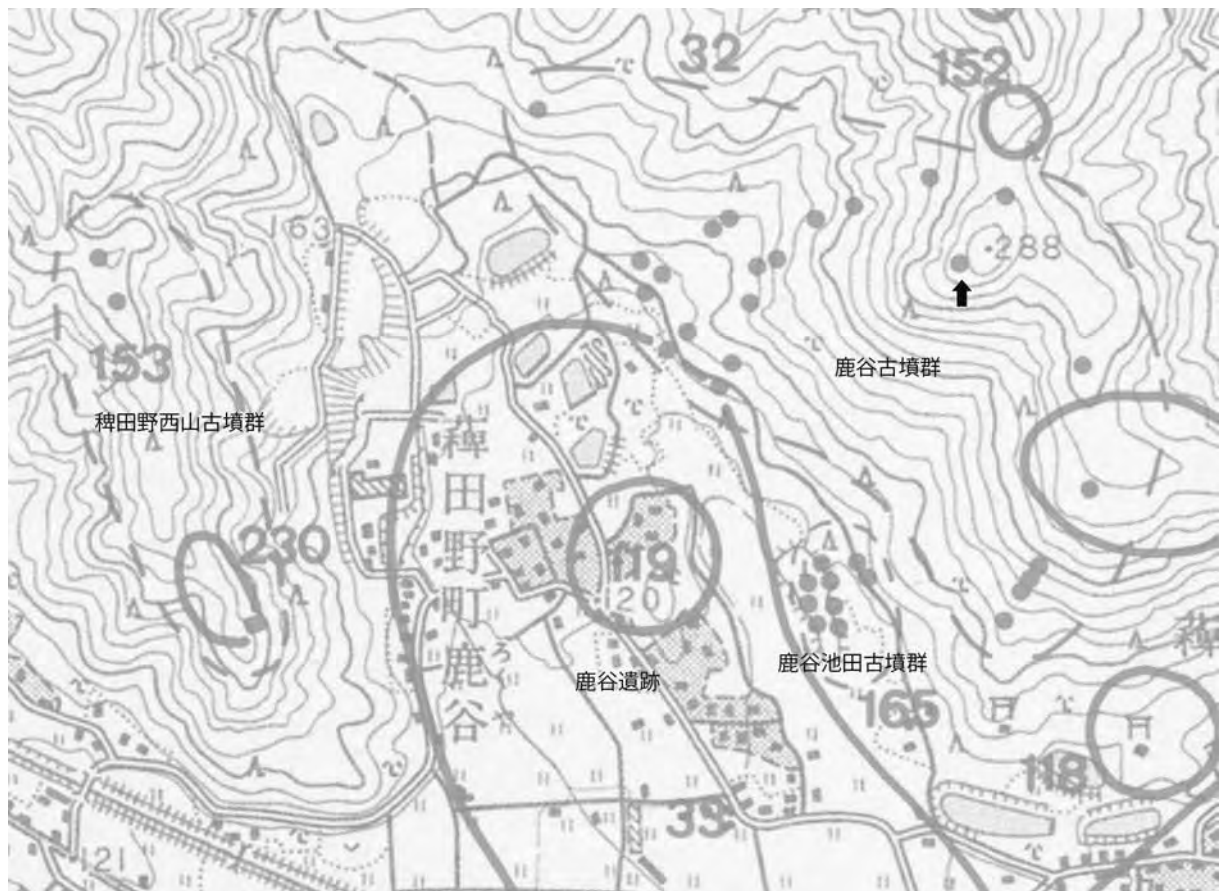


図26 鹿谷古墳の位置（2002年時点）（S=1/10000）（〔京都府教委2002〕に加筆）

土井が指摘するように1881年発掘墳は、結果的には1972年時点から一貫して遺跡地図に載っている。問題は、この古墳が何号墳かである。ここで改めてこれまでに刊行された遺跡地図をみると、まず1972年時点で、初めて鹿谷古墳群の範囲が地図上に記され、1～5号墳とされた5基の円墳とともに埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として掲載された〔京都府教育委員会1972〕。これらのうち山頂にある一基（5号墳）は、近年「再発見」された1881年発掘墳とまさに同じ位置にあり、土井が指摘するように同一古墳とみてよい（図24）。

その後、1986・1987年時点の遺跡地図において、改めて鹿谷古墳群の範囲と17基の古墳の位置が示される（図25）〔京都府教育委員会1986、亀岡市教育委員会1987〕。1972年時点の5号墳に相当する古墳も存在するが、残念ながらこれらの地図にも古墳番号が振られておらず、1972年の遺跡地図にあった2基の古墳のドットが無くなっていることもあって、新旧の古墳番号の対応関係は明らかでない。2000・2002年時点の遺跡地図をみると、1986・1987年時点で18基（うち1基は位置不詳）であった鹿谷古墳群は27基（うち3基は消滅）に増えている（図26）。前者の地図にはうち15基の、後者の地図には全24基のドットが落ちているが、地図には番号が振られておらず、やはり表に掲げられた各古墳を同定することはできない。最後に最新の状況を反映しているとみられる京都府・市町村共同統合型地理情報システム（GIS）の遺跡マップで鹿谷古墳群をみると、古墳群の範囲は若干異なるものの、2002年時点とおおむね同じ位置に古墳のドットが落ちている。またドットをクリックすると号数が記載されており、これによって1881年発掘墳は、現在、15号墳として登録されていることがわかる（図27）<sup>4</sup>。

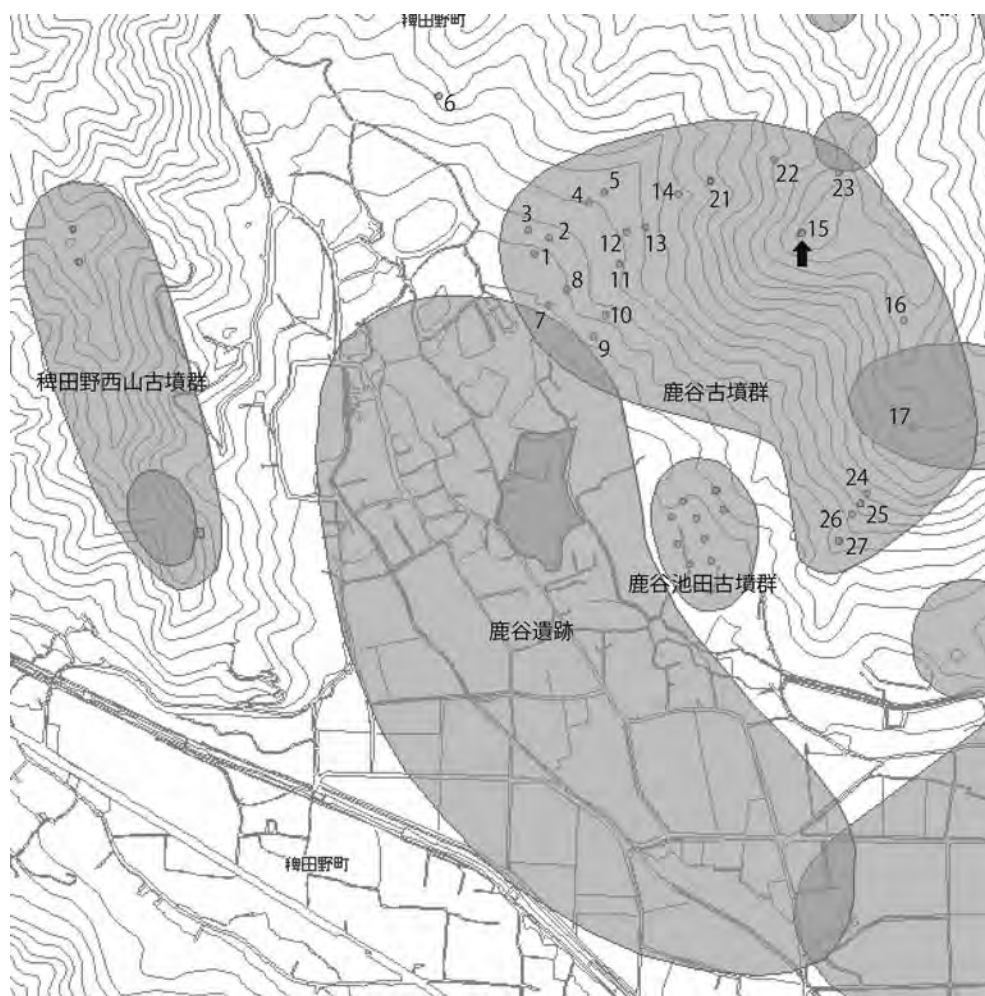


図27 鹿谷古墳の位置（2019年現在）（縮尺不同）（〔京都府遺跡マップ〕に加筆）

1986・1987年時点から確認されている15号墳周辺の古墳に18～20号墳以降の数字が振られていることから、2000年以前に古墳群の分布調査が行われ、遅くとも2002年までには古墳番号の振り直しが行われたとみられる。

このように位置不詳、あるいは消滅したと考えられてきた1881年発掘墳が、1972年時点のみならず、鹿谷18号墳が設定された1986・1987年以降も一貫して遺跡地図に載っている以上、これを18号墳と呼ぶことは適切ではないだろう。となると1972年時点の5号墳よりは、最新の遺跡地図に記載されている15号墳と呼ぶべきかもしれないが、一方で鹿谷古墳群の正確な古墳数についてはまだ把握されておらず、支群設定の問題も含め、課題が山積しているようにもみえる。鹿谷古墳出土遺物が大英博物館に所蔵されていることを鑑みれば、いたずらに番号に拘泥することは新たな混乱を引き起こすもととなりうる。

以上をふまえ、本報告書では1881年発掘墳をゴーランドの「Rokuya Dolmen」とも通じる「鹿谷古墳」と呼びたい。(諫早)

### 3. 墳 丘

本プロジェクトの一環で、富山直人らによって「再発見」された鹿谷古墳の墳丘測量調査を行った。調査は2012年2月から2013年3月にかけて断続的に実施し、その成果は『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2013』において報告している〔荒木2014〕。調査の詳細については前稿に譲り、ここでは概要のみを示す。

なお、鹿谷古墳はこれまで円墳であると考えられてきたが〔河野2000など〕、今回の測量調査の結果、北側の地形の状況からみて前方後円墳あるいは造出付円墳となる可能性がある。墳丘裾周囲の崩壊が著しく、測量調査のみでは墳形を確定するには至らなかったが、本報告ではこれまで円墳とされてきた部

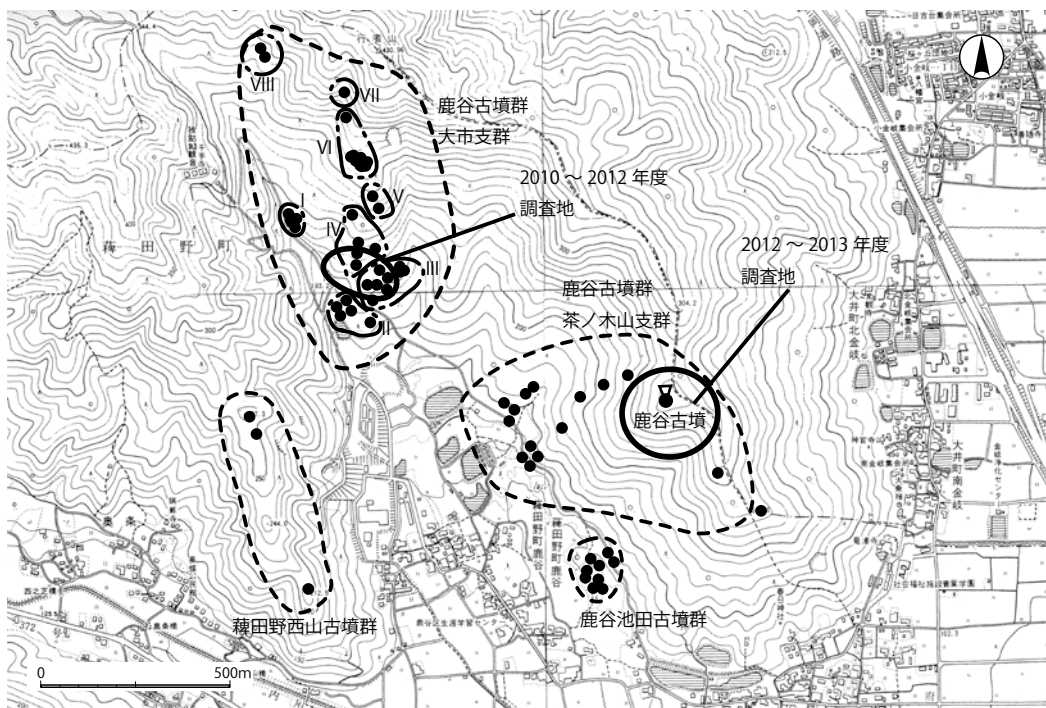


図28 行者山南麓における古墳の分布 (S=1/20000)

分を円丘部、前方部あるいは造出の可能性のある部分を突出部と表記する。

### (1) 立地

鹿谷古墳は京都府亀岡市葎田野町に所在する。亀岡盆地中西部、大堰川（保津川・桂川）西岸の行者山（標高約430m）南麓に延びる丘陵尾根の頂部（標高281.8m）に位置する（図28・29）<sup>5</sup>。北からの尾根がちょうど東に曲がる角の部分に位置し、南側に鹿谷の平野部を見渡すことができる。この平野部には鹿谷古墳と時期の重複する可能性のある集落遺跡である鹿谷遺跡が存在する。古墳の立地する丘陵の南側平野には、亀岡盆地から西丹波・篠山盆地へ抜けるルートが通り、このルートを意識した立地と考えられる。

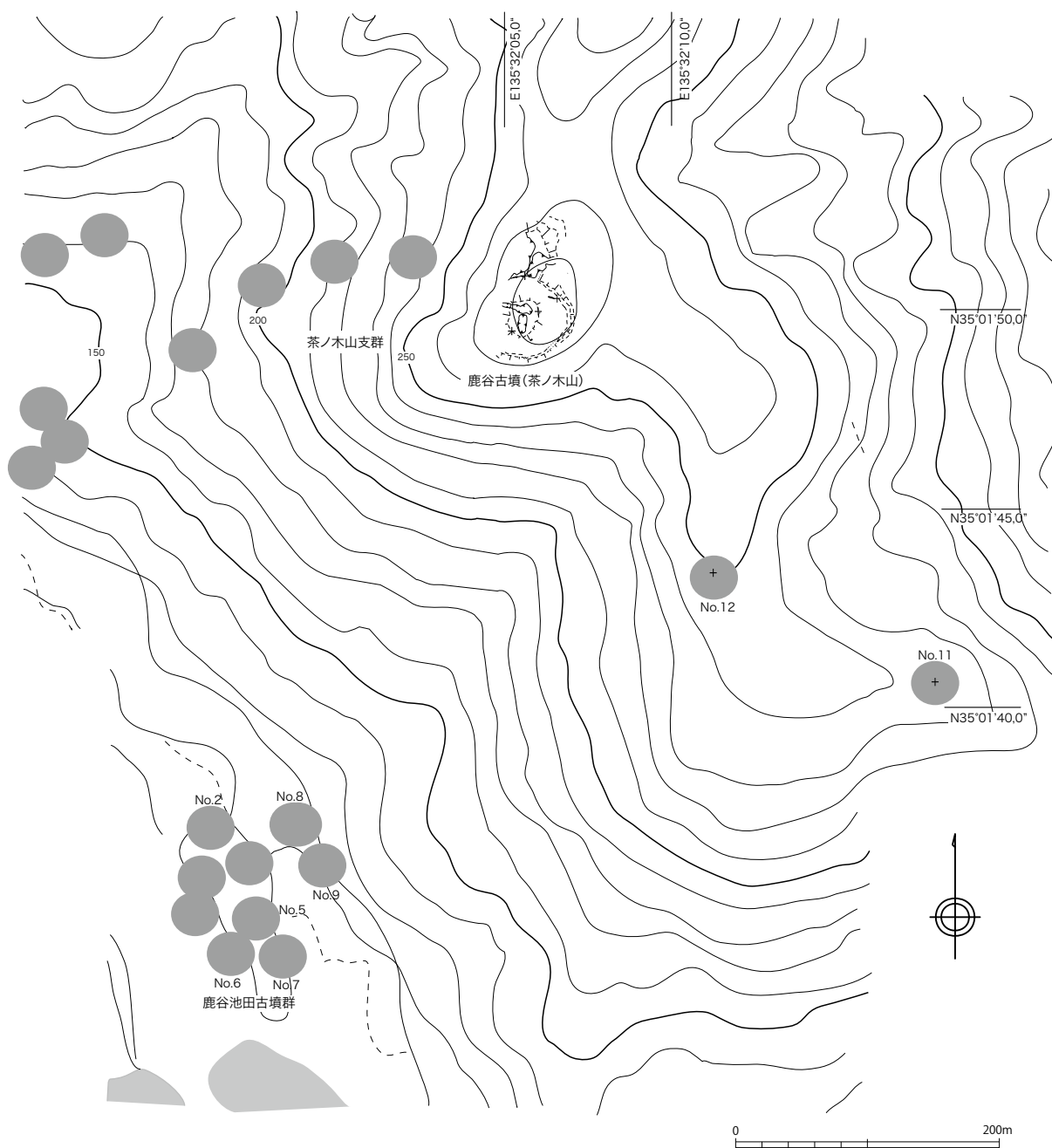


図 29 鹿谷古墳とその周辺における古墳の分布 (S=1/5000)



## (2) 墳 丘

円丘部は、南で T.P.274.0m 付近、北東で T.P.277.0m 付近、南西で T.P.277.75m 付近をそれぞれ墳丘裾の傾斜変換点と考えると径 38m に復元することができる (図 30、図版 29 上)。ただしコンターのふくらみから南部と南東部の墳丘裾付近の盛土は流出している可能性がある。高さは最も高い南東部で 8m、ほかの部分で 5～6m となる。頂部の平坦面は径 13m である。頂部には石室陥没坑と考えられる窪み (図版 29 下) と、北東方向から南西方向に延びる不整形の溝がある。盗掘による陥没と考えられる窪みは、断面 U 字形で長軸 7m、短軸 2.5～3m となる。不整形の溝は長さ 12m、北東最大幅 4m、南西最大幅 2m で、北東側 5m は楕円形状に陥没する。円丘部西側の墳丘裾付近は崖となっている。また、後述するように 2 重目の下段テラスが入る可能性のある T.P.277.0～278.25m 付近から傾斜が変わり、特に北・東側の墳丘裾付近はほかの部分より急傾斜になっている。この影響から、北西-南東方向の円丘部断面 (e-f ライン) で確認できるように、北・東側からみると円丘部は腰高な印象を受ける。

突出部は、北側に位置する幅 3～4m の掘割の手前まで測量した。茶ノ木山周辺には、土塁などの城郭関連遺構が所々に分布しており、この掘割も尾根筋の南方で顕著にみられる中世の城郭関連遺構の一部である可能性もある。また、墳形の判断において問題となる円丘部との境界付近のくびれ部に相当する可能性のある部分は、現状、東西両側が大きく削平・崩落しており、旧状を留めると考えられる部分が幅 0.2～0.3m ほどかろうじて残っている。

以上をふまえて墳丘各部の特徴を整理する。まず北部については T.P.275.0m 付近に傾斜変換点があり、この付近を墳丘裾とする。くびれ部にあたる円丘部と突出部の境界については不明瞭であるが、T.P.277.5m 付近のコンターが北に向かって折れ曲がることから、これより南部を突出部とみて計測すると、長さ 16m、残存部の最大幅 8m、高さ 2m となる。円丘部の頂部とくびれ部にあたる部分の頂部との高低差は 4.5m である。

## (3) 外表施設と内部構造

## ① 外表施設

円丘部には葺石・埴輪・周濠 (掘割) はみられなかったが、2 重のテラスが存在する。上方 1 重目の中段テラスは墳頂平坦面の下部にあたる T.P.279～280m 付近をめぐる。幅は 3m であるが東部や北西部では不明瞭になる。このテラスと石室陥没坑の底のレベルは一致する可能性がある。下方 2 重目の下段テラスは墳丘裾より 1m 上部にあたる T.P.277.0～278.75m 付近をめぐると考えられる。幅は 2m を測るが、北西部と南部では不明瞭になり全周しない可能性もある。このテラスより下部斜面は北と東で急傾斜になっている。また 2 重目の下段テラスの北部と東部の下部斜面に大きさ 1m 未満の石材が散乱し、これらが並ぶ箇所もみられ、石列のような施設となる可能性がある。場所により異なるが各部分の高低差はそれぞれ墳頂平坦面と中段テラスは 0.5m、中段テラスと下段テラスは 2m、下段テラスと墳丘裾は 1～2m である。1 重目と 2 重目の間、すなわち墳丘中段の距離がほかの部分より広い。

突出部には、葺石・埴輪はみられないが、くびれ部付近の西側の削平箇所には大きさ 1m 未満の石材が散乱する。頂部は T.P.278m 前後、円丘部 2 重目の下段テラスにとりつく。それより下方のテラスも明確には確認できないが、北側の前面法面の T.P.275.0～275.5m 付近がやや平坦になり、この部分にテラスが存在する可能性はある。また北側に掘割があるが、中世の城郭関連遺構の可能性もある。

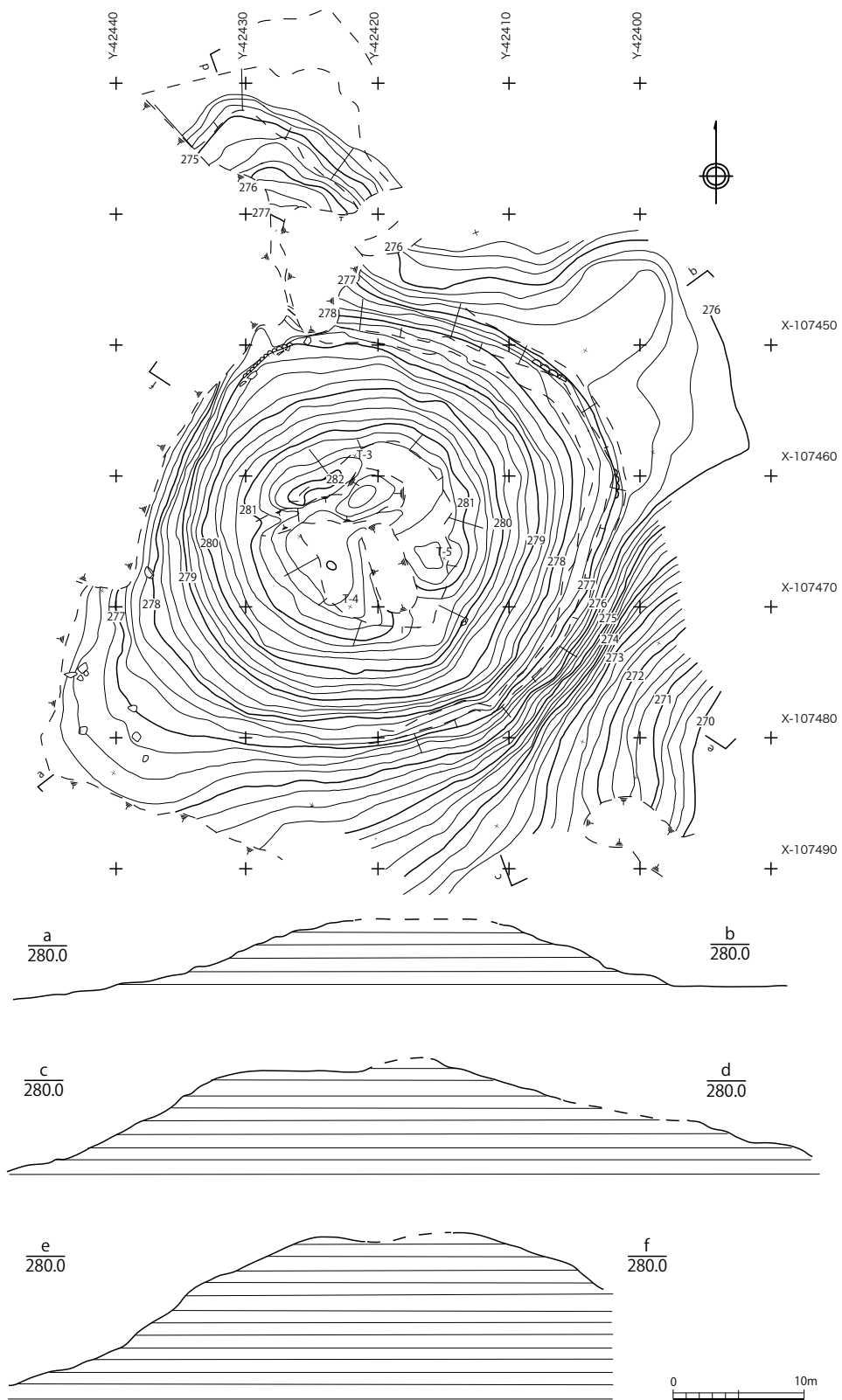


图 30 鹿谷古墳填丘測量図 (S=1/500)

## ②内部構造

円丘部頂部の陥没坑の状態から南東方向に開口する横穴式石室であると考えが、石室構築材などは露出してない。また開口方向の下部の T.P.276.0～280.5m 付近の墳丘は南東方向に向かってやや膨らんでおり、この部分に前庭部や墓道が存在する可能性がある。突出部には、埋葬施設の痕跡が確認できなかった。

## (4) 墳形について

現時点で本古墳が前方後円墳や造出付円墳である可能性の根拠を整理すると次の通りである(図30)。

1. 突出部の北側に切断痕の可能性ある掘割がみられること。
2. 円丘部北部の T.P.276.25～277.5m 付近のコンターが北に曲がりくびれ部を形成しそうなこと。
3. 円丘部断面 c-d ラインをみると、突出部裾のレベル(T.P.275m 付近)と、反対側の円丘部南側の墳丘裾のレベル(T.P.275～276m 付近)がほぼ一致しそうな状態であり、円丘部の墳丘裾に注目してみると、円形に回らずに北西側で突出しそうなこと。
4. コンターの変化状況から、円丘部頂上から突出部へと向かう方向の円丘部の墳丘の傾斜がほかの部分に比べて緩やかであり、前方後円墳にみられるような前方部頂と後円部頂との間のスロープ状の施設を形成しそうなこと。

これらの中で、まず1については、上述のように城郭関連遺構の可能性があるので現時点では根拠として不十分である。次に2については、円墳であるならばこの部分に切断痕が入る可能性が高いので、根拠の1つとして検討してもよさそうだが、削平により明確なくびれ部がみられないので、確定することは難しい。3も墳丘裾が確定したわけではないので確定するだけの根拠とはならない。最後の4についても現時点では不明瞭である。以上のように、墳丘測量調査のみでは前方後円墳や造出付円墳である可能性を残しつつも、墳形の最終判断には至らなかった。

仮に前方後円墳あるいは造出付円墳であるとした場合、墳長は55mになる。主軸はN-19°-Wで、北西方向に突出部を向ける。また、円丘部の陥没坑の状態から横穴式石室の主軸は墳丘の主軸とほぼ一致し、突出部と反対の南東方向に開口すると考えられる。

## (5) 絵図との比較検討

本測量調査結果を京都国立博物館所蔵絵図(京B-3)(図版1・2)に描かれた古墳(1881年発掘墳)と比較し、類似点と相違点を明らかにする。

## ①絵図との類似点

- ・墳丘については3段築成とみられ、絵図にも2重のテラスが描かれている。ゴーランドは2段からなる整った円墳としているが、上・中段を1段とみれば、2段築成とみる余地も残される。
- ・絵図で墳丘南部の「甲」「乙」と書かれた箇所の石室らしき部分が、円丘部頂部の石室の陥没坑の位置とほぼ一致する。
- ・絵図の石室の北にある西側に向かって傾斜する溝と、石室陥没坑の北の溝状の落ち込みの形状が類似する。
- ・絵図の北側半分にめぐる「此筋周囲壇ノ如ク少シ平面アリ」と書かれた部分と、墳丘北側の T.P.279.0～280.0m 付近のテラスと推定される傾斜が緩やかな部分がほぼ一致する。ただし、その下段にある「此

筋東北二巡リテ堀ノ埋マリタル如ク凹ナリ」と書かれた箇所と類似する部分は確認できなかった。

・絵図の東側の墳丘裾付近に「此処石垣ノ如キ石見エル」と書かれた石垣状の箇所と、円丘部東側墳丘裾付近の石列状施設が一致する。ただし不明瞭であるが、現状では石垣のように複数の石段があるわけではなく、1段の石列が残存している程度である。

## ②絵図との相違点

・絵図の墳頂部には、絵図右下の説明に「丙ヨリ庚ニ至ルモノ五箇ヲ周リニ配列スルフ梅花形ヲ為ス」とあるように、北から時計回りに「戊」・「丁」・「丙」・「庚」・「己」と書かれた5つの盛土が石室を囲むように梅花形に配置されている様子が認められるが、現状の円丘部頂部にはこれらに該当するような盛土状の痕跡は認められない。これらは発掘時の上げ土で、その後流出してしまった可能性がある。

・今回の測量調査では円丘部の北西方向に存在する前方部あるいは造出の可能性のある突出部状の地形部分について測量・検討したが、絵図の古墳は円墳として描かれており、この部分については、まったく描かれていない。

なお京都国立博物館所蔵絵図の中には鹿谷古墳群の分布図があり(京B-2)(図版3上)、ゴーランド文書資料の中にも同じような分布図がある(英A1-1、B3)(図版9上・3下)。ゴーランドがアストンに宛てた手紙に見える「田んぼより少し高い荒野」に散らばる「13基からなる古墳」は、鹿谷古墳の南西方に位置する鹿谷池田古墳群のことであろうか。そして、「村の一部をとり囲む丘陵の低い麓のあちこち」にある「30から50基というかなりの数の古墳」とは、茶ノ木山支群や大市支群の低いところに位置するものことであろう。肝心の絵図に描かれた古墳は「茶ノ木山という丘の山頂」にあるという〔ハリス2003:15〕。以上の検討結果を総合すると今回測量調査を行った古墳は、絵図に描かれた鹿谷古墳(1881年発掘墳)とみて大過ないだろう。

## (6) 小 結

今回の測量調査によって得られた墳丘に関わる基礎データは次の通りである。

**円丘部** 頂部の標高は281.8mである。径38.0m、高さ5～8m、頂部平坦面径13.0mとなる。墳丘は3段築成の可能性もある。また、北・東側の墳丘裾付近に石列状施設が断片的に残存する。頂部に石室陥没坑が1箇所存在し、陥没坑の状況から南東方向に開口する横穴式石室を持つと考えられる。

**突出部** 円丘部の北西側に接しており、北西－南東に長軸を向ける。くびれ部に該当する可能性のある部分の東西の地形が削平・崩落しており残存状況は悪い。頂部の標高は277.0mである。長さ16.0m、最大幅8.0m、高さ2.0mとなる。不明瞭であるが前面側にテラスが1本入る可能性がある。埋葬施設の痕跡はみられない。北側に時期不明の掘割が存在する。

**前方後円墳(造出付円墳)である場合** 墳長55.0m、円丘部と突出部の高低差は4.5mとなる。主軸はN－19°－Wであり北西方向に前方部(造出)を向ける。円丘部頂部の陥没坑の状況から、横穴式石室と墳丘の主軸は一致する可能性がある。

絵図との比較検討を行った結果、相違点もあるが、確実な類似点が複数存在することから、本古墳は絵図に描かれた鹿谷古墳(1881年発掘墳)と判断される。(一瀬和夫)

## 4. 横穴式石室の構造と出土状況の復元

### (1) 石室構造

資料 鹿谷古墳の横穴式石室については、明治14(1881)年に半井真澄の「古墳見分日記」作成の際に遠藤茂平によって絵図が描かれ、副葬品の出土位置についても記された(京B-3)(図版2下)。しかし、絵図は鹿谷古墳の石室そのものをみて描いたのではなく、その近くの類似した形態を持つ横穴式石室を参考に聞き取りを行いながら描かれたとされている(第2章第1節参照)。さらに、絵図正本はいまだ未発見であり、さまざまな経緯で作られた4種類の写しが確認されているのみである。4種類の図面は京都国立博物館所蔵絵図〔宮川2005:C〕(図31-1)(京B-3)、絵図正本をもとに描いたとみられるゴーランド文書資料にみえる石室図(図31-2)(英A1-3)(第2章5節参照)、若林勝邦の論文に掲載された石室図〔若林1898〕(図31-3)、梅原末治の論文に掲載された石室図〔梅原1924〕(図31-4)である。石室の図面は基本的な構図は共通するものの、細部表現などには違いがある。また、大きさや縮尺を示すものがない。

京都国立博物館所蔵絵図(京B-3)は絵図正本に近い資料であると考えられるが、石室内の説明や副葬品の出土位置を示す「十干」や「いろは」は表記のみで注記を欠く。一方、ゴーランド文書資料の石室にはそれらが大きく小文字のアルファベットで示され(英A1-3)、記号の説明がある(英A1-4・5)(図版9下右・10下左)。ここでは京都国立博物館所蔵絵図を中心にゴーランド文書資料の記述を含め、各石室図の類似点や相違点に留意しながら、石室の形態や構造・規模について復元を試みる。

**基本形態・規模** まずは、京都国立博物館所蔵絵図の石室図を中心に、ゴーランド文書資料の記述を参考にしながら石室の形態についてまとめる。

平面長方形で平天井の玄室を持ち、石柵と仕切石を備える両袖式の横穴式石室で、南側に開口する。玄室は大型の崩落石(チ)(h)によって2分されているため(j・k)、発掘は玄室天井部の2ヶ所(甲・乙)(A・B)からなされている。羨道は土砂(i)によって埋もれているため、規模・構造は不明である。奥壁には石柵を備え(イ)(a)、その先端部直下に奥壁に沿って仕切石(ロ)(b)を設ける。奥壁は石柵を含めると4段からなる。平面図をみると、基底石であるのか石柵上部を表現しているのかは不明であるが、1つの段には同規模の石材3石とそれよりも小型の石材1石の描写がなされている。石柵は扁平な石材を用い、基底石から数えて3段目に設置されている。前壁は2段からなり、ほぼ垂直となっている。側壁の石積みは描かれていないが、石柵下面と前壁下面のレベルはほぼ同じに表現されている。玄室天井部は発掘坑の部分を考慮すると、3~4石程度の大きな板石が架けられていたようである。床面は仕切石部分を除いて礫敷がなされ(ヌ)(m)、その上に扁平石材による敷石がなされている(リ)(l)。仕切石は1枚の板石からなるとみられ、石柵先端の直下に設置されている。その高さは奥壁基底石の上面の高さとほぼ一致するように描かれている。仕切石の位置は、奥壁から1石分ほど開口部側にある。

規模を示す数値や縮尺は記されていないが、仕切石に関しては「10 inches high」という記述がある〔Gowland1897:32、ゴーランド1981:51〕(英A3-3)。そのほかの記載はなく、また図面の精度も不明であるが、仮に京都国立博物館所蔵絵図の玄室奥壁の幅を1とすると、玄室長1.65、玄室高1.05、玄門部幅0.42、玄門部高0.63という比率となり、梅原図面の玄室奥壁の幅を1とすると、玄室長1.54、玄室高0.92、玄門部幅0.52、玄門部高0.44という比率となる。

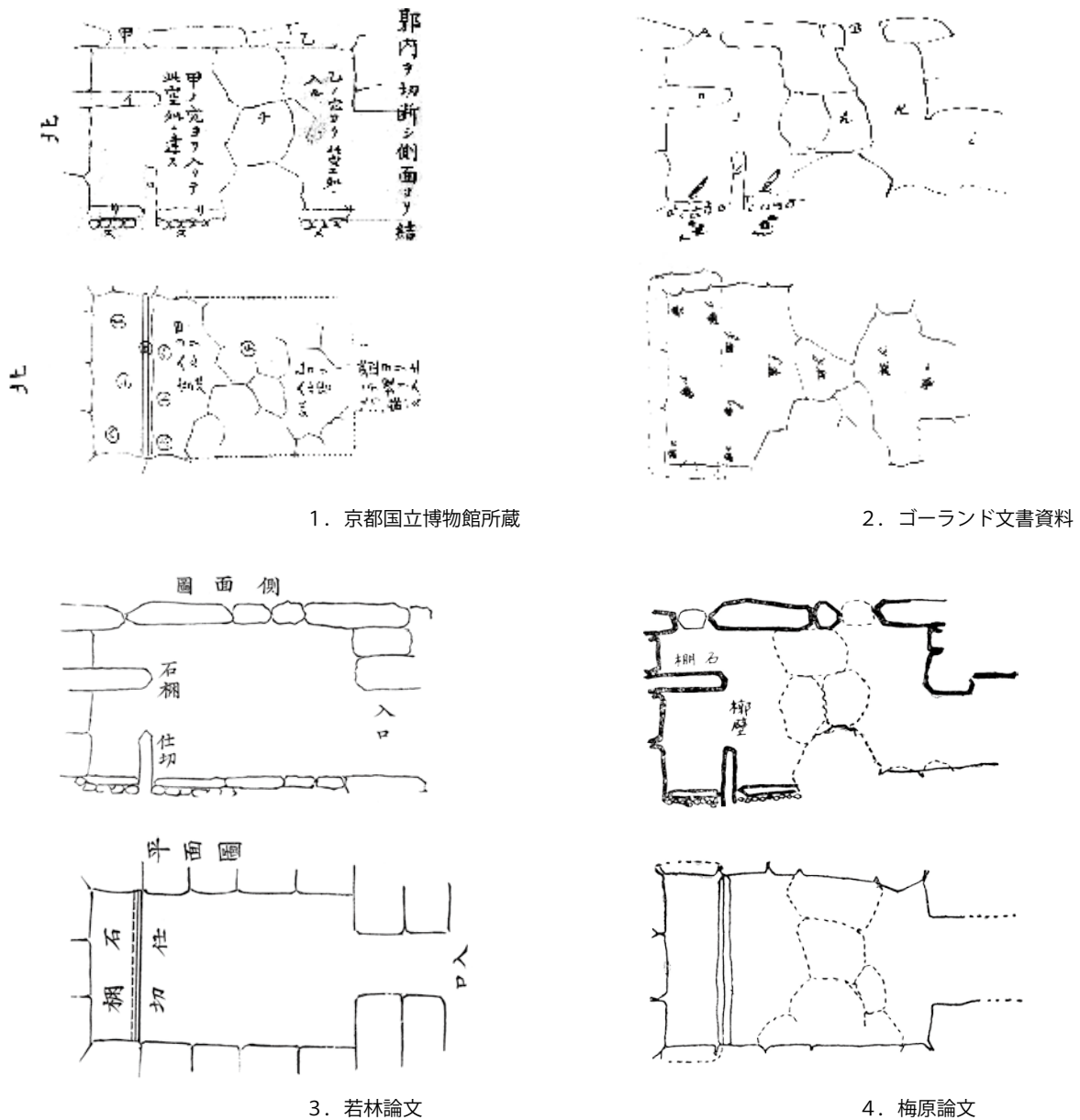
**図表現の相違** 次に、京都国立博物館所蔵絵図(図31-1)(京B-3)とそのほかの石室図の相違点を整

理する。

ゴーランド文書資料の石室図(図31-2)(英A1-3)では、石室に落ち込んだ土石の表現が異なる。平面図では石棚の範囲を破線で表記し、奥壁と両側壁に入り込むように描いている。仕切石の表現はない。また、奥壁は3石となっている。立面図では玄門付近の玄室床面が描かれていない。

若林論文の石室図(図31-3)では、玄室天井部の発掘坑や石室に落ち込んだ土石などの表現を欠き、また石材の厚みをほぼ均等に表現することなどから、ある程度復元的に改変を加えて作図したものと考えられる。平面図では玄室側壁や羨道側壁の石の並びが表現されており、奥壁は3石となっている。立面図では玄門付近の玄室床面の礫敷の表現がない。また、天井石の並びが異なる。

梅原論文の石室図(図31-4)では、石室に落ち込んだ土石の表現が異なる。平面図では石棚の両側壁に接する部分を破線で表記している。また玄室側壁の石の並びが表現されている。立面図では羨道天井石を兼ねる前壁下段が上段の石材よりも厚みがあり、前壁下段は隣接する羨道天井石よりも低く描かれている。玄門部付近の玄室床面の表現はない。なお、玄室天井部の発掘坑や石室に落ち込んだ土石など



1. 京都国立博物館所蔵

2. ゴーランド文書資料

3. 若林論文

4. 梅原論文

図31 鹿谷古墳横穴式石室図 (縮尺不同)

の表現や、平面図に石柵が描かれていること、玄門部付近の玄室床面の表現がみられないことなどについてはゴーランド文書資料の石室図と近似する。

以上のことから鹿谷古墳の横穴式石室の形態は次のようにまとめられる。

- ・両袖式の横穴式石室で南側に開口する。
- ・玄室は平面長方形で平天井を持つ。
- ・奥壁に石柵を備え、その先端部直下に奥壁に並行して仕切石を設ける。
- ・奥壁は石柵を含めると4段からなり、1つの段には3石ほどを配していたとみられる。
- ・石柵は基底石から数えて3段目に設置されている。
- ・石柵下面と前壁下面のレベルはほぼ同じである。
- ・前壁は2段で構成され、ほぼ垂直に積んでいる。
- ・玄室天井部は3～4石程度の大きな板石が架けられていたとみられる。
- ・床面は仕切石部分を除いて礫敷がなされ、その上に扁平石材による敷石がなされている。
- ・仕切石は1枚の板石からなり、奥壁から1石分ほど開口部側へ設置されている。
- ・仕切石の上端は奥壁基底石の上面の高さとはほぼ揃う。

(奥田)

## (2) 出土状況の復元

副葬品の出土状況については、若林論文〔若林1898〕や梅原論文〔梅原1924〕に記述がみられるほか<sup>6</sup>、京都国立博物館所蔵絵図(京B-3)の石室図に記載された記号が手がかりとなると考えられてきたが、絵図にはその記号についての説明がなく、国内所蔵文書資料の中にも具体的な記述は見いだせなかった。

これに対し、ゴーランド文書資料の「鹿谷古墳の検討メモ」の石室図(英A1-3)には京都国立博物館所蔵絵図の記号と対応するように副葬品の出土位置を示す記号がアルファベットで記されており、その記号についての記述もある(英A1-4・5)。また、「鹿谷古墳・鹿谷古墳群の検討メモ」(英A2)には鹿谷古墳群調査時の聞き取りや、「古墳見分日記」や絵図などを参考に書いたとみられる副葬品のリストと出土位置のメモがある(英A2-1・2)<sup>7</sup>。このほかにも、1897年論文において鹿谷古墳の副葬品の出土位置について記述している〔Gowland1897〕。ここでは新出資料であるゴーランド文書資料を中心に、副葬品の出土位置について復元を試みる。

「鹿谷古墳の検討メモ」(英A1)では、副葬品は玄室奥壁側の石柵の上(c)、石柵の下(d)、仕切石の前(e・g・f)から出土している(図20)(英A1-3・4)。石柵の上には西端の奥に轡が置かれ(c)、石柵の下には鉄刀や金銅製品片、玉類などがある(d)。石柵の西端には鉄刀が立て掛けられており(e)、仕切石の開口部側の前には台付子持壺がそれぞれ置かれている(g・f)。若林論文、梅原論文とほぼ内容が一致するが、石柵の下から出土した遺物について、前者は「刀、鍍金せし銅片、珠の碎片」、後者は「直刀及び金銅珠片等」としている。金銅製品片の中には絵図からみて、双魚佩が含まれていたとみられる。

「鹿谷古墳・鹿谷古墳群の検討メモ」(英A2)では「鹿谷古墳の検討メモ」(英A1)と比べると遺物の個数が記されており、出土状況も若干詳しいものとなっている。それによると、石柵の上には轡以外にも馬具類が置かれており、石柵の下には4～5点のガラス玉が西端から出土しているようである。鉄刀に関する記述は、英A1および若林論文、梅原論文と異なり、この資料では鉄刀は2本とも石柵に立てかけられており、その間に台付子持壺があると書かれている(英A2-1・2)。

ゴーランド1897年論文では、石柵の上の馬具の個数や、石柵の下に人骨についての記述がある。論文によると、副葬品の出土は仕切石の奥壁側の空間で床面の丸石の層の上に人骨、小玉、そのほかの個人用装飾品の遺物があり〔Gowland1897:32、ゴーランド1981:51〕、2点の轡は石柵の上でみづかり

〔Gowland1897：49、ゴーランド1981：74-75〕、6点の杏葉もこの轡と一緒に石柵上から出ているとされる〔Gowland1897：50、ゴーランド1981：76-77〕。なお、ゴーランドは6点の剣菱形杏葉が出土したとするが、個数の記載は「鹿谷古墳・鹿谷古墳群の検討メモ」（英A2）にはない。京都国立博物館所蔵絵図に「同種品五枚」と書かれているように5点の誤りである〔富山2009〕（本章第5節参照）。人骨に関して英A3-3では人骨や歯は見つかっていないという記述がみられ、内容に一致をみないが、2点の轡（f字形鏡板轡：図36、八角形（車輪形）鏡板轡：図38）（英C6）（図版14下左）や、杏葉（剣菱形杏葉：図42）が石柵の上から出土したという記述は英A2の内容と一致する。

いずれも断片的な情報であり、相互の記述に若干の相違もあるが、絵図正本の情報に基づくと思われるゴーランド文書資料の「鹿谷古墳の検討メモ」（英A1）を中心に整理すると、出土位置を次のように復元することが可能である。

【石柵の上】 轡（西端）を含む各種馬具

【石柵の下（仕切石内）】 金銅製品片（双魚佩）、ガラス玉（西端）などの玉類、鉄刀、（人骨？）など

【石柵の前面】 鉄刀（石柵西端に立て掛け）、台付子持壺

西端に遺物が集中しており、とりわけ石柵の下から出土しているガラス玉からみて石柵の下（仕切石内）に埋葬された被葬者の頭位は西向きであった可能性が高い。2本の鉄刀については、1本は石柵の下（仕切石内）にあったという記述（英A1、若林1898、梅原1924）のほかに、2本とも立て掛けていたという記述（英A2）があるが、前者とみておきたい。あわせて金銅製品片（双魚佩）が出土している点を考慮すれば、石柵の下（仕切石内）には双魚佩を伴う装飾付大刀が副葬されていたのであろう。

（奥田・諫早）

## 5．鹿谷古墳出土遺物

### （1）出土遺物の概要

鹿谷古墳出土遺物については、ゴーランド自身が執筆した論文の中で Rokuya Dolmen 出土として掲載している集合写真（図32、図版14中右）<sup>8</sup>と図面（図5）〔Gowland1897・1899〕、発掘直後に絵師遠藤茂平によって作成され、現在、京都国立博物館が所蔵する絵図・拓本類（京A・B-4）（図版5～8）や、今回明らかとなったゴーランド文書資料によってその概要を知ることができる。とりわけ出土遺物を同定する上で重要な資料として、集合写真と絵図が挙げられるが、両者の内容は厳密に一致するわけではなく、注意が必要である。前者の集合写真はゴーランド自身が鹿谷古墳出土遺物として提示した点で貴重であるが、金属製品のみしか写っておらず、またその中には後者に描かれていないものが写っている。そして、次節にて詳述するようにそれらの中には鹿谷古墳以外の古墳から出土したものが含まれていることが今回の調査で明らかとなった。後者は出土当時に作成された点で一次資料とすべきであるが、第2章で明らかとなったように現在、京都国立博物館にあるのは、「古墳見分日記」に添付された絵図正本の草稿であり、正本の所在はいまだ不明である（第2章第1節参照）。すなわち、明治14（1881）年に鹿谷古墳から出土した遺物を網羅するリストは、少なくとも現時点では確認されていない。

そこで本プロジェクトでは、ゴーランド考古資料に対する悉皆調査（記録化）を行いながら、絵図や集合写真との同定作業を進めていった。そして、絵図と同定できたものを鹿谷古墳出土遺物、集合写真とのみ同定できたものは鹿谷古墳出土遺物の可能性を含む関連遺物として抽出した。また抽出基準を明確にした上で、絵図や集合写真と同一個体ではなくても、同一個体を構成する可能性の高い資料や、同



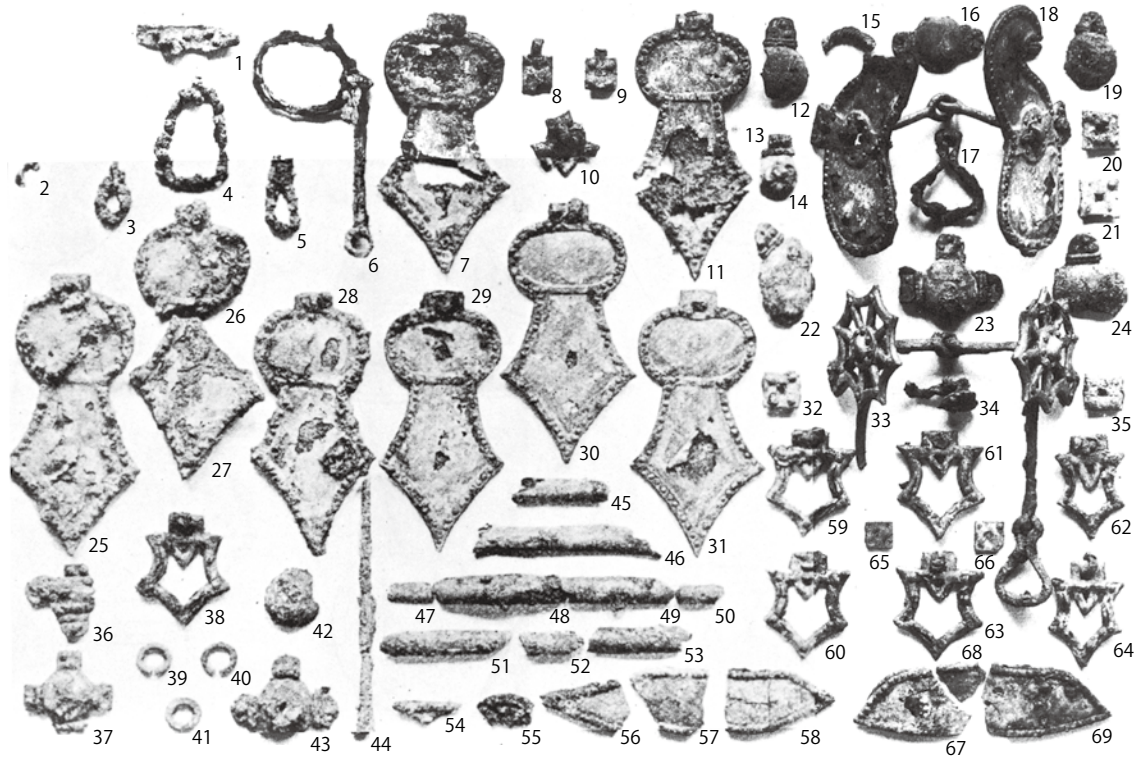


図32 鹿谷古墳ほか出土遺物集合写真（英C5合成、加筆）（The British Museum 所蔵）

表5 鹿谷古墳出土遺物一覧

じ型式の資料などについても積極的に抽出を試みた。以上のような作業を通じて明らかとなった鹿谷古墳出土遺物は、表5の通りである。この作業を通じて、須恵器埴のように現在、ゴーランド考古資料には見いだせないものや、玉類のように同定の困難な資料も存在することが明らかとなったが、それらを含め鹿谷古墳出土遺物の全容をほぼ明らかにすることができた。なお鹿谷古墳出土遺物の可能性を含む関連遺物については節を改めて記載することとする。また「OA+」、「F」、「J」の記号は大英博物館の所蔵番号である。

	品目	数量	絵図	集合写真	備考	図番号
刀剣	鉄刀	2	○	×		図33
	振り環	1	×	○		図34
	双魚佩	1	○	×		図34
馬具	f字形鏡板轡	1	○	○		図36
	八角形鏡板轡	1	○	○		図38
	鞍金具	1背分	○	○		図39～41
	剣菱形杏葉	5	○	○		図42
	五角形杏葉	10	○	○		図43
	雲珠	1	○	○		図44
	辻金具	10	○	○		図45・46
	透入方形飾金具	22	○	○		図47・48
瓜形飾金具	4	×	×		図49	
玉類	ガラス小玉	2	○	×	同定できず	図50
	土玉	1	○	×	同定できず	図50
須恵器	台付子持壺	4	○	×		図52
	台付子持壺蓋	1	○	×		図52
	杯蓋	1	○	×		図52
	杯身	1	○	×		図52
	壺	1	○	×		図52
	埴	1	○	×	現存せず	図53

(2) 刀剣類

①概要

ゴーランド・コレクションに含まれる刀剣類のうち、鹿谷古墳出土遺物として抽出できたのは鉄刀2点と振り環1点、双魚佩片1点である。

鉄刀と双魚佩片は、いずれも絵図に見いだせるため、鹿谷古墳出土遺物であることに相違ない。振り環は、絵図にはみえないが、集合写真に写る振り環（図32-15）とサイズが一致することが判明した。集合写真には、絵図にみられる鉄刀 2 点は含まれていないものの、双魚佩をもつ大刀の多くが振り環を伴うこと（第 4 章第 4 節参照）、ゴーランド・コレクションの出土不明関連資料に振り環と組み合いのような大型の鉄刀が認められないことから、この振り環についても鹿谷古墳から出土した 2 本の鉄刀のいずれかに伴うものと判断した。

## ②鉄 刀（図33、表 6、図版15・30）

### 1) 刀 1（図33-1）

切先から茎の半ばまでが遺存する。残存長で115cmを超える長大な鉄刀である。切先は丸みを帯びたフクラ状で、先端背側をわずかに欠く。刃部はほとんど反りをもたず、関付近でやや幅を広める。関部は直角に深く切れ込む。刃部の関付近に、径0.4cmの鑷本孔が認められる。茎部は、刃部に対してやや腹側に傾く。茎部には目釘孔とみられる孔を 3 つ確認できる。関寄りの孔が径0.6cm、茎半ばの孔が径0.6cm、茎尻近くの孔が0.4cmで、いずれも茎部中軸よりやや背側に位置する。茎の厚さは、背側に比べ腹側がやや薄くなっており、断面梯形を呈する。拓本には、関部近くの茎部腹側に削り込みがあることがはっきりと示されているが、現状の肉眼観察では明瞭でない。刃部にはわずかに鞘木とみられる木質が付着する。茎部では木質の遺存は確認できないが、把巻きとみられる有機質の痕跡が背側の一部に認められる。OA+1247。

### 2) 刀 2（図33-2）

切先近くから茎の半ばまでが遺存する。刀 1 よりはやや短いものの、残存長100cmを超える大型の鉄刀である。刀身はほぼ反りのない直刀で、切先は先端を欠くがフクラ状を呈する。関は明瞭に切れ込む直角関で、関部から少し切先側の位置に径0.4cmの鑷本孔が認められる。茎部は刃部から直線的に伸びる。関部付近の茎部腹側には幅1.1cm、深さ0.4cmの削り込みを確認できる。茎部半ばに径0.4cmの目釘孔をもつ。拓本にはさらに、上述の削り込みの近くにもう 1 つ目釘孔が存在することが記されているが、現状の肉眼観察では不明瞭である。絵図には、関付近から茎部にかけて、鞘木と把木の木質が良好に残る様子が描かれている。現状では絵図ほどの有機質の遺存は確認できないものの、刃部には鞘木とみられる木質がところどころに付着しており、関付近の木質が鑷本孔をまたいで直線的に途切れる様子を観察できる。茎部にも把木の痕跡が認められ、木質が茎部背側の側面まで及んでいる。OA+1246。

## ③振り環（図34-1、図版15・31）

大刀把頭装飾の一部とみられる鉄地銀張の振り環である。刀 1 か刀 2 に付随するものと推定される。残存長4.1cm、幅0.6～0.8cm。集合写真の状態より劣化が進んだためか欠損部位が広がっている。遺存する條線数からみて、少なくとも 3 回転は振っている。把頭装具との接続部付近とみられるあたりでは振りがやや甘くなる。銀板の遺存状態は良好で、鉄芯に 1 枚の銀板を被せ、内側で端部を重ねてある。一部に銀板の切れ目が認められ、被せる銀板を継ぎ足した可能性がある。OA+3050。 (金宇大)

表 6 鉄刀の計測値

	全長	刃 部			茎 部		
		長さ	最大幅	最大厚	長さ	最大幅	最大厚
刀 1	(115.8)	95.4	4.3	0.9	(20.4)	3.4	0.8
刀 2	(108.6)	(91.0)	4.1	0.8	(17.6)	3.2	0.6

〔凡例〕単位：cm。括弧内の数値は残存値。

## ④双魚佩（図34-2・3、図版15・31）

遠藤茂平によって描かれた絵図にある双魚佩の破片と照合したところ、形と表現が一致したことから、鹿谷

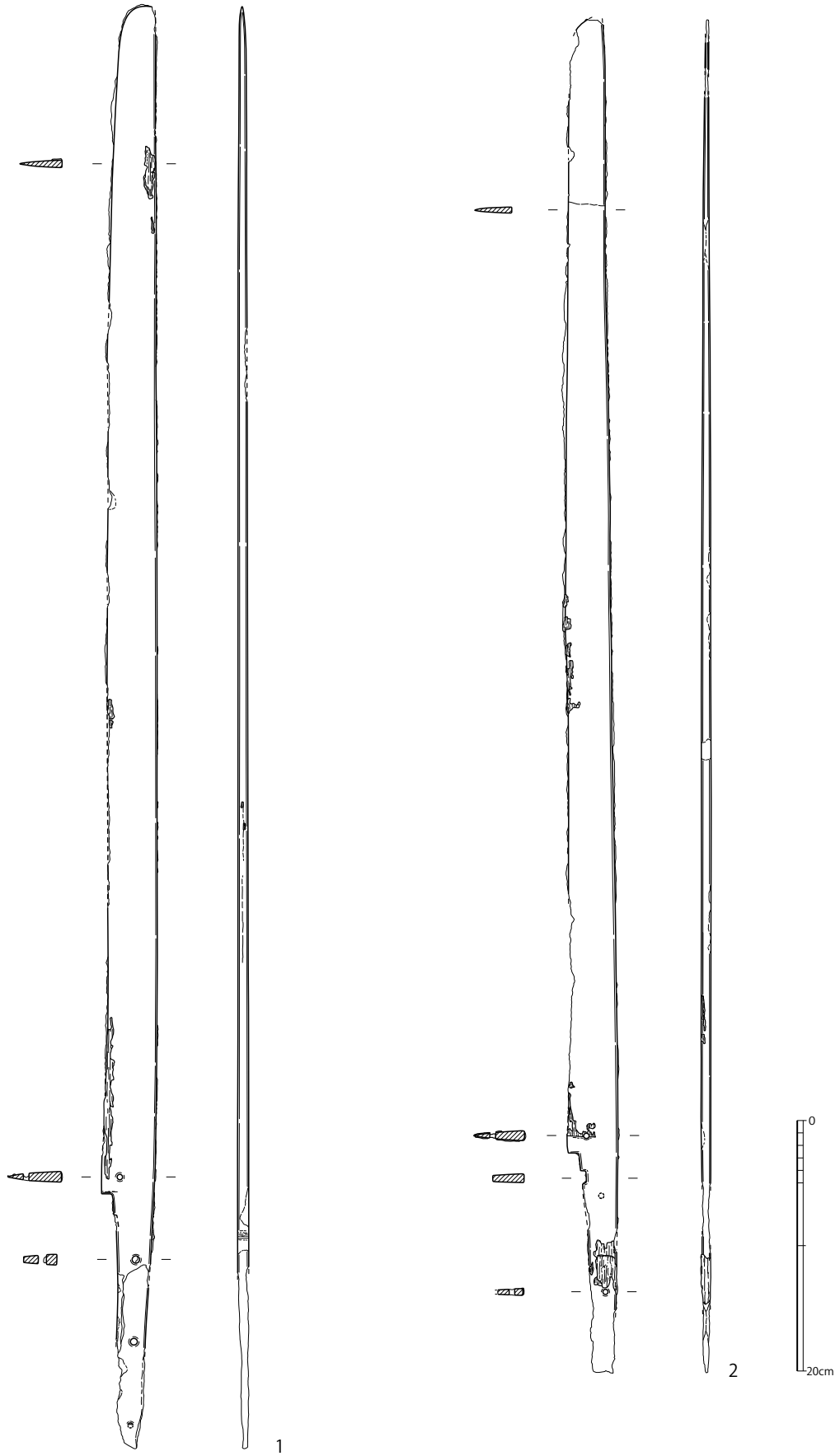


図 33 鉄刀実測図 (S=1/5)

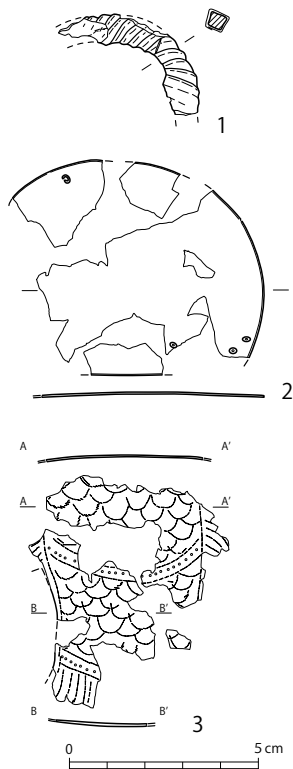


図34 振り環・双魚佩実測図 (S=1/2)

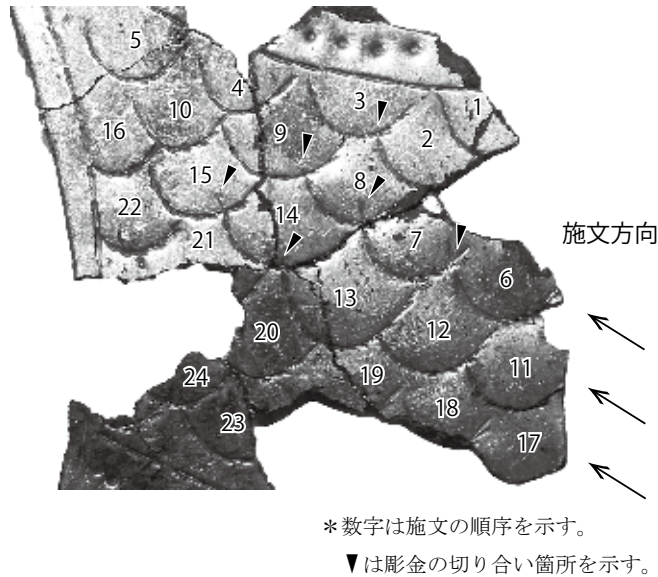


図35 双魚佩細部写真 (2.5倍)

古墳から出土したものであることが確定した。

魚形金具の上につくことが多い中間部分の金具は確認できず、半円形を呈する上部金具(図34-2)と魚形金具(図34-3)が遺存する。上部金具はOA+7368、魚形金具はOA+3076、OA+16108。

上部金具は、類例を考慮すると、表裏の2枚の金具からなり、間に平織物を挟み込むのが通例である。本例は外形線が残存した

部分もあるが、破片であるため表裏のどちらの金具であるか部位の同定が難しい。図の右下、中央下、左上の4箇所には鉾の痕跡がみられる。鉾は径0.2cmほどの楕円形を呈している。鉾頭であると考えられるが、鉾頭にしては径が小さいため、鉾のかしめ痕である可能性も考えられる。前者であれば表面の金具、後者であれば裏面の金具と考えられるが、どちらかに確定することは難しい。上部金具と鉾には現状では鍍金がみられず、銅製である。図の左上の鉾は欠損によって穿孔が露出しており、穿孔の中に繊維が残存している。加えて、裏面には平織物がわずかに付着している。通例の双魚佩にみられるように、本例も元々は表面と裏面の金具の間に平織物が挟み込まれていたことがわかる。

魚形金具は、片方の魚の胴部から尾部にかけての部分が残存している。表裏面ともに鍍金された金銅製である。彫金による文様が良好に残存しており、鱗、背鰭、胸鰭、尾、胴部と尾をわける内彎した区画、鱗と鰭の間の区画線が蹴り彫りと点打ちによって表現されている。

鱗は蹴り彫りによる曲線を複数組み合わせで表現されている。鮒や鯉にみられるような、円鱗が重なる様子を写実的に描いたものであろう。ただし所々、鱗の中に彫金が入り込んでしまっている箇所もみられる。鱗の蹴り彫りは、全て右から左方向に施文されている。彫金前の割り付け線がみられないことから、鱗の配置はそれほど厳密には決まっていなかったようである。彫金の切り合い関係が複数個所でみられ、右下から左上方向へ斜めに行をなして鱗が施文されていたことがわかる(図35矢印)。

背鰭と胸鰭は内から外方向の蹴り彫り、尾は上から下方向の蹴り彫りで表現されている。鱗と鰭の間の区画線は、左側では上から下方向の蹴り彫り、右側では下から上方向と上から下方向の両方向の蹴り彫りで引かれている。彫金の切り合い関係からみて、鱗の施文後に区画線が引かれたことがわかる。胴部と尾をわける内彎した区画では、右から左方向に2本の蹴り彫り線が引かれ、間に点打ちが施されている。点の間には鑿を引き摺ったような痕跡がみられ、工人の癖を読み取ることができる。(土屋)

## (3) 馬 具

## ①抽出の手順

破片を含めて240点余りを数える大英博物館ゴーランド・コレクションの馬具は、現在、鹿谷古墳出土遺物と芝山古墳出土遺物と、出土地不明遺物が区別されずに保管されている〔諫早2014〕。既往の研究でも個々の資料の出土地について混乱があったように、収蔵庫に保管された大量の馬具の中から鹿谷古墳出土馬具を弁別することは、ほかの遺物以上に困難である。まずは以下に報告する馬具を、いかなる根拠に基づいて鹿谷古墳出土馬具とみなしたのか、その手順について簡略に述べておきたい。

抽出の手がかりとなるのはすでに述べたように、ゴーランド自身が執筆した論文の中で Rokuya Dolmen 出土として掲載している集合写真(図32、図版14中右)と図面(図5)、そして現在京都国立博物館が所蔵する絵図(京A・B-4)(図版5~8)である。集合写真には絵図と対応のとれない遺物が写りこんでおり、後者と同定可能なもの、およびそれらと同一形態のものを鹿谷古墳出土遺物としてまず抽出し(抽出精度A)、集合写真には写っているものの絵図には描かれていないものについては、鹿谷古墳出土遺物の可能性を含む関連遺物として区別した(抽出精度C、D)。また絵図との同定ができなかった馬具の中で、形態や材質、製作技術などから絵図と同定できた馬具と同じ馬装を構成した可能性が高いものについては、鹿谷古墳出土馬具として積極的に抽出を試みた(抽出精度B)。なお、明治14(1881)年4月に地元民によって掘り出された鹿谷古墳出土遺物を抽出する上で、最も確度の高い根拠となる絵図については、原寸大複製品を作成し、大英博物館において実物資料との同定作業を行った〔諫早2016〕。以上の手順によって、72点の馬具を鹿谷古墳出土馬具、30点の馬具を鹿谷古墳出土馬具の可能性を含む関連馬具<sup>9</sup>として抽出した(表19・20)。

## ②轡

## 1) f字形鏡板轡(図36、図版18・32・33)

欠失部分が多いものの、1個体分のf字形鏡板轡が確認される。鏡板・銜・遊環・引手は連結した状態で、鏡板の裏側で遊環を介して銜と引手を連結する(図36-1)。また図36-2はこれに伴うとみられる引手壺である。以下、部品ごとに細かくみていく。

鏡板 左右2点が確認される。右鏡板が馬の右頬側、左鏡板が左頬側に相当する。どちらも絵図と照合可能であり、出土時の状態を良好に保っている。各部位の計測値、計測位置は表7・図37の通りである。厚さ約1.5mmの鉄製地板の上に、厚さ約2.0mmの鉄地金銅張縁金をのせ、鉤頭径約3.0mm、鉤頭高約1.5mmの鉄地銀被円頭かしめ鉤を密に打って固定する。いわゆる金銅板一枚被せである。鏡板中央には長さ約1.0cm、幅2.0~2.4cm、隅丸長方形の銜孔を穿け、表側に長さ約3.0cm、幅約0.6cmの鉄製棒状銜留金具を縦方向に取り付け、鉤頭径約3.0mm、鉤頭高約1.5mmの鉄製円頭かしめ鉤を上下に打って固定している。鏡板の裏面には鉤脚をかしめた痕跡を多数確認することができる。鏡板上部に長さ約1.5cm、幅約3.0cmの長方形立間部を設け、その中央に長さ約0.8cm、幅約1.0cmの方形立間孔を穿ける。立間孔にはいずれも鉄製棒状吊金具の鉤部が錆着している。吊金具本体の形状、材質は不明である<sup>10</sup>。左右の鏡板は基本的に同形同大であり、経年変化の影響や図化の精度などを考慮すれば、同一の様(ためし)をもとに製作されたとみられる。ただし、立間部や銜孔の大きさ、地板と縁金を固定する鉤の位置などには差異がある。

銜 銜は鉄製2連式で、ほぼ完存する。完形の左銜をみると全長約9.6cmをはかり、外環は長さ約2.8cm、幅約1.8cmの長楕円形、内環は直径約2.3cmの略円形である。右銜は外環と内環が同じ方向を向いているのに対し、左銜は直交方向を向く。銜身には斜め方向の細かい條線が認められる(図版44下1)。

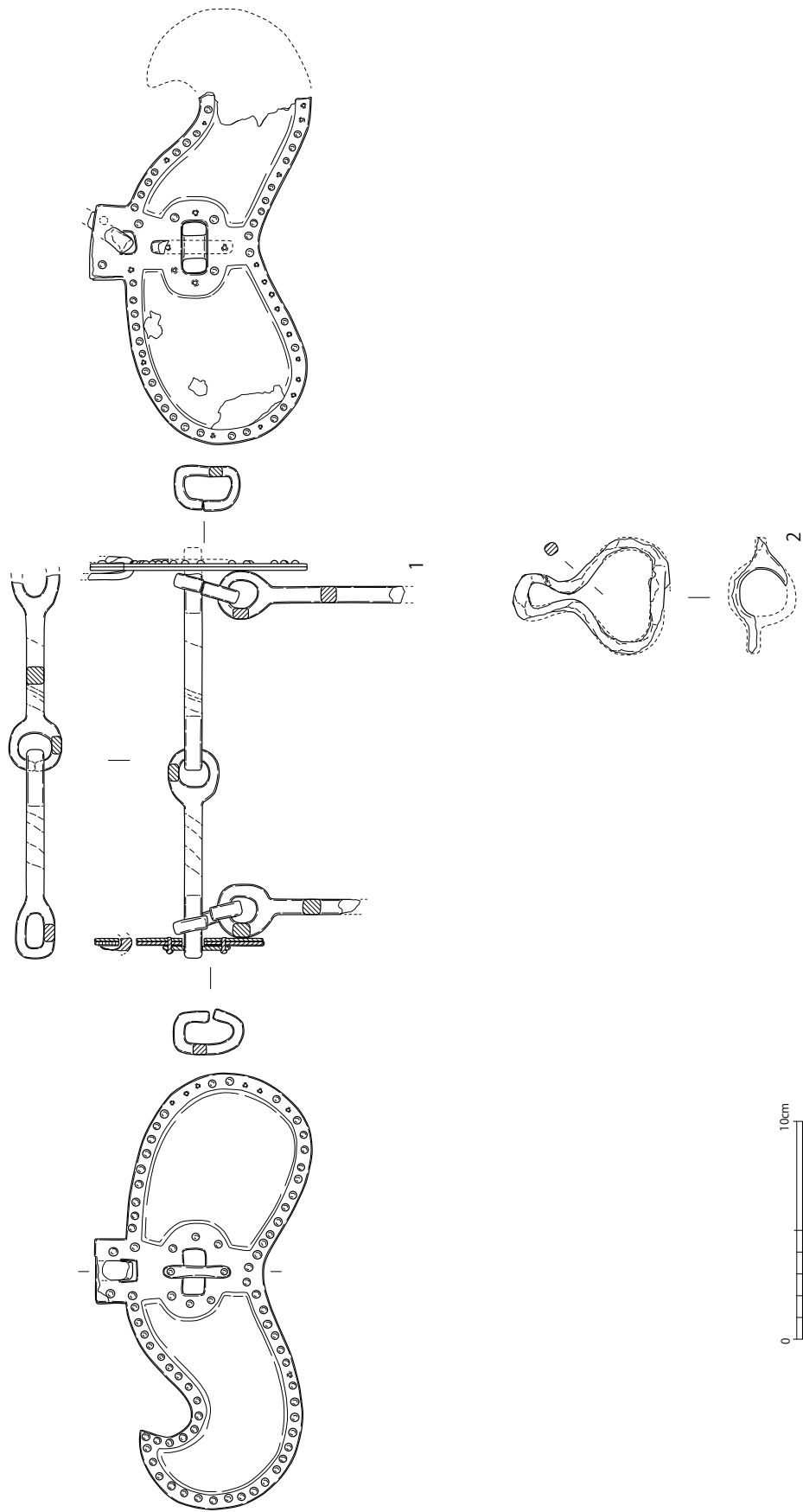


图 36 f 字形鏡板彎實測圖 (S=1/3)

表7 f字形鏡板の計測値

	屈曲度	挟り	頭部	幅	長さ	屈曲部幅	頭部幅	尾部幅	鋳数
右側	18	26	—	9.9	(16.0)	6.2	5.1	7.4	(54)
左側	18	26	68	9.9	19.8	6.3	5.1	7.6	73

〔凡例〕幅・長さの単位はcm。括弧内の数値は残存値(数)。計測位置は図37参照。

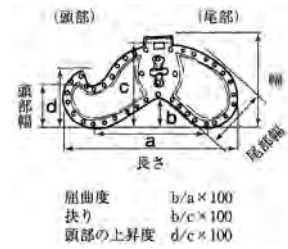


図37 f字形鏡板の計測位置 ((田中2004)より転載)

振った痕跡の可能性もあるが、凹凸は小さく単位も不明で、切削などによる可能性も考えられる<sup>11</sup>。なお左銜の内環は継ぎ目を丁寧に鍛接しているが、右銜の内環はT字成形技法〔諫早2012〕によって環部を成形し、継ぎ目は鍛接していない。銹化の影響を考慮する必要もあるが、左銜の内環をまずつくり、右銜内環を後から連結したため、右銜内環にのみこのような痕跡が残ったとみるのが自然であろう。

遊環 銜と引手を連結する遊環は左右いずれも完存する。どちらも長さ約3.0cm、幅約2.0cmの長楕円形である。銜外環と引手内環はいずれも丁寧に継ぎ目を鍛接しているのに対し、遊環は鉄棒を折り曲げるのみで、継ぎ目を鍛接した形跡が認められない。銜と引手をまずつくり、最後に遊環で連結したため、遊環にのみこのような痕跡が残っているとみられる。

引手 引手本体は1条線で、いずれも外環側が欠失している。遺存状態の比較的良好な右引手をみると残存長は約8.5cmをはかり、内環は直径約2.2cmの略円形である。柄部に振りなどは認められない。内環はどちらも丁寧に継ぎ目を鍛接している。絵図をみると、この引手本体に別造りの瓢形引手壺を取り付ける1条線引手a3類〔諫早2012〕であることがわかる。絵図には左側の引手壺が描かれているが、集合写真の段階ですでにその存在を確認できない。図36-2は絵図の完形の引手壺(図版5)とは形態が一致せず、別個体とみられるが、集合写真でf字形鏡板轡の間に写っており(図32-17)、ここではf字形鏡板轡の右側の引手壺とみておく。長さ約7.1cm、最大幅約5.4cmをはかり、上部中央に手綱を通すための直径約3.0cm(推定)の環部を設けている。

2) 八角形(車輪形)鏡板轡(図38、図版19・34・35)

右引手が半損しているものの、ほぼ完形の八角形鏡板轡である(図38-1)。鏡板の内側で銜と引手を直接連結する。絵図や集合写真と照合可能で、出土時の姿をほぼ保っていることがわかる。この轡の一部とみられる引手壺(図38-2)や吊金具(図38-3)も含め、部品ごとに細かくみていく。

鏡板 左右2点がほぼ完存している。鏡板内部をスポーク状に透かした八角形の鏡板である。右鏡板は長さ約10.3cm、幅約10.6cm、左鏡板は長さ約9.8cm、幅約10.1cmをはかる。透かしをもつ厚さ約2.0mmの鉄製地板の上に、同形同大で厚さ約2.5mmの鉄地金銅張上板をのせ、各頂点と立間部2箇所、計10箇所に鉄地銀被花形かしめ鋌を打って固定する。銜孔付近の構造は、鏡板中央に長さ約1.4cm、幅約2.1cmの楕円形の銜孔を穿けた鉄製地板の上に、十字形の銜孔を穿けた鉄地金銅張上板をのせ、地板に長さ約3.2cm、幅約0.6cmの鉄製板状銜留金具を縦方向に設置した上で、表側に長さ約3.2cm、幅約3.5cm、高さ約0.9cmの鉄地金銅張半球形覆金具をのせ、鉄地銀被花形かしめ鋌を8箇所に打って固定する複雑なものである。この半球形覆金具のため、銜留金具や銜外環は鏡板の表側からはみえない。鋌は銹化によって判然としないものもあるが、いずれも鋌頭径約5.0mm、鋌頭高約3.0mmの鉄地銀被花形かしめ鋌とみられる。花形は6弁と7弁があり、細部形態にも差異があることから、鋌頭を単一の型打ちによって成形したとは考えにくい。鏡板の裏面には鋌脚をかした痕跡が多数確認でき、中には長い鋌脚をそのまま折り曲げているものも確認される(図版44下2)。鏡板上部に長さ約2.0cm、幅約3.0cmの長方形立

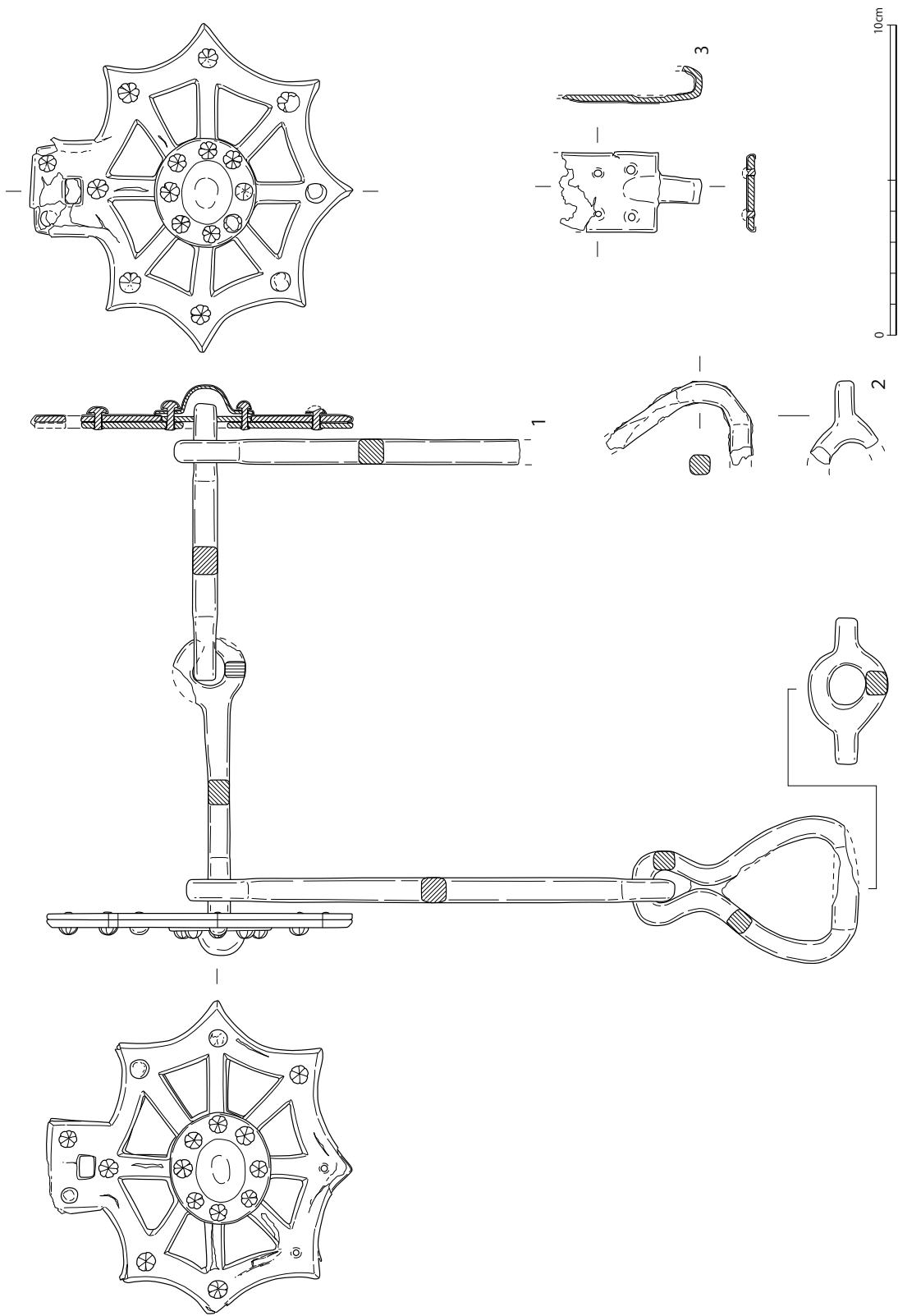


图 38 八角形镜板轡美测图 (S=1/2)



間部を設け、その中央に長さ約0.5cm、幅約0.8cmの長方形立間孔を穿けている。

図38-3はこれに伴うとみられる鉄地金銅張棒状吊金具である。絵図に描かれている長方形吊金具の下半部と形状が一致し、同一個体であることを確認した。絵図の時点で上半部と下半部の間には亀裂が入っており（図版5）、集合写真の時点ではすでに現在のように分離している。絵図では鏡板とは別に描かれているが、f字形鏡板轡には吊金具の鉤部が遺存していることから、八角形鏡板轡に伴う可能性が高い。鉤部の幅からみて右鏡板に連結されていたとみられる。金銅板は吊金具本体にのみ張られ、鉤部は鉄が露出している。現状で4個、絵図を参照すれば8個の鉤によって繋と連結していたとみられるが、鉤頭はすべて欠失し、吊金具裏面に明確な繋の痕跡も認められない。残存長4.6cmで、吊金具本体は残存長約3.2cm、幅約2.5cmである。

銜 銜は鉄製2連式で、ほぼ完存する。左右の銜は絵図および集合写真が撮影された時点まではしっかりと連結していたようであるが、1967年に大塚初重が実測図を作成した時点では現在のように銜内環部分で分離可能な状態であったようである〔大塚2003:96〕。右銜が全長約8.9cmで、外環は長さ約2.5cm、幅約2.0cmの長楕円形、内環は直径約2.0cmの略円形、左銜が全長約9.5cmで、外環は長さ約2.5cm、幅約2.0cmの長楕円形、内環は直径約2.3cmの略円形である。右銜は外環と内環が同じ方向を向いているのに対し、左銜は直交方向を向く。また右銜の内環は丁寧に継ぎ目を鍛接しているが、左銜の内環はT字成形技法によって環部を成形し、継ぎ目を鍛接していない。銹化の影響を考慮する必要もあるが、右銜内環をまず作り、後から左銜内環を連結したため、左銜内環にのみこのような痕跡が残ったとみるのが自然であろう。

引手 1条線の引手本体に、別造りの瓢形引手壺を取り付ける1条線引手a3類である。銜と連結し、ほぼ完形の左引手をみると、引手本体と引手壺を連結した全長は約21.5cmである。引手本体は長さ約15.5cmで、内環は直径約2.3cm、外環は直径約1.7cmをはかる。柄部に振りなどは認められない。外環は丁寧に鍛接されているのに対し、内環は左右ともにT字成形技法によって環部を成形し、鍛接はしていない。引手壺は長さ約7.4cm、最大幅約4.7cmをはかり、上部中央に手綱を通すための直径約2.5cmの環部を設ける。図38-2は欠失部分が多いものの、絵図の完形の引手壺と同一個体の可能性が考えられ、もし鹿谷古墳出土遺物であれば、八角形鏡板轡の右引手壺となる。残存長4.7cm。 (諫早)

### ③鞍金具（図39～41、図版23・36・37）

洲浜金具や磯金具、覆輪の破片がある。鞍橋や居木など鞍本体（木製部品）は遺存していないものの、金属製部品の遺存状態、および裏面に付着する有機質からみて、1背分の鉄地金銅装鞍が副葬されていたとみられる。洲浜金具と磯金具を別造りにする千賀久の洲浜・磯分離鞍である〔千賀2003〕。海金具は出土しておらず、もともと海部分には金属板を伴わなかったものとみられる。以下、洲浜金具・磯金具と覆輪にわけてみていく。

洲浜金具・磯金具 細片化しており遺存状態はあまりよくない。大きさや鞍孔の有無からみて、図39が前輪側、図40が後輪側とみられる。

前輪側は欠損部分が多いが、大英博物館による保存処理の際に完形に復元されており、高さ約12.0cm、幅約25.0cmほどと推定される。磯金具と洲浜金具はそれぞれ厚さ約1.5mmの鉄製地板に金銅板を張ったもので、洲浜金具の上辺と磯金具の周囲に幅約0.5cm、厚さ約1.5mmの金銅製縁金具をあて、鉤頭径約3.0mm、鉤頭高約2.0mmの鉄地銀被円頭打込鉤を密に打つ。鉤はすべて縁金具と洲浜金具、磯金具を貫通している。

磯金具裏面をみると、上辺の鉤脚には表面に漆を塗った木質が付着している。木質の繊維方向が鉤脚長軸に直交することから、この木質は居木先ではなく鞍橋に由来するものと思われる。下辺の鉤脚は裏

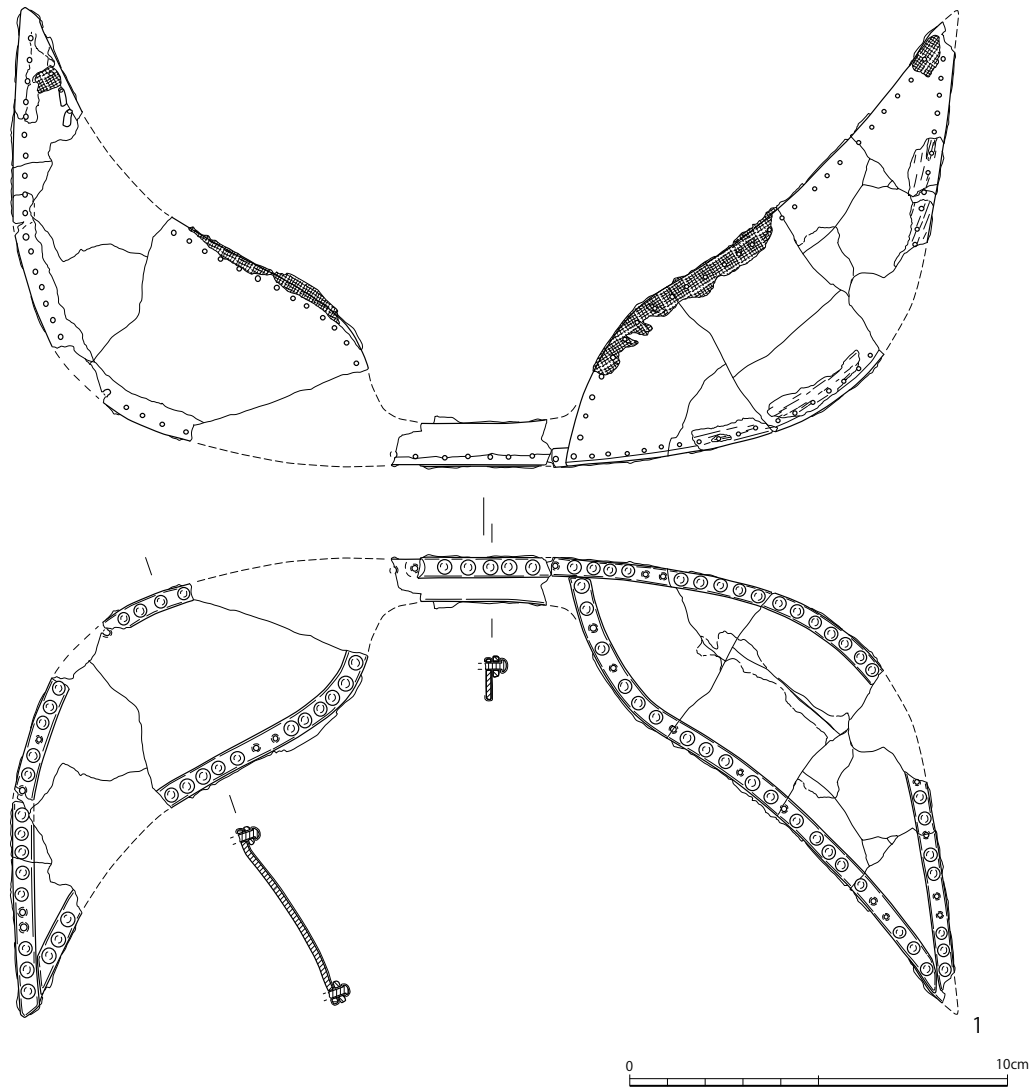


図39 鞍金具実測図(1) (S=1/2)

側ですぐ折り曲げられていることから(図版44下3)、磯金具は上辺の鉤だけで鞍本体(木製部品)に固定されていたようである。下辺には木質ではなく織物が幅0.5~0.8cmの範囲に付着している。鉤脚はこの織物を貫通していないことから、織物は居木先と磯金具で挟んで固定していた可能性が高い。織物は磯金具下辺を巻き込むようにして確認されるため、ここに縁飾〔片山2016〕による見かけが組紐状の装飾が付けられていた可能性がある。

後輪側は洲浜金具および磯金具の鞍孔よりも下方を欠失している。図40-2は高さ約7.3cm、残存幅約9.4cm、図40-3は高さ約7.3cm、残存幅約9.8cmをはかる。前輪と同じく厚さ約1.0mmの鉄製地板に金銅板を張った後、その縁に幅約0.5cm、厚さ約1.5mmの金銅製縁金具をあて、鉤頭径約3.0mm、鉤頭高約2.0mmの鉄地銀被円頭打込鉤を密に打つ。どちらも金具の中央下寄りに0.7×0.9cmの方形孔をあけ、鞍孔とする。図40-2の鞍孔には直径約2.8cm、高さ約0.5cmの鉄地金銅張半球形座金具と、鉄製鞍金具の破片が錆着している。脚と輪金を別造りにするもので、絵図や集合写真の円形座金具付鞍金具片(図32-34)はこれと対になる可能性がある。半球形座金具は厚さ約1.0mmの鉄製円板を叩きだしてかたちをつくり、金銅板を張ったもので、磯金具に固定するための鉤などはみられない。鞍金具を居木先に取り付けることによって、磯金具に固定していたようである。

後輪側も下辺の鉤脚は裏側ですぐ折り曲げられている。やはり下辺に沿って鉤脚を覆うように幅0.6

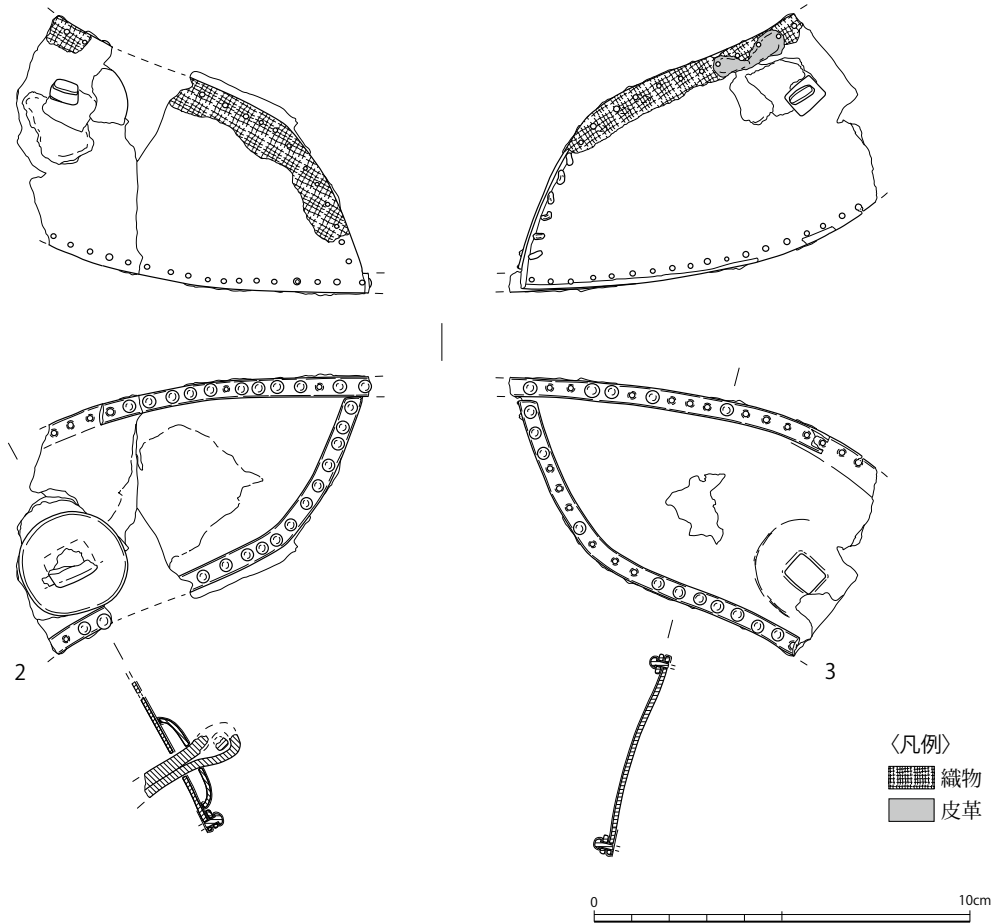


図40 鞍金具実測図(2) (S=1/2)

～1.1cmの範囲に織物が付着していることから、磯金具と居木先の間には織物が挟み込まれていたものと思われる。また、図40-3をみると織物の上に皮革が付着しており、居木先→皮革→織物→磯金具という構造であったようである。

図41-11は上述の磯金具の一部と思われる破片である。長さ約3.5cm、残存幅約2.5cmである。厚さ約1.0mmの鉄製地板に金銅板を張る。鉚孔が上辺に2つ、下辺に1つ確認できる。鉚孔の位置や破片の形状などから考えて、後輪側の磯金具の爪先側の破片の可能性はある。

**覆輪** 覆輪の破片は7点を確認した。前輪と後輪のどちら側に帰属したのかは不明である。なお、俯瞰図のため厳密な対応はとれないが、絵図にも2点の覆輪が描かれている。いずれも鉄地金銅張で、高さ1.1～1.2cm、幅1.8～2.1cm、断面U字形である。最も長い図41-4で残存長約32.0cmをはかる。幅約3.0cm、厚さ約1.0mmの長方形鉄板をU字形に曲げた後にかたちをつくり、上から金銅板を被せている。内面には頂部を境に方向の異なる木質が付着しており(図版51下1)、鞍橋は左右の2枚から構成され、中央部で左右の板を重ね合わせていたものと思われる。また下辺中央付近には鉚を1列に打った縁金具の破片が錆着しており、覆輪に沿って海部分の外縁に縁金具を巡らせていたものと思われる。縁金具の残存長は約1.6cm、残存幅は約0.5cmである。厚さ1.0mm前後の鉄板に金銅板を被せ、鉚頭径3.0～4.0mm、鉚頭高1.5～2.0mmの鉄地銀被円頭鉚を密に打つ。図41-6の頂部(側面)には鞍橋に固定するための鉚頭径約7.0mm、鉚頭高約1.5mmの鉄製円頭打込鉚が2箇所みられる。図41-7の内面にはこの木質の下に織物らしき痕跡が確認される。肉眼観察による限り、ほかの金具に同様の痕跡は確認できず、断定は難しいが、鞍橋(海部分)の表面に何らかの繊維製品を貼っていた可能性がある。このほか、図41-4・5の外面には平織物が一部付着している。(諫早・片山健太郎)

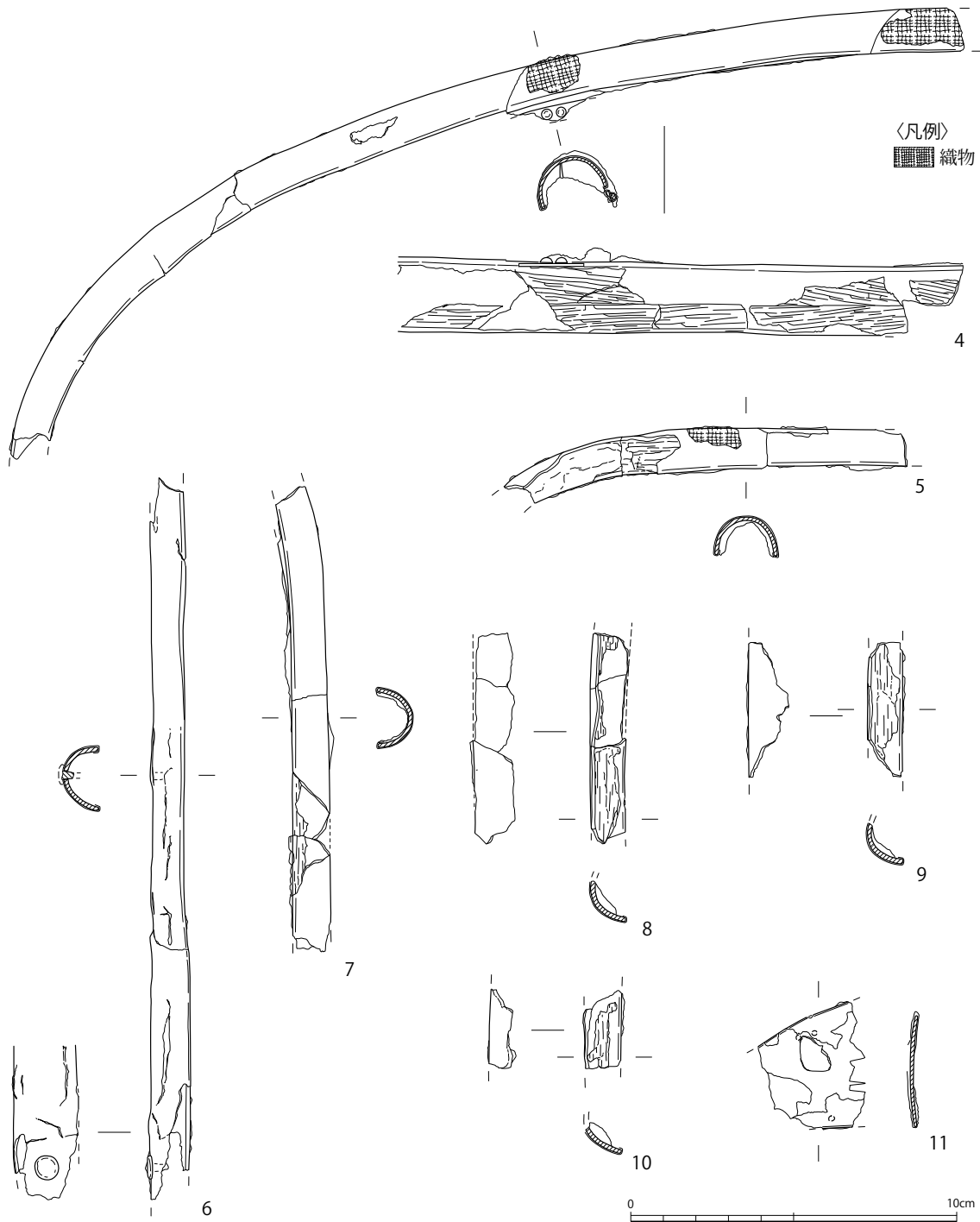


図41 鞍金具実測図(3) (S=1/2)

#### ④杏葉

1) 剣菱形杏葉 (図42、表8、図版20・21・38~40)

絵図に描かれている剣菱形杏葉 (図42-5) に加え、これと同じ形態の特徴をもつ剣菱形杏葉がほかに4点確認される。絵図には「同種品五枚」と書かれており、これら5点はすべて鹿谷古墳出土遺物と判断される〔諫早2016〕。形状はおおむね類似しており、立間部を含めた全長は20.8~21.6cm、幅は扁円部で9.4~9.6cm、剣菱部で10.2~11.1cmである。いずれも厚さ約1.5mmの鉄製地板の上に、同じく厚さ約2.0mmの鉄地金銅張縁金をのせ、周縁に鋌頭径4.0~5.0mm、鋌頭高1.5~2.0mmの鉄地銀被円頭かし

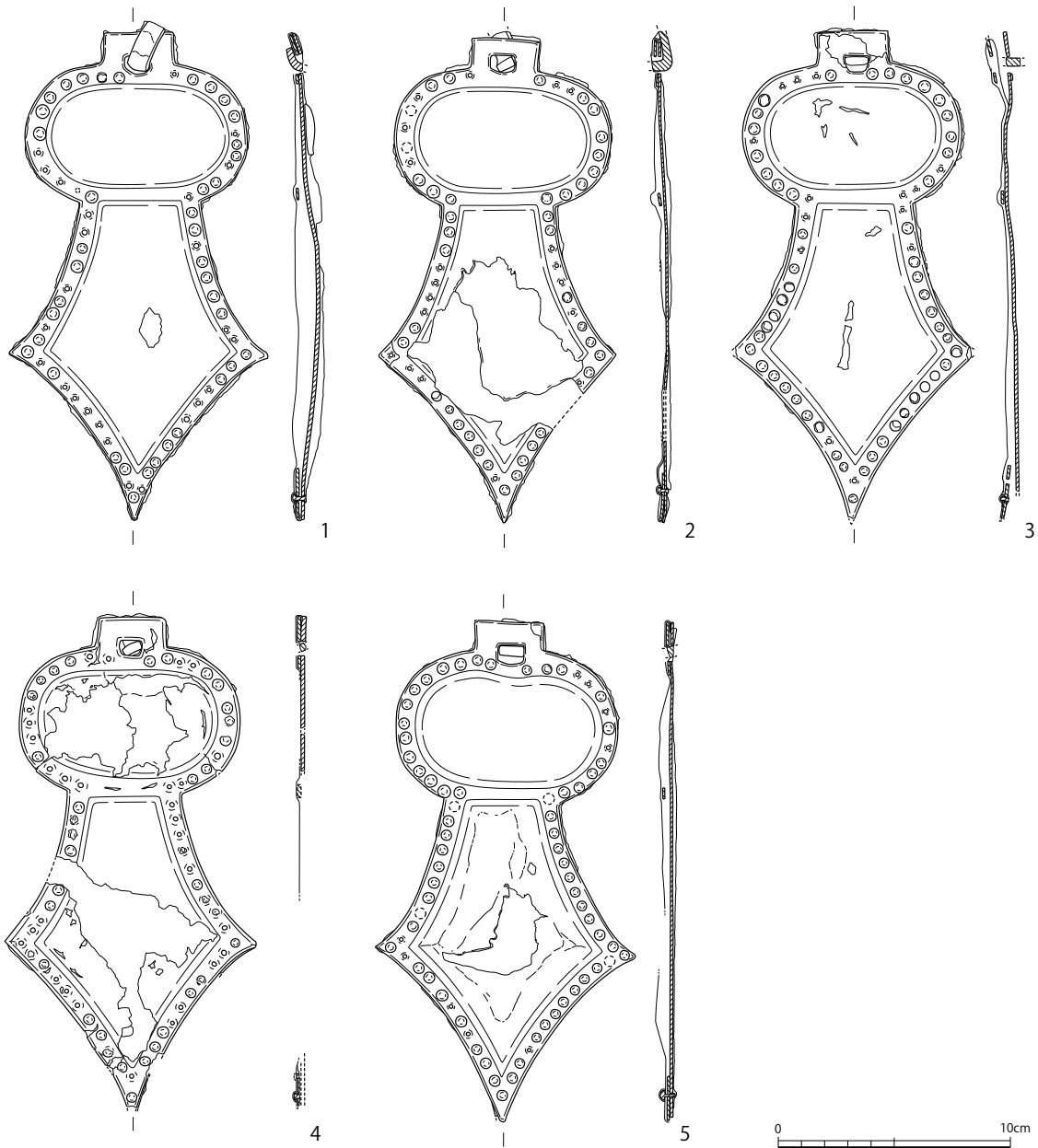


図42 剣菱形杏葉実測図 (S=1/3)

表8 剣菱形杏葉の計測値

番号	全長	幅		立間部		鋸数
		扁円部	剣菱部	長さ	幅	
42-1	20.9	9.6	11.1	1.3	3.2	65
42-2	20.8	9.4	10.2	1.3	2.9	(58)
42-3	(20.9)	9.5	(10.2)	1.4	3.1	65
42-4	(21.1)	9.5	10.8	1.3	3.1	(66)
42-5	21.6	9.6	11.1	1.3	3.0	72

〈凡例〉単位：cm（鋸数を除く）。括弧内の数値は残存値（数）。

表9 五角形杏葉の計測値

番号	分類	全長	幅	立間部	
				長さ	幅
43-1	1類	8.4	(6.8)	1.2	3.1
43-2		8.6	(7.1)	1.3	2.8
43-3		8.8	6.0	1.6	2.8
43-4		8.7	(6.2)	1.4	2.8
43-5		8.7	7.0	1.2	2.9
43-6	2類	8.4	5.7	1.5	2.9
43-7		(7.3)	(4.8)	1.4	3.0
43-8		(4.5)	(4.6)	1.4	3.0
43-9		8.4	5.7	1.5	3.0
43-10		8.3	5.6	1.5	2.8

〈凡例〉単位：cm。括弧内の数値は残存値。

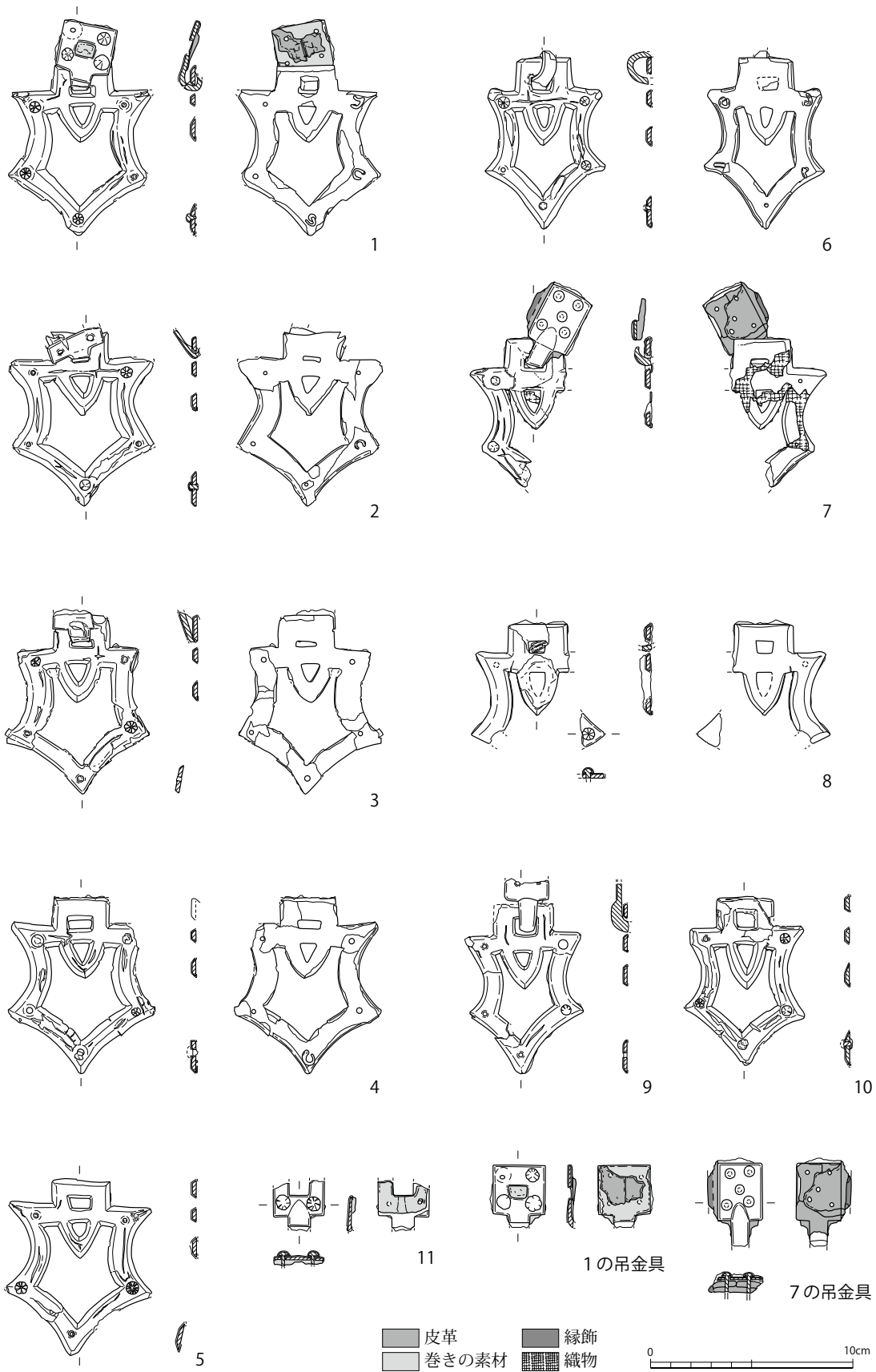


図43 五角形杏葉実測図 (S=1/3)

め鋌を密に打って固定する。いわゆる金銅板一枚被せである。鋌脚はかしめず、一方向に折り曲げて処理する。縁金は扁円部内側が楕円形で、扁円部と剣菱部の間に区画帯をもつ。立聞部は長さ1.3～1.4cm、幅2.9～3.2cmの長方形で、長方形ないし逆台形の立聞孔を穿つ。いずれの立聞孔にも、幅約1.0cm、厚さ約0.3cmの鉄製棒状吊金具の破片が錆着しているが、吊金具本体の形状、材質は不明である。裏面に繊維や革らしき有機質の付着が認められる資料もある。なお、各杏葉の外形線はおおむね一致し、同一の様をもとに製作されたとみられる。ただし、鋌数は60本ほどから72本とばらつきがあり、鋌の数や間隔に明確な規格性は認められない。

## 2) 五角形(五稜形) 杏葉(図43、表9、図版22・41～44)

絵図には2点の五角形杏葉が描かれ、それぞれ「五稜ノ金具 大ナルモノ全キモノ五枚」、「前同小ナルモノ全キモノ二枚」と書かれている。ゴーランド・コレクションには前者に対応するもの5点、後者に対応するもの5点、計10点の五角形杏葉が確認でき、これらはすべて鹿谷古墳から出土したものとみられる。透かしをもつ五角形の一辺に立聞部を設け、残りの四辺を内彎させる。立聞部下方には透かしをもつV字状の突出部を付す。立聞部を含む全長は8.3～8.8cm、幅は最大で5.6～7.1cmである。これらは、五角形の外形の違いから、幅が6.0cm以上で幅広の輪郭をなす1類(図43-1～5)と、幅が6.0cmに満たずやや縦長の輪郭をなす2類(図43-6～10)に大別できる。いずれも厚さ約2.0mmの鉄板に金銅板を被せ、端部を裏側に折り返して留めている。立聞部は長さ1.2～1.6cm、幅2.8～3.1cmの長方形で、中央に長方形の立聞孔を設けている。

裏面の一部には繊維の錆着がみられ、図43-7は透かし部分にまで及んでいる(図版51下2)。金属製の地板をもたないにも関わらず鋌留がなされていることも勘案すれば、裏面に織物を貼り、透かしから生地をみせていた可能性が高い。すなわち、五角形の各角に打たれた鋌頭径約6.0mm、鋌頭高約0.7mmの鉄地銀被花形かしめ鋌によって、鉄地金銅板と織物を固定したとみられる。織物の固定効果を高めるためか、遺存状態のよい鋌脚はいずれも脚端部を叩き潰さずに折り曲げて処理している(図43-1・2・4・6)(図版44下4)。花形の鋌頭形状には鋌ごとに多少の差異が認められ、彫りが深く立体的なもの(図43-1など)と、浅く平板なものがある(図43-6など)。花卉数は6弁が多いが、7弁や8弁のものもあり、型打ちでなく一点ずつ叩いてつくったとみられる。一部の個体には、立聞孔に鉄地金銅張棒状吊金具が連結している。吊金具本体は、四隅に鉄地銀被花形かしめ鋌を打ち込む透入方形吊金具(図43-1・2・11)と、四隅と中央に鉄地銀被円頭かしめ鋌を打ち込む長方形吊金具(図43-7・9)の2種類が認められる。前者は1類に、後者は2類に伴う。

吊金具の裏面には繫に由来する有機質素材が付着しており、いずれも折り返して筒状にした皮革を繫本体とするとみられる。1類に伴う透入方形吊金具には、皮革製の繫本体とそれを巻く別素材とみられるものが付着しており、別材巻繫[片山2016]の可能性もある。一方、2類に伴う長方形吊金具には、繫本体の両側縁に縁飾が付く縁飾付繫らしき痕跡が付着している(図43-7)。

なお、本プロジェクトの調査を実施する以前は、図43-1および図43-7の吊金具は杏葉本体と接合されておらず、本体とは別個に管理されていたが、調査の過程で絵図と実物資料との照合作業を行った結果、その接合関係が明らかとなった。(金)

## ⑤雲珠・辻金具

### 1) 鉢状雲珠(図44、図版24・45)

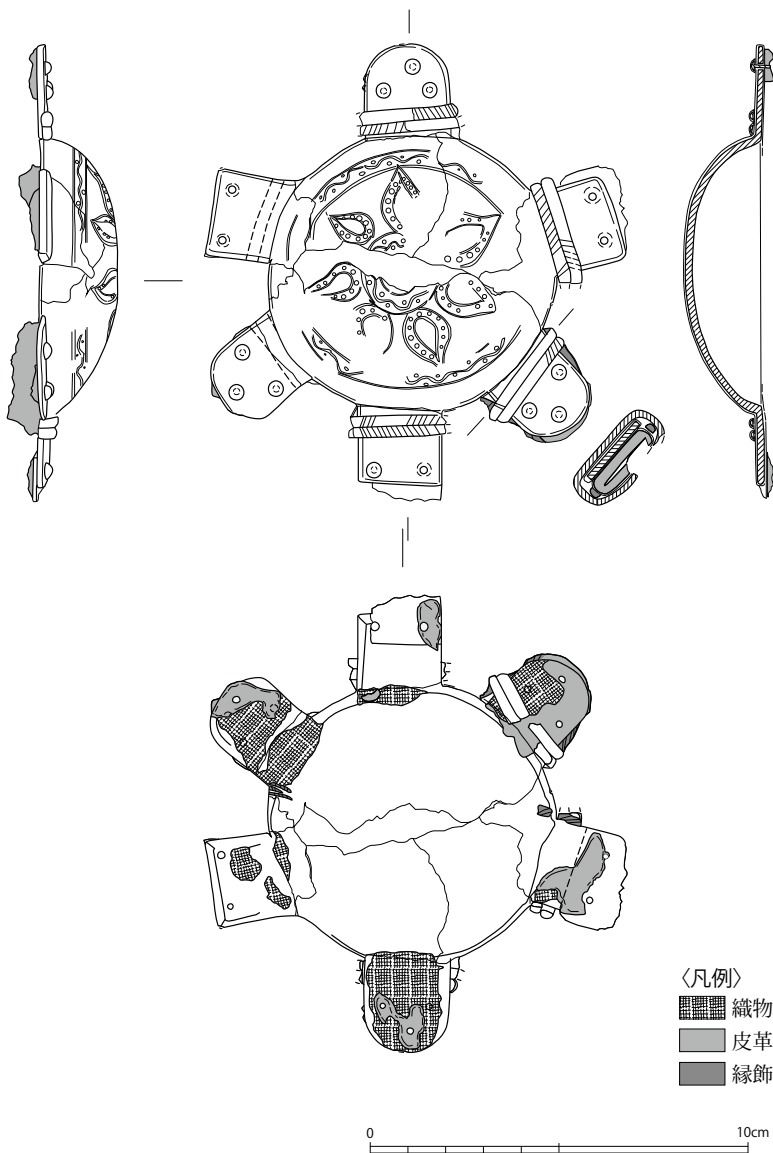


図44 鉢状雲珠実測図 (S=1/2)

六脚の鉄地金銅張鉢状雲珠である。絵図・集合写真で破片の状態であったのが、大英博物館による保存処理によって完形に復元された〔諫早・片山2014〕。図で上方の爪形脚とその左右の方形脚との距離がほかの脚どうしの距離に比べて長い、宮代栄一の偏在配置六脚雲珠に相当する〔宮代1986〕。大きさは、鉢を挟んで対応する二脚間の長さが11.2~12.2cm、高さ約2.2cmである。低く扁平な鉢部をもち、縁部には突帯などをもたない。鉢頂部には蹴り彫りと点打ちによる花文を施す。

花文<sup>12</sup>は内区と外区に二重の圏線に挟まれた波状列点文を配し、その間に一重の花弁文7弁をめぐる。花弁文は中に子葉の表現がみられ、子葉との間に円文を施す。内区の中には一重の圏線を置く。脚部は三鉾配置の爪形脚、二鉾配置の方形脚を交互に配し、六脚とする。表面で右上の脚、および下中央の脚の裏面には直接鉄地金銅張の破片が錆着しており、杏葉の吊金具の可能性はある。鉾は鉄地銀被円頭かしめ鉾で、鉾頭

径4.0~5.0mm、鉾頭高1.5~2.0mmである。また、斜め方向の刻みを施した2本の鉄地銀張貴金具が四つの脚に遺存する。いずれの脚裏面にも繋の痕跡を確認することができる。袋状に折返した皮革製の繋に織物を巻き、両側縁に縁飾を施した縁飾付織物巻繋〔片山2016〕で(図版51下3・4)、右下の脚の貴金具部分から、幅2.5cm、厚さ0.7cm程であったとみられる。

## 2) 鉢状辻金具 (図45・46、図版24・46~49)

全体の大きさ、鉢部への装飾の有無、脚の形状と鉾数などによって、3類に分類する。

なお、鉢状辻金具のうち、1類(図45-3)は絵図・集合写真ともに確認でき、2類と3類は集合写真にしか確認できないが、両者とも花形鉾を用いていること、2類は1類と同様に織物巻の確認できる繋が留められていることから、鹿谷古墳出土遺物と判断した。

鉢状辻金具1類 爪形脚に3鉾を留める図45-1~5が該当する。図45-1・3・4には鉢頂部に彫金による花文が確認でき、図45-2・5についても本来は彫金が施されていた可能性がある。鉢部の大きさには、鉢を挟んで対応する二脚間の長さが4.3~4.5cmでやや小型の図45-1・2・4と、4.9~5.1cmでや



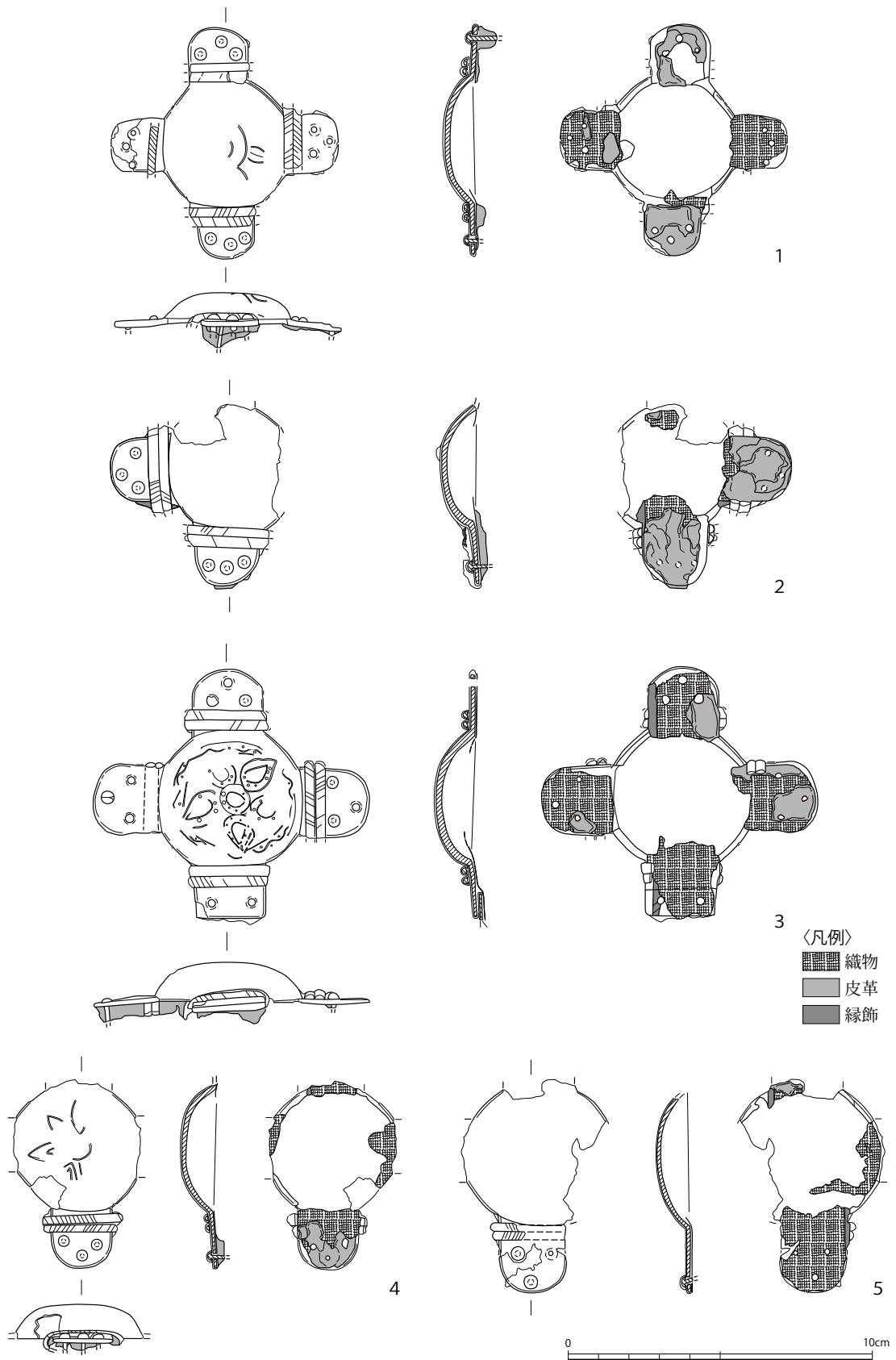


図45 鉢状辻金具実測図(1) (S=1/2)

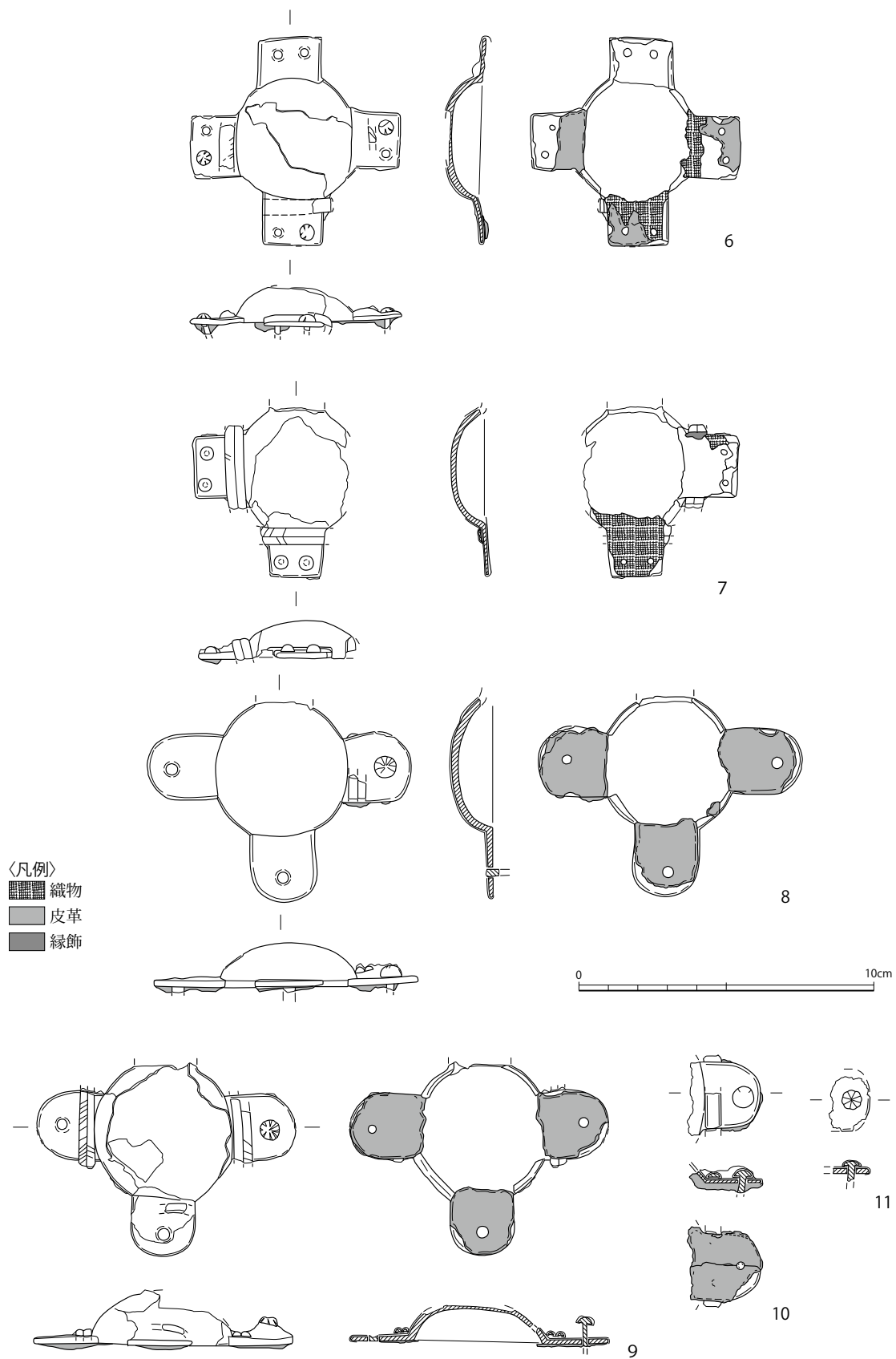


图 46 鉞状辻金具実測图 (2) (S=1/2)

や大型の図45-3・5がある。完形のもの大きさをみると、図45-1が二脚間の長さが7.5~7.7cm、高さ約1.2cm（鉤脚含めない）、図45-4が二脚間の長さが8.3~9.2cm、高さ約1.6cm（鉤脚含めない）である。いずれも扁平な鉢部をもち、縁部に突帯などをもたない。鉢頂部には蹴り彫りと点打ちによる花文を施す。遺存状態の良い図45-3をみると、花文の外区は二重の圈線に挟まれた波状列点文である。内区は二重の圈線に囲まれた列点文である。内区と外区の間に一重の花弁文5弁をめぐらす。花弁文は主弁の中に子葉の表現がみられ、主弁と子葉の間に円文を施す。脚部は基本的に爪形脚で3鉤を打つが、杏葉を直接吊り下げたとみられる脚（図45-3の下方）のみ方形で2鉤を打つ。鉤は鉄地銀被円頭かしめ鉤で、鉤頭径4.0~5.0mm、鉤頭高約2.0mmである。また、斜め方向の刻みを施した幅3.0~4.0mmの鉄地銀張貴金具2本で繫を留める。いずれの個体も遺存状態が悪く、繫の幅や厚さは不明である。繫の構造については図45-3の脚に残された痕跡から、袋状に折返した皮革製の繫に、織物を巻き両側縁に縁飾を施した縁飾付織物巻繫とみられる。

鉢状辻金具2類 方形脚に2鉤を留める図46-6・7が該当する。完形の図46-6で鉢を挟んで対応する二脚間の長さが7.1~7.2cm、高さ約1.5cmをはかる。扁平な鉢部をもち、縁部に突帯などをもたない。鉢頂部に彫金を施したり、別造の宝珠飾などを取り付けた痕跡は認められない。脚は方形で2鉤

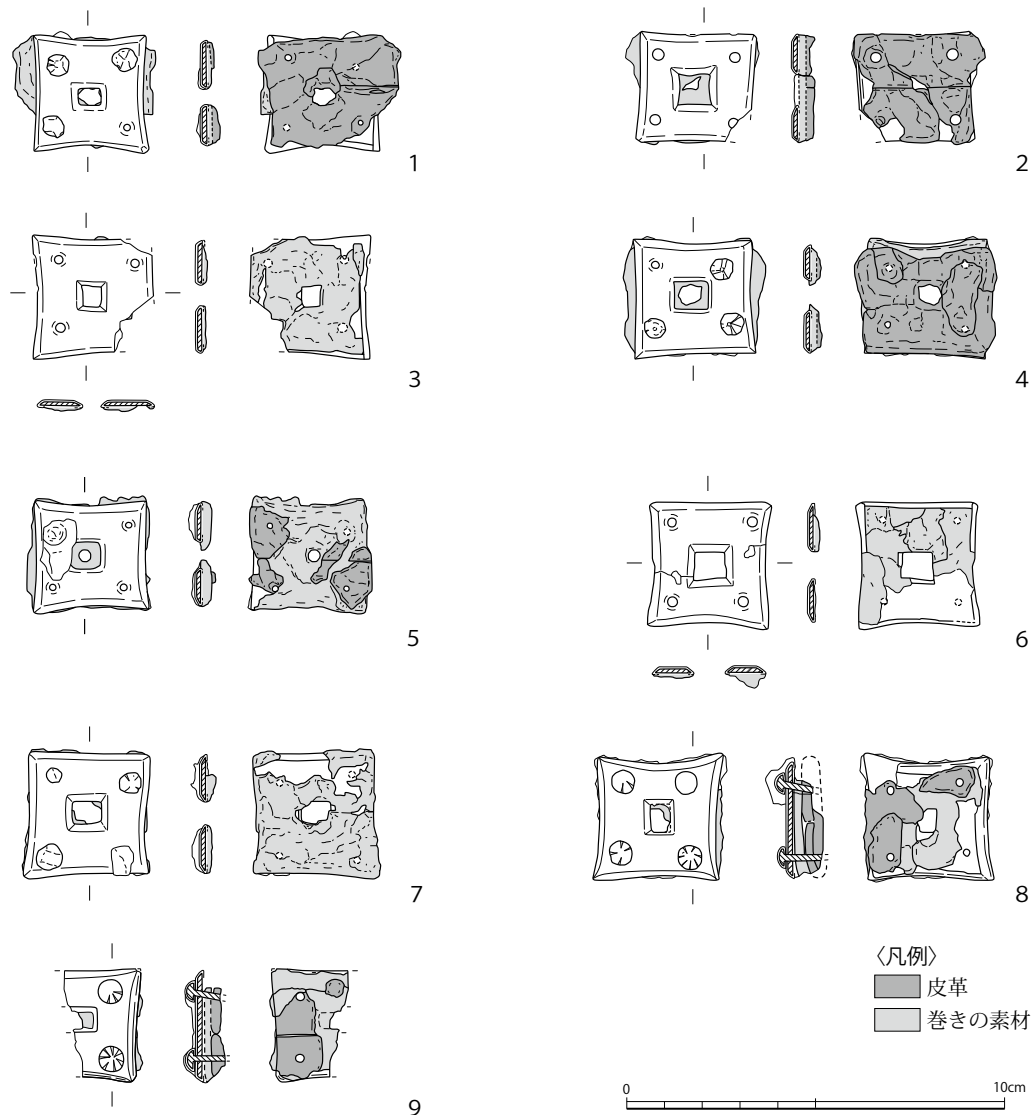


図47 透入方形飾金具実測図(1) (S=1/2)

を打つ。鉾は鉄地銀被花形かしめ鉾（図46-7については錆化が激しく花形鉾であることを確認しがたい）で、鉾頭径4.0～5.0mm、鉾頭高2.0～3.0mmである。最も遺存状態のよい図46-6の左側脚の鉾で6弁が確認できる。この鉾と綾杉状の刻みを施した幅5.0～7.0mmの貴金具1本で繫を留める。遺存状態が悪く繫の幅や厚さは不明である。繫の構造については、織物に巻かれた皮革製の繫本体が確認でき、織物巻繫か縁飾付織物巻繫のいずれかとみられる。図46-7も同様であるが、左側の脚裏面に残された痕跡から、両側縁に縁飾を施していることがわかる。

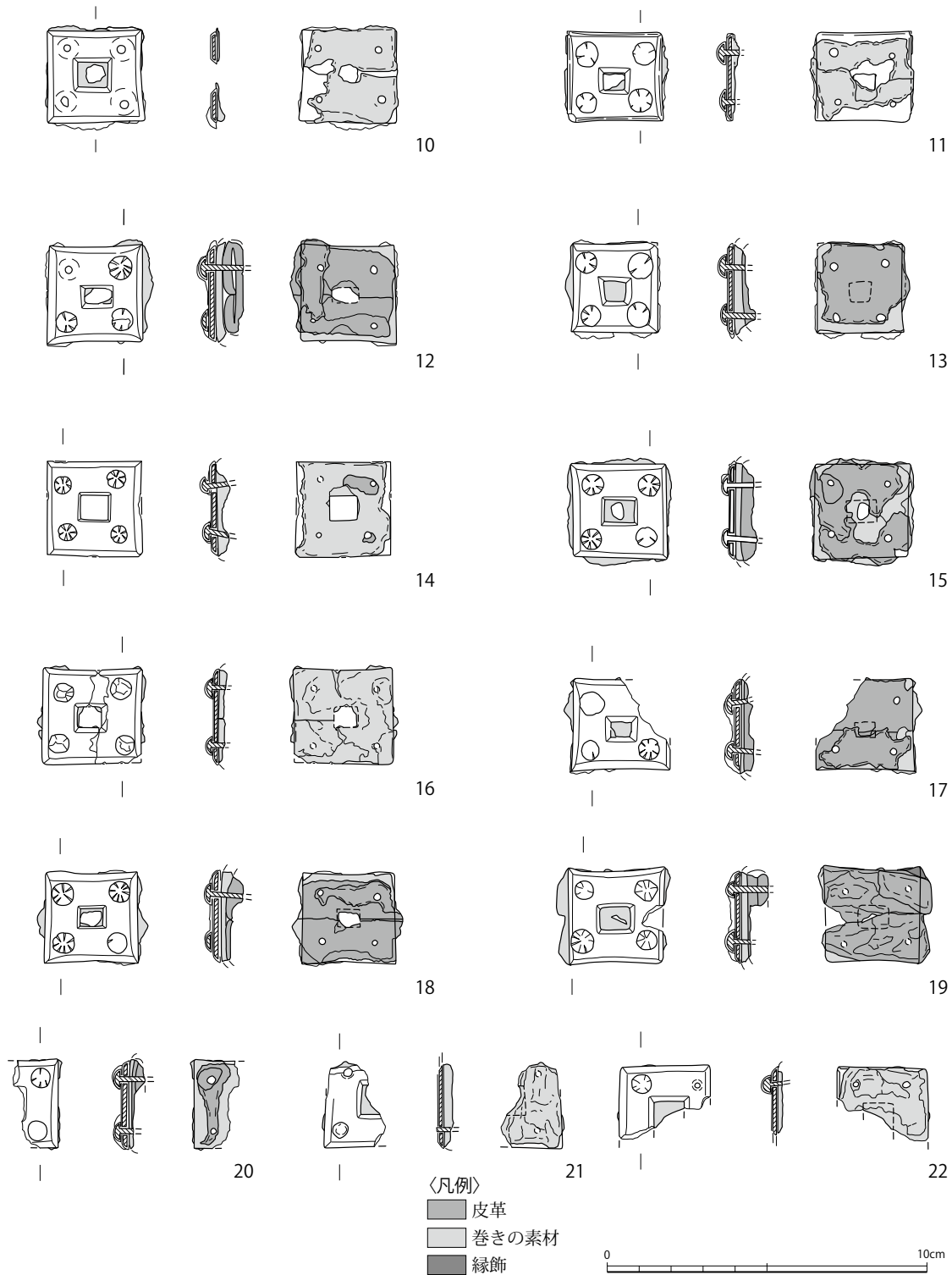


図48 透入方形飾金具実測図（2）（S=1/2）

鉢状辻金具 3 類 爪形脚に 1 鉾を留める図 46-8~10が該当する。いずれも完形ではないが、残存する大きさについてみると、図46-8は縦約6.8cm、横約9.0cmで、高さは約1.6cmである。図46-9は縦約6.6cm、横約8.9cmで、高さは約2.0cmである。図46-10は残存する大きさ縦約1.5cm、横約2.6cmである。やや偏平な半球形鉢をもち、縁部には突帯などをもたない。鉢頂部に彫金を施したり、別造の宝珠飾などを取り付けた痕跡は認められない。脚に打たれた鉾は鉄地銀被花形かしめ鉾で、鉾頭径7.0~8.0mm、鉾頭高3.0~4.0mmである。最も残りのよい図46-9の下方の脚に残る鉾で 8 弁が確認できる。この鉾と斜め方向の刻みを施した幅約4.0mmの鉄地銀張貴金具 2 本で繫を留める。いずれも遺存状態が悪く、繫の幅や厚さは不明である。繫の構造については、本体は皮革製であることを確認できるが、織物や縁飾の有無は確認できない。

表 10 透入方形飾金具の計測値

番号	分類	縦幅	横幅	鉾弁数	鉾頭径
47-1	1類	3.2	3.2	—	6.0~7.0
47-2		3.0	3.3	—	—
47-3		3.4	3.3	—	—
47-4		3.3	3.3	—	7.0
47-5		3.2	3.2	—	7.0
47-6		3.4	3.3	—	—
47-7		3.4	3.4	—	6.0~7.0
47-8		3.4	3.5	8	7.0
47-9		3.0	(2.1)	7	7.0
48-10	2類	2.9	3.1	—	—
48-11		2.9	3.0	—	7.0
48-12		3.2	3.1	8	6.0~8.0
48-13		2.9	2.8	—	7.0~8.0
48-14		3.0	3.0	6	6.0
48-15		3.0	3.1	6・7	7.0
48-16		3.1	3.2	—	6.0~7.0
48-17		3.0	3.2	7	6.0~7.0
48-18		2.9	3.0	—	7.0~8.0
48-19		3.1	3.0	—	6.0~8.0
48-20		2.8	(1.5)	—	7.0
48-21		(1.7)	(2.1)	—	—
48-22		(2.3)	2.9	—	6.0

〈凡例〉縦幅・横幅：cm。鉾頭径：mm。括弧内の数値は残存値。

⑥飾金具

1) 透入方形飾金具 (図47・48、表10、図版49・50)

鉄地金銅張透入方形飾金具が22点確認される。ほぼ同形同大のため絵図や集合写真との厳密な同定は難しいが、いずれも鹿谷古墳から出土したとみてよい。表10に各資料の大きさについて示しておく。細かくみると、四辺をわずかに内彎させた 1 類 (図47) と、四辺ともほぼ直線で方形の 2 類 (図48) に大別できる。前者は一辺が3.0~3.4cm、後者は2.8~3.2cmと、前者の方が若干大きいものが多い。鉄板の厚さはいずれも2.0~3.0mmである。透かし部分にも金銅板が折り込まれており、透かしは鉄板に金銅板を被せる前に穿けられていることがわかる。四隅に鉾を打って繫を固定している。鉾は鉄地銀被花形かしめ鉾で、鉾頭径は7.0~8.0mm、鉾頭高は3.0~4.0mmである。花卉の弁数には 6・7・8 弁が認められる。繫は、最も遺存状態のよい図48-12をみてみると、幅約3.1cm以上、厚さ約1.0cmで、折返して筒状にした皮革製の繫本体を覆うように別の一層の有機質素材がある。これは、皮革製の繫本体をさらに巻き込んだ別素材であると考えられることから、別材巻繫である可能性がある。同様の状況は図47-8・9、図48-12・18・19などで確認できる。なお、図48-19の裏面右上に縁飾を確認できるが、これが確かならば、別材巻繫に縁飾を付けたものということになる (図版51下5・6)。

2) 爪形飾金具 (図49、表11、図版51上)

鉄地金銅張爪形飾金具が 4 点確認される。絵図や集合写真にはみえないが、五角形杏葉 2 類と同じ縁飾付繫である点や、花形鉾の共通性などから、鹿谷古墳出土遺物と判断した。平面爪形の本体に打った 3 鉾と 1 本の貴金具によって繫を留める。金具本体は長さが2.2~2.5cm、幅が2.6~2.9cmと3.0mm程度のバラつきが認められるがほぼ同形同大の金具である (表11)。いずれも、厚さ2.0~3.0mm程度の鉄板に金銅板を被せた鉄地金銅張りで、鉾頭径6.0~8.0mmの鉄地銀被花形かしめ鉾を 3 鉾打つ。花卉

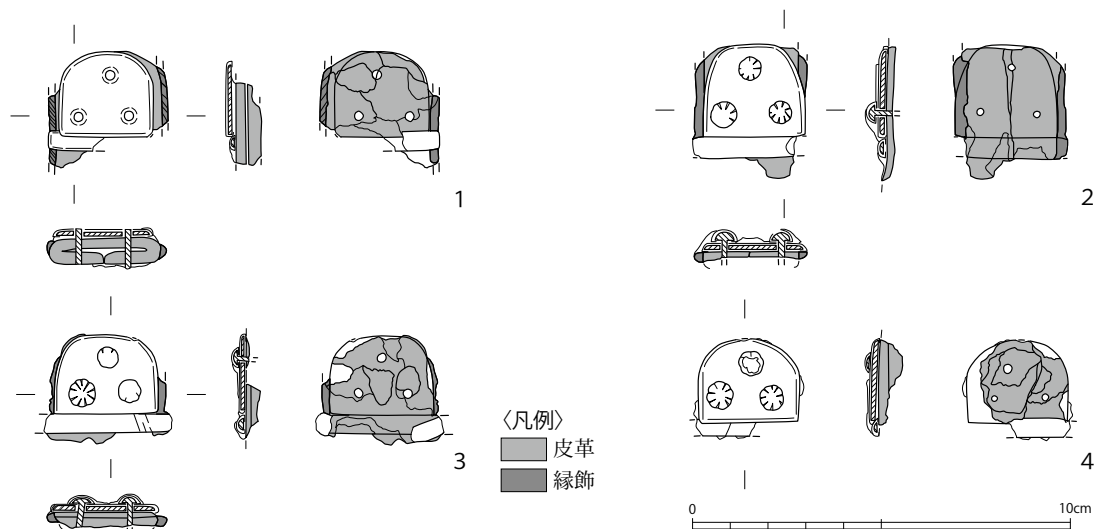


図 49 爪形飾金具実測図 (S=1/2)

表 11 爪形飾金具の計測値

番号	長さ	幅	鉸弁数	鉸頭径
49-1	2.3	2.6	—	—
49-2	2.5	2.8	8	6.0~7.0
49-3	2.2	2.9	9	6.0~8.0
49-4	2.3	2.8	8	8.0

〈凡例〉長さ・幅：cm。鉸頭径：mm。

の弁数はわかるもので、図49-2が 8 弁、図49-3が 9 弁である。これに伴う責金具は斜め方向の刻みを施した幅約5.0mmの鉄地銀被である。これらが留められた繫は、最も遺存状態のよい図49-1をみると、幅約3.2cm（縁飾を含む）、厚さ約8.0mmである。繫の構造については、折返して筒状にした皮革製の繫の両側縁に縁飾を付けた縁飾付繫である可能性が考えられる。（片山）

#### （4）玉 類



図 50 絵図に描かれた玉類 (京都国立博物館所蔵)

絵図には 3 点の玉が描かれており (図50)、「青クロ色」のものが 2 点、「クリイロ」のものが 1 点であったようである。色調からみて前者はガラス小玉、後者は土玉と推測される。



図 51 絵図と対応する可能性のある土玉写真 (The British Museum 所蔵)

現在、ゴーランド・コレクションには約1250点の玉類があり〔竹村2017〕、一部のガラス小玉や管玉、勾玉は紐で連結した状態で、収蔵あるいは展示されている。また連結せずに個別にケースに納めているものもあり、銀製空玉は専用ケースに納められている。ガラス小玉の中には、取り上げ時に折損したのか、破片があり、円形のケースの中に納められている。ゴーランドによれば大阪府芝山古墳からは1108点の玉類が出土しており〔Gowland1897、ゴーランド1981〕、ゴーランド考古資料玉類の大半を占める。ゴーランド・コレクション玉類の中に鹿谷古墳から出土し、絵図に描かれた玉類が含まれている可能性は十分あるが、膨大な量のガラス小玉の中からそれらを抽出することは極めて困難である。

土玉についても状況は同じであるが、絵図に描かれた土玉は、縦に長い楕円形で、半分に割れており、このような特徴をもつ土玉をゴーランド考古資料の中から抽出したのがOA+2977の図51である。暗褐色系の色調を呈しており、長さ7mm、幅6mm、孔径2mmで、大きさは絵図と類似するものとみられる。ただし破面にみられる3mm程の縦方向の痕跡は、絵図には描かれておらず、細かな計測値がない以上、厳密な同定は難しい。あくまで鹿谷古墳出土遺物の可能性を指摘するに留まる。(竹村亮仁・諫早)

#### (5) 須 恵 器

絵図には8点の須恵器が描かれており、そのうち7点をゴーランド考古資料の中から特定することができた。ここで紹介するのは、これらにロンドン古物学協会が所蔵するゴーランド直筆ノート(A)から鹿谷古墳出土遺物とみられる1点を加えた8点の須恵器である(図52)。ゴーランド考古資料には、このほかにも「Tamba」などのラベルが貼られている資料がある。これらについては鹿谷古墳群から出土したことは確かであろうが、鹿谷古墳出土遺物とは限定できないため、関連遺物として節を改めて紹介することとする。

##### ①台付子持壺(図52、図版25・26・52～55)

4点の台付子持壺と1点の台付子持壺の蓋がある。絵図には蓋と合わせて3点の台付子持壺が描かれており、それぞれ甲・乙・丙・丁という番号が付けられている。一方、ゴーランド・コレクションには完形品に復元されている3点と破片1点、計4点の台付子持壺が保管されており、図52-1を甲、図52-3を乙、図52-5を丙、図52-2を丁と同定することが可能である。図52-4は絵図には描かれていないが、ロンドン古物学協会が所蔵するゴーランド直筆ノート(古物A)を整理した竹村亮仁によれば、台付子持壺は4点出土と読み取ることが可能であり〔竹村2015:117〕、鹿谷古墳出土遺物と判断した。

図52-1は残存高27.9cm、胴部最大径17.5cm、脚部残存高9.6cmをはかる。脚部下半と口縁部は欠損しているが、現在は完形品に復元されている。頸部が短い有蓋壺に、比較的長い脚部を付したものである。肩部には4個の小壺を配置する。小壺は回転を用いて成形し、そののちに外面体部上半～口縁部端部にはカキメを施す。小壺は壺本体の肩部上に置き、周囲を粘土で補強して固定する。小壺は器高5.7～7.0cm、口縁部径3.8～3.9cmをはかる。胴部外面にはタタキの痕跡が残るが、胴部から頸部にかけてカキメが施され、これによりタタキ痕の大部分は消されている。胴部内面の底部にはやや小さい同心円文当具痕が認められるが、上部はナデ消される。脚部は粘土紐を巻き上げて成形し、外面全体にタタキを行い、更にカキメを施し整形する。脚部には現状の2条の沈線が巡らされ、この沈線により脚部は区画される。最上段の区画には長方形の透孔が4方向に穿たれる。2段目の区画には波状文が施されたのち、三角形の透孔が4方向に穿たれる。なお1段目の長方形透孔と2段目の三角形透孔は交互に穿たれている。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。F2226。ゴーランドが付けた土器番号はJ.1。

図52-2は残存高29.9cm、胴部最大径16.9cm、脚部は底部径15.6cm、高さ17.9cmをはかる。頸部と肩部に付属する小壺はすべて欠損しているが、現在は完形品に復元されている。胴部外面にはタタキの痕跡が残るが、胴部から頸部にかけてカキメが施され、これによりタタキ痕の大部分は消されている。胴部内面の底部にはやや小さい同心円文当具痕が認められるが、上部はナデ消される。脚部は粘土紐を巻き上げて成形し、外面全体にタタキを行い、更にカキメを施し整形する。脚部には3条の沈線が巡り、これによって区画されている。上から2・3段目には波状文が施されている。脚部最上段には長方形の透孔が、上から2・3段目には三角形の透孔がそれぞれ4方向に、交互に穿たれている。脚端部は直線的に外方に伸び、踏ん張りはさほど強くない。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。F2226a。

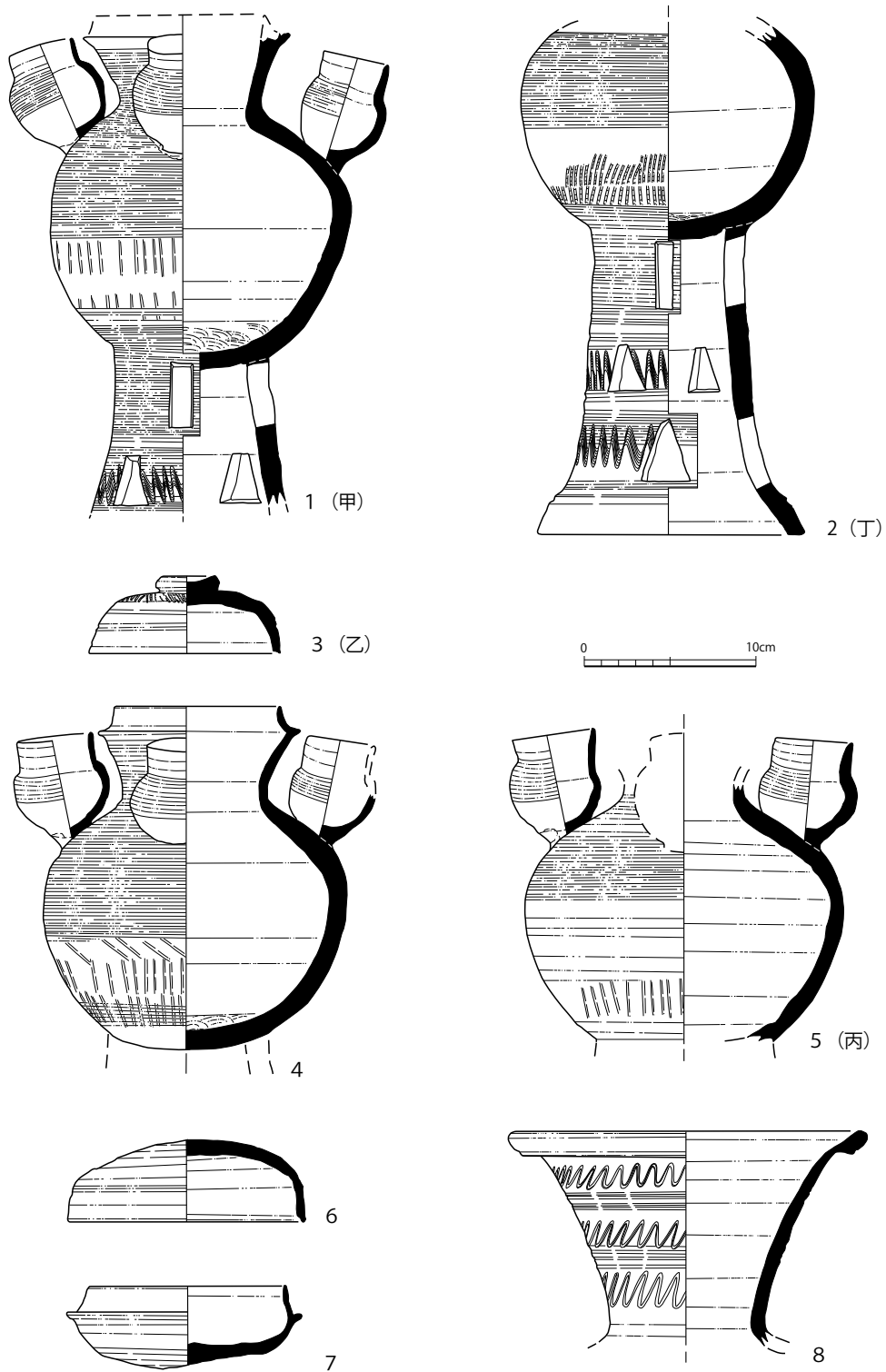


図 52 須恵器実測図 (S=1/4)

J.3。

図52-4は残存高19.9cm、口縁部径9.7cm、胴部最大径17.4cmをはかる。脚部は欠損しているが、現在は完形品に復元されている。頸部が短い有蓋壺に、比較的長い脚部を付したものである。肩部には4個の小壺を配置するが、現在はこれらの小壺は部分的な欠損は認められるものの、すべてが残存している。小壺は回転を用いて成形し、そののちに外面体部上半～口縁部端部にはカキメを施す。小壺は壺本体の肩部上に置き、周囲を粘土で補強して固定する。小壺は器高6.1～6.4cm、口縁部径4.3～4.5cmをは



かる。口縁部端部は、やや内傾しつつ高い立ち上がり有する。胴部外面にはタタキの痕跡が残るが、胴部から頸部にかけてカキメが施され、これによりタタキ痕の大部分は消されている。胴部内面の底部にはやや小さい同心円文当具痕が認められるが、上部はナデ消される。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。F2226d。J.2。

図52-5は残存高14.6cm、胴部最大径18.4cmをはかる。頸部と脚部は欠損している。頸部が短い有蓋壺で、肩部には4個の小壺を配置する。現在はこれらの小壺のうち2個が残存している。小壺は回転を用いて成形し、そののちに外面体部上半～口縁部端部にはカキメを施す。小壺は壺本体の肩部上に置き、周囲を粘土で補強して固定する。小壺は器高およそ6.2cm、口縁部径4.5～4.9cmをはかる。胴部外面にはタタキの痕跡が残るが、胴部から頸部にかけてカキメが施され、これによりタタキ痕の大部分は消されている。胴部内面の底部にはやや小さい同心円文当具痕が認められるが、上部はナデ消される。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。外面には広範囲に焼成時の降灰や自然釉の付着が認められる。F2226D。J.1a。

図52-3は台付子持壺の蓋である。頂部につまみをもつ。口縁部径11.0cm、器高4.4cmをはかる。外面は回転ナデののちに、上部1/2程度のやや広い範囲にはヘラケズリが施され、そののち天井部には列点文を円周状に施す。ケズリの方向は、反時計周りである。内面は回転ナデが施されるが、天井部付近は回転ナデののちに一定方向の静止ナデが施される。口縁部端部は内傾した面をもつ。いずれの台付子持壺とセットになるのか断定できないものの、ゴーランドは図52-3と図52-1をセットと認識していたと思われる。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。F2226。J.1。

## ②蓋杯 (図52、図版27・56)

杯身・杯蓋とも絵図に描かれている蓋杯と同定可能であり、鹿谷古墳出土遺物と判断される。なお、この杯身と杯蓋は形態的特徴から同型式とみてよいが、焼成などから厳密にはセットと考えにくい。

図52-6は杯蓋である。口縁部径13.6cm、器高4.8cmをはかる。外面は回転ナデののちに、上部の広い範囲には浅くヘラケズリが施される。ケズリの方向は、反時計周りである。外面の天井部と口縁部の境には沈線が施され、稜はわずかに膨らむ。内面は回転ナデが施されるが、天井部付近は一定方向の静止ナデが施される。口縁部端部は内傾した面をもつ。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。F2226b。J.4。

図52-7は杯身である。口縁部径11.4cm、器高4.7cmをはかる。外面は回転ナデののちに、上部1/2程度のやや広い範囲には浅くヘラケズリが施される。ケズリの方向は、反時計周りである。内面は回転ナデが施されるが、天井部付近は回転ナデののちに一定方向の静止ナデが施される。口縁部端部は単に丸くおさめる。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。F2226B。J.4。

## ③壺 (図52、図版27・56)

図52-8は広口壺の口縁部の破片である。絵図に器台の脚部として描かれている破片がこれにあたる。復元口縁部径19.8cm、残存高12.6cmをはかる。内外面ともに回転ナデが施され、頸部は沈線によって3つに区画される。

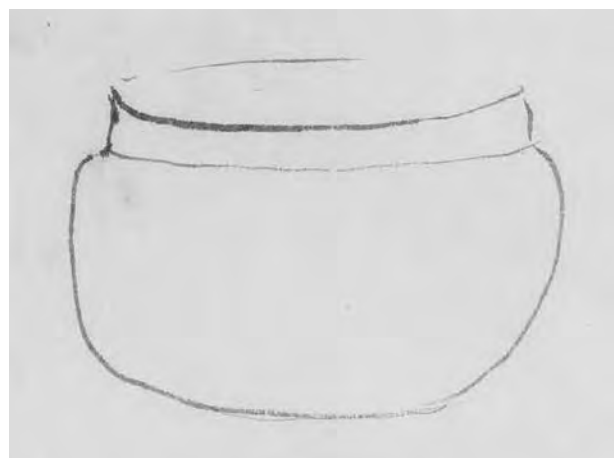


図53 絵図に描かれた須恵器埴 (縮尺不同)  
(京都国立博物館所蔵)

いずれの区画も上下幅の大きな波状文が施される。口縁部端部は外面に肥厚させ、肥厚させた部分には沈線が1条巡る。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。OA+764。J.3a。

#### ④ 埴

絵図には、これらのほかに須恵器の埴とみられる完形の土器が描かれている(図53)。しかしながら、ゴーランド考古資料の中には候補となる資料を見つけることができなかった。(前田・富山直人)

## 6. 関連遺物

### (1) 関連遺物の概要

本節で紹介する資料は、京都国立博物館所蔵絵図には描かれていないものの、ゴーランドの論文に掲載された集合写真に写っている金属製品や「Tamba」などのラベルが貼られた土器である(表12)。これらの資料はいずれも「古墳見分日記」には記載されなかったとみられ、①鹿谷古墳から出土したものの「古墳見分日記」には記載されなかった、②鹿谷古墳以外から出土した、という2つの可能性が考えられる。後述するようにこれらの中にはかなりの確度をもって②、すなわち鹿谷古墳以外から出土したものが含まれているが、ここではひとまず鹿谷古墳出土遺物の可能性を含む関連遺物として報告する。(諫早)

表12 鹿谷古墳出土遺物の可能性を含む関連遺物一覧

品目		数量	絵図	集合写真	注記	備考	図番号
馬具	素環轡	1	×	○	×	笹原古墳出土品か	図54
	鐙鞞	一括	×	○	×	一部芝山古墳出土品か	図56
	剣菱形杏葉	3	×	○	×	笹原古墳出土品か	図57
	辻金具	1	×	×	×		図58
	方形飾金具	8	×	△	×	一部芝山古墳出土品か	図59
	吊金具	5	×	×	×		図60
	不明金具	4	×	×	×		図61
装身具	耳環	3	×	○	×	笹原古墳出土品か	図62
	須恵器	5	×	×	○	「Tamba」などの注記あり	図63

### (2) 馬具

鹿谷古墳出土馬具の可能性を含む関連馬具として抽出できたのは、表20に掲げた30点の馬具である。抽出の手順については本章第5節(3)を参照されたい。なお、これらのうち少なくとも剣菱形杏葉については地元の大塚仰軒によって発掘され、エルンスト・ナウマンを介してゴーランドの手に渡った土佐国領石村(現、高知県南国市)の笹原古墳から出土した可能性が極めて高く<sup>13</sup>、素環轡や辻金具についてもその可能性がある。(諫早・片山)

#### ① 轡(図54、図版57)

4つの破片に分離し、接合しないものの、1個体分の鉄製素環轡とみられる(図54)。銜外環に環状鏡板と引手内環を別々に連結する構造である。図55に復元展開図を示す。この轡は集合写真には写っているが、絵図には描かれていない。大塚初重は「近畿地方の出土と推定」し〔大塚2003:117〕、富山

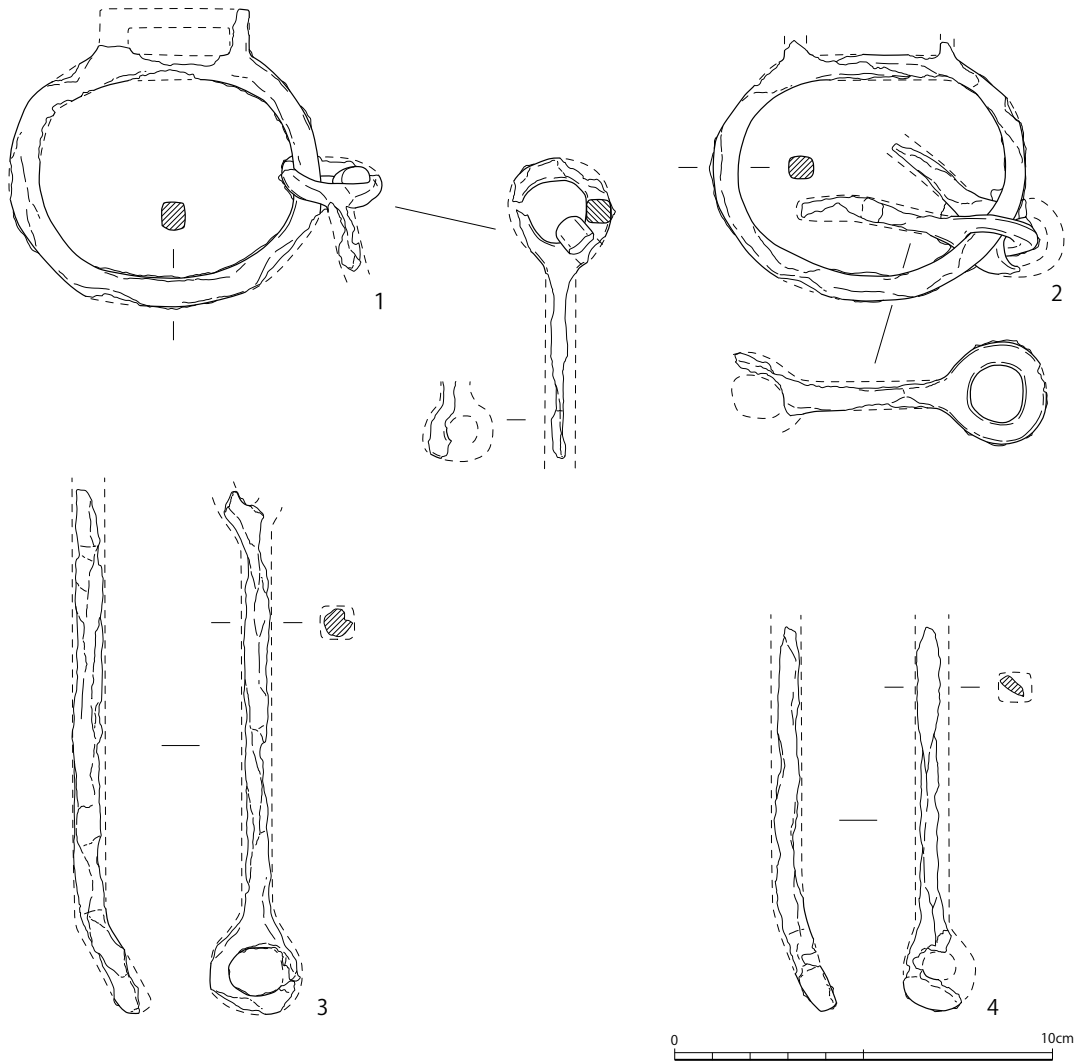


図54 素環轡実測図 (S=1/2)

直人は集合写真に写っていることを重視して「鹿谷古墳群」出土遺物とみたが〔富山2009〕、剣菱形杏葉同様、高知県笹原古墳出土遺物の可能性も十分ある<sup>14</sup>。

鏡板 図54-1は長さ約7.8cm、幅約8.2cm、図54-2は残存長約6.8cm、幅約8.2cmと、ほぼ同形同大の環状鏡板である。どちらも長さ約1.0cm、幅4.0～4.5cmほどの長方形の立間部を設けている。

銜 図54-1は残存長約7.9cm、外環は直径約2.7cm（推定）、図54-2は残存長約8.2cm、外環は直径約2.7cmをはかる。銜身に振りなどは認められない。外環は丁寧に鍛接している。後者は外環と内環が同じ方向を向いているのに対し、前者は直角方向を向く。

引手 どちらも完形ではないが、屈曲柄の1条線引手 a2類が2点出土している。図54-3は残存長約13.7cm、外環は直径約2.5cm（推定）、図54-2は残存長約10.1cm、外環は直径約1.9cm（推定）をはかる。外環は柄部に対して約20度曲げている。柄部に振りなどは認められない。集合写真をみると、前者は図54-1の銜外環に銜着している引手内環と同一個体であったとみられるが（図32-6）、現状では接合しない。同様に図54-4と図54-2の銜外環に連結している引手内環側の破片も同一個体とみられるが、接合はしない。（諫早）

## ②鏡（図56、表13、図版57）

木製の壺鏡を鞍から吊り下げる鏡鞆を構成したと思われる兵庫鎖の破片が9点確認される。確定す

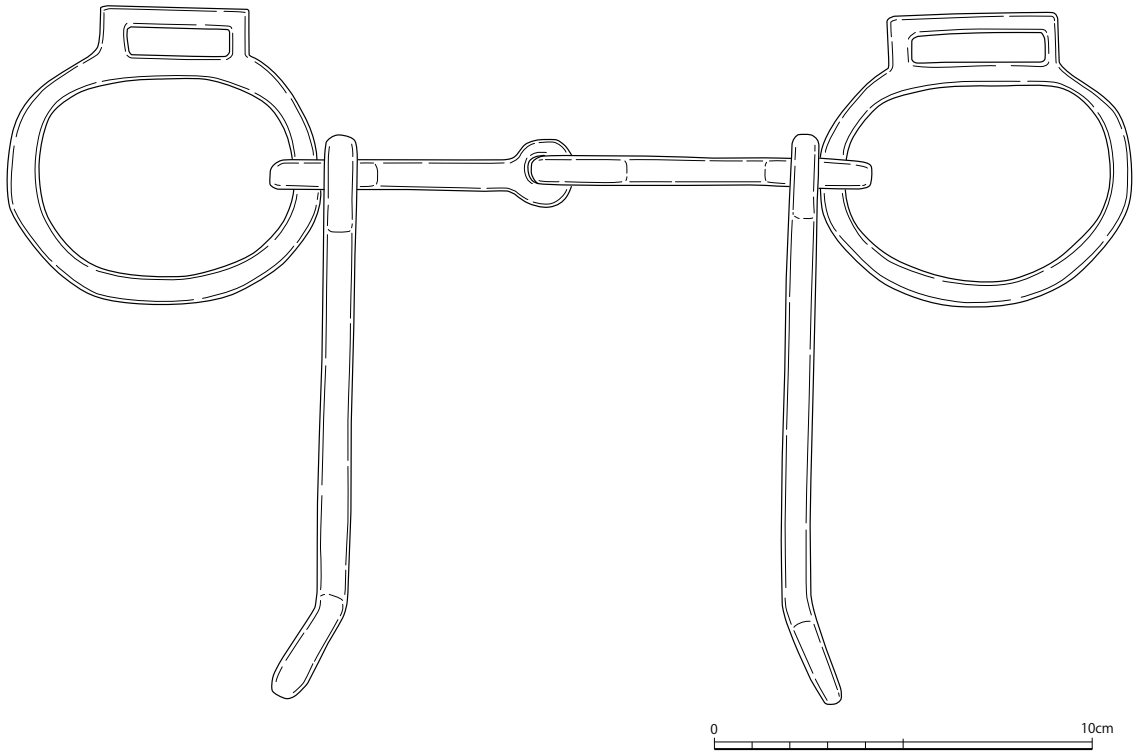


図55 素環轡復元展開図 (S=1/2)

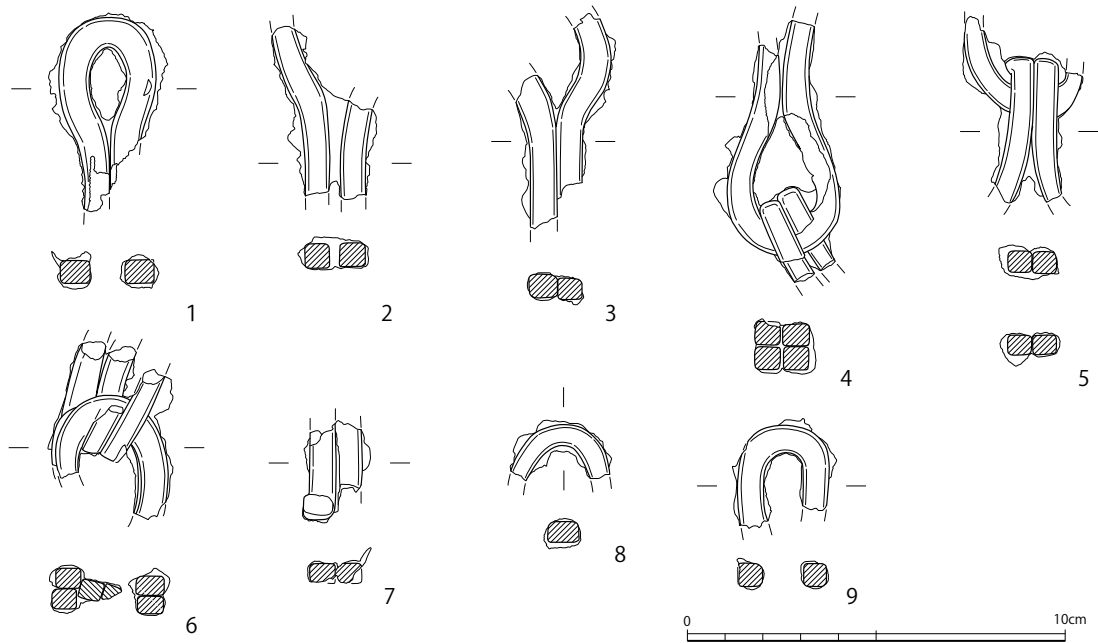


図56 鐙鞞実測図 (S=1/2)

表13 鐙鞞の計測値

番号	残存長	残存幅
56-1	5.3	2.7
56-2	4.6	2.7
56-3	5.7	2.5
56-4	6.9	3.1
56-5	4.9	3.3
56-6	5.7	3.0
56-7	2.6	1.5
56-8	1.5	2.7
56-9	2.9	2.6

〔凡例〕単位：cm.

ることは難しいが、図56-1は集合写真の図31-3に、図56-2は図31-5に該当する可能性がある。図56-3～9はこれらと同じ箱に保管されており、鉄棒のつくりや大きさ、遺存状況からみて、同じ鐙鞞を構成した可能性が高い。各破片の計測値は表13に示した通りである。太さ6.0～8.0mm程度の断面方形の鉄棒を輪状にし、これらをU字形に折り曲げて繋いで鎖とする。兵庫鎖からなる鐙鞞は、連数の多いものから少ないものへと変化し、兵庫鎖一連の長さも短いものから長いものへ変化することが指摘されてい

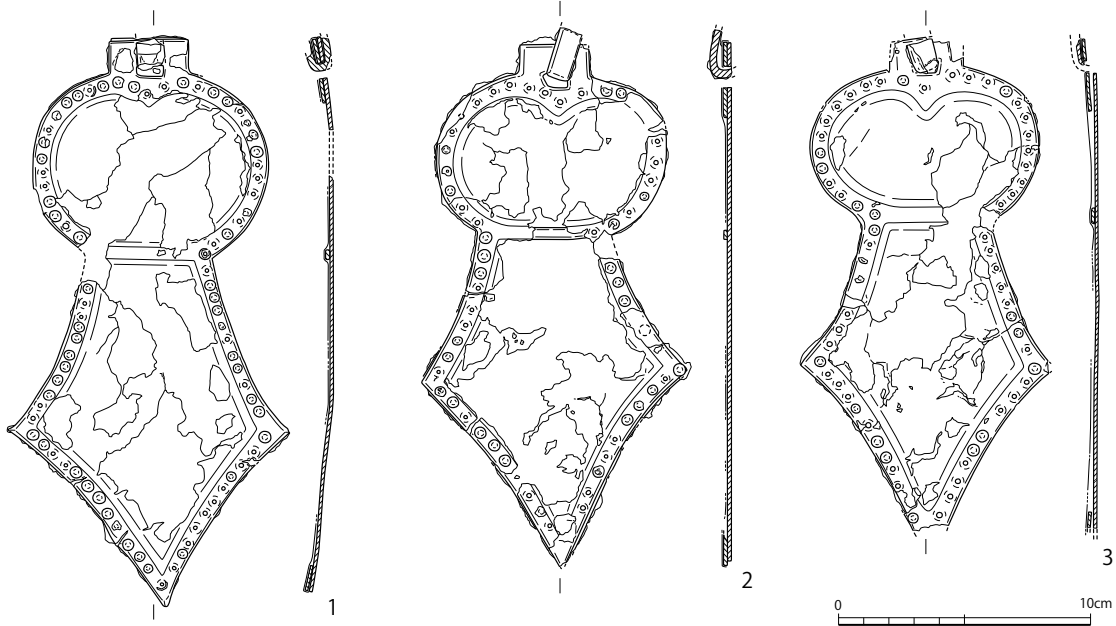


図57 剣菱形杏葉実測図 (S=1/3)

表14 剣菱形杏葉の計測値

番号	全長	幅		立間部		鍔数
		扁円部	剣菱部	長さ	幅	
57-1	22.4	9.3	11.2	1.3	3.2	(80)
57-2	20.6	9.2	10.5	1.1	2.8	(56)
57-3	(19.5)	9.1	(9.9)	1.2	3.0	(62)

〈凡例〉単位：cm（鍔数を除く）。括弧内の数値は残存値（数）。

るが〔斎藤1986〕、残念ながら本資料の中には一連の長さを知りうるものはない。

なお、図56-9についてはゴーランドが大坂府芝山古墳を発掘した際の横穴式石室内の出土位置を示す Div. 番号が書かれたタグ（た

だしゴーランド自身による手書きではなく新たに書き直されたもの）が取り付けられており、注意が必要である。図56-1～9とは別の箱にゴーランド自身による手書きとみられるタグが付された鎧鉈の破片が存在し、芝山古墳にも兵庫鎖の鎧鉈を伴う鎧が副葬されていたことは確実であり、図56-9についてもまずは芝山古墳出土の可能性を考えるべきであろう。一方で、タグが新たに書き直されたものであることや保管状況が異なることから、鹿谷古墳出土馬具の可能性を含む関連馬具として紹介しておく。（片山）

③杏葉（図57、表14、図版58・59）

鉄地金銅張剣菱形杏葉が3点確認される。いずれも集合写真に写っているが、絵図に描かれた剣菱形杏葉とは形態の特徴を異にする。先述したように図57-3は高知県笹原古墳出土遺物とみられる。立間部を含めた全長は20.6～22.4cm、幅は扁円部で9.1～9.3cm、剣菱部で10.5～11.2cmである。厚さ約1.5mmの鉄製地板に厚さ約2.0mmの鉄地金銅張縁金を重ね、周縁に鍔頭径4.0～5.0mm、鍔頭高1.5～2.0mmの鉄地銀被円頭かしめ鍔を密に打ち込んで固定する。縁金は扁円部内側上方が突出する心葉形で、扁円部と剣菱部の間に区画帯をもつ。立間部は長さ1.1～1.3cm、幅2.8～3.2cmの長方形で、方形ないし逆台形の立間孔をもつ。いずれの立間孔にも、幅約1.0cm、厚さ約0.3cmの鉄製棒状吊金具の破片が錆着している。各杏葉の外形線を細かく比べると、図57-2・3は比較的一致するが、図57-1は扁円部、剣菱部ともにやや大きい。鍔数も、図57-2・3が60本前後であるのに対し、図57-1は80本以上と多いことから、図57-1と2・3は別の馬装を構成した可能性も考えるべきだろう。（金）

④辻金具（図58、図版59）

図58は鉄地金銅張鉢状辻金具である。この鉢状辻金具は絵図・集合写真ともに確認できないが、ゴー

表15 方形飾金具の計測値

番号	分類	縦幅	横幅	鋲数	鋲頭径
59-1	1類	2.4	2.5	5	4.0
59-2		2.6	2.5	5	5.0
59-3		(2.5)	(2.4)	5	—
59-4	2類	2.2	2.3	4	—
59-5		2.3	2.3	4	5.0
59-6		2.2	2.2	4	—
59-7		2.3	2.1	4	5.0
59-8		2.2	2.2	4	—

〈凡例〉 縦幅・横幅：cm。鋲頭径：mm。括弧内の数値は残存値。

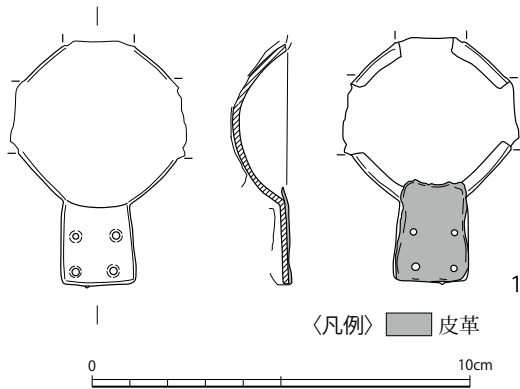


図58 鉢状辻金具実測図 (S=1/2)

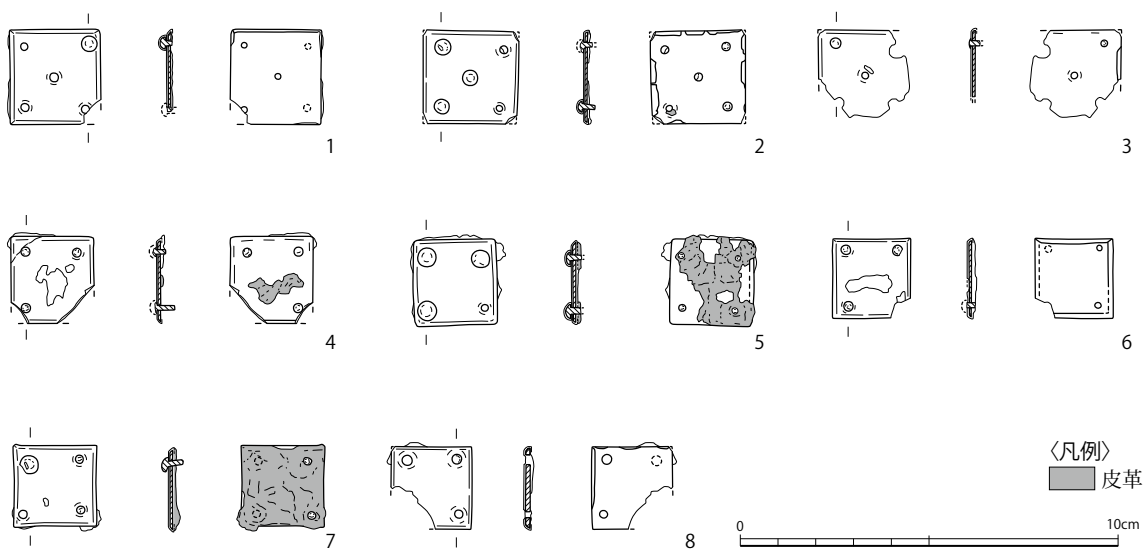


図59 方形飾金具実測図 (S=1/2)

ランド考古資料に含まれるほかの馬具には鉢状辻金具が含まれないことから、鹿谷古墳出土遺物の可能性を含む関連遺物として紹介する<sup>15</sup>。残存する大きさは縦約5.0cm、横約6.6cmで、高さ約1.6cmである。扁平な鉢部をもち、縁部には突帯などをもたない。鉢頂部に彫金を施したり、別造りの宝珠飾などを取り付けた痕跡は認められない。脚は方形で4鋲を打つ。鋲頭はすべて欠失している。遺存状態が悪く、繫の幅や厚さは不明である。繫の構造については、本体は皮革製であることを確認できるが、織物や縁飾の有無は確認できない。

#### ⑤飾金具 (図59、表15、図版60)

鉄地金銅張方形飾金具が8点確認される。四隅と中央に合わせて5鋲を打つ1類(図59-1~3)と、四隅に4鋲を打つ2類(図59-4~8)がある。図59-1・2のいずれかが、図32-66に対応する可能性が高いが、芝山古墳の遺物集合写真にも同じような特徴をもつ金具が写っており峻別が難しい<sup>16</sup>。また図59-4~8のいずれかが図32-65に該当する可能性がある。1類と2類は大きさも異なり、1類が縦・横ともに2.5cm前後なのに対して、2類は縦・横ともに2.1~2.3cm前後で一回り小さい。いずれも、厚さ1.0~1.5mmの鉄板に金銅板を被せた鉄地金銅張で、鋲頭径4.0~4.5mm、鋲頭高2.0mm前後の鉄地銀被円頭かしめ鋲で繫を留める。図59-4・5・7の裏面に、繫と思われる皮革状の有機質が付着している

が、織物などは確認できない。

⑥そのほかの馬具 (図60、表16・17、図版60・61)

図60-1～5は鉄地金銅張棒状吊金具の破片である。絵図や集合写真にはみえないが、以下に述べるように鹿谷古墳の剣菱形杏葉や五角形杏葉2類、あるいは上述の剣菱形杏葉に伴う可能性がある。

図60-1・2は長方形吊金具で、吊金具本体の大きさから、いずれも杏葉に連結されたとみられる。大きさからみて剣菱形杏葉などに伴う吊金具の可能性が高いが、鹿谷古墳の五角形杏葉2類には、このような吊金具が伴うため、五角形杏葉2類の吊金具の可能性もある。なお、図60-1の上半部には、別の鉄製品が錆着し、上半2鉾の鉾頭が確認できないことから、鉢状雲珠や鉢状辻金具の脚に直接留められた吊金具である可能性が考えられる。いずれも吊金具本体は長さ1.0～1.5mmの鉄板に金銅板を被せた鉄地金銅張で、鉾頭径4.0～7.0mm、鉾頭高2.0～3.0mmの鉄地銀被円頭かしめ鉾で繫を留める。全形がわかる図60-1・2をみると、吊金具本体は長さ2.8～2.9cm、幅2.2cmで、四隅と中央の計5鉾を打つ。裏面をみると図60-1・3～5に皮革状の有機質が、図60-2には織物がそれぞれ付着している。

図60-6～9は鉄地金銅張の本体に鉄地銀被円頭鉾を打った金具である。鉢状雲珠や辻金具の脚部、吊金具や方形飾金具の一部の可能性もある。いずれも、ゴーランド考古資料に含まれる馬具の中では、鹿谷古墳出土馬具の可能性が高いと考えられるが、芝山古墳やそのほかの馬具が混入している可能性も残される。いずれも1.0～2.0mmの鉄板に金銅板を被せたものである。鉾頭が残る図60-7をみると鉾頭径約5.0mm、鉾頭高約2.0mmの鉄地銀被円頭鉾で繫を留めている。いずれの個体においても裏面に皮革が付着しており、図60-7には裏面中央に皮革製繫の合わせ目と思われる痕跡も確認できる。

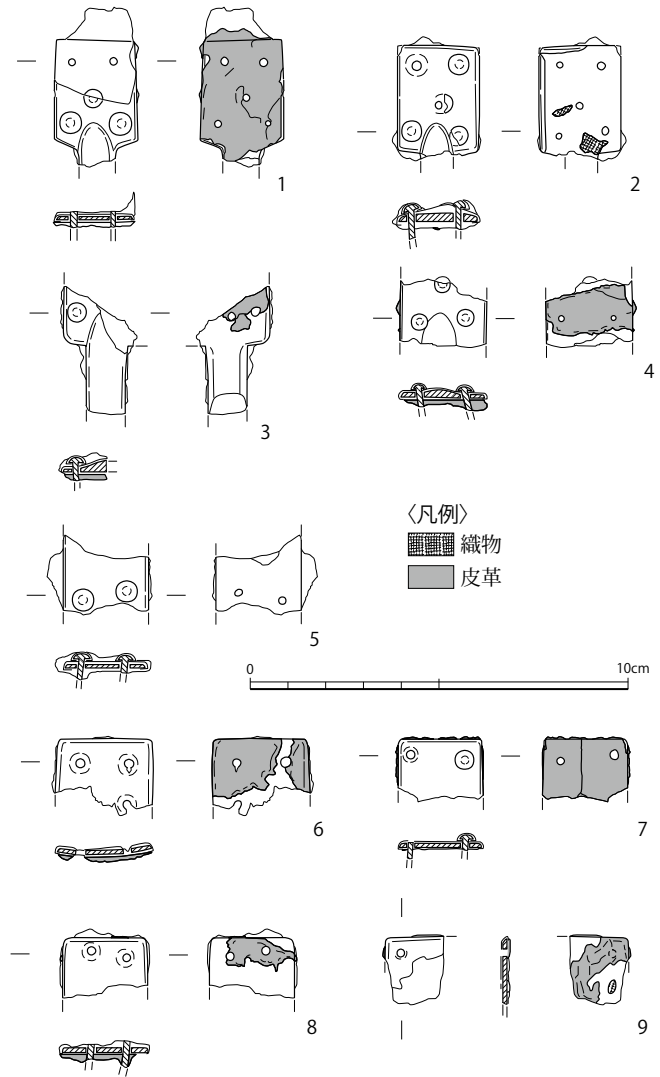


図60 そのほかの馬具実測図 (S=1/2)

表16 吊金具の計測値

番号	長さ	幅	鉾数	鉾頭径
60-1	(3.4)	2.3	5	6.0
60-2	(3.3)	2.2	5	6.0
60-3	(3.1)	(2.0)	(1)	5.0
60-4	(1.7)	2.3	(3)	5.0
60-5	(2.1)	2.4	(2)	6.0

〈凡例〉単位：cm。括弧内の数値は残存値（数）。

表17 不明金具の計測値

番号	長さ	幅	鉾数	鉾頭径
60-6	(1.2)	2.7	(3)	—
60-7	(1.7)	2.4	(2)	5.0
60-8	2.4	2.1	(2)	—
60-9	(1.8)	(1.6)	(1)	—

〈凡例〉単位：cm。括弧内の数値は残存値（数）。

(片山)

(3) 耳環 (図61、図版61)

集合写真には3点の耳環が写っている(図32)。写真からある程度の直径や太さを知ることができるが、材質についてはまったくわからない。ゴーランド考古資料には10点の耳環があり(表18)、これらの中から明らかに直径や太さが異なる耳環4・5・8~10を除いた5点が候補となる。このうち銅製の耳環1(図62-1)は写真40と細部形状がよく似ており、同一個体の可能性が高い。遺存状態が悪く表面材の有無は不明である。直径2.7~2.9cm、太さ5.0mm。残る2点については、写真が不鮮明で確定することは難しいが、直径や太さ、材質からみて、1対を構成した可能性が高い銅芯金張の耳環2・3、銅芯銀張の耳環6・7が候補となる。『ガウランド 日本考古学の父』において耳環7が芝山古墳出土遺物として紹介されており、芝山古墳出土遺物の集合写真の中に銀製耳環(耳環8~10)と同定できる耳環が写っていることをふまえれば、銀装の耳環6・7についてはひとまず芝山古墳出土遺物とみておくのが穏当であろう。すなわち写真39・41がゴーランド考古資料の中に含まれているのであれば、耳環2・3(図62-2・3)である可能性が高い。耳環2は直径3.1cm、太さ6.0mm。耳環3は直径3.0cm、太さ6.0cmで、開口面に金板の折込皺が認められる。

なお、ナウマンが描いた笹原古墳の出土状況図をみると、3点の耳環(Metal rings)が出土しており〔富山2018:図3〕、ゴーランドの直筆ノート(B)にも記載がある。集合写真の配置からみてこれが笹原古墳出土遺物である可能性は十分考えられるが、直筆ノート(B)に記載された耳環と材質や計測値が異なることから<sup>17</sup>、ここではその立場をとらない。(諫早)

表18 集合写真に写る耳環とゴーランド考古資料の耳環計測値

番号	材質	直径 (cm)	太さ (mm)	ハリス・後藤2003	OA番号
写真39	不明	約2.8	約6.0	160 (鹿谷古墳)	
写真40	不明	約2.8	約5.5	160 (鹿谷古墳)	
写真41	不明	約2.6	約5.5	160 (鹿谷古墳)	
耳環1	銅製	2.7×2.9	5.0	—	OA+1241
耳環2	銅芯金張	3.1	6.0	235中 (出土地不明)	OA+7355or7357
耳環3	銅芯金張	3.0	6.0	235左 (出土地不明)	OA+7355or7357
耳環4	銅芯金張	1.9	5.0×7.0	235右 (出土地不明)	OA+7362
耳環5	銅芯銀張	2.9×3.3	8.0	—	OA+1248
耳環6	銅芯銀張	2.6×2.9	6.0	—	OA+1239
耳環7	銅芯銀張	2.6×2.9	6.0	164右 (芝山古墳)	OA+1240
耳環8	銀製	2.0	2.0	164中下 (芝山古墳)	OA+2997-1
耳環9	銀製	1.9	2.0	164中上 (芝山古墳)	OA+2997-2
耳環10	銀製	1.9	2.0	164左 (芝山古墳)	OA+2997-3

〔凡例〕写真39~41の計測値は写真からの略測値。

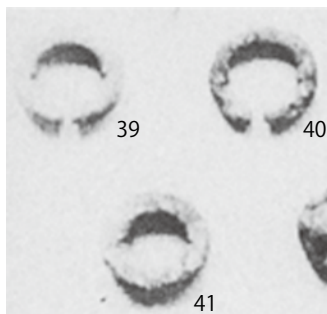


図61 集合写真に写る耳環 (S=約1/2)(番号は図32と対応)(The British Museum所蔵)

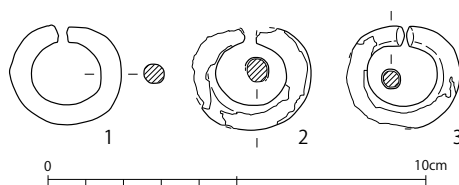


図62 耳環実測図 (S=1/2)



## (4) 須恵器 (図63、図版62)

京都国立博物館所蔵絵図には描かれていないものの、「Tamba」などのラベルが貼られているものである。筆跡からみてゴーランド自らの注記とみられ、鹿谷古墳を含む鹿谷古墳群出土遺物と考えられる。これらについては、鹿谷古墳出土遺物と一緒に購入した可能性も考えられるが、いずれも細片であり、ここではゴーランド自身が鹿谷古墳群を調査した際に採集した可能性を考えておきたい。

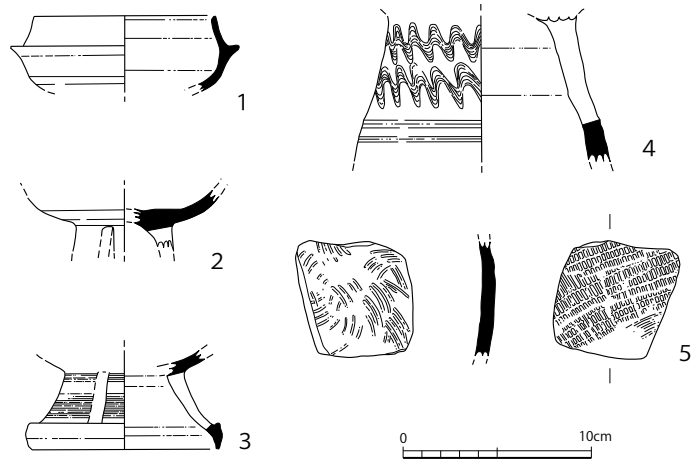


図63 須恵器実測図 (S=1/4)

図63-1は杯身で、口縁部を含む破片

である。復元口縁部径9.5cm、残存高4.0cmをはかる。口縁端部は内傾する面をもつ。内外面ともに回転ナデ調整であるが、外面底部には反時計周りの回転ヘラケズリが2/3程度の広い範囲に施される。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。F2291.2。

図63-2は高杯脚部の破片である。残存高3.3cmをはかる。杯部は内外面ともに回転ナデ調整であるが、外面底部付近には反時計周りの回転ヘラケズリが施される。脚部は内外面ともにナデ調整である。脚部には3方向の長方形透孔が穿たれる。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。F2290.1。

図63-3は高杯脚部の破片である。復元脚端部径10.0cm、残存高3.9cmである。杯部は内外面ともに回転ナデ調整であるが、外面底部付近には回転ヘラケズリが施される。脚部は内外面ともにナデ調整であるが、外面は脚端部をのぞき、カキメが施される。脚部には3方向の長方形の透孔が1段穿たれている。脚端部はやや内面に屈曲する。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。OA+783。

図63-4は器台の脚部の破片と考えられる。残存高は7.7cmをはかる。内外面ともに回転ナデ調整である。外面には沈線が巡り、上下に区画される。沈線より上には2条の波状文が施される。また沈線より上には3方向に長方形の透孔が沈線の施文後に穿たれている。外面に2条の波状文を施す。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。F2291.3。

図63-5は甕の胴部の破片である。残存長約6.0cmをはかる。外面には格子状タタキが、内面には同心円文当具痕が認められる。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。OA+798。 (前田・富山)

表 19 鹿谷古墳出土馬具一覽

			番号	抽出精度 <sup>1</sup>	同定資料		文 献				OA番号	
					絵 図	集合写真	Gowland <sup>2</sup>	大塚 <sup>3</sup>	ハリスほか <sup>4</sup>	富山 <sup>5</sup>		
轡	f字形鏡板轡	本体	36-1	A	○	18	29	—	191	5-2	OA+1257	
		引手壺	36-2	B	△	17	—	—	236**	5-2	OA+3044	
	八角形鏡板轡	本体	38-1	A	○	33	29	—	190	5-3	OA+1255	
		引手壺	38-2	B	△	—	—	—	—	—	OA+3015	
		吊金具	38-3	A	○	8	—	—	167*	—	OA+3014	
鞍金具	磯・洲浜金具（前輪）		39-1	A	○	54、56~58	30e	—	196	7	OA+3045	
	磯・洲浜金具（後輪）		40-2	A	○	67	—	7-1*	166*	7	OA+3045	
			40-3	A	○	69	—	—	—	7	OA+3045	
	覆輪			41-4	A	○	48・49	—	—	—	—	OA+3046
				41-5	B	—	△	—	—	—	—	OA+3015
				41-6	B	—	△	—	—	—	—	OA+3046
				41-7	B	—	△	—	—	—	—	OA+3046
				41-8	B	—	△	—	—	—	—	OA+3015
				41-9	B	—	△	—	—	—	—	OA+3015
				41-10	B	—	△	—	—	—	—	OA+3015
	磯金具片		41-11	B	—	—	—	—	—	—	OA+2963	
杏葉	劍菱形杏葉		42-1	B	—	30	30a	—	238**	6-7	OA+1253	
			42-2	B	—	11	—	—	193	6-8	OA+2991	
			42-3	B	—	29	—	—	193	6-9	OA+2992	
			42-4	B	—	7	—	—	193	6-10	OA+3051	
			42-5	A	○	31	—	—	238**	6-11	OA+1253	
	五角形杏葉		43-1	A	○	9、60	—	—	195	6-15	OA+1252, 3015	
			43-2	A	△	59	—	7-6*	195	6-17	OA+3014	
			43-3	B	—	38	31a?	—	195	6-18	OA+2996	
			43-4	B	—	63	—	—	—	6-19	OA+2994	
			43-5	B	—	61	—	7-5*	195	6-16	OA+3014	
			43-6	A	○	64	—	—	195	6-22	OA+1252	
			43-7	B	—	—	—	—	—	6-20	OA+3015	
			43-8	B	—	—	—	—	—	6-24	OA+3015, 3051	
			43-9	B	—	10	—	—	—	6-21	OA+3015, 3207 or 3107?	
五角形杏葉吊金具		43-11	B	—	—	—	—	—	OA+299 =	OA+3015		
雲珠・辻金具	鉢状雲珠		44	A	○	22・24?	31c	8-1*	165*	6-32	OA+3007, 3013, 3015	
	鉢状辻金具	1類	45-1	A	○	△	—	8-2*	—	6-26	OA+3015	
			45-2	B	—	△	—	—	—	6-27	OA+3015	
			45-3	A	○	23	—	—	241**	6-25	OA+3051	
		45-4	B	—	△	—	—	—	6-29	OA+3007		
		45-5	B	—	12	—	—	—	6-28	OA+3051		
	3類	46-6	B	—	37	31b	—	240**	6-35	OA+3015		
		46-7	B	—	—	—	—	240**	6-31	OA+7362		
		46-8	B	—	—	—	—	—	6-33	OA+2971, 2976		
	46-9	B	—	43	—	—	241**	6-34	No Number			
	46-10	B	—	—	—	—	—	—	OA+3077			
46-11	B	—	—	—	—	—	—	OA+3051				
飾金具	透入方形飾金具		47-1	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015	
			47-2	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015	
			47-3	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015	
			47-4	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015	
			47-5	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015	
			47-6	B	—	—	—	—	—	—	No Number	
			47-7	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015	
			47-8	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015	
			47-9	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015	
			48-10	A	△	—	—	—	—	—	OA+3015	
			48-11	A	△	—	—	—	—	—	OA+3015	
			48-12	A	△	—	—	—	—	—	OA+3015	
			48-13	A	△	—	—	—	—	—	OA+3015	
			48-14	A	△	32?	—	—	—	—	—	OA+3015

飾金具	透入方形飾金具	48-15	A	△	—	—	—	—	—	OA+3015
		48-16	A	△	—	—	8-4?*	166*	—	OA+3007
		48-17	A	△	—	—	—	—	—	OA+3015
		48-18	A	△	—	—	—	—	—	OA+3052
		48-19	A	△	35?	—	—	—	—	OA+3015
		48-20	A	△	—	—	—	—	—	OA+3015
		48-21	A	△	—	—	—	—	—	OA+3015
		48-22	A	△	—	—	—	—	—	OA+3015
	爪形飾金具	49-1	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015
		49-2	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015
		49-3	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015
		49-4	B	—	—	—	—	—	—	OA+3015

〈凡例〉 1：A—鹿谷古墳出土遺物。B—鹿谷古墳出土遺物の可能性の高いもの。 2：〔Gowland1897〕 3：〔大塚1977〕 4：〔ハリス・後藤2003〕 5：〔富山2009〕 ○：絵図に描かれているもの。△：絵図・集合写真との厳密な対応がとれないもの。\*：芝山古墳出土遺物として紹介されたもの。\*\*：出土地不明遺物として紹介されたもの。

表 20 鹿谷古墳出土馬具の可能性を含む関連馬具一覧

	番号	抽出精度 <sup>1</sup>	絵 図	集合写真	文 献				OA番号		
					Gowland <sup>2</sup>	大塚 <sup>3</sup>	ハリスほか <sup>4</sup>	富山 <sup>5</sup>			
轡	素環轡	54	D	×	6	—	—	236**	5-1	OA+3044	
鐙	鐙鞞	56-1	C	×	3	—	—	—	—	OA+2793	
		56-2	C	×	5?	—	—	—	—	OA+3048	
		56-3	C	×	—	—	—	—	—	OA+2970	
		56-4	C	×	—	—	—	—	—	OA+2793	
		56-5	C	×	—	—	—	—	—	OA+2976	
		56-6	C	×	—	—	—	—	—	No Number	
		56-7	C	×	—	—	—	—	—	OA+394 =	
		56-8	C	×	—	—	—	—	—	OA+3048	
杏葉	剣菱形杏葉	57-1	D	×	25	—	—	194	6-12	OA+2985, 2986, 2987	
		57-2	D	×	26・27	—	—	194	6-13	No Number	
		57-3	D	×	28	30b	—	194	6-14	OA+2985, 2986, 2987	
辻金具	鉢状辻金具	58	C	×	—	—	—	6-30	OA+3077		
飾金具	方形飾金具	1類	59-1	C	×	△ (66?)	—	—	—	—	OA+3051
			59-2	C	×	△ (66?)	—	8-3?*	166*	—	OA+3007
			59-3	C	×	—	—	—	—	—	OA+2798
			59-4	C	×	△ (65?)	—	—	—	—	OA+3015
		2類	59-5	C	×	△ (65?)	—	—	—	—	OA+3015
			59-6	C	×	△ (65?)	—	—	—	—	OA+3015
			59-7	C	×	△ (65?)	—	—	—	—	No Number
			59-8	C	×	△ (65?)	—	—	—	—	OA+3051
その他の馬具	吊金具	60-1	C	×	—	—	—	—	—	OA+2991	
		60-2	C	×	—	—	—	—	—	OA+3077	
		60-3	C	×	—	—	—	—	—	OA+3068	
		60-4	C	×	—	—	—	—	—	OA+3015	
		60-5	C	×	—	—	—	—	—	OA+2973	
	不明金具	60-6	C	×	—	—	—	—	—	OA+3015	
		60-7	C	×	—	—	—	—	—	OA+2979	
		60-8	C	×	—	—	—	—	—	OA+2793	
		60-9	C	×	—	—	—	—	—	No Number	

〈凡例〉 1：C—鹿谷古墳出土遺物の可能性を含む関連遺物。D—高知県笹原古墳出土遺物の可能性の高いもの。 2：〔Gowland1897〕 3：〔大塚1977〕 4：〔ハリス・後藤2003〕 5：〔富山2009〕 △：集合写真との厳密な対応がとれないもの。\*：芝山古墳出土遺物として紹介されたもの。\*\*：出土地不明遺物として紹介されたもの。

## 注

- 1) 図23の鹿谷古墳の範囲や支群名称は龍谷大学考古学研究会や本プロジェクトの調査成果を反映したものであり、京都府や亀岡市の遺跡地図とは必ずしも対応しない。
- 2) ゴーランドの撮影したとみられる鹿谷古墳群の石柵を持つ石室の写真は 3 枚あるが、いずれも仕切石を持たず 1881年発掘墳とは異なる (図版12上・13)。
- 3) 地図には番号が振られていないが、亀岡市教育委員会の土井孝則氏は一覧表の記載内容から 5 号墳と判断したとのことである。また京都府教育委員会の古川匠氏を通じて京都府教育委員会が保管している遺跡台帳の原本を照会した結果、5 号墳として登録されていることを確認した。
- 4) 京都府・市町村共同統合型地理情報システム (GIS) 遺跡マップ  
<https://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/top/select.asp?dtp=671> (最終閲覧日: 2019年 1 月15日)  
5号墳が15号墳として登録された経緯について確認したところ、GISの作成時に番号付けにミスが生じているようであり、現在、番号の整理を検討しているとのことである。
- 5) 図28・29の古墳のドットは龍谷大学考古学研究会や本プロジェクトの調査成果を反映したものであり、京都府や亀岡市の遺跡地図とは必ずしも対応しない。
- 6) 以下に両者の論文の記載内容を載せておく。  
「此石柵の左方には轡ありし、石柵の下なる床の中央より少しく右方には刀、鍍金せし銅片、珠の碎片ありし、石柵の下なる堰板の如き平石の外には左の隅に刀を立掛けありし、平石の外中央及び右方には祭器の台付き土器等ありし〔若林1898: 255〕」  
「発見の当時此の石柵の西隅に轡あり、柵の下、櫛壁内に直刀及び金銅珠片等を存し、また壁の前に陶質器を置き、室の西壁には直刀一口を立懸けありしと云ふ。〔梅原1924: 290〕」
- 7) 一部が富山直人によって判読されている〔富山2009: 47〕。
- 8) ゴーランドが論文の中で鹿谷古墳出土遺物として紹介した集合写真〔Gowland1899: FIG.21〕と、〔後藤・ハリス2003: [16]〕の集合写真はいずれもガラス乾板の一部をトリミングしたものである。本調査では両者を合成した〔富山2009: 写真 7〕に任意で番号を振り、同定作業を行った。
- 9) 後者はこれまで「鹿谷古墳を含む鹿谷古墳群出土馬具」としてきた一群にあたる〔諫早2016、諫早ほか2016など〕。抽出の基本的な手順に変更はないが、ゴーランド文書資料などの調査の結果、ゴーランドが提示した集合写真の中に Rokuya Dolmen 以外の資料が写り込んでいることが明らかとなったことから、本書では「鹿谷古墳出土馬具の可能性を含む関連馬具」として報告する。
- 10) 前稿では鉄地金銅張舌長形棒状吊金具が、この f 字形鏡板轡に伴うとみてきたが〔諫早2014・2015〕、絵図や集合写真にその存在を確認できないことから、その判断を撤回する。
- 11) 同じようなつくりの銜をもつ類例に、関西大学博物館所蔵本山コレクションの伝・群馬県藤岡市出土 f 字形鏡板轡や大加耶の高霊池山洞44号墳25号石柵出土内轡楕円形鏡板轡、咸陽白川里1-3号墳出土内轡楕円形鏡板轡などがある。
- 12) 花文の構成については、松浦宇哲の整理に従う〔松浦2004〕。
- 13) 集合写真に写っている剣菱形杏葉の 1 点 (図32-28、図57-3、図版59上) は、ゴーランドによって図面が提示された剣菱形杏葉〔ゴーランド1897: Fig.30-b〕と同一製品とみられ、「高知 (土佐) 近くの領石にあるドルメンで見つかった四つのうちのひとつ〔Gowland1897: 50、ゴーランド1981: 77〕」と紹介されている。富山直人〔2018〕によるゴーランド文書資料 (ナウマンが1885年 5 月にゴーランドに送った手紙) とゴーランド考古資料領石村古墳出土須恵器の調査成果、さらには後藤和雄〔後藤1997〕による大英博物館所蔵直筆ノート (B) の記載からみて、ゴーランド考古資料の中には須恵器のほかにも笹原古墳出土遺物が含まれているとみられる。
- 14) ナウマンが描いた笹原古墳の出土状況図をみると、素環轡らしき大きな環をもつ轡 (Bridle bit) が 1 点描かれて

いる〔富山2018：図3〕。大英博物館所蔵直筆ノート（B）には土佐領石村の古墳出土遺物として、「#204 40. 4個の馬のはみで頬当ての付いたもの」という記載がある〔後藤1997：40〕。本例が現状、4点の破片からなること、集合写真において剣菱形杏葉のそばに配置されていることも踏まえれば、笹原古墳から出土した可能性も十分あるだろう。

- 15) ナウマンが描いた笹原古墳の出土状況図をみると、剣菱形杏葉のそばから鉢状辻金具らしき馬具が5点出土しており〔富山2018：図3〕、本例はその1つに該当する可能性もある。
- 16) ゴーランド考古資料の管理状況等が確かであれば、芝山古墳と極めて似た方形飾金具が鹿谷古墳を含むほかの古墳からも出土していることになる。あるいは集合写真の中に芝山古墳出土品が写り込んでいる可能性を考慮する必要があるのかもしれない。
- 17) 以下に、大英博物館所蔵直筆ノート（B）の該当部分の翻刻を示す〔後藤1997：40〕。  
 「#206 42. 銀環。銅板に銀加工した不完全輪形の輪。内径は1.43cm×1.75cm（9/16inc×11/16inc）である。  
 #207 45. 銅環。銅製の不完全輪形の輪で、多分銀装してあったものらしいが銀の痕跡は残っていない。内径は1.58cm×1.74cm（5/8inc×11/16inc）である。  
 #208 46. 銅製の不完全輪形の輪で、金銀表装したもの。内径は1.58cm×1.27cm（5/8inc×1/2inc）。これらの輪環類についての目録は Arch, 55, 449, 490参照。」

#### 参考文献

- 荒木瀬奈 2013 「鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群墳丘測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2012』、京都橘大学文学部、pp.16-27
- 荒木瀬奈 2014 「鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2013』、京都橘大学文学部、pp.24-34
- 諫早直人 2012 『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』、雄山閣
- 諫早直人 2014 「ガウランド・コレクションの馬具」『シンポジウム 古墳研究のさきがけ・ガウランドを考える—これまでの研究成果と大英博物館所蔵資料に関する新発見—』、明治大学博物館・日英共同研究調査グループ Gowland Project、pp.13-22
- 諫早直人 2015 「ゴーランドの持ち帰った馬具」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.12-13
- 諫早直人 2016 「鹿谷古墳の馬具—絵図との同定作業を中心に—」『ゴーランド・コレクション総合研究の新発見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』News Letter No.2、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、pp.10-13
- 諫早直人・片山健太郎 2014 「ゴーランド・コレクションと絵師遠藤茂平～鹿谷18号墳出土花文付雲珠・辻金具の紹介～」『古代学研究』第204号、古代学研究会、pp.35-37
- 諫早直人・片山健太郎・金 宇大・サイモン＝ケイナール・一瀬和夫 2016 「大英博物館ゴーランド・コレクション京都府鹿谷古墳出土馬具の調査」『日本考古学協会第82回総会研究発表要旨』、日本考古学協会、pp.52-53
- 一瀬和夫・荒木瀬奈 2015 「鹿谷村民に発掘された古墳」『大英博物館ゴーランド・コレクションの調査から』、ゴーランド・コレクション調査プロジェクト、p.16
- ヴィクター・ハリス 2003 「ウィリアム・ガウランドの日本における足跡」『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.8-24
- ヴィクター・ハリス／後藤和雄（編） 2003 『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館
- 梅原末治 1924 「第八 鹿谷の古墳群」『南桑田郡誌』、京都府教育会南桑田郡部会、pp.289-291
- 大塚初重 1977 「大阪府芝山古墳の出土遺物をめぐる諸問題」『考古論集』、松崎寿和先生退官記念事業会、pp.313-

- 大塚初重（解説）／後藤和雄（撮影） 2003 「ガウランド・コレクション」『ガウランド 日本考古学の父』、朝日新聞社・大英博物館、pp.81-119
- 片山健太郎 2016 「古墳時代馬具における繋の基礎的研究」『史林』99巻6号、史学研究会、pp.36-74
- 亀岡市 2000 『亀岡市の遺跡』（『新修亀岡市史』資料編第1巻付録）
- 亀岡市教育委員会 1987 『亀岡市遺跡分布地図』（亀岡市文化財調査報告 第18集）
- 河野一隆 2000 「48 鹿谷古墳群（遺跡番号32）」『新修亀岡市史』資料編第1巻、亀岡市、pp.172-175
- 京都府教育委員会 1972 『京都府遺跡地図 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図 第3分冊』
- 京都府教育委員会 1986 『京都府遺跡地図 第3分冊』
- 京都府教育委員会 2002 『京都府遺跡地図〔第3版〕』第2分冊
- 後藤和雄 1997 「ウィリアム・ガウランドの業績（3）—コレクションの全貌とその後の発見—」『考古学ジャーナル』No.420、ニューサイエンス社、pp.38-43
- 斎藤 弘 1986 「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号、PHALANX 古墳文化研究会、pp.47-53
- 竹村亮仁 2015 「ロンドン古物学協会ゴーランド・ノートと大英博物館ゴーランド・コレクションとの比較・照合」『京都橘大学大学院研究論集』第13号、京都橘大学大学院文学研究科、pp.1-133
- 竹村亮仁 2017 「ゴーランド・コレクション報告玉類について」『京都橘大学大学院研究論集』第15号、京都橘大学大学院文学研究科、pp.16-30
- 田中由理 2004 「f 字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』第51巻第2号、考古学研究会、pp.97-117
- 千賀 久 2003 「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学 III 交流と交易』、同成社、pp.101-127
- 土井孝則 2010 「石柵古墳の研究（三）—ガウランドが撮影した鹿谷古墳とその所在—」『亀岡古墳研究』No.1、亀岡古墳研究会、pp.1-3
- 富山直人 2009 「ガウランドと鹿谷古墳—大英博物館所蔵資料の調査から—」『日本考古学』第28号、日本考古学協会、pp.41-54
- 富山直人 2018 「ナウマンと土佐の古墳」『日本考古学』第45号、日本考古学協会、pp.57-68
- 松浦宇哲 2004 「花文付馬具の編年と系譜」『古文化談叢』第50集（下）、九州古文化研究会、pp.65-80
- 宮川禎一 2005 「描かれた古墳出土品—明治十四年の発掘調査—」『学叢』第27号、京都国立博物館、pp.91-100
- 宮代栄一 1986 「古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号、古墳文化研究会、pp.33-45
- 若林勝邦 1898 「古墳内部の構造」『考古学会雑誌』第2編第7号、考古学会、pp.25-28
- W・ゴーランド（上田宏範（校注）・稲本忠雄（訳）） 1981 『日本古墳文化論—ゴーランド考古論集』、創元社
- William Gowland 1897 The dolmens and burial mounds in Japan, *Archaeologia* 55, pp.439-524.
- William Gowland 1899a The dolmens of Japan and their builders, *Transactions and Proceedings of the Japan Society* 4, pp.128-183.

## 第4章 考察

### 1. 国内所蔵文書資料

#### ①古墳見分日記（半井真澄）の評価

古墳見分日記からは、鹿谷古墳発見当時の情報を多く読み取ることができる。古墳見分日記は明治13（1880）年11月15日付宮内省達乙第3号（…凡テ詳細ナル絵図面ヲ製シ、其地名並近傍ノ字等ヲモ取調、当省へ可申此旨相達候事）および、明治10（1877）年9月27日付内務省布達甲第20号「遺失物取扱規則中埋蔵物ヲ掘得ル者処分方」（…物品ハ先ツ掘出地名及形状等ヲ詳記シ、及ヒ模写スルモノヲ郵送シ、其見込アルモノニテ通送方相達候後、本文ノ通可取計候事）に応じて作成されたものである。出土地名、形状、出土遺物の模写などが求められているが、現在のように決まった届出の書式はなく、詳細は報告者に委ねられている。東京国立博物館所蔵の『埋蔵物録』をはじめとする公文書には、鹿谷古墳以外にも様々な古墳の発見報告書が記載されているが、「古墳見分日記」ほど多くの情報が含まれているものは稀である。明治14（1881）年という、上記の法令が出されて間もない頃のものであることを考慮すると、特筆すべきものであろう。

なお、明治16（1883）年には京都府向日市の北山古墳において埋蔵物が発見され、宮内省と農商務省に詳細な報告と絵図が上申されている〔加藤・有馬2015〕。「古墳見分日記」の報告の質の高さは、京都という土地柄とも関係したものであったと考えられる。

#### ②絵図（遠藤茂平）の評価

遠藤茂平の人物像 宮川禎一と多田敏捷によると遠藤茂平は、「幕末の京都で出版業を営み、維新直後は新政府太政官の印刷業務などを請け負っていたという。また、京都国立博物館が所蔵する「伏見鳥羽戦争図草稿」を描いた遠藤蛙齋と同一人物である。この伏見鳥羽戦争図も明治10年代に誰かに命じられて制作にかかった長大な鳥羽伏見の戦いの絵巻草稿である。遠藤自身が戦闘のあった現地に赴いて取材し下図を描いたとされるものである〔宮川2005：92〕。」とされる。遠藤茂平の作品を国立国会図書館デジタルコレクション（dl.ndl.go.jp）で探してみると、『懷宝国郡称呼』（遠藤茂平著、明治5年）、『内外国旗譜誦表：百旗章』（遠藤茂平編、明治5年）、『太陽曆講釈』（遠藤茂平著、明治6年）、『日本地誌略便覧』（西村義民編輯、遠藤茂平画図、明治9年）、『京都名所案内圖會 乾』（遠藤茂平編輯、明治14年）、『丹後地誌：小學』（遠藤茂平纂輯、明治15年）、『丹波地誌：京都府管下ノ部』（遠藤茂平纂輯、明治15年）、『山城地誌：小學』（遠藤茂平纂輯、明治16年）、『筆道腕能療治：一名・習字早指南』（遠藤茂平著、明治19年）などが登録されている。挿絵画家に加えて、書家、教育者としての側面もあったようである。

ゴーランドによる影響はあったか 実測図表現として遠藤が描いた絵図をみたときに、「墳丘および石室図」に横穴式石室の平面図と内観立面図が描かれている点は興味深い。宮川は、明治14（1881）年という古墳の調査が一般的ではなかった時期を考えると極めて先進的であると評価している〔宮川2005：94〕。また、宮川はその背景にゴーランドの影響を想定し、遠藤がゴーランドによる実測作業とその石室図面をみて、自らも平面図と立面図を取り入れたと推測している。だが、「古墳見分日記」の検討からは、半井と遠藤が鹿谷古墳を訪れた際にゴーランドと接触したことを読み取ることができない。現状の記録からは、石室の絵図は遠藤の技量によって描かれたものである可能性が高いと考えられる。

さらに宮川は、絵図の「古墳の分布図」に塚だけのもの（穴ナキ塚）と石室の開口したもの（穴アル塚）

の2種類が区別して描かれていること、古墳が群として記録されていることについて、遠藤がゴーランドの調査図面を参照したことに起因する可能性を指摘している〔宮川2005：93〕。ただ、上記の「古墳見分日記」の内容をみると、「すでに発掘されて石槨が露出しているものもある。あるいはまだ露出していないものもある。あるいは中間が陥没して、その状態が変容したもの等もある。…古墳の最も多い所では、一つの丘の上に累々として大小のものが雑然としており、あたかもオレンジを散布したものに似ている。」とあり、少なくとも半井は開口古墳とそうでない古墳があること、古墳が丘の上に群集していることを認識していることが読み取れる。つまり、これについてもゴーランドの影響というよりかは、半井と遠藤の認識によるものである可能性が高いと考える。

考古学的な図面としての評価 考古学的な図化技術という観点でみた時に、上述のようにゴーランドからの影響がないとすれば、遠藤の絵図はどのように評価できるであろうか。

まず石室の絵図について、比較対象として近い時期の事例を探してみると、明治20（1887）年に作成された東京国立博物館所蔵の『出雲国塩冶村古墳石槨石棺図』（歴資-1152）は参考になる。渡邊貞幸が詳しく報告しているように、これは島根県上塩冶築山古墳の横穴式石室と石棺が図化されたものである〔渡邊2000〕。「洞窟入口図」や「洞窟内部ノ図」において遠近法が用いられている点、「洞窟解剖図」において石室の平面図、奥壁と左右壁の内観立面図、天井の見上げ図が正投影法で示される点などが、特質すべき点として挙げられている。このような特徴について渡邊は、「…日本人が近代的製図法を使って石室を図化した最古の図面であり、その先駆性は十分評価されてよいと思う〔渡邊2000：61〕。」と評している。この絵図の画工師について詳細はわからないが、渡邊は洋画の基本を熟知し、西洋流の建築製図についても知識を有した人物であったと想定している。

この絵図と遠藤の絵図を比較してみると、宮川も指摘している通り、遠藤の絵図（「墳丘および石室図」）にも正投影法で描かれた石室の平面図と内観立面図がみられる点は注目される〔宮川2005：94〕。石室図面の展開数など図面の情報量の多さには差があるが、明治14年に描かれたということを考慮すれば、図化の水準は『出雲国塩冶村古墳石槨石棺図』にも匹敵するといえる。

また遺物の図化技術についてであるが、遠藤の絵図の「遺物の図面 1」（京A）、「遺物の図面 2」（京B-4）をみると、大刀は正投影法による平面図と側面図、馬具は平面図で描かれている点が特徴である。江戸時代の寛政4（1792）年頃に藤貞幹によって作成された『集古図』の石器の図面には、既に側面図や断面図を付加したものがみられ〔桜井2007：9〕、また幕末の慶応2（1866）年に柏木貨一郎によって作成された蕨手刀の実測図にも既に平面図、側面図が描かれている〔加藤2018：128-129〕。遠藤による大刀や馬具の図化技術は、江戸時代の日本でもみられたものである。

また、須恵器は透孔や波状文が割り付けされて、俯角から立体的に描かれている点が特徴である。桜井準也によると、近世における土器の図面は「多視点図」（全体が一点から眺めて図化されておらず、1つの資料が複数の視点から図化されているもの。例えば、口縁部周辺が俯角から描かれているのに対し、頸部以下は横方向から描かれていることが多い。）であるが、19世紀の初めになると「一点透視図」（遠近法の原理に基づき、一点からの視点で描いたもの。）による図面がみられるようになるという〔桜井2003a・b〕。遠藤が描いた須恵器はこの一点透視法で表現されたものである。

このように遠藤の絵図には、当時の日本にみられた先進的な図化技術が用いられている。明治初期における考古学の図面の到達点であり、考古学史的にも注目すべき事例であろう。 （土屋）



## 参考文献

- 加藤一郎・有馬 伸 2015 「北山古墳関係公文書と三角縁神獸鏡について」『元稻荷古墳の研究』、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター、pp.219-243
- 加藤一郎 2018 「幕末から明治・大正期における実測図の変遷（素描）」『古天神古墳の研究』、島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会、pp.123-130
- 桜井準也 2003a 「日本考古学における図化技術の系譜とその背景—多視点図から透視図へ—」『メタ・アーケオロジー』第4号、メタ・アーケオロジー研究会、pp.70-82
- 桜井準也 2003b 「近世～近代における考古資料の図化法—視角分析と遠近法の獲得—」『日本情報考古学会第16回大会発表要旨』、日本情報考古学会、pp.97-102
- 桜井準也 2007 「実測図表現の系譜と考古学者の遺物認識—『人類学雑誌』掲載実測図の分析から—」『日本情報考古学会講演論文集』Vol.4、日本情報考古学会、pp.7-10
- 宮川禎一 2005 「描かれた古墳出土品—明治十四年の発掘調査—」『学叢』第27号、京都国立博物館、pp.91-100
- 渡邊貞幸 2000 「東京国立博物館所蔵「出雲国塩冶村古墳石槨石棺図」について—正投影法で描かれた日本人による最古の石室図面—」『MUSEUM』第568号、東京国立博物館、pp.2・5・6・49-64・iv

## 2. 横穴式石室

鹿谷古墳の横穴式石室は、両袖式石室で長方形の玄室に平天井の構造を有し、奥壁に石棚を備え、その先端部直下に奥壁に沿って仕切石を設けることに大きな特徴がみられる（第3章第4節参照）。横穴式石室の構造からみた築造年代については、年代の指標となる袖部の形態などが不明であるため、ここでは絵図から判明する材料をもとに、鹿谷古墳の横穴式石室の位置づけについて考えてみたい。

**亀岡盆地の横穴式石室** 亀岡盆地にはMT15型式期に北ノ庄13号墳、14号墳など肥前南部から伝播したと考えられる横穴式石室が導入される〔森下1999〕。MT15～TK10型式期には石棚を持つ拝田16号墳など、岩橋型の石室が主に首長墓墳に採用され、小谷17号墳や医王谷3号墳など10m前後の円墳には、北ノ庄13・14号墳をモデルとした肥後型石室が畿内の影響を受けつつ築造されるようである〔土井1998・2001〕。それ以降は、畿内あるいは紀伊の影響を受けた石室が築造されていくが、中高式天井を有する北ノ庄4号墳など伯耆からの影響が考えられる石室もみられ、亀岡盆地の横穴式石室は複雑に展開していく〔森下1999〕。石棚と仕切石を有する鹿谷古墳の石室は、このように多様な石室が築造されていく中で築かれたのである。

**石棚と仕切石** 鹿谷古墳の石室に特徴的な石棚や仕切石といった構造は、亀岡盆地の横穴式石室にいくつかが認められる。まず石棚を持つ石室は導入期段階に築造される拝田16号墳（図65-1）〔京都学園大学考古学研究会1984〕をはじめ、小金岐古墳群で3基（76・78・112号墳：図65-2～4）〔安藤2000、藤井（編）1999〕、鹿谷古墳群茶ノ木山支群で4基（鹿谷古墳：図64-1、No.105～107：図64-2～4）〔ゴーランド1981、富山2009〕、同大市支群で1基（IV-1号墳：図65-5）〔藤井（編）1999、荒木2013、富山・笹栗2015〕などの9例が認められる。拝田16号墳に始まり、TK209型式期まで継続してみられるようである〔富山2007〕。

次に仕切石を持つ石室は、鹿谷古墳群大市IV-1号墳、拝田9号墳（図65-6）〔安藤・原野・小仲1980〕、小金岐1号墳（図65-7）〔田代1985〕などにみられる。そのうち鹿谷古墳群大市支群IV-1号墳では鹿谷古墳と同様に石棚と仕切石を有し、仕切石は石室に直行した状態で石棚の先端付近に近接して設置されているようである〔富山・笹栗2015〕。

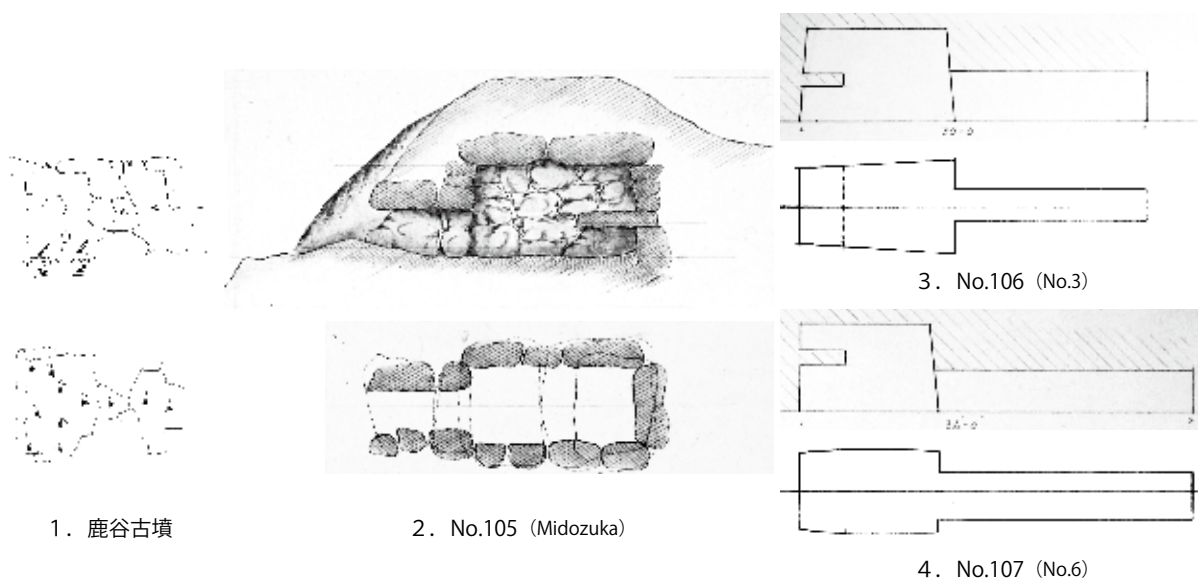


図64 ゴーランド文書資料にみえる鹿谷古墳群の石棚、仕切石を持つ横穴式石室  
（1：縮尺不同、2～4：S ≒ 1/200）（The British Museum 所蔵）

なお、鹿谷古墳の石柵下の空間は仕切石のあり方から埋葬棺のつもりであったという指摘がゴーランドによって早くからなされている（英A4-3）〔Gowland1897：32、ゴーランド1981：51〕。

石柵上の出土遺物 鹿谷古墳では石柵上から馬具が出土しているが（第3章第4節参照）、このような事例が確認された例は少なく、石柵の意味／機能を考える上で重要である。石柵の上に遺物を有する例として和歌山県天王塚古墳（図66-1）〔菅谷・伊藤1967〕や、奈良県の三里古墳（図66-2）、岡峯古墳（図66-3）〔河上（編）1977〕などがある（表21）。

天王塚古墳は結晶片岩の割石で構成された高さ約5.9mの玄室内に、石柵2枚と垂直石梁8本を有し、玄室、玄室前道、羨道、前庭部からなる岩橋型の横穴式石室である。石柵2枚は上下に近接して設置されており、1枚目は床面から高さ約2.0mの位置に架けられ、奥壁と両側壁に入り込んでいる。

2枚目は床面から高さ約2.3mの位置に架けられ、両側壁に入り込んでいる。この石柵の上面からガラス小玉約20点、金銅製飾金具片、鉄鏃片、小札片や骨片状のものが検出されている。また、玄室床面

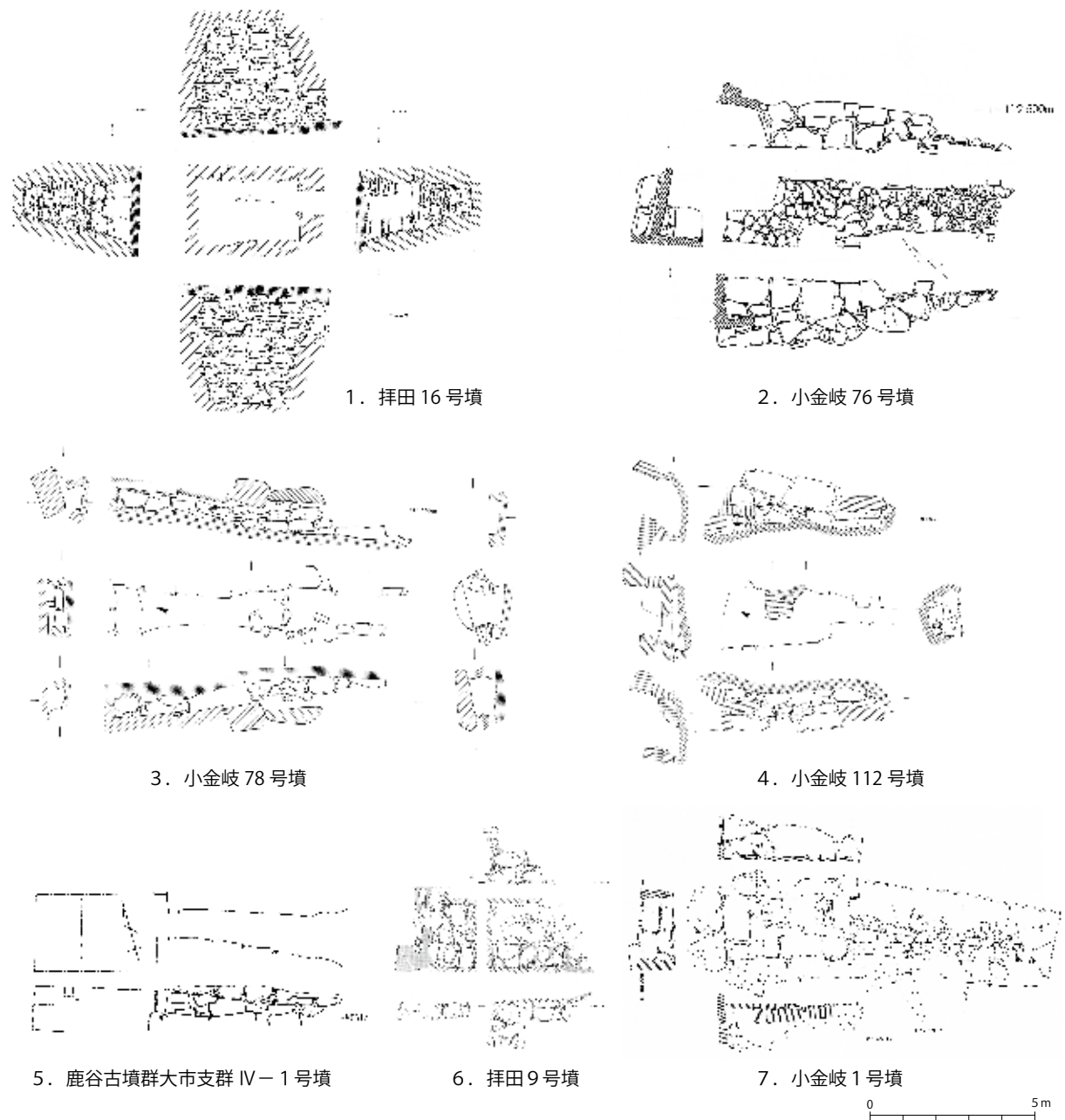


図65 亀岡盆地の石柵、仕切石を持つ横穴式石室（S=1/200）

表 21 石棚上に遺物を有する横穴式石室

	墳形・墳長	須恵器	石室規模					遺物出土位置				
			全長	玄室長	玄室幅	玄室高	石棚高	石棚上	棺	玄室	羨道	出典
和歌山県 天王塚 古墳	前方後円墳 ・88	MT85	10.95	4.22	2.89	5.90	下2.0 上2.3	ガラス小玉約 20、金銅製飾り 金具片、鉄鏃 片、小札片、骨 粉化した骨片状 のもの		攪乱土内： 土器片、玉 類、金属製 品の破片	土師器2、漆製品 攪乱土内：金銅 製金具片、切子 玉	菅原・伊藤 1967 黒石2016
京都府 鹿谷古墳	前方後円墳 または 造出付円墳 ・約55	MT85	—	—	—	—	—	馬具	仕切石(奥壁 側)：鉄刀、 金銅片、玉 類	鉄刀(石棚に 立てかけ)、 須恵器杯 蓋・杯身、 台付子持壺		
奈良県 三里古墳	前方後円墳 ・35 または 円墳 ・22	TK43	12	左4.8 右4.92	奥2.36 中2.44 前2.12	—	0.4	木棺：刀子2	組合家型石棺：須恵器、土師器、馬具、刀、 鉄鏃、ガラス玉 玄室木棺：刀子、須恵器 羨道石棺：須恵器？ 石棚下木棺：棗玉 羨道木棺：金棺、土師器		河上(編)1977	
奈良県 岡峯古墳	円墳 ・径15以内	TK43	5.25	2.95	1.9	2.2	1.4	須恵器杯蓋1、鉄 鏃4	石棚下石 棺：単龍環 頭1	直刀1、須恵 器台付長頸 壺		河上(編)1977

※数値の単位はm

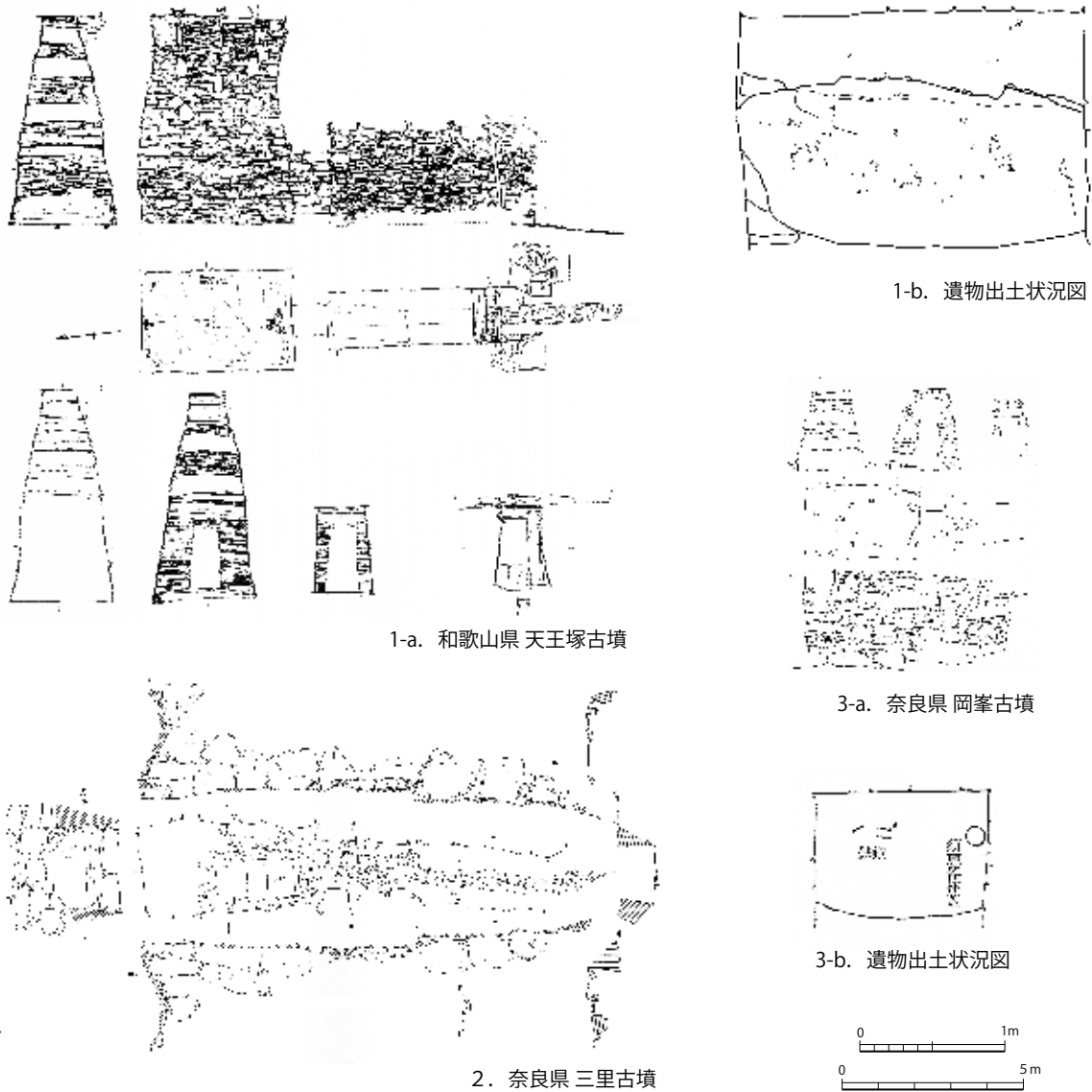


図 66 石棚上に遺物を有する横穴式石室 (石室図：S=1/200、遺物出土状況図：S=1/50)

には遺骸を安置したと考えられる板石が散乱していたと報告されている。

三里古墳は両袖式の横穴式石室で、石柵は玄室の奥壁に接し、両側は側壁に入り込んだ状態で付設されている。その高さは低く、床面より約0.4mの位置にある。遺物は奥壁と石柵の間に石柵上から落ち込んだとみられる刀子片2点が検出されており、石柵上に1体の追葬の棺を置いていた可能性が高いと考えられている。また、石柵の下では棗玉2点が検出されており、床面の礫石が取り除かれたような状態であることから、同様に追葬の棺の存在が指摘されている。

岡峯古墳は玄室、玄室前道、羨道からなり、石柵は三方が奥壁と両側壁に入り込んでおり、床面から約1.4mの高さに付設されている。石柵の上面には鉄鏃4点、須恵器杯蓋1点が確認されている。また、石柵の下部には石棺が設置されている。

このほかにも、石柵上から切子玉・丸玉・小玉・練玉・直刀などが出土しているもの（和歌山県船戸山2号墳〔金谷1956〕）、鉄器（鉄鏃7点・刀子1点・馬具）や人骨が出土しているもの（愛媛県新城3号墳〔常盤1998〕）、鉄鏃14点と銀環1点が出土しているもの（和歌山県小倉8号墳〔大野1971〕）、鉄鏃が数点出土しているもの（和歌山県山1号墳〔田中1976、植田1979〕）、須恵器が数点出土しているもの（愛媛県山口1号墳〔川之江市教育委員会（編）1960〕）があり〔金谷1958、河上1977、進藤2000〕、また、和歌山県大谷山22号墳では金銅製雲珠があったという〔森1967〕。

このように、石柵上から出土遺物が確認できるものに関しては、鉄器、須恵器、骨片などが主に認められるようである。

鹿谷古墳の横穴式石室の位置づけ 亀岡盆地の横穴式石室の変遷上に位置づけると、鹿谷古墳の横穴式石室は長方形の玄室に平天井の構造から畿内の横穴式石室構造を基本とし、とくに和歌山、九州など他地域からの影響とみられる石柵や仕切石を持つことから、多様な石室が築造されていくMT85型式期以降に築造されたものと考えられる。石室の規模は不明であるが、石柵を持つ横穴式石室であること、豊富な副葬品を有すること、そして墳長約55mの前方後円墳（造出付円墳）の可能性のあることなどから、鹿谷古墳群内、そして亀岡盆地の中でも首長墓級の古墳であると考えられる。石柵と仕切石を持つ特徴的な石室であり、副葬品の配置例がうかがえる点でも重要な古墳である。（奥田）

#### 参考文献

- 荒木瀬奈 2013 「鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群墳丘測量調査（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）」『京都橘大学 歴史遺産調査報告 2012』、京都橘大学文学部、pp.16-27
- 安藤信策 2000 「小金岐古墳群」『新修亀岡市史』資料編第1巻、亀岡市、pp.160-171
- 安藤信策・原野諭喜夫・小仲敏之 1980 「国道9号バイパス関係遺跡昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-1）』、京都府教育委員会、pp.59-83
- 植田法彦 1979 「室山古墳群」『海南市史』第3巻史料編I、海南市役所、pp.145-167
- 大野嶺夫 1971 「明楽山山塊の古墳群について」『古代学研究』第62号、古代学研究会、pp.1-12
- 金谷克己 1956 『紀伊の古墳』2、綜藝舎
- 金谷克己 1958 「石柵」『貝塚』第75号、貝塚研究会、pp.1-2
- 河上邦彦 1977 「石柵を有する古墳について」『平群・三里古墳』、奈良県立橿原考古学研究所、pp.125-142
- 河上邦彦（編）1977 『平群・三里古墳』、奈良県立橿原考古学研究所
- 川之江市教育委員会（編）1960 「東宮山口古墳群」『川之江市史』第1輯（古墳時代篇）、pp.8-16
- 京都学園大学考古学研究会 1984 「拜田16号墳」『古道』第3巻、pp.2-11
- 黒石哲夫 2016 「総括」『大谷山22号墳、天王塚古墳』、和歌山県教育委員会、pp.49-50
- 進藤弘誉 2000 「石柵付石室の系譜と伝播」『滋賀考古』第22号、滋賀考古学研究会、pp.17-47

- 菅谷友一 1998 「亀岡盆地に分布する横穴式石室の概観」『第25回企画展 横穴式石室のはじまり一口丹波を中心に一』、亀岡文化資料館、pp.22-23
- 菅谷文則・伊藤 徹 1967 「天王塚」『岩橋千塚』、関西大学文学部考古学研究室、pp.247-275
- 竹村亮仁 2016 「亀岡・鹿谷古墳群に関する一考察」『京都府埋蔵文化財論集』第7集、京都府埋蔵文化財調査研究センター、pp.153-160
- 田代 弘 1985 「小金岐古墳群」『京都府遺跡調査概報』第17冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、pp.49-93
- 田中英夫 1976 「和歌山県海南市室山1号墳の鉄鏃」『古代学研究』第79号、古代学研究会、p.36
- 土井孝則 1995 「石棚古墳の研究(一)―亀岡盆地に分布する石棚古墳について―」『第20回企画展亀岡発掘40年』、亀岡文化資料館、pp.26-27
- 土井孝則 1998 「一口丹波における導入期の横穴式石室について」『第25回企画展 横穴式石室のはじまり一口丹波を中心に一』、亀岡文化資料館、pp.2-3
- 土井孝則 2001 「南丹波における横穴式石室の導入について」『花園大学考古学研究論叢』、花園大学考古学研究室、pp.73-85
- 土井孝則 2010 「石棚古墳の研究(三)―ガウランドが撮影した鹿谷古墳とその所在―」『亀岡古墳研究』No.1、亀岡古墳研究会
- 常盤 茂 1998 「北条平野の横穴式石室」『遺跡』第36号、遺跡発行会、pp.73-88
- 富山直人 2007 「京都丹波の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』、横穴式石室研究会、pp.163-174
- 富山直人 2009 「ガウランドと鹿谷古墳―大英博物館所蔵資料の調査から―」『日本考古学』第28号、日本考古学協会、pp.41-54
- 富山直人・笹栗 拓 2015 「鹿谷古墳群石室実測調査報告」『古代学研究』第206号、古代学研究会、pp.38-43
- 林日佐子 1988 「丹後・丹波における初現期の横穴式石室」『考古学と技術』(同志社大学考古学シリーズIV)、同志社大学考古学シリーズ刊行会、pp.223-239
- 藤井 正(編) 1999 『小金岐古墳群分布及び測量調査報告書』(龍谷大学考古学研究会踏査報告書第5集)、龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会
- 細川康晴 2003 「南丹波地域の横穴式石室」『考古学に学ぶ(Ⅱ)』(同志社大学考古学シリーズVIII)、同志社大学考古学シリーズ刊行会、pp.315-324
- 森 浩一 1967 「岩橋千塚の横穴式石室」『岩橋千塚』、関西大学文学部考古学研究室、pp.404-416
- 森下浩行 1999 「畿内周辺の横穴式石室考(その二)―亀岡盆地における横穴式石室の導入と展開―」『考古学に学ぶ―遺構と遺物―』(同志社大学考古学シリーズVII)、同志社大学考古学シリーズ刊行会、pp.375-384
- 和歌山県立紀伊風土記の丘 2018 『天王塚古墳 第2次発掘調査』(平成29年度発掘調査現地説明会資料)
- W・ゴウランド(上田宏範(校注)・稲本忠雄(訳)) 1981 『日本古墳文化論―ゴウランド考古論集』、創元社
- William Gowland 1897 The dolmens and burial mounds in Japan, *Archaeologia* 55, pp.439-524.

図版出典(本書報告のものは除く)

- 図65 1: 京都学園大学考古学研究会1984 2: 安藤2000 3: 藤井(編)1999 4: 藤井(編)1999 5: 富山・笹栗2015 6: 安藤・原野・小仲1980 7: 田代1985
- 図66 1: 菅谷・伊藤1967 2: 河上(編)1977 3: 河上(編)1977

### 3. 刀剣類

鉄 刀 いずれも関の切れ込みが深く、刀身が比較的長大、幅広で、釦本孔を有する点を特徴として挙げる事ができる。釦本孔をもつ大刀の初現は陶邑編年TK23型式期以後とされるが〔齊藤2009〕、長大化した刀身や関形状〔白杵1984〕、刀1に3つの目釘孔が確認される点を考慮すると、初現期のものよりはやや時期が下ると判断される。茎尻の形態は不明であるが、茎部関近くに把装具を固定する機能をもつとみられる割り込みを備える点に、1mを優に超える法量を勘案すると、これらの鉄刀は古墳時代中期以来の倭風木製装具を取り付けた古墳時代後期の儀仗用大刀と評価できる。なお、前述のように、これらの鉄刀のうちいずれか1本が、石棚に立て掛けられた状態で出土した。副葬時に刀剣を石室の壁に立て掛ける事例は、これまでに少なくとも30例余りが確認されているが〔日高2008〕、石棚を持つ石室での立て掛け副葬、しかも石棚に立て掛けるという事例は鹿谷古墳のほかには知られていない。このやや特異な副葬状況には留意しておく必要がある。

振り環 残存部分の形状から振り部下端の幅6cm前後、振り部の高さ3cm前後に復元できる。深谷淳分類の「鉄振り銀張りIB型」に該当し、陶邑編年TK10～TK43型式期に並行する年代が与えられる〔深谷2008〕。 (金)

双魚佩 双魚佩は出土数が極めて少なく、現状で確実な事例は本例を含めて8古墳12組に限られる〔酒巻2009〕(図67)。その中には、大阪府峯ヶ塚古墳〔下山・吉澤(編)2002〕、滋賀県鴨稻荷山古墳〔濱田・梅原1923、森下・高橋・吉井1995〕、奈良県藤ノ木古墳〔奈良県立橿原考古学研究所(編)1993〕のような高い階層の被葬者が想定されている古墳も含まれている。鹿谷古墳の被葬者の階層を反映する器物として重要であろう。

双魚佩は倭風の様式の拵えをもつ大振りの立派な大刀に伴うものであることが指摘されている〔白石1993〕。出土状況から双魚佩と組み合う大刀がわかる事例として、上述の峯ヶ塚古墳、鴨稻荷山古墳、藤ノ木古墳が挙げられる。峯ヶ塚古墳出土の3対の双魚佩は大刀4(振り環付梯形柄頭大刀)・大刀9(楕円形柄頭大刀)付近、鴨稻荷山古墳の1対の双魚佩は大刀2(振り環付鹿角装大刀)付近で出土した。そして、藤ノ木古墳の3対の双魚佩は、大刀1(振り環付梯形柄頭大刀)、大刀3(楕円形柄頭大刀)、大刀5(振り環付梯形柄頭大刀)と組み合せて出土した。また、出土状況がわからない事例であるが、千葉県松面古墳では出土遺物の中に大刀3(振り環付倭装大刀)が含まれている〔酒巻2009〕。

このようにみると、双魚佩は振り環付大刀と組み合うことが多い。鹿谷古墳出土の双魚佩も、上記の振り環と組み合っていた可能性が高いと考えるが、刀1、刀2のどちらと組み合っていたかについては確定することはできない。

しかし、組み合わせこそ明瞭でないものの、鹿谷古墳には双魚佩を伴う振り環付大刀が副葬されていたとみてほぼ間違いない。亀岡盆地では、鹿谷古墳のほかに装飾付大刀が副葬された事例はこれまで確認されていない。そんな中で、全国的にも極めて稀少な双魚佩を伴う振り環頭大刀の副葬は、極めて異例である。この大刀の存在は、鹿谷古墳の被葬者が亀岡盆地でも特殊な社会的立場にある人物であったことを示唆している。

次に双魚佩の製作時期について考えてみたい。第3章でも述べた通り、鹿谷古墳出土双魚佩の鱗は、彫金の切り合い関係からみて、右下から左上方向へ斜めに行をなして施文されていた。同様の視点で、他の双魚佩の鱗の施文方法についても検討した結果、福島県真野古墳群A地区寺内支群20号墳(以下、真野20号墳と呼ぶ)例〔沢沢1975〕(図67-6)、松面古墳例(図67-10)も彫金の切り合い関係からみて、右下から左上方向へ斜めに行をなして鱗が施文されていた可能性が高いことが判明した。また、熟覧できて



1. 大阪 峯ヶ塚古墳① 2. 峯ヶ塚古墳② 3. 峯ヶ塚古墳③ 4. 滋賀 鴨稻荷山古墳 5. 京都 鹿谷古墳  
 6. 福島 真野 20 号墳 7. 奈良 藤ノ木古墳① 8. 藤ノ木古墳② 9. 藤ノ木古墳③ 10. 千葉 松面古墳  
 \* a、bは1組の細分に用いている

図 67 双魚佩とその類例 (S=1/5)



いないため実物での検討はできていないが、藤ノ木古墳①例(図67-7a)は実測図の表現からみて右下から左上方向へ、藤ノ木古墳③例(図67-9b)は右上から左下へ斜めに施文されていた可能性が考えられる。施文の発想としては、真野20号墳例、松面古墳例に近い。

一方、峯ヶ塚古墳例(図67-2)、鴨稻荷山古墳(図67-4)では、彫金の切り合い関係や彫金の方向からみて、右端から左方向へ横に施文され、その行が終われば下の行の右端から左方向へ横に施文されている。これは鹿谷古墳例とは大きく異なる施文方法である。

このように、鱗の施文方法は大きく2つにわけられる。共伴遺物の編年的位置づけをみると峯ヶ塚古墳例・鴨稻荷山古墳例は陶邑編年のMT15～TK10型式期、真野20号墳例・藤ノ木古墳例・松面古墳例はMT85～TK209型式期のものであることから、鱗の施文方法の違いは時期差に由来すると考えられる。鹿谷古墳例には後者と同じ特徴がみられることから、MT85型式期以降のものであろう。(土屋)

#### 参考文献

- 穴沢咏光 1975 「金銅魚佩考(真野古墳出土例を中心に)」『福島考古』第16号、福島県考古学会、pp.1-14
- 臼杵 勲 1984 「鍬本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』第31巻第2号、考古学研究会、pp.97-106
- 齊藤大輔 2009 「鍬本孔鉄刀の基礎的研究」『第3回東アジア考古学会・中原文化財研究院研究交流会予稿集』、東アジア考古学会・中原文化財研究院、pp.1-20
- 酒巻忠史 2009 「第3章松面古墳出土双魚佩の図上復元」『木更津市文化財調査集報』14、木更津市教育委員会、pp.49-52
- 下山恵子・吉澤則男(編) 2002 『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』、羽曳野市教育委員会
- 白石太一郎 1993 「玉纏太刀考」『国立歴史民俗博物館研究報告』50、国立歴史民俗博物館、pp.141-162
- 奈良県立橿原考古学研究所(編) 1993 『斑鳩藤ノ木古墳：第二・三次調査報告書』、奈良県立橿原考古学研究所
- 濱田耕作・梅原末治 1923 「近江国高島郡水尾村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第8冊、京都帝国大学文学部、pp.1-101
- 日高 慎 2008 「後期古墳における刀類立てかけ副葬について」『王権と武器と信仰』、同成社、pp.784-795
- 深谷 淳 2008 「金銀装倭系大刀の変遷」『日本考古学』第26号、日本考古学協会、pp.69-99
- 森下章司・高橋克壽・吉井秀夫 1995 「鴨稻荷山古墳出土遺物の調査」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』(平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査研究成果報告書)、京都大学文学部考古学研究室、pp.49-72

図版出典(本書報告のものは除く)

図67 1～3：下山・吉澤(編)2002 4：森下・高橋・吉井1995 6：穴沢1975 7～9：奈良県立橿原考古学研究所(編)1993 10：酒巻2009

## 4. 馬具

ゴーランド・コレクションの馬具のうち鹿谷古墳出土の馬具については、京都国立博物館所蔵絵図によって、今回、一定程度の確かさをもってその帰属を明らかにすることができた（第3章第5節参照）。鹿谷古墳出土として抽出ができた馬具のセット関係については、すでに富山直人〔2009〕や筆者〔謙早・片山ほか2016〕らによってセット数やその内容について概要が示されている。これらと重複するところもあるが、ここでは、近年の馬具研究を踏まえた上で、改めて鹿谷古墳出土の馬具のセット関係の復元と編年の位置づけを行いたい。編年上の位置づけについては内山敏行による鏡板轡・杏葉を中心とした編年〔内山1996〕と、田辺昭三による陶器編年〔田辺1981〕とを併記する。

### ①セットの復元

セット復元的前提 鹿谷古墳からはf字形鏡板轡1組、八角形鏡板轡1組、磯・洲浜金具と覆輪を伴う鞍金具1組、剣菱形杏葉5点、五角形杏葉10点、鉢状雲珠1点、鉢状辻金具3種10点、透入方形飾金具22点が出土した可能性が高く、爪形飾金具についても留められた花形鉾の共通性から鹿谷古墳出土の可能性が高いと思われる。

上記の内訳を一瞥すると、基本的にはf字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセットが1組あり（Aセット）、残りの八角形鏡板轡と五角形杏葉で別の1組（Bセット）を構成したとまずは想定できる。幸いなことに、類例のほとんど確認できない八角形鏡板轡と五角形杏葉は透かしを有する本体の構造や突起を意識した意匠、花形鉾を用いるという点で共通性がみられ、これは両者のセット関係を想定する上で重要な材料である。さすれば問題となるのは、鞍や雲珠、辻金具、飾金具がどちらのセットに帰属するのか、あるいはどちらのセットにも帰属しないのかということになる。セット関係を復元するためにはこれら残りの馬具と、セット認定の上で基準となる鏡板轡と杏葉などがセット関係を取りうるような時間的接点があるかどうかの確認が必要である。まずは、鏡板轡と杏葉の編年上の位置づけを検討する。

Aセット f字形鏡板轡の鏡板は田中由理分類のⅡB1式にあたる〔田中2004〕。内山編年の後期1～2段階（MT15～TK10型式期）に盛行した型式である。田中ⅡB1式は三重県井田川茶白山古墳例（図68-1）、島根県上島古墳例（図68-2）、静岡県翁山6号墳例（図68-3）、大阪府青松塚古墳例（図68-4）、群馬県藤岡市出土例（図68-5）が該当する。鏡板と銜、引手の連結方法をみても、遊環を介して引手と銜とを鏡板の内側で連結する事例は小野山節分類のⅣ段階に相当する〔小野山1964〕。f字形鏡板轡で遊環を使って内側で銜と引手を連結する事例は、これまでのところ鹿谷古墳例と千葉県禅昌寺山古墳例（ⅡC1式、図68-6）、福岡県山の神古墳B例（ⅡD式、図68-8）、福岡県西堂古賀崎古墳A例（ⅡD式）などがある。後2者はいずれも銜先覆部を鏡板文様板と一体で作り出すものであり、鹿谷古墳例は禅昌寺山古墳例と近い。神啓崇によればf字形鏡板轡における遊環連結は鏡板外側での引手—銜連結の流れにある禅昌寺山古墳例などと、その後、鏡板文様板と一体の銜先覆部を設けた新型式での採用の2相が認められるという。このうち新型式での採用は大加耶地域の轡の影響であると指摘する〔神2017〕。

剣菱形杏葉は5点があり、わずかな全長の差や鉾数の差があるものの、同一の規格に基づいて製作されたものと思われる。田中由理分類のⅡA式に該当し〔田中2005〕、後期1段階～後期3段階（MT15～TK43型式期）に盛行する。大きさや形状、鉾の数等でもっとも類似したものは福岡県西堂古賀崎古墳例（図69-2）、静岡県荒久城山古墳例（図69-3）、岡山県四つ塚1号墳例（図69-4）などに認められる。ただ、鹿谷古墳の剣菱形杏葉は扁円部の内縁上部が下方へ突出しないという特徴があるが、この特徴はⅡA式では新沢178号墳例（図69-5）でしか確認できない。田中のⅠA、ⅠB式にこのつくりのものが多

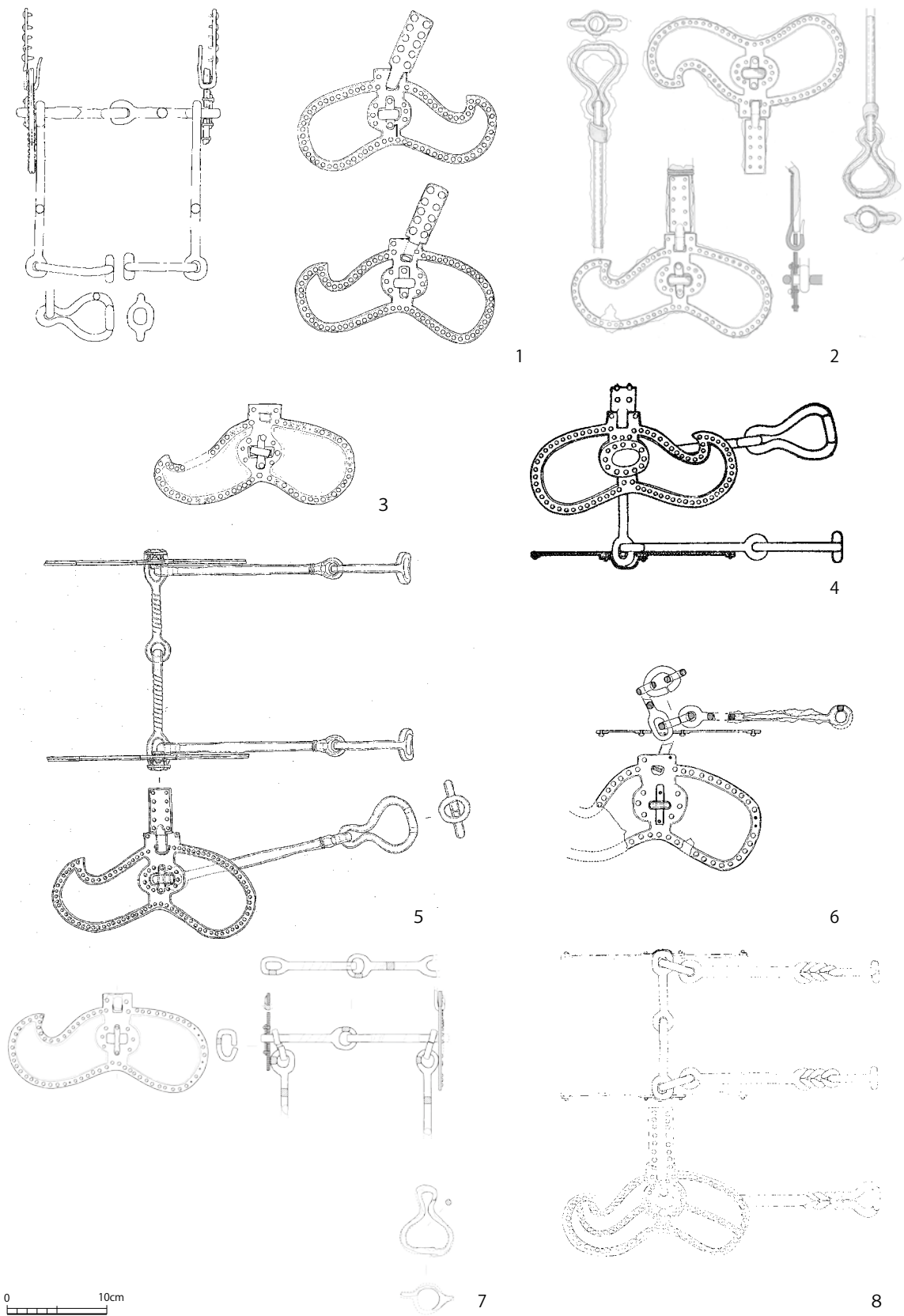


図68 f字形鏡板轡とその類例 (S=1/6)

1：井田川茶白山古墳 2：上島古墳 3：翁山6号墳 4：青松塚古墳 5：藤岡市出土 6：禅昌寺山古墳  
7：鹿谷古墳 8：山の神古墳

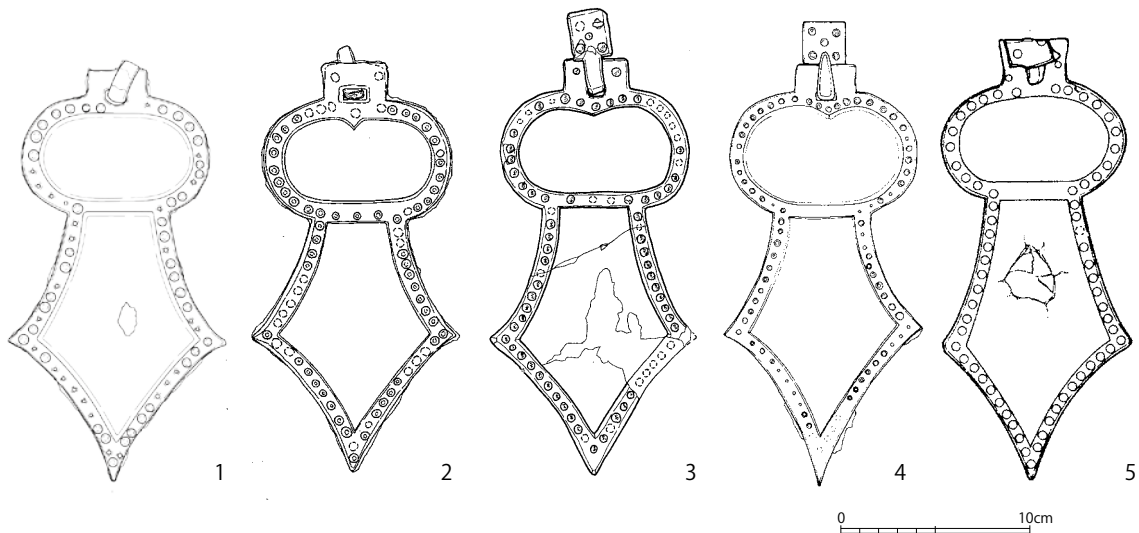


図 69 剣菱形杏葉とその類例 (S=1/4)

1：鹿谷古墳 2：西堂古賀崎古墳 3：荒久城山古墳 4：四つ塚1号墳 5：新沢178号墳

いことから、やや古い特徴をもつと指摘することもできよう。なお、5点はすべてが1つのセットに用いられたと考えられる。剣菱形杏葉は当初は3点を尻繫に飾ることが通有であるが、井田川茶白山古墳例や大門大塚古墳例、珠城山1号墳例、福岡県寿命王塚古墳例などでも5点を確認できる。宮代栄一〔2003〕の指摘するように楕円形鏡板轡と杏葉のセットの馬装が、f字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセットの馬装に影響を与えた結果であろう。

Bセット 八角形鏡板轡は全く同じ形態、構造の資料を確認できないが、外形に注目すれば、突起をもつ鏡板は天理参考館蔵例(図70-1)、福岡県櫛山古墳例(図70-2)、長野県疱瘡神塚古墳例(図70-3)、島根県大念寺古墳例(図70-4)などにみられる。また、福岡県瓜尾・梅ヶ内25号墳例の十字文楕円形鏡板轡は剣菱形突起をつけており(図70-6)、6世紀前半から中頃にかけて、楕円形鏡板に突起をつける意匠が流行したことがうかがえる。一方、内区は車文楕円形鏡板や杏葉と同様の放射状に配置された格子から構成されており、桃崎祐輔が位置づけを試みたように、これらと密接な関係が想定される〔桃崎2011〕。さらに、内区の格子は透かしとなる点で、透十字文心葉形鏡板轡などとのつくりの共通性も指摘できる。銜と引手、鏡板との連結方法をみると、まず引手は、鏡板の裏側で銜と引手を直接連結する。銜と鏡板は、銜外環を鏡板表面に留められた板状銜留金具に通して連結する。また、鏡板の表面には半球形覆金具を被せており、銜外環は表側からはみえない。このような特徴は後期2段階(TK10型式期)以降にf字形鏡板轡、十字文楕円形鏡板轡、鐘形鏡板轡などに採用されるものである〔内山1996、諫早近刊〕。この覆金具を鏡板本体に留める際に用いる釘数は一般的に多釘から少釘へと変化することが知られている。鹿谷古墳から出土した八角形鏡板では左右とも7釘と比較的多い。また、鏡板に留められた花形釘についても、半球形覆金具をもつ大阪府南塚古墳の鐘形鏡板轡が初現的なものと考えられる。以上のことから、八角形鏡板轡については、後期2段階(TK10型式期)以降のものともみるのが妥当である。上述したように6世紀中頃以降盛行する様々な新しい特徴を取り入れた鏡板轡であると評価できる。

五角形杏葉(図71-1)も類例を確認できない。ただし、系譜を探る上でヒントになりそうなのは立間部下方の透かしをもつV字状の突出部である。同様のものが、慶州味鄒王陵第7地区4号墳出土(諫早編年慶州VI段階)〔諫早2012〕の圭形杏葉(図71-2)に確認でき注目される。ただし、外形は大きく異なり、味鄒王陵第7地区4号墳例が金属製の地板をもつものに対し、鹿谷古墳例は金属製の地板をもたない点

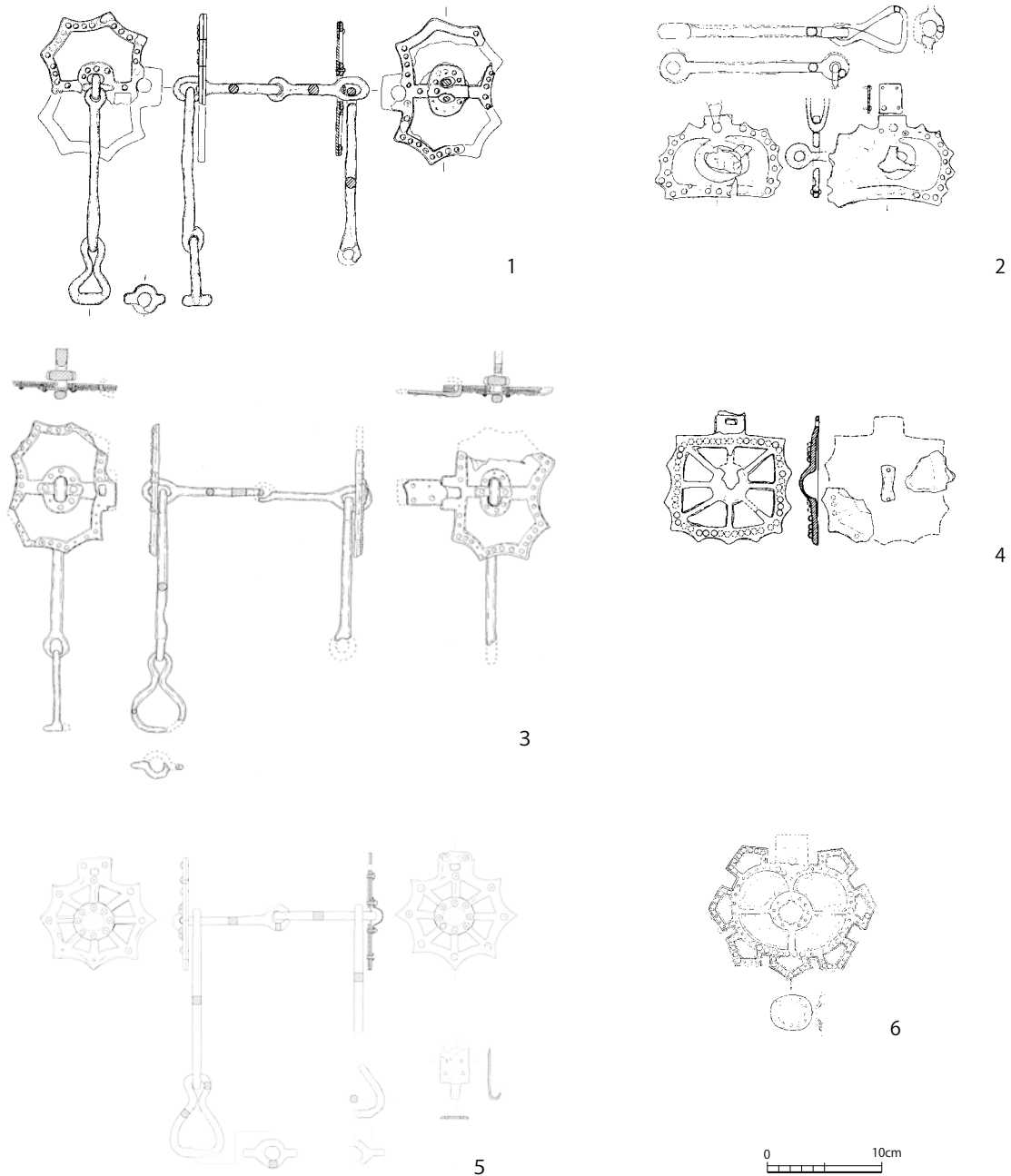


図70 八角形鏡板轡とその類例 (S=1/6)

1：天理参考館蔵 2：櫛山古墳 3：疱瘡神塚古墳 4：大念寺古墳 5：鹿谷古墳 6：瓜尾・梅ヶ内25号墳

で構造も異なる。そのほか、この関連資料として、漆塗の有機質を地板としてもつ可能性のある上塩冶築山古墳の透入心葉形杏葉(図71-3)、有機質(皮膜)を地板と縁金の上に挟み装飾としていた可能性がある千葉県金鈴塚古墳の格子文楕円形杏葉(図71-4)〔宮代2014〕や、地板が皮革とされる慶州皇南大塚南墳の玉虫装扁円魚尾形杏葉(図71-5)、吊金具のみの出土で、杏葉そのものが皮革などの有機質の可能性が指摘された高尾向山3号墳例(図71-6)などがある。これらは、杏葉本体に金属以外の有機質素材が用いられた例として注目され、五角形杏葉もその1つに位置づけることができる。なお、透かしの部分に有機質装飾を用いたかどうかを問わなければ、大阪府白雉塚古墳(鉄地銀張、7~8点)(図71-7)、奈良県ホリノヲ1号墳(鉄地金銅張、現状1点)(図71-8)と透かしのある小型の杏葉を多数組み込んだ馬具セットが確認されており、これらとの関係もうかがえる。五角形杏葉の編年上の位置づけについては、

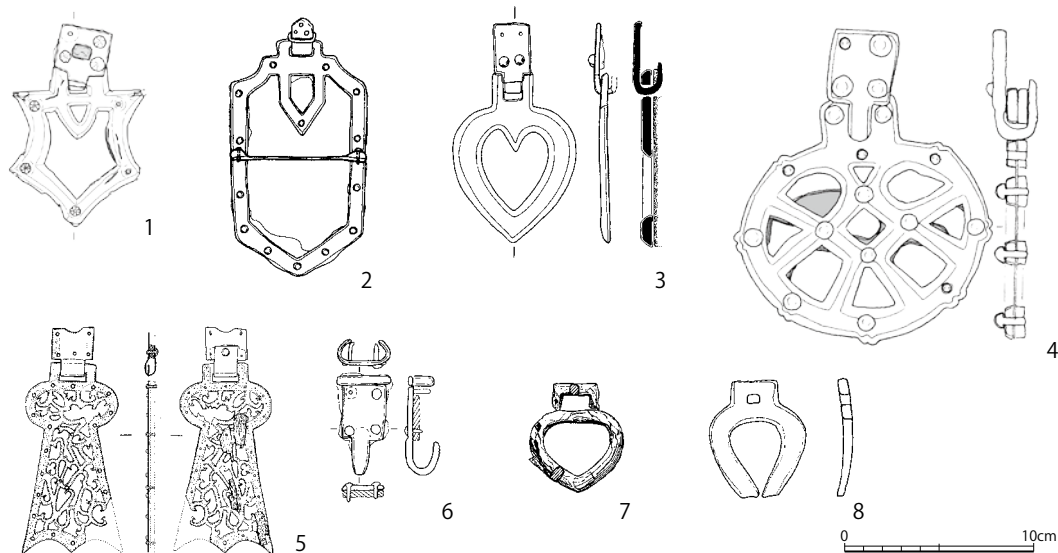


図71 五角形杏葉とその類例 (S=1/4)

1：鹿谷古墳 2：味鄒王陵第7地区4号墳 3：上塩冶築山古墳 4：金鈴塚古墳  
5：皇南大塚南墳 6：高尾向山3号墳 7：白雉塚古墳 8：ホリノヲ1号墳

八角形鏡板轡と同様の花形鉾が用いられており、これは現在のところ、新羅では確認できないが〔諫早2013〕、その点を重視すれば、後期2段階（TK10型式期）以降に位置づけられることになる。

f字形鏡板轡と剣菱形杏葉から構成されるセットが八角形鏡板轡と五角形杏葉のセットよりも早い段階に製作されている可能性は十分にあるが、八角形鏡板轡と五角形杏葉の製作時期を絞り込むのは容易ではなく、鏡板と杏葉からはここまでの考察に留まらざるを得ない。

雲珠・辻金具の帰属 次に鉢状雲珠・辻金具と飾金具について検討を進め、帰属するセットについて明らかにする。鉢状雲珠・辻金具は六脚の雲珠が1点と、1～3類の辻金具計10点が出土している。このうち、鉢部に花文を彫金する辻金具1類5点は、同じく鉢部に花文を彫金する六脚の雲珠とセットである。この形態の雲珠・辻金具については宮代分類の偏平無稜鉢偏在配置六脚系雲珠〔宮代1993〕に分類され、鉢が偏平であること、刻み目をもつ責金具2本を用いていることから、後期2段階新相、MT85型式期に位置づけられる。花文付馬具の研究を行った松浦宇哲の分類では花文はA-2類に分類され〔松浦2004〕、TK10～MT85型式期とみられている。以上から、花文付雲珠と辻金具は後期2段階新相、すなわちMT85型式期のものとみるのが妥当である。

2類も1類と同様に偏平無稜鉢であり、鉾の数、配置、責金具の特徴から後期2段階（TK10～MT85型式期）のものと思われる。図46-6に認められる花形鉾が確かなものであるとすれば、1類辻金具と雲珠のセットよりは後出的なものとするのが妥当である。

3類は1・2類に比べて鉢に高さがあり、また、爪形の脚に花形鉾を一鉾留めるといった特徴がある。鉢は偏平無稜鉢の特徴を有するが、一鉾配置という特徴は一般的に後期2段階（TK10型式期）以降にみられ、後期3段階（TK43型式期）以降に盛行する特徴である。また、花形鉾も辻金具では後期2段階（TK10型式期）以降にみられる。類例として奈良県ホリノヲ4号墳（図72-1）、京都府物集女車塚古墳（図72-2）などの例がある。以上の特徴から後期2段階（TK10型式期）以降の製作とみるのが妥当である。

なお、脚に残された繫の特徴をみると〔片山2016〕、鉢状雲珠・辻金具の1、2類が縁飾付織物巻繫である。透入方形飾金具は（縁飾付）別材巻繫であり、爪形飾金具は縁飾付繫の可能性が高い。鉢状辻金具3類は繫の残りが悪いが、織物を確認できないことから、透入方形飾金具、爪形飾金具のいずれ

かと同じ繫が用いられていた可能性  
がある。別材巻繫は後期 3 段階以  
降に今のところ類例がみられ、この  
点を重視するならば、透入方形飾金  
具も後期 3 段階以降のものとも  
みることが可能である。透入方形飾金  
具は、このような繫の痕跡と透かしを  
有するという形態上の特徴や花形鉾  
のつくりからも B セットに伴う可能性が高い。また、爪形飾金具については繫が別材巻繫と縁飾付繫  
という違いがあるが、花形鉾や縁飾のついた繫が留められていた可能性はある、これも B セットに伴  
うものと考えてよいだろう。

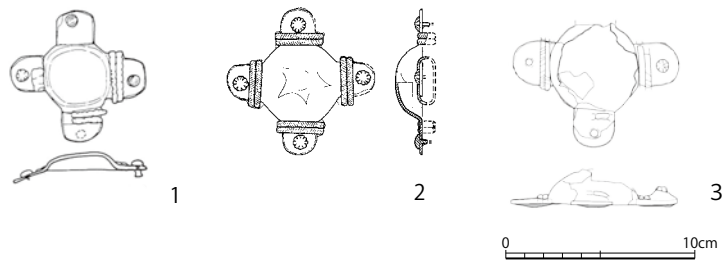


図 72 鉢状辻金具 3 類とその類例 (S=1/4)  
1：ホリノヲ 4 号墳 2：物集女車塚古墳 3：鹿谷古墳

以上の検討から、1 類辻金具とセットとなる雲珠が f 字形鏡板轡と杏葉のセットに組みこまれ、花  
形鉾を打ち、やや盛行時期の遅れる 3 類が八角形鏡板轡と五角形杏葉とセットを構成したと考えられ  
る。後述するように類似のセットと照らし合わせると、この段階の f 字形鏡板轡のセットに鉢状雲珠辻  
金具が含まれる類例の少ないセット構成をとる点に注意される。

鞍の帰属 次に磯金具、洲浜金具、覆輪金具を有する鞍の位置づけについてみると、磯・洲浜の  
構造は分離構造（分離式磯金具鞍）である。磯金具の取付方法は、花谷分類の B1-a 類に該当し、これは  
6 世紀半ばまでにみられる特徴である〔花谷2000〕。一脚構造の鉄地金銅張円形座金具付鞍を有する鞍  
は、後期 2 段階（TK10型式期）以降にみられる〔宮代1996〕。ここまでみてきたように、製作時期や留め  
られた繫の特徴などから、鏡板轡と杏葉を中心に雲珠や辻金具、飾金具について 2 組のセットに分離  
することができたが、鞍に関してはこの視点のみからセットを判別することは難しい。そこで、後期  
2 段階（MT85型式期）までの分離式磯金具鞍と装飾付鏡板轡と杏葉のセットの傾向をみることで、何  
らかの見通しを得たい。表22にセットの内訳を示したが、f 字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセットには、  
磯・洲浜金具をもたない鞍（非金属製磯鞍）が組み込まれることが比較的標準であったことがわかる。全  
体として分離式磯金具鞍が盛行するようになるのは、後期 2 段階以降である。以上のことから、磯・  
洲浜金具を有する鞍は f 字形鏡板轡のセットに伴う可能性も、八角形鏡板轡のセットに伴う可能性も残  
されている。f 字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセットに磯・洲浜金具を有する鞍がセットで用いられている  
とすれば、鹿谷古墳の同セットは先進的な構成をとっていると評価できよう。

同様のことは、先述したように鉢状雲珠と辻金具が A セットに用いられていることから指摘できる。  
f 字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセットに鉢状雲珠と辻金具が普遍的に組み合うようになるのは後期 2 段  
階（TK10型式期）、小野山分類の V 段階以降の f 字形鏡板轡である。千葉県江子田金環塚古墳例では小野  
山分類 IV 段階の f 字形鏡板轡のセットに鉢状雲珠や辻金具が組み込まれているが、これらが連結されて

表 22 分離式磯金具鞍の諸例

	f 字・剣菱	楕円	鐘	十字透心葉	車文・格子文
分離式磯 金具鞍	大阪・長持山(中6)	滋賀・鴨稲荷山(後1)	奈良・藤ノ木(後2)	鳥取・石州府5号(後3)	千葉・城山1号(後3)
	和歌山・大谷(中7)	兵庫・園田大塚山(後1)	奈良・市尾宮塚(後2)	千葉・法皇塚(後3)	奈良・烏土塚(後3)
	福井・十善の森後円部(中7)	大阪・梶原D1号(後1)	大阪・山畑33号(後2)	島根・岡田山1号(後3)	福岡・新延大塚(後4)
	滋賀・木部天神前(後1)	大阪・新芦屋(後2)	愛媛・川上神社(後2)	島根・上塩冶築山(後4)	埼玉・冨塚(後4)
	島根・上島(後1)	岐阜・大牧1号(後2)		岡山・塚段第二(後3)	広島・二子塚後円部(後4)
	三重・西野5号墳(後1)	福岡・箕田丸山(後2)			
	奈良・珠城山1号(後2)	伝三重・天理参考館蔵(後2)			
大阪・河内愛宕塚(後2)					
非金属 製磯鞍	18例	5例	2例	2例	2例

馬具品目	時期	TK47	MT15	TK10	MT85	TK43	TK209
	田辺 (1981) 内山 (1996)	中期 7	後期 1	後期 2		後期 3	後期 4
A セット	f 字形鏡板轡		■	■	■	■	
	鉢状雲珠・辻金具 1 類		■	■	■	■	
	剣菱形杏葉		■	■	■	■	
	分離式磯金具鞍		■	■	■	■	
B セット	八角形鏡板轡			■	■	■	
	鉢状雲珠・辻金具 3 類			■	■	■	
	五角形杏葉			■	■	■	
	透入飾金具					■	■

凡例 ■ 該当する型式の存続時期幅 (想定も含む) を示す  
 ■ 該当する型式のうち特に絞りこめる時期を示す

図 73 鹿谷古墳出土主要馬具の編年的位置づけ

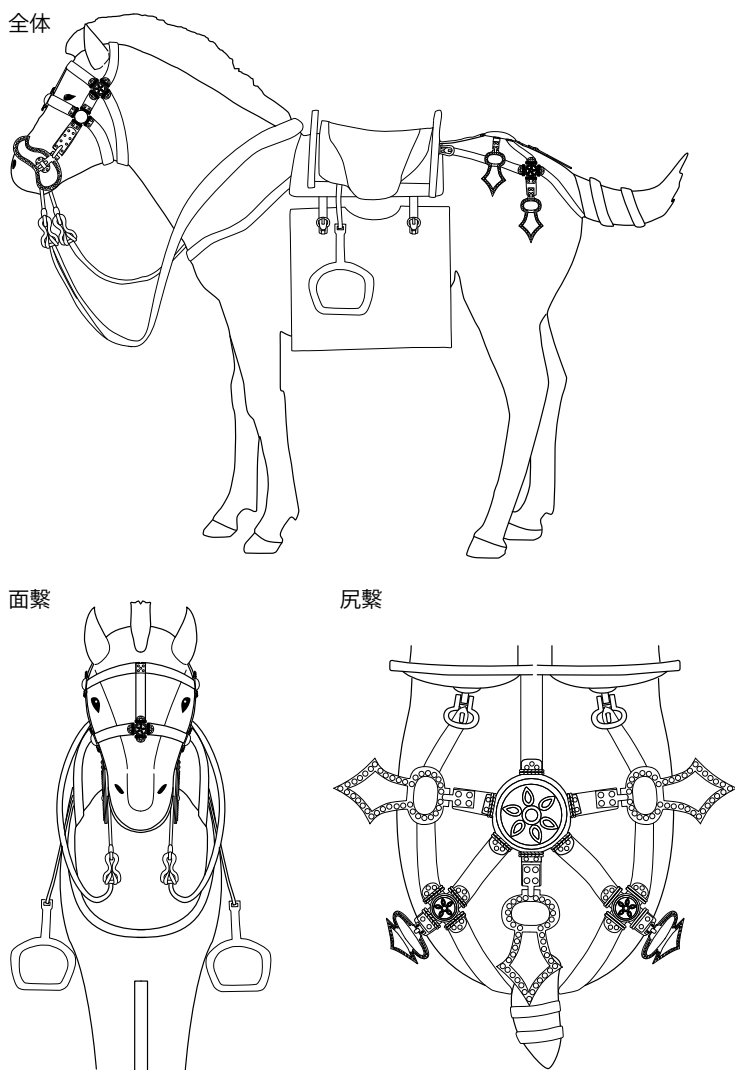


図 74 鹿谷古墳 A セットの馬装復元

### ③各セットの馬装の復元<sup>1</sup>

それでは、このような組み合わせの A・B 各セットは、どのような馬装を構成していたのだろうか。上述のように分離式磯金具鞍については保留し、おもに面繫と尻繫に関して復元を試みることにしたい。A セット (図 74) では、面繫に f 字形鏡板轡を鉢状辻金具 5 点を用いて装着する。この際に鉢状辻金具は 1 類 5 点を用いたか、1 類 3 点と 2 類 2 点を用いたかは判断できない。面繫の構成は宮代分類の複条系に該当する [宮代 1997]。尻繫には鉢状偏在六脚雲珠を中心におき、ほかに鉢状辻金具 2 点を用

いるのは鐘形杏葉を用いた尻繫のみである。鉢状雲珠や辻金具の導入期は楕円形馬具や鐘形馬具のセットとして用いられることが多かったであろう。

### ②各セットの編年的位置づけ

以上の検討事項をもとに、各馬具の編年的位置づけについてまとめたのが図 73 である。鏡板轡と杏葉の製作時期に時期差を見いださうの可能性は残るが、現状では明確に時期差を見いだしがたい。ただし、時期差を考慮に入れ、追葬が認められるのであれば A セットは初葬、B セットは追葬に伴う可能性も残している。f 字形鏡板轡と剣菱形杏葉の A セットに花文付鉢状雲珠・辻金具を伴うことは、鉾や繫の特徴から一定程度の確かさをもって指摘することができる。一方、分離式磯金具鞍がこのセットに伴うと評価できるのであれば、現状ではセット間に明確な時期差が認められない八角形鏡板轡と五角形杏葉のセットと合わせて、極めて先進的、かつ特殊な馬具のセットを入手できる被葬者像が想定でき、これは、双魚佩を伴う装飾付大刀などの文物を入手できるような社会関係におかれた被葬者像とも調和的であろう。



いて5点の剣菱形杏葉を装着する。このような尻繫の構成は宮代の分類した「偏平鉢六脚系の雲珠を伴う馬装の基本型」に該当する〔宮代2003〕。剣菱形杏葉をはじめとする杏葉3点を尻繫に装着する際に通有の馬装である。また、馬形埴輪によく表現される馬具の装着方式である。Bセット(図75)では、面繫に八角形鏡板轡を鉢状辻金具3類2点を用いて装着する。尻繫には透入方形飾金具を辻金具に用いて10点の五角形杏葉を左右5点ずつ垂下する。繫を格子状に配置する点に特徴がある。先に挙げた上塩冶築山古墳のように6点以上の杏葉を尻繫に垂下する場合でも、多脚の雲珠が尻繫の中心におかれれば、尻繫は格子状とはならない。Bセットには雲珠が確認できず、多数の飾金具が出土しているため、格子状の尻繫が想定される。なお、日本列島でも馬形埴輪や石馬に格子状の尻繫が表現され、実際の馬具でも、杏葉の数から格子状の馬装が復元される例が注目されている〔神ほか2018〕。五角形杏葉の一部の意匠に新羅の圭形杏葉との共通性がみられることを指摘したが、朝鮮半島では扁円魚尾形杏葉を多数用いた新羅を中心とする地域に格子状の尻繫の馬装が想定される事例が多いことから〔姜2011〕、何らかの関係性があるかもしれない。(片山)

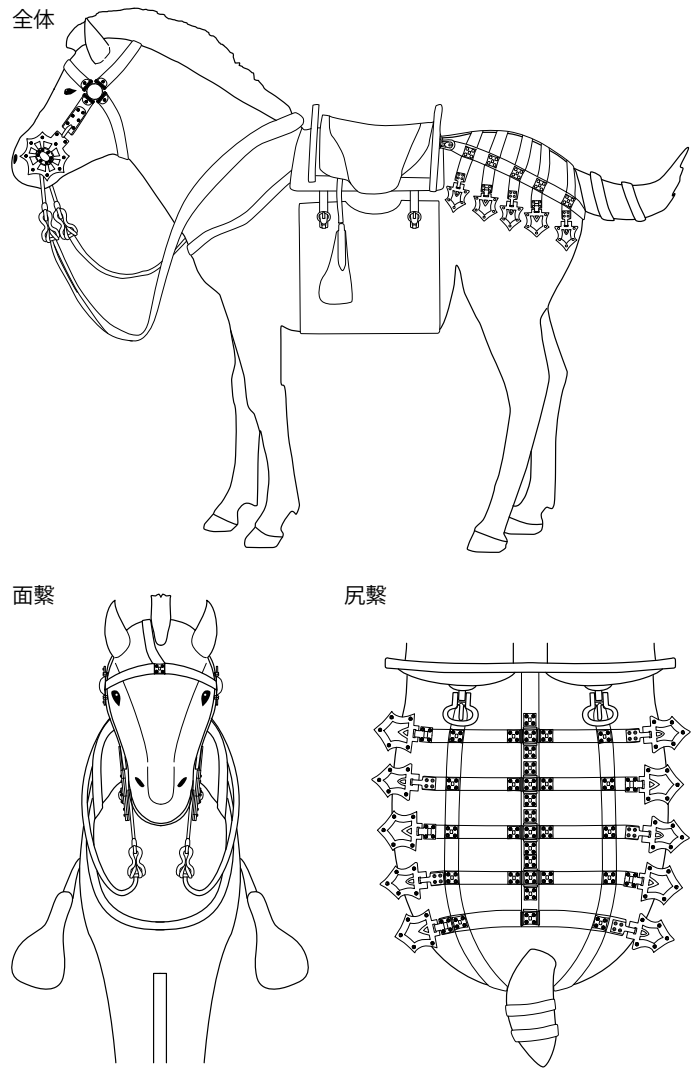


図75 鹿谷古墳Bセットの馬装復元

#### 注

- 1) なおA、B両セットの鏡や障泥に関する情報は皆無であるが、ここでは、馬形埴輪や類似する馬具セット等を参考に、Aセットでは輪鏡を、Bセットでは壺鏡を表現し、障泥を垂下させた。

#### 参考文献

(日本語文)

諫早直人 2012 『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』、雄山閣

諫早直人 2013 「馬具の舶載と模倣」『技術と交流の考古学』、同成社、pp.348-359

諫早直人・片山健太郎・金 宇大・サイモン=ケイナー・一瀬和夫 2016 「大英博物館ゴーランド・コレクション京都府鹿谷古墳出土馬具の調査」『日本考古学協会第82回総会発表要旨』、日本考古学協会、pp.52-53

- 諫早直人 近刊 「青松塚古墳出土馬具の時期と系譜」『青松塚古墳の研究』、京都大学文学研究科
- 石部正志 1981 「178号墳」『新沢千塚古墳群』、奈良県立橿原考古学研究所、pp.411-420
- 内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『'96特別展 黄金に魅せられた倭人たち』、島根県立八雲立つ風土記の丘、pp.42-47
- 岡部裕俊（編） 1994 『井原遺跡群 井原地区周辺古墳群』、前原市教育委員会
- 小野山節 1964 「剣菱形杏葉をとまなう馬具の性格」『日本考古学協会昭和39年度大会 研究発表要旨』、日本考古学会、pp.17-18
- 片山健太郎 2016 「古墳時代馬具における繋の基礎的研究」『史林』第99巻 6号、史学研究会、pp.36-74
- 北野耕平 1967 「古墳時代の枚方」『枚方市史』第1巻、枚方市
- 小玉道明 1988 『井田川茶白山古墳』、三重県教育委員会
- 小林行雄 1951 『日本考古学概説』、創元社
- 近藤義郎 1987 「四つ塚1号墳」『岡山県史』第18巻考古資料、岡山県、pp.324-327
- 嶋田光一 1991 「福岡県櫛山古墳の再検討」『古文化論叢』、児嶋隆人先生喜寿記念事業会、pp.507-557
- 神 啓崇 2017 「馬具の構造変化とその意義—西堂古賀崎古墳馬具の再検討—」『平成29年度九州考古学会総会 研究発表資料集』、九州考古学会、pp.20-29
- 神 啓崇・西 幸子・桃崎祐輔 2018 「岩戸山古墳石馬の馬装研究」『古文化談叢』第81集、九州古文化研究会、pp.51-78
- 杉山晋作・大久保奈奈・萩 悦久 1987 「佐原市・禅昌寺山古墳の遺物」『古代』第83号、早稲田大学考古学会、pp.110-139
- 高野政昭 1995 「天理参考館所蔵の異形鏡板付轡について」『天理参考館』第8号、天理大学附属天理参考館、pp.55-60
- 滝沢 誠 2002 「荒久城山古墳」『沼津市史』資料編考古、沼津市史編さん委員会、pp.332-333
- 田中由理 2004 「f字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』第51巻第2号、考古学研究会、pp.97-117
- 田中由理 2005 「剣菱形杏葉と6世紀前葉の馬具生産」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』、大阪大学考古学研究室、pp.641-656
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』、角川書店
- 千賀 久 1977 「付載 奈良県出土の馬具集成」『平群・三里古墳』、奈良県立橿原考古学研究所、pp.143-155
- 辻田淳一郎ほか 2015 『山の神古墳の研究：「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に』、九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 富山直人 2009 「ガウランドと鹿谷古墳—大英博物館所蔵資料の調査から—」『日本考古学』第28号、日本考古学協会、pp.41-54
- 西尾良一 1986 「大念寺古墳出土遺物について」『島根考古学会誌』第3集、島根考古学会、pp.43-56
- 花谷 浩 2000 「古墳時代鞍金具の取付方法とその変化について」『日韓古代における埋葬法の比較研究』（平成9年度～11年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（2））研究成果報告書）、奈良国立文化財研究所、pp.29-37
- 花谷 浩 2007 「上島古墳出土遺物の再調査報告」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集、出雲市教育委員会、pp.1-32
- 不破 隆 1988 「馬具」『物集女車塚』、向日市教育委員会、pp.100-113
- 堀田啓一・泉森 皎 1970 「ホリノヲ4号墳」『天理市石上・豊田古墳群Ⅰ』、奈良県教育委員会、pp.46-56
- 松井一明 1996 『高尾向山遺跡Ⅱ』、袋井市教育委員会
- 松浦宇哲 2004 「花文付馬具の編年と系譜」『古文化談叢』第50集（下）、九州古文化研究会、pp.65-80
- 松尾昌彦 1985 「信濃の馬具」『東日本における古墳時代遺跡・遺物の基礎的研究』、筑波大学、pp.2-24

- 松本岩雄（編） 1999 『上塩冶築山古墳の研究』（島根県古代文化センター調査研究報告書 4）、島根県古代文化センター
- 宮代栄一 1993 「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号、埼玉考古学会、pp.253-290
- 宮代栄一 1996 「古墳時代金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学』第3号、日本考古学協会、pp.53-82
- 宮代栄一 1997 「古墳時代の面繫構造の復元—X字脚辻金具はどこにつけられたか—」『HOMINIDS』Vol.001、CRA、pp.49-70
- 宮代栄一 2003 「古墳時代における尻繫構造の復元—馬装が示すもの—」『HOMINIDS』Vol.003、CRA、pp.37-64
- 宮代栄一 2014 「金鈴塚古墳出土馬具の研究」『金鈴塚古墳研究』第2号、木更津市郷土博物館金のすず、pp.1-24
- 桃崎祐輔 2011 「風返稲荷山古墳くびれ部出土馬具とその意義—考古資料からみた舎人像—」『東国の地域考古学』、六一書房、pp.163-191
- 八木勝行 2007 「正勝古墳群・翁山古墳群」『藤枝市史』資料編 1 考古、藤枝市史編さん委員会、pp.422-429
- 横田昌宏・井 英明 2015 『青柳篠林地区遺跡の埋蔵文化財調査』、古賀市教育委員会
- 米田文孝 1987 「群馬県藤岡市出土馬具考—鐘形杏葉を中心に—」『文化史論叢』上、横田健一先生古稀記念会、pp.490-524
- （韓国語文）
- 姜昇姫 2011 『加耶・新羅의 후걸이 (尻繫) 研究』釜山大學校大學院考古學科文學碩士學位論文
- 金廷鶴・鄭澄元・林孝澤 1980 「I. 味鄒王陵地区 第七地区 古墳群 発掘調査報告」『慶州地区 古墳発掘調査報告書』第2輯、文化財管理局・慶州史蹟管理事務所
- 文化財管理局 文化財研究所 1993・1994 『皇南大塚（南墳）』

## 図版出典

- 図68 1：小玉1988 2：花谷2007 3：八木2007 4：小林1951 5：米田1987 6：杉山ほか1987  
7：本書 8：辻田ほか2015
- 図69 1：本書 2：岡部（編）1994 3：滝沢2002 4：近藤1987 5：石部1981
- 図70 1：高野1995 2：嶋田1991 3：松尾1985 4：西尾1986 5：本書 6：横田ほか2015
- 図71 1：本書 2：金ほか1980 3：松本（編）1999 4：宮代2014（一部改変） 5：文化財管理局 文化財研究所1993・1994 6：松井1996 7：北野1967 8：千賀1977
- 図72 1：堀田ほか1970 2：不破1988
- 図73～75 筆者作成

## 5. 須恵器

鹿谷古墳からは 8 点の須恵器の出土が確認された。鹿谷古墳出土須恵器の中で注目すべき点に、台付子持壺の複数個体出土がある。鹿谷古墳出土の台付子持壺はいずれも欠損部位があり、完形品は存在しない。出土した各部位から台付子持壺の全体像を復元すると、次のようになる(図76)。

壺部はタタキによって成形し、これをカキメで消す。口縁部は受け部をもち、立ち上がりは内傾する。肩部には体部上半にカキメが施された無蓋の小壺を 4 個配置する。脚部径は壺部の径からするとやや大きく、長脚である。脚部は 3 箇所巡らされた沈線により 4 区画に分割される。最上段である 1 段目は、カキメが施される。2、3 段目はカキメののちに波状文が施される。最下段である 4 段目は、無文であり、脚端部をなす。透孔は 1、2、3 段目に文様の施文後に穿たれており、1 段目の透孔は長方形、2、3 段目の透孔は三角形である。透孔はそれぞれ 3 方向に、各段互い違いになるように穿孔されている。蓋は天井部に扁平なつまみをもつ。外面天井部にはケズリを施し、そののち櫛描列点文がつまみの周囲を一周するように施される。これら台付子持壺は、仕切石の前に配置されていたことが、ゴーランドの調査メモからわかる(第3章第4節参照)。

鹿谷古墳出土の台付子持壺は、形態的には本体の壺部が蓋の受け部をもつ有蓋短頸壺であり、肩部に付く小壺の形状が無蓋短頸壺で頸部はあまり長くならず、脚部の形状は長脚で脚部径がやや太く、脚端部が強く踏ん張らないといった点が特徴的である。台付子持壺は各地から普遍的に出土する器種ではなく、その分布には偏りがある。近畿地方では嵯峨野地域、播磨、紀ノ川流域などで出土にまとまりがみ

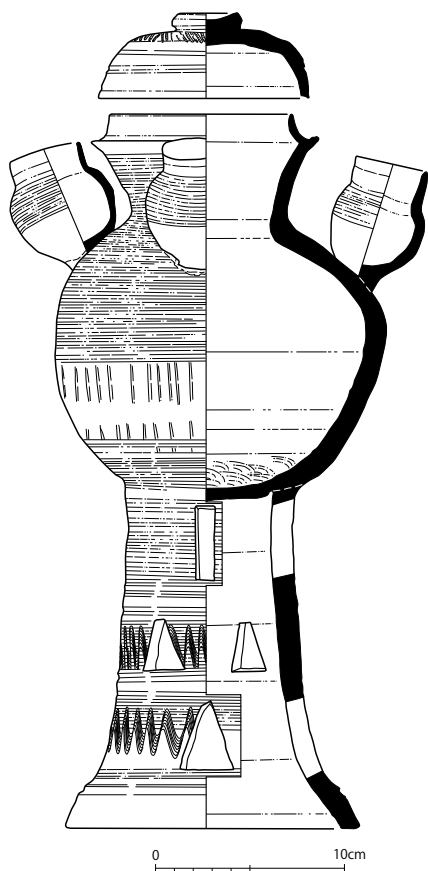


図 76 鹿谷古墳出土台付子持壺復元図  
(S=1/4)

られる。これらの台付子持壺の分布地域のうち鹿谷古墳が築造された丹波盆地は、保津峽を挟んで嵯峨野地域と隣接する。このことから、鹿谷古墳出土の台付子持壺は、嵯峨野から丹波盆地にかけての地域の、須恵器の地域色のまとまりの一端を示しているのかもしれない。その一方で、台付子持壺の形状については、鹿谷古墳例と嵯峨野地域出土例には差異がみとめられる。具体的には嵯峨野地域の台付子持壺は、壺口縁部端部には蓋の受け部はなく、蓋のほうに壺との合わせ部分がつくり出される。また脚部の形状についても、嵯峨野地域例では径が細く、また鹿谷古墳例ほど脚高が高くないという傾向にある。このことから、鹿谷古墳の台付子持壺は、台付子持壺を副葬するという地理的に近接する嵯峨野地域の影響を受けつつも、その形状には亀岡盆地、ひいては鹿谷古墳の独自性が認められる。

次に形態的特徴から、鹿谷古墳出土台付子持壺の年代について検討する。他古墳の出土例との比較視点としては、肩部に付属する小壺の形状や、中心の壺部と脚部を合わせた全体形状をあげることができる。

鹿谷古墳例の肩部に付属する小型壺は頸部が短く、直線的に伸びる無蓋壺である。このような小型壺が付着する台付子持壺は、大阪府一須賀 WA27号墳(図77-4)〔大阪府立近つ飛鳥博物館2000〕や兵庫県長尾タイ山 1 号墳(図77-6)〔龍野市教

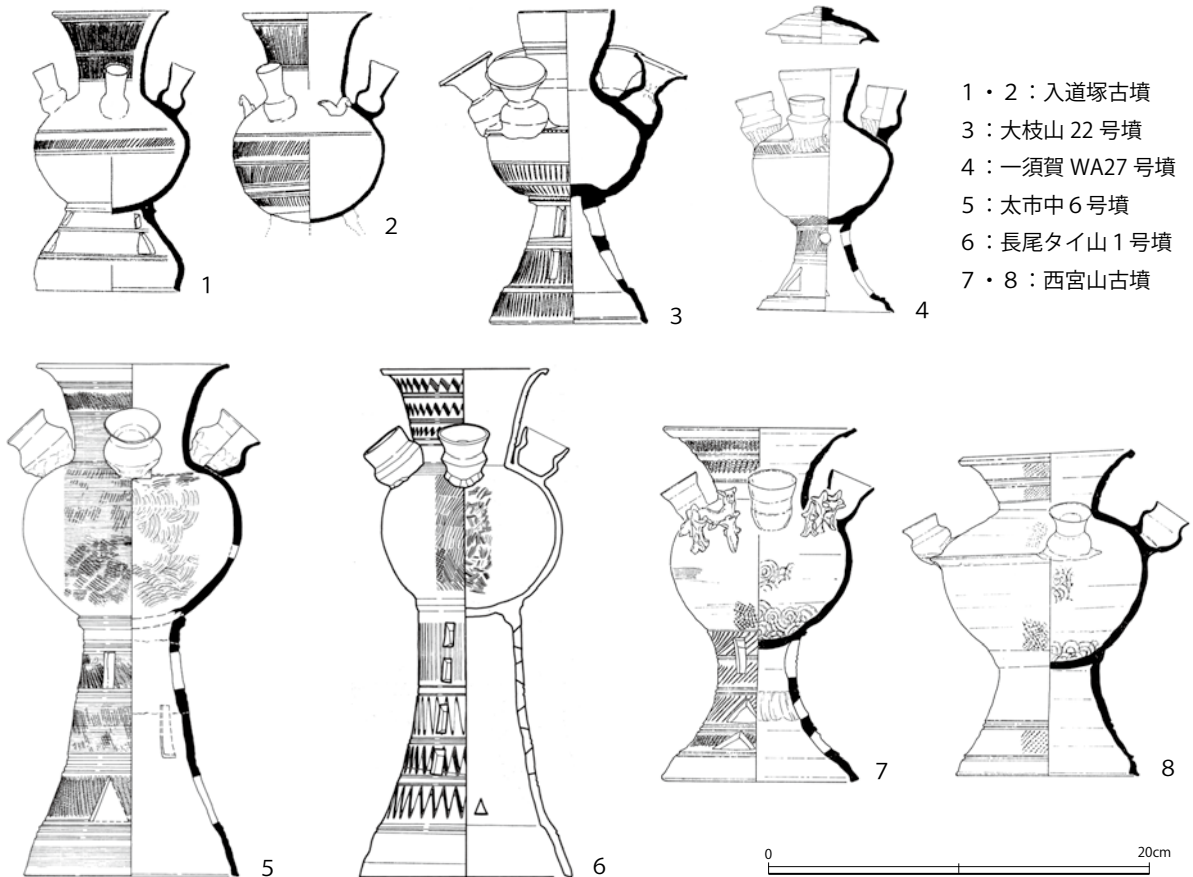


図77 近畿地方出土台付子持壺 (S=1/8)

育委員会(編)1982]、兵庫県西宮山古墳(図77-7・8)[八賀1982]などで確認される。これらのうち一須賀WA27号墳はTK43型式期、長尾タイ山1号墳と西宮山古墳はともにTK10型式期に出土土器から位置づけることができる。

一方、小壺をのぞいた全体形状であるが、鹿谷古墳例は球形の胴部に直線的な長い脚部をもち、また脚部径が胴部径と比較するとやや太めである点が特徴的である。このような形状は、兵庫県太市中6号墳(図77-5)[柏原(編)2003]例や長尾タイ山1号墳例などと共通する。出土土器から、前者はTK10型式期、後者はTK43型式期に位置づけることができる。

なお肩部に小型壺をもたない台付壺の形状と比較すると、京都府向日市物集女車塚古墳(秋山・山中(編)1988)例などに類似する。前者は出土土器などからMT85型式期と想定されている。

このように、他古墳出土の台付子持壺などの形状との比較をふまえると、鹿谷古墳出土の台付子持壺はTK10～TK43型式期に位置づけることができると想定される。また鹿谷古墳からは台付子持壺以外にも蓋杯と広口壺の口縁部が出土している。蓋杯はヘラケズリの範囲が1/2～2/3程度とやや広く、また杯身の立ち上がりは約1.8cmで、ごくわずかに内傾する。広口壺は頸部が沈線によって3区画に分割され、いずれも波状文が施文される。また口縁部の開きも、頸部基部や口縁部高と比して広い。これらの特徴はいずれもMT85型式期に比定することができ、台付子持壺の年代観と齟齬をきたさない。このことから、鹿谷古墳出土の土器群はMT85型式期に比定できると考えられる。

鹿谷古墳出土遺物は地元住民による発掘を経て、ゴーランドの手に渡っている。そのため現在知られている土器が、古墳の埋葬時の土器を完全に反映しているとは限らない。現状で判明している鹿谷古墳出土土器はいずれも須恵器で、蓋杯1点、台付子持壺3点、広口壺1点である。高杯や甕などと

表 23 亀岡盆地における古墳出土土器組成

	墳形 (規模)	埋葬施設	時期								甕	
				蓋杯	碗	台付有蓋碗	有蓋長脚高杯	無蓋長脚高杯	有蓋短脚高杯	無蓋短脚高杯		
北ノ庄13号墳	円 (8.8)	横穴式石室	MT15	3								
北ノ庄14号墳	円 (10)	横穴式石室	MT15	2								
医王谷3号墳	円 (10)	横穴式石室	TK10	8					3			1
鹿谷古墳	方円? (55?)	横穴式石室	MT85	1								
拝田8号墳	円 (12)	横穴式石室	TK43	5								
拝田9号墳	円 (10)	横穴式石室	TK43	11				1				
医王谷1号墳	円 (23)	横穴式石室	TK209	23			2	3			1	2
桜峠18号墳	円 (9)	横穴式石室	TK209	6								1
宮川1号墳	円 (20)	横穴式石室	TK209	3								
小金岐8号墳	円 (17)	横穴式石室	TK209	5				1				
加舎西山10号墳	円 (11)	横穴式石室	飛鳥Ⅰ	3							4	
宮川2号墳	不明	横穴式石室	飛鳥Ⅰ	3				1				
小金岐1号墳	円 (20)	横穴式石室	飛鳥Ⅰ	4								
小金岐3号墳	円 (11)	横穴式石室	飛鳥Ⅰ	4	1							1
医王谷4号墳	円 (13)	横穴式石室	飛鳥Ⅱ	4				1			1	
春日部1号墳	不明	横穴式石室	飛鳥Ⅱ	7		1		2			3	3
小金岐6号墳	円 (9)	横穴式石室	飛鳥Ⅱ	2								
小金岐9号墳	円 (12)	横穴式石室	飛鳥Ⅱ	7	1			1				1
国分古墳群ST80	八角 (15)	横穴式石室	飛鳥Ⅲ	6								
南条4号墳	円 (5)	横穴式石室	飛鳥Ⅲ	5								

いった器種がなく、また蓋杯も数が少ない一方、台付子持壺というほかの古墳ではあまりみられない器種が多いといった点が特徴的である。

この鹿谷古墳における土器組成を亀岡盆地内の古墳中に位置づけていく。6世紀以降の亀岡盆地では前方後円墳が連続と築造される。千歳車塚古墳〔亀岡市2000〕や拝田16号墳〔亀岡市2000〕など前方後円墳が築造されるが、いずれの古墳も出土遺物が知られていない。

一方、亀岡盆地内には多数の群集墳が築造されている。群集墳は亀岡盆地の各地に築造されるが、中でも鹿谷古墳群が築造される保津川西岸の行者山麓には亀岡盆地最大規模の群集墳である小金岐古墳群〔亀岡市2000〕や、拝田古墳群〔亀岡市2000〕などが認められる。また保津川東岸にも案察使古墳群〔亀岡市2000〕や国分古墳群〔京都府埋蔵文化財調査研究センター2008〕といった群集墳が築造される。これらの群集墳中には墳丘規模や石室規模が大きく、群集墳中の中心的な位置づけの古墳も存在する。これらの古墳の土器組成のうち、判明しているものは以下のとおりである(表23)。亀岡盆地における横穴式石室導入期にあたるMT15型式期は、いずれも蓋杯が少数副葬されるのみである。TK10～TK43型式期に相当する、土器組成の判明している古墳は数が限られている。これらのうちTK43型式期では、副葬土器は極めて少ないが、これらの古墳はいずれも群集墳中の小古墳である。一方TK10型式期に相当する医王谷3号墳は、多数の副葬土器が出土している。この時期は畿内地域における横穴式石室の導入以後、各地で地域内の有力古墳にも横穴式石室の採用が広まっていく時期である。医王谷3号墳も横穴式石室を導入した地域の有力古墳であったのかもしれない。豊富な土器組成も、このことを裏づけ

須 恵 器													土 師 器			
提瓶	平瓶	横瓶	壺	短頸壺	長頸壺	広口壺	埴	台付壺	台付長頸壺	台付子持壺	装飾付器台	甕	杯	台付碗	甕	長胴甕
3		1		3				1				2				1
						1	1			4						
					1											
4	3		1	2	1				3		2					
1						1										
1				1										1		
					1											
													2		2	
1																
2																
				1	2				3							
	1			1												
				1									3			
									1				3			
				1					1							

ているのかもしれない。TK209型式期は医王谷 1 号墳では豊富な土器が出土しているが、それ以外の古墳では蓋杯を中心としたごく限定された器種のみが出土される。医王谷 1 号墳出土土器は多数の蓋杯に加えて高杯や甕、壺類が出土しており、中でも壺類には装飾付壺が含まれている。医王谷 1 号墳は径が23mの円墳と墳丘規模が大きく、また石室についても規模が全長11.7m、玄室長4.2m、羨道長4.6m、玄室幅2.3mと長大である。また石材についても大形のものを用いられる。このことから医王谷 1 号墳は群集墳中の中心的な位置にあったことがわかる。飛鳥Ⅰ・Ⅱ式期は蓋杯を中心として無蓋高杯、甕、瓶類、壺類が出土する。この時期はいずれの古墳でも土器組成が均質化し、飛び抜けて豊富な土器組成をもつ古墳はみられない。飛鳥Ⅲ式期になると前段階と比較して、急激に副葬土器の器種の種類が減少する。群集墳内の中心的な古墳と考えられるような古墳（国分古墳群 ST80）であっても、蓋杯が中心となる。

ここまで亀岡盆地における古墳の土器組成の変遷をみてきた。この変遷をふまえ、亀岡盆地における鹿谷古墳の土器組成の位置づけについて検討する。鹿谷古墳の土器は MT85型式期と想定されるが、出土土器は須恵器の台付子持壺 4 点と、蓋杯と広口壺と埴がそれぞれ 1 点ずつという組成である。台付子持壺は亀岡盆地内では、鹿谷古墳でのみ出土が確認されている。また脚台をもつ器種が多数副葬される古墳についても、亀岡盆地では稀である。このことから鹿谷古墳の被葬者は、亀岡盆地内において卓越した勢力をもった人物であったと考えられる。

このように鹿谷古墳の土器組成は亀岡盆地内では特異なものである。鹿谷古墳の土器組成は、台付子

持壺が副葬される点からは、入道塚古墳〔小林2002〕や南天塚古墳〔安藤1976〕、あるいは大枝山22号墳〔上村・丸川（編）1989〕などといった、嵯峨野地域の有力古墳との関連がうかがわれる。また石室内に石柵をもち、台付子持壺が副葬される古墳も散見されるという点から、紀ノ川地域の古墳との関連についても考える必要があるのかもしれない。また亀岡盆地内の多くの古墳から出土が確認されている高杯や甕などといった器種が、鹿谷古墳では確認されない。この高杯や甕といった器種は同時期の古墳の副葬土器として広く認められるものである。このことから大英博物館で収蔵されている土器は鹿谷古墳に副葬されていたもののすべてではなく、副葬土器の一部を示している可能性が高いものと想定される。鹿谷古墳出土の土器は、その特徴から MT85型式期と考えられる。土器組成からは亀岡盆地内において卓越した内容をもつといえ、これは金属製品の様相からも追認できる。また台付子持壺の出土からは、鹿谷古墳の被葬者の他地域との活発な交流の様子が浮かび上がってくる。

一方、ゴーランド・コレクション中には「Tamba」などのラベルが貼られているものの、遠藤茂平の絵図では確認できない資料が含まれている。これらはゴーランドが鹿谷古墳群を調査した際に採集されたものであろう。これらの土器はその特徴から、TK23～MT15型式期に比定することができる。鹿谷古墳群では木棺直葬墳と考えられる低墳丘墳も確認されている。これらの資料はこのような古墳で採集されたものであろうか。いずれにせよ鹿谷古墳群は少なくとも、TK23型式期には造墓が行われていたことがわかる。

亀岡盆地では横穴式石室を主体部とする群集墳の築造が、MT15型式期（北ノ庄13・14号墳〔亀岡市教育委員会（編）1997〕）から確認されている。一方、木棺直葬墳などの竪穴系の埋葬施設を主体部とする古墳からなる群集墳は、穴太古墳群〔亀岡市2000〕などがあげられる。これらの群集墳はTK23・47型式期に造墓されたと考えられる。また拝田古墳群や美濃田古墳群〔亀岡市2000〕などのように、古墳群内に竪穴系の埋葬施設を主体部とする古墳と、横穴式石室を主体部とする古墳がともに築造されるものも存在する。これらはTK43型式期には横穴式石室墳が築造されるようになり、それとともに直葬系の古墳の造営が停止する。このように亀岡盆地ではTK23・47型式期に直葬系の埋葬施設を主体部とする古墳からなる群集墳が形成され、その後MT15型式期には横穴式石室墳からなる群集墳が形成されはじめるようになり、TK43型式期になると横穴式石室墳が一般的になる。一方の鹿谷古墳群は遺物から、TK23～MT15型式期の形成と考えられ、亀岡盆地における木棺直葬墳からなる群集墳の形成期にあたる。このように鹿谷古墳群における竪穴系の埋葬施設を主体部とする考えられる古墳は、亀岡盆地における群集墳の開始時期の様相を検討する上で、極めて重要な資料となる。

ゴーランド・コレクション中の「Tamba」などのラベルが貼られている土器は、鹿谷古墳出土のものとその周辺の鹿谷古墳群から採集されたものである。前者からは鹿谷古墳の時期や亀岡盆地における鹿谷古墳の位置づけ、あるいは鹿谷古墳の被葬者の他地域との交流の様相をうかがうことができる。また後者は鹿谷古墳群の造墓開始時期や、亀岡盆地における群集墳の造営開始期の様相について検討する際の重要な資料を提示している。

（前田）

#### 参考文献

- 秋山浩三・山中 章（編） 1988 『物集女車塚』、向日市教育委員会  
安藤信策 1976 「大覚寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』、京都府教育委員会、pp.80-115  
柏原正民（編） 2003 『太市中古墳群』、兵庫県教育委員会  
上村和直・丸川義広（編） 1989 『大枝山古墳群』、京都市埋蔵文化財研究所  
大阪府立近つ飛鳥博物館 2000 『一須賀古墳群WA支群』  
亀岡市 2000 『新修亀岡市史』資料編第1巻



- 亀岡市教育委員会（編）1989 『医王谷1号・4号墳発掘調査報告』  
 亀岡市教育委員会（編）1997 『北ノ庄13・14号墳』  
 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008 『京都府遺跡調査報告集』第129冊  
 小林行雄 2002 「円山陵墓参考地・入道塚陵墓参考地調査報告」『書陵部紀要』第53号、宮内庁書陵部、pp.1-15  
 龍野市教育委員会（編）1982 『長尾タイ山古墳群』  
 田辺昭三 1981 『須恵器大成』、学生社  
 寺前直人 2005 「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』、大阪大学考古学研究室、pp.447-458  
 土井孝則 2001 「南丹波における横穴式石室の導入について」『花園大学考古学論叢』、花園大学考古学研究室、pp.73-85  
 富山直人 2007 「京都丹波の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』、横穴式石室研究会、pp.163-174  
 富山直人 2009 「ガウランドと鹿谷古墳—大英博物館所蔵資料の調査から—」『日本考古学』第28号、日本考古学協会、pp.41-54  
 八賀 晋 1982 「西宮山古墳出土遺物」『京都国立博物館蔵 富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』、京都国立博物館、pp.29-81  
 森本 徹 2012 「儀礼からみた畿内横穴式石室の特質」『ヒストリア』第235号、大阪歴史学会、pp.1-25

図版出典（本書報告のものは除く）

図76 筆者作成

図77 1・2：小林2002 3：上村・丸川（編）1989 4：大阪府立近つ飛鳥博物館2000 5：柏原（編）2003  
 6：龍野市教育委員会（編）1982 7・8：八賀1982

# 第5章 総括

## 1. ゴーランド・コレクション調査プロジェクトと鹿谷古墳

本章では、本プロジェクトによって明らかとなった鹿谷古墳の基礎情報をいま一度整理し、残された課題を明確にしておくことで総括に代えたい。ここまでみてきたように、本プロジェクトで行った鹿谷古墳に関する調査は多岐にわたる。とりわけ平成23～30（2011～2018）年にかけて毎年渡英して実施した大英博物館の調査では、大英博物館の全面的な協力のもと、ゴーランド・コレクション考古資料と文書資料の双方について悉皆調査を実施することができた。鹿谷古墳に関していえば、先人たちにより断片的に知られてきた資料も含めて、本書によってその全貌がほぼ公になったとあってよいだろう。日本考古学を中心に様々な専門領域をもつ複数の研究者が継続的、かつ組織的に調査を行うことで、既往の個人単位の調査ではなしえなかった水準での資料化を達成することができたことも重要である。

また、亀岡市に現在も存在する鹿谷古墳、鹿谷古墳群の測量調査や、国内の各機関において保管されていた鹿谷古墳に関連する文書資料の調査もあわせて実施した。前者においては2000年代に入り「再発見」された鹿谷古墳の墳丘測量図を初めて提示し、明治14（1881）年に遠藤茂平が描いた絵図と比較するための素地を整えた。後者においては当時の様々な行政文書の検討を通じて、鹿谷古墳の発見からゴーランドが出土遺物を入手するまでの経緯を克明に浮かび上がらせた。

最後に鹿谷古墳に関連して本プロジェクトが実施・協力した主要な活動をまとめておきたい。

### 【調査研究活動】

- ・鹿谷古墳・鹿谷古墳群の測量調査（2010～2013年）
- ・大英博物館におけるゴーランド・コレクションの調査（2011～2018年）
- ・ロンドン古物学協会におけるゴーランド関連文書資料の調査（2013・2014年）
- ・京都国立博物館における絵図の調査（2014年）
- ・宮内庁宮内公文書館、東京国立博物館における鹿谷古墳関連公文書の調査（2016年）
- ・公益財団法人東洋文庫における梅原考古資料（鹿谷古墳群関連資料）の調査（2018年）

### 【展示・普及活動】

- ・鹿谷古墳群シンポジウム（2011年11月20日、京都府亀岡市・穂田野町鹿谷公民館）
- ・企画展「ウィリアム・ガウランドと明治期の古墳研究」（2014年9月6～28日、東京都千代田区・明治大学博物館）
- ・ワークショップ京都編「大英博物館所蔵ゴーランド・コレクション調査プロジェクト」（2016年6月18日、京都府京都市・キャンパスプラザ京都）
- ・特別展「ウィリアム・ガウランドと日本の古墳研究」（2018年10月13日～12月2日、東京都千代田区・明治大学博物館）
- ・「大英博物館所蔵ゴーランド・コレクション調査プロジェクト（亀岡編）―鹿谷古墳の新知見―」（2019年3月2日、京都府亀岡市・亀岡市文化資料館）
- ・大英博物館所蔵品データベース（Collection online）、日本ギャラリー展示リニューアルへの協力

## 2. 鹿谷古墳の発見とその後の調査研究

### (1) 鹿谷古墳の発見

#### ①鹿谷古墳の発見

明治14(1881)年4月に地元民によって発掘され、現在、大英博物館が所蔵する鹿谷古墳出土遺物の来歴については、これまで京都国立博物館所蔵絵図や、大英博物館所蔵ゴーランド文書資料の一部に基づいて議論が行われてきたが、大英博物館とロンドン古物学協会が所蔵するゴーランド文書資料を可能な限り、悉皆調査するとともに、宮内庁宮内公文書館や東京国立博物館が所蔵する公文書についても調査を行った。その結果、絵師遠藤茂平が作成した京都国立博物館所蔵絵図(京A・B)の正本が、京都府社寺掛の半井真澄によって作成された「古墳見分日記」(東B-2別紙)とともに京都府から宮内省、そして翌年には農商務省へ提出されていたことが明らかとなった。絵図に加えて東京国立博物館が所蔵する「古墳見分日記」の全容が公となったことで、発掘時の状況や半井らの調査についてより詳細な検討が可能となった。

#### ②絵図の作成

「古墳見分日記」の記載から、現地調査の期間、すなわち絵図の作成期間が明治14(1881)年5月6日から8日とかなり短かったこと、遠藤茂平は石室図を描くにあたって鹿谷古墳の石室内には入っていないことなどが初めて明らかとなった(第2章第1節参照)。なお正投影法を用いた石室図の作成にあたっては、ゴーランドの影響を想定する意見もあったが〔宮川2005〕、ゴーランドが鹿谷古墳が最初に訪れるのは明治14(1881)年12月であり、鹿谷古墳が発掘された同年4月から絵図が作成、宮内省に提出される7月までの間に遠藤がゴーランドと接触した形跡は、少なくとも資料からは確認できなかった。図化方法についても同時期の日本において散見され、高水準ではあるが必ずしも先駆的なものとはいえないことも示された(第4章第1節参照)。ゴーランドが近代的な考古学的素養を身につける過程については、エドワード・モースやアーネスト・サトウ、W.G.アストンなどとの関係が注目されてきたが〔富山2014〕、鹿谷古墳出土遺物についての観察記述には絵図の影響がうかがえる(第2章第3節参照)。今回明らかとなった時系列からみても、絵図(ないしその作成者である遠藤茂平)との出会いがゴーランドの石室研究の方向性に一定の影響を与えた可能性は十分にあるのではないだろうか。

### (2) 鹿谷古墳出土遺物をめぐる中央官庁の対応

公文書類の悉皆調査を通じて、京都府が半井による調査や絵図の作成も含めて、当時の法令に即して宮内省、農商務省へ速やかに報告をしていたこと、事務的なミスはあるものの「遺失物取扱規則」という法令のもとに、鹿谷古墳出土遺物が土地共有者(地元民)に下付され、ゴーランドに売却されたこと、その事実が発覚後も京都府はもちろん、農商務省も何ら効果的な対処をできなかったことなど、鹿谷古墳出土遺物の発見からゴーランドの所蔵となるまでの詳細な経緯が明らかとなった(第2章第1・2節参照)。ゴーランドの手記などがみつからないため、鹿谷古墳出土遺物入手に至る具体的な経緯はいまだ闇の中ではあるが、氏自らが発掘を行った芝山古墳出土遺物と共にゴーランド・コレクションの中核を占める鹿谷古墳出土遺物の入手過程が復元された意義は大きい。当時の日本国内における文化財行政の実態を考える上でも格好の材料となるであろう。

### (3) 鹿谷古墳に対するゴーランドの調査・研究

#### ①ゴーランドの調査

ゴーランド文書資料の検討から、ゴーランドは少なくとも2度、鹿谷古墳群を訪問している(第2章第3節参照)。1度目は明治14(1881)年12月であり、2度目は明治16(1883)年2月以降である。1度目の調査では村長から発掘について説明を受け、遺物の調査を行っている。ゴーランドがいかにして鹿谷古墳発見の情報を入手したのかは依然明らかでないが、ゴーランド文書資料にはゴーランド自身の現地調査記録(英A1・A2)だけでなく、京都国立博物館所蔵絵図とほぼ同一内容の絵図(英B2・3)や、東京国立博物館所蔵「古墳見分日記」の草稿(英B1)が含まれており、これらの入手は半井真澄との直接的な接触なくして考え難い。現時点で資料的な裏付けはとれていないものの、村長との面会や古墳への案内、警察署に保管されていたとみられる遺物の調査は、半井による口利きがあつてのものともみるのが素直であろう。2度目の調査では鹿谷古墳群の別の石室の計測や写真撮影を行っている(英C1~4)。日本にもたらされて間もないガラス乾板による写真撮影は、ゴーランドが撮影したものの中では比較的古く(富山2014)、古墳調査における最初期の撮影事例としても再評価されてしかるべきものである。すでにモースからの影響が指摘されている計測や図化に、写真撮影を加えたゴーランドの石室調査スタイルは、遅くともこの調査の頃には確立されていた可能性が高い。なお、明治15(1882)年12月の時点で出土遺物は遺失物取扱規則に基づいて土地共有者に下付されており、翌年5月にはゴーランドに50円で売却されている。購入の話はおそらく2度目の調査の前後にはまとまっていたのであろう。

#### ②ゴーランドの研究

ゴーランドは論文の中でたびたび鹿谷古墳やその出土遺物について言及しており、彼のドルメン研究や遺物研究において、鹿谷古墳は大阪府芝山古墳と同じくらい重要な存在であった。それゆえに芝山古墳同様、まとまった報告をついにしなかつたことは、返す返すも惜まれる。ゴーランド文書資料にはゴーランドが鹿谷古墳に対する自らの調査を報告しようとしていたことをうかがわせるメモも複数みつけたが(英A3・4)、あくまでメモの水準に留まるものであった。大英博物館やロンドン古物学協会にある直筆ノート(A)・(B)はゴーランドが認識する鹿谷古墳出土遺物を知る基礎資料となるが、写真や実測図がないため、その記載をもとに個々の遺物を特定することはよほどの条件に恵まれない限り難しい。そのようなリストの脆弱性もあつてか、1889年4月に他のゴーランド・コレクション考古資料とともに大英博物館に90円で譲渡された後、1896年ないしそれ以前に大英博物館で鹿谷古墳出土遺物の集合写真の撮影が行われた時点で早くも遺物の帰属に一部混乱が生じてしまっている(第3章第5・6節参照)。

## 3. 鹿谷古墳とその出土遺物の調査・研究

### (1) 古墳の名称

古墳の名称について、本プロジェクトでは当初、鹿谷18号墳(鹿谷古墳群茶ノ木支群18号墳)という名称を用いていた。これは、京都府の遺跡地図において「位置不詳」とされている鹿谷18号墳(1881年発掘墳)を「再発見」という認識によるものであった。しかしながら土井孝則[2010]の指摘を受けて過去の遺跡地図や台帳との照合を進めていった結果、その古墳が昭和47(1972)年に初めて遺跡地図が作成されて以来、基本的に5号墳として登録され続けていたことを追認した(第3章第2節参照)。

一方で龍谷大学考古学研究会や本プロジェクトによる鹿谷古墳群の分布調査や測量調査によって、古墳群の範囲は拡大し、古墳の数も増えており、既存の遺跡地図に基づいた議論にも限界がある。そのような問題点を認識した上で、ゴーランドがこの古墳を Rokuya Dolmen と呼んでいること、現在、大英博物館に遺物が所在することも考慮し、本書では「鹿谷古墳」という名称を採用することとした。

## (2) 鹿谷古墳の基礎情報

### ①墳丘

行者山(標高約430m)南麓に延びる丘陵の頂部(標高281.8m)に位置する。絵図との比較を行った結果、立地や墳丘細部の特徴に確実な類似点が複数存在することから、明治14(1881)年に発掘された鹿谷古墳と判断した(第3章第3節参照)。発見当時はゴーランドを含めて円墳と認識していたが、測量調査の結果、径38.0m、高さ5~8mの円丘部の北西側に、長さ16.0m、最大幅8.0m、高さ2.0mの突出部が確認された。最終的な墳丘形態の確定は発掘調査を待つ必要があるが、墳長55.0mの前方後円墳(造出付円墳)である可能性が浮上した。

### ②石室構造

絵図を含め複数の石室図面が存在し、各図の細部表現には若干の差異が存在するが、玄室奥壁側に石棚、仕切石を持つ両袖式の横穴式石室である点では一致する。遠藤茂平もゴーランドも石室内に入っていないため、大きさを推測する手がかりがほとんどないものの、図面に基づけばその比率は玄室奥壁幅1に対して、玄室長1.5~1.6、玄室高1、玄門部幅0.4~0.5、玄門部高0.4~0.6である。玄室は平面長方形、平天井構造で、床面には礫敷の上に扁平石材による敷石がなされている(第3章第4節参照)。

### ③出土状況

石室内から出土した遺物については、絵図とゴーランドの石室図に出土位置が記号で記されているほか、ゴーランドを含む複数の研究者によって言及されている。いずれも断片的な情報であり、相互の記述に若干の相違もあるが、絵図正本の情報に基づくとみられるゴーランド文書資料の「鹿谷古墳の検討メモ」(英A1)を中心に検討を行った結果、次のように出土位置を復元することが可能である(第3章第4節参照)。

【石棚の上】	轡(西端)を含む各種馬具
【石棚の下(仕切石内)】	金銅製品片(双魚佩)、ガラス玉(西端)などの玉類、鉄刀、(人骨?)など
【石棚の前面】	鉄刀(石棚西端に立て掛け)、台付子持壺

### ④出土遺物

ゴーランド・コレクション考古資料について悉皆調査を実施した上で、ゴーランド自身が執筆した論文の中で Rokuya Dolmen 出土として掲載している集合写真や図面、発掘直後に遠藤茂平が作成した絵図に基づいて鹿谷古墳出土遺物の抽出作業を進めた。結果として、絵図に描かれている遺物のほとんどが大英博物館にあることや、集合写真には絵図には描かれていない遺物が写っており、それらの中には明らかに鹿谷古墳以外から出土した遺物が含まれることなどが明らかとなった。このため、抽出方法を明記した上で、鹿谷古墳出土遺物と鹿谷古墳出土遺物の可能性を含む関連遺物にわけて報告した(第3章第5・6節参照)。今回確認できなかったものも含めて、改めて前者の内容を示しておく(絵図に描かれているものについてはゴシックで示した)。

【刀剣類】 鉄刀 2、振り環 1、双魚佩 1

【馬具】 f字形鏡板轡 1、八角形鏡板轡 1、鞍金具 1 背分、劍菱形杏葉 5、五角形杏葉10、鉢状雲珠 1、鉢状辻金具10、透入方形飾金具22、爪形飾金具 4

【玉類】 ガラス小玉 2、土玉 1（いずれも同定できず）

【須恵器】 台付子持壺 4、台付子持壺蓋 1、杯蓋 1、杯身 1、壺 1、罎 1（現存せず）

#### ⑤出土遺物についての新知見

刀剣類 2本の鉄刀と双魚佩については、絵図や拓本と大きさを含め細部において一致することを確認した。また双魚佩については細部写真を提示しつつ、具体的な彫金の手順についても検討を試みた上で（第3章第5節参照）、類例との比較を行い、鱗の施文方法からMT85～TK209型式期に位置づけられることを確認した（第4章第3節参照）。これらに加えて集合写真との同定ができた振り環についても、双魚佩が振り環付大刀としばしば組み合うこともふまえ、石棚の下（仕切石内）に副葬された鉄刀に伴う可能性が高いと判断した。

馬具 破片を含めて240点余りを数えるゴーランド・コレクションの馬具の中から、72点の鹿谷古墳出土馬具、30点の鹿谷古墳出土馬具の可能性を含む関連馬具を抽出した。後者についてはナウマンを介してゴーランドの手に渡った土佐国領石村（現、高知県南国市）の笹原古墳から出土した馬具がほぼ確実に含まれている。しかしながら集合写真に写り、絵図には描かれていない馬具すべてを笹原古墳に帰属させることもできない。集合写真の撮影時期は、ゴーランドが大英博物館に遺物を譲渡してしばらくたった1896年ないしそれ以前であり、撮影者もゴーランド自身ではなかった可能性が高い（第2章第3節参照）。彼が撮影の場に立ち会っていたかを確認する術もないため、これ以上の詮索は控えておくが、鹿谷古墳から出土したものの「古墳見分日記」には記載されなかった、あるいは後述する須恵器と同様にゴーランド自身が鹿谷古墳群を調査した際に入手したものが一定量含まれている可能性も依然として残る（第3章第6節参照）。

なお、資料化にあたっては可能な範囲で表面だけでなく裏面についても実測、写真撮影を行い、金属製馬具だけでなく、裏面に付着している繫などの有機質製馬具についても記録を試みた。これによって、八角形鏡板轡や五角形杏葉については裏面に織物を貼り、透かしから織物をみせていたことが初めて確かめられた。また形態、材質、意匠や繫の構造などから馬具のセット関係について検討をおこない、f字形鏡板轡・劍菱形杏葉をはじめとするAセットと、八角形鏡板轡・五角形杏葉をはじめとするBセットに帰属する馬具を確定させ、馬装の復元についても試案を示した（第4章第4節参照）。個々の馬具の製作時期から導き出される両セットの編年的位置づけは、Bセットが若干後出する可能性を残しつつも、おおむね内山編年後期2段階、すなわちTK10～MT85型式期におさまる。

玉類 絵図には「青クリ色」のガラス小玉2点と、「クリイロ」の土玉1点が描かれているが、ゴーランド・コレクションに含まれる約1250点の玉類の中からそれらを抽出することはできなかった（第3章第5節参照）。土玉については絵図と同じく半分に分れているものを1点抽出したが、絵図には計測値が示されておらず、あくまで推測の域を出ない。

須恵器 罎を除いて、絵図に描かれているもの7点を抽出した（第3章第5節参照）。またゴーランド直筆ノート（A）の記載内容をもとに台付子持壺1点についても鹿谷古墳出土遺物と判断した。これらの土器群は、MT85型式期に比定することが可能である（第4章第5節参照）。

なお、ゴーランド・コレクションの中にはこれらのほかにも、「Tamba」などのラベルが貼られている須恵器があり、ゴーランド自身が鹿谷古墳群を調査した際に採集したものとみられる（第3章第5節参照）。TK23～MT15型式期に比定されるこれらの資料は、築造時期を示す資料がほとんど得られてい

ない鹿谷古墳群の造墓活動の上限年代を考える上でも重要である（第 4 章第 5 節参照）。眼下に展開した集落遺跡である鹿谷遺跡とのパラレルな関係が改めて注目されよう。

### （ 3 ） 鹿谷古墳の築造時期と位置づけ

#### ①築造時期

鹿谷古墳の築造時期を知る手がかりは、①横穴式石室、②刀剣、③馬具、④須恵器がある。須恵器型式でそれぞれの位置づけを整理すると、① MT85型式期以降、② TK10～TK43型式期（振り環）、MT85～TK209型式期（双魚佩）、③ TK10～MT85型式期、④ MT85型式期となる（第 4 章第 2～5 節参照）。

以上を総合すると、既に富山直人により指摘されていたところではあるが〔富山2009〕、鹿谷古墳は MT85型式期、すなわち 6 世紀中頃でも後半に近い時期に築造されたとみるのが妥当である。発掘された範囲が限定されているものの、現在知られる副葬品に関していえば追葬を想定する積極的な理由は見出せない。副葬品はすべて石棚下（仕切石内）に葬られた被葬者に伴うものとみてよいだろう。ただし、2 セットの馬具については若干の新旧が認められ、入手時期（製作時期）に差があった可能性は十分にある。

#### ②位置づけ

鹿谷古墳については副葬品の豊富さや石棚・仕切石を持つ特異な石室構造から、これまでも鹿谷古墳群における「盟主墳」〔河野2000〕、「首長墓」〔土井2001〕などと目されてきた。今回の測量調査によって鹿谷古墳が、古墳群の最高所に位置する墳長55.0mの前方後円墳（造出付円墳）である可能性が浮上したことで、その位置づけはより確かなものとなったといえよう。同じく行者山麓に築かれ、鹿谷古墳に先行して石棚が採用された拝田16号墳も、拝田古墳群では唯一の前方後円墳（墳長44m）であり、石棚を持つ横穴式石室が群集墳の最有力者層に相次いで導入された様子をうかがうことができる。

副葬品についていえば、全国的にも稀少な双魚佩を伴う振り環頭大刀や、同一被葬者が入手したとみられる先進的かつ特殊な 2 セットの装飾馬具については（第 4 章第 3・4 節参照）、当該期の亀岡盆地に鹿谷古墳よりも卓越した墳丘規模を持つ古墳がほかに見当たらないことからみて、王権中枢との直接的な関係によってもたらされたと考えてよいだろう。一方で石室構造からは畿内型石室を基本としつつも、紀ノ川流域や九州地方との持続的な関係が、子持台付壺をはじめとする須恵器からは隣接する嵯峨野地域の有力古墳との関係がうかがわれるなど、王権中枢を介さない、地域独自の交渉の存在も垣間見える（第 4 章第 2・5 節参照）。これらを総合すれば、外部世界と重層的な関係を構築した、鹿谷古墳群のみならず当該期の亀岡盆地において最も卓越した被葬者像を描くことが可能であろう。

## 4 . 今後の課題

本書によって、これまで断片的に紹介された諸資料から紡ぎだすほかなかった鹿谷古墳の全貌がほぼ明らかとなった。最後に今後に残された課題をいくつか挙げ、‘ほぼ’とせざるを得なかった理由を明らかにしておくことで、鹿谷古墳の最初の報告者としての責を塞ぎたい。

#### ①半井真澄らの調査内容

かつて確実に存在した文書資料のいくつかについて、現時点で所在を確認できておらず、半井真澄らの調査の実態については不明な点が多い。とりわけ「古墳見分日記」とともに宮内省、農商務省に提出された絵図正本がみつかっていないため、京都国立博物館所蔵絵図とゴーランド文書資料の絵図の相違

が何に起因するのか明らかにしえなかった。また、絵図正本には本来「備考書」が伴っており（第2章第1節参照）、これにはおそらく個々の遺物の出土状況や出土品の目録などが記載されていた可能性が高い。これらの原典ともいべき資料が欠落していることで、石室図がどこまで実態を反映しているのかや、絵図に描かれた遺物が鹿谷古墳出土遺物のすべてであるのか、といった基本的なことすら確かなことはわからなかった。本書がきっかけとなって宮内庁や東京国立博物館、そして京都府や地元亀岡に眠っているかもしれない未知の資料の掘り起こしがなされることを期待したい。

## ② ゴーランドの調査内容

今回、検討を行ったゴーランド文書資料には手記（日記）のようなものは含まれず、鹿谷古墳に関するものはいずれも断片的で、いつ作成した、あるいは入手したのかがわからないものが大部分であった。そのため、ゴーランドが鹿谷古墳群にいつ、そして何度訪れ、何をみた（調査した）のかといったことや、いかなる経緯で鹿谷古墳出土遺物入手し、帰国するまでの間、どのような保管状況であったのかといったことについては、依然として不明な点が多い。またゴーランド文書資料に関しては、未報告資料の掘り起こしと翻刻に時間を取られ、後藤和雄や竹村亮仁によって紹介されている直筆ノート（A）・（B）などを含めた十分な検討を行うことができなかった。本書に掲載した翻刻や写真図版といった基礎資料をもとに、国内文書資料やゴーランドが公にした論文、さらには出土遺物や現地に残された古墳などと詳細に比較する作業は今後の課題である。

## ③ 出土遺物の抽出

調査開始当初、大英博物館が所蔵するゴーランド・コレクション考古資料の中で、どれが鹿谷古墳出土遺物であるかについては、大英博物館においても十分に把握されていなかった。2度の大战に伴う混乱はもちろん〔出口2005：200-215〕、ゴーランドが資料を譲渡してわずか数年後に撮られた鹿谷古墳出土遺物の集合写真に既に別古墳出土遺物の混入がみられることからして（第3章第5・6節参照）、これは致し方ないことではある。これまでも注目されてきた主要な遺物だけでなく、ゴーランドが資料として大切に持ち帰り、百年以上に渡って大英博物館で保管されてきた破片資料を含む、総合的な資料化と帰属の確定は、本プロジェクトの最も重要な目的の1つであったが、調査が進めば進むほどそれが容易な作業でないことを実感せざるを得なかった。

鹿谷古墳出土遺物に関していえば、そもそも「古墳見分日記」に鹿谷古墳出土遺物の目録が存在せず、個々のモノを京都国立博物館所蔵絵図や集合写真などのゴーランド文書資料と見比べながら、その帰属を確定させるという迂遠かついささか頼りない方法をとらざるを得なかった。本プロジェクトを開始する前は、実態の明らかでないゴーランド文書資料の中に新たな手がかりが多く含まれていることが期待されたが、結局のところ個々のモノと対比しうる資料は集合写真と直筆ノート（A）・（B）という既知の資料に限られ、それらについても絵図と比べると抽出精度に問題があった。

一方でゴーランド・コレクションのほかの古墳から出土した資料の検討が進むことで、今回関連遺物として紹介した資料の帰属はより明確になることが期待される。事実、集合写真の中に高知県笹原古墳の出土遺物が含まれることに気づいた契機は、ナウマンからゴーランドに宛てた手紙の公開によってであった〔富山2018〕。金属製品に多い破片資料に関していえば、当時、古美術品として流通していた可能性は低く、芝山古墳の発掘で破片資料をすべからず持ち帰っていることから理解されるように、そこには考古学者ゴーランドの選択性が働いていた可能性が極めて高い。翻って破片資料の帰属については、ゴーランドが直接現地に赴き、調査に携わった古墳におおむね限定される可能性があることを指摘しておきたい。



## ④古墳・古墳群の実態

本プロジェクトでは行者山南麓に延びる丘陵の頂部に位置する1基の古墳について測量調査を実施し、絵図などとの比較から明治14(1881)年に発掘された鹿谷古墳に比定した。残念ながら茶ノ木山という名前は現在失われてしまっているが、その位置や規模、形状からいってこれが鹿谷古墳の最有力候補であることについては疑いの余地がない。しかしながらその最終的な確定は現在も陥没している石室の再発掘を待つべきであろう。ゴーランドはもちろん、半井真澄や遠藤茂平も石室内には入れておらず、鹿谷古墳の横穴式石室の正確な構造は不明である。石室図を見る限り発掘は玄室全体には及んでおらず、土器組成に不自然な点が指摘されているように(第4章第5節参照)、大英博物館所蔵遺物と接合するような遺物がまだ現地に残されている可能性は大いにある。測量調査の結果、前方後円墳(造出付円墳)の可能性が浮上した墳丘形態の確定も今後の発掘調査に委ねざるをえない。鹿谷古墳の被葬者像や築造背景については今回十分な議論が及ばなかったが、出土遺物と古墳の結びつきが確かであればこそ意味を持つことは改めていうまでもないだろう。

ゴーランドが実際に調査し、計測や写真撮影を行った古墳の追及も今後の課題である。既に指摘されているようにそれらは鹿谷古墳群大市支群に存在する可能性が極めて高いが、肝心の鹿谷古墳群の範囲や支群設定、古墳数についてはまだ確かな共通見解が存在しない。鹿谷池田古墳群や穂田野西山古墳群といった別の古墳群名で登録されている古墳群も含めて、行者山南麓に展開する夥しい数の古墳を整合的に理解する枠組みの構築と共有は喫緊の課題である。

## ⑤整備活用

これは鹿谷古墳群全体の問題であるが、現在、鹿谷古墳へ至る道は整備されておらず、地図をもとに現地にたどり着いてもそれが鹿谷古墳であることを示す看板などは一切存在しない。それはある意味、当時の地形が限りなく当時に近いまま残されていることを意味し、100年以上前に半井真澄やゴーランドがみた景色や辿ったであろう道を追体験できる環境が現在も残されている点で魅力であるともいえる。一方で世界有数の博物館である大英博物館において出土遺物が常設展示されていることを鑑みると、この状況に幾何の寂しさを感じざるを得ないことも確かである。本プロジェクトも協力した、明治大学博物館の特別展示において鹿谷古墳出土遺物を含むゴーランド・コレクションの里帰り(一時帰国)が実現するなど、21世紀に入り、日英両国における考古学者ゴーランドへの関心は俄かに高まっている。本書の刊行が、鹿谷古墳・鹿谷古墳群の調査研究、整備活用の起爆剤となり、日英両国、とりわけ地元である京都、亀岡において鹿谷古墳の価値が一層認知されることを願い、本報告を終えたい。(諫早)

## 参考文献

- 河野一隆 2000 「48 鹿谷古墳群(遺跡番号32)」『新修亀岡市史』資料編第1巻、亀岡市、pp.172-175
- 出口保夫 2005 『物語 大英博物館』中公新書1801、中央公論社
- 土井孝則 2001 「南丹波における横穴式石室の導入について」『花園大学考古学研究論叢』、花園大学考古学研究室、pp.73-85
- 土井孝則 2010 「石柵古墳の研究(三)ーガウランドが撮影した鹿谷古墳とその所在ー」『亀岡古墳研究』No.1、亀岡古墳研究会、pp.1-3
- 富山直人 2009 「ガウランドと鹿谷古墳ー大英博物館所蔵資料の調査からー」『日本考古学』第28号、日本考古学協会、pp.41-54
- 富山直人 2014 「ゴーランドと黎明期の古墳研究(上)」『古代学研究』第203号、古代学研究会、pp.29-39
- 富山直人 2018 「ナウマンと土佐の古墳」『日本考古学』第45号、日本考古学協会、pp.57-68
- 宮川禎一 2005 「描かれた古墳出土品ー明治十四年の発掘調査ー」『学叢』第27号、京都国立博物館、pp.91-100



# Studies of Rokuya Kofun

Kameoka City, Kyoto, Japan

Principal Investigator: ICHINOSE Kazuo

Editors: ISAHAYA Naoto  
NISHIMURA Hideko

Contributors: MORISHITA Shōji  
TSUCHIYA Takafumi  
OKUDA Tomoko  
MAEDA Toshio  
Luke Edgington-Brown  
KIM Woodae  
KATAYAMA Kentarō  
TAKEMURA Katsuhito  
TOMIYAMA Naoto  
SASAKI Ken'ichi

March 2019

Gowland Collection Survey Project  
Japan

## Abstract

(1) Rokuya Kofun and the Gowland Collection Survey Project.

This publication is the research report of Rokuya Kofun 鹿谷古墳 (mounded tomb) located in, Hiedano-chō 穂田野町, Kameoka City 亀岡市, Kyoto Prefecture 京都府, Japan. Locals first excavated Rokuya Kofun (the largest single mounded tomb in the mound cluster) in 1881. This was quickly followed by a field investigation undertaken by NAKARAI Masumi 半井真澄, a prefectural government official and ENDŌ Mohei 遠藤茂平, a painter. Then, Englishman William Gowland (1844-1922), while employed at the Japan Mint between 1872 and 1888, visited Kameoka at least twice to measure, photograph and study the tomb.

Gowland purchased artefacts recovered from Rokuya Kofun in 1883. As of 1889, the collection has been held by the British Museum and is on permanent display in the Mitsubishi Corporation Japanese Galleries. In addition to Rokuya Kofun, Gowland investigated hundreds of other mounded tombs across Japan, conducting pioneering archaeological research for the time. His materials are now known as the Gowland Collection and is widely known as one of the most important Kofun period collections held abroad containing reliably recorded archaeological materials. An outline of the collection, *William Gowland: The Father of Japanese Archaeology* was published simultaneously in Japanese and English in 2003 by Victor Harris and GOTŌ Kazuo 後藤和雄. However, the entire scope of the collection, including the artefacts from Rokuya Kofun, remained unclear.

The Gowland Collection Survey Project has involved many scholars with various specialities led by ICHINOSE Kazuo 一瀬和夫 (Kyoto Tachibana University 京都橘大学) in collaboration with the British Museum and the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures (SISJAC). Between 2011 and 2018, the Project has been investigating Gowland and his associated materials distributed between Japan and Britain.

This publication is the 2nd issue of the Gowland Collection Survey Research Reports following *Hakuchōzuka Kofun and the Yamamoto Mound Cluster in Takarazuka City, Hyōgo* published in 2017. While investigating the Gowland Collection at the British Museum, the Survey Project researched not only artefacts but also Gowland's hand-written records and other documentary materials, such as photographs and drawings, including those associated with Rokuya Kofun.

In Japan, a modern survey of the Rokuya Mound Cluster was conducted as part of the Survey Project. Here, the survey team re-discovered Rokuya Kofun excavated in 1881, thought to have been destroyed, shown on the survey map and presented in this publication for the first time. Furthermore, a literary survey of documentary materials relating to Rokuya Kofun held by Japanese institutions was carried out and through this research clarified the circumstances around how Gowland acquired the artefacts.

## (2) Overview of Rokuya Kofun.

The physical characteristics of Rokuya Kofun uncovered by the Survey Project are as follows:

### 1. Burial mound.

Rokuya Kofun is located in the mid-western section of the Kameoka basin, west of the Ōi-gawa river 大堰川; situated on a southern slope of Gyōja-san hill 行者山 (altitude: 430m). This slope was known Chanoki-yama 茶ノ木山 (altitude: 281.8m) until at least the 1880s. When the mound was initially excavated, it was believed to be circular. Our modern survey has confirmed that the circular section on the northwest side has a diameter of 38.0m and a height of 5 to 8m. We also found a protuberance with a height of 2.0m, a length of 16.0m, and 8.0m at its widest point. Although this hypothesis must be tested by a future excavation, it is possible that the mound was, in fact, keyhole-shaped (or circular with a protuberance) and 55.0m in total length.

### 2. Structure of the stone burial chamber.

The burial chamber was a rectangular, flat-roofed corridor-style, with a stone shelf and stone partition built into the back wall. Plans of the chamber were made during the original investigations, but neither ENDŌ nor Gowland investigated the interior of the chamber firsthand. Therefore, there is little reliable evidence to estimate the dimension of the chamber.

### 3. Archaeological context of the artefacts discovered.

As a result of examining Gowland's documentary materials and the illustrations 絵図 drawn by ENDŌ, the locations of the artefacts at the time of excavation can be restored as follows:

[On top of the stone shelf] Various horse trappings including a horse bit.

[Underneath the stone shelf, behind the stone partition] Fragmentary gilt bronze objects (double fish-shaped sword ornament), glass and other varieties of beads, an iron sword and fragmentary human remain(?).

[In front of the stone shelf] An iron sword and pedestal jars with miniature decorative pots on their shoulders.

### 4. Artefacts held in the Gowland Collection.

As a result of examining the illustrations drawn by ENDŌ and Gowland's hand-written records, the following artefacts can be identified as those excavated from Rokuya Kofun:

[Swords] two iron swords, one twisted pommel ring, one double fish-shaped sword ornament.

[Horse trappings] a pair of f-shaped cheek plates attached to either end of a bit, a pair of octagonal cheek plates attached to either end of a bit, a set of saddle fittings, five sword-shaped (halberd-shaped) horse pendants, ten pentagonal horse pendants, one cup-shaped crupper strap union, ten cup-shaped strap unions, twenty two square ornamental fittings with apertures, four fingernail-shaped ornamental fittings.

[Beads] two glass beads, one clay bead (neither yet identified).

[Stoneware] four pedestal jars with miniature decorative pots on their shoulders, one lid from the pedestal jars with miniature decorative pots on their shoulders, one lid of bowl, one bowl,

one storage jar, one pot (currently unlocated).

##### 5. Evaluating the date of Rokuya Kofun and its archaeological significance.

The evidence for the date of construction for Rokuya Kofun is as follows: (1) the stone burial chamber, (2) the iron sword ornaments, (3) the horse harnesses, and (4) the stoneware.

Based on the available evidence, we can extrapolate that Rokuya Kofun was constructed in the Late Kofun period, during the third quarter of the sixth century A.D. (MT85 stage of the stoneware typological chronology).

The grave goods are believed to have been left as offerings to an individual interred below the stone shelf at the back of the stone burial chamber. It is very unlikely that any additional interment took place. Owing to the abundance of grave goods and the unusual structure of the stone burial chamber with a stone shelf and partition, Rokuya Kofun is considered to be the tomb of a leader or chief within the mound cluster. This interpretation would gain strong support from the possibility that Rokuya Kofun was a 55.0m long keyhole-shaped mounded tomb because mounded tombs of that form are considered to hold elite status.

The nearby site Haida No.16 Kofun 拜田16号墳, that was built slightly earlier than Rokuya Kofun, also gives us a clue to understanding the rank of the individual buried in Rokuya Kofun. The Haida No.16 Kofun is situated on another slope of Gyōja-san hill, and characterized by the adoption of a stone shelf. It is also the only keyhole-shaped mounded tomb in the Haida Mound Cluster. Therefore, it would appear that generations of local chiefs in the Kameoka basin adopted corridor-style horizontal burial chambers with a stone shelf.

Furthermore, the deposition of a sword with twisted pommel ring, decorated with a very rare double fish-shaped sword ornament, as well as two sets of ornamental horse trappings is very unusual. Since any additional interment is very unlikely, these all appear to have been offered to the same individual. It is also important to note that, if Rokuya Kofun was indeed keyhole-shaped, the length of 55.0m would make it the largest among all the keyhole-shaped mounded tombs in the Kameoka basin. As such, it is possible to interpret that the swords and horse trappings were directly given by the higher-ranking elite in the central polity.

At the same time, the adoption of corridor-style horizontal burial chambers with characteristic stone shelves suggests some connection between local elites of the Kinokawa river basin 紀ノ川流域 (modern Wakayama City 和歌山市) and the Kyushu district 九州地方 where the adoption was relatively common. The deposition of pedestalled stoneware jars with miniature decorative pots on their shoulders also suggests a relationship with local elites buried in the Sagano Mound Cluster 嵯峨野古墳群 in northwestern Kyoto City, a southeastern neighbor of the Kameoka City. These elite interactions were at the local level, and we assume that these did not take place under the directives of the central polity. The results of Gowland's investigations into the Rokuya Kofun and our re-examinations of data related to it continue to make important contributions to our understanding of the relationships between high-ranking local elites in the Kameoka basin, those of other regions and the central polity at different levels.

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Numbers JP24320160, JP15H03270.

(ISAHAYA Naoto, Translated by Luke Edgington-Brown and SASAKI Ken'ichi)

# Contents

Overview.  
Contents.  
Figures.  
Tables.  
Plates.

## Chapter 1. Aims and results of the Gowland Collection Survey Project.

- 1 . Character of Gowland's investigation and research. .... MORISHITA Shōji 1
- 2 . History of researching Gowland. .... 2
- 3 . Aims of the Survey Project. .... 3
- 4 . Results of previous research. .... 4

## Chapter 2. The discovery of Rokuya Kofun and subsequent investigation.

- 1 . The discovery of Rokuya Kofun and the response of Kyoto Prefecture.  
..... TSUCHIYA Takafumi 20
  - ( 1 ) Chronology from discovery to examination. .... 20
  - ( 2 ) Details of Kyoto Prefecture's examination - Kofun inspection diary 古墳見分日記 -. .... 21
  - ( 3 ) Creation of the illustrations 絵図. .... 23
- 2 . Response of the central government to the artefacts recovered from Rokuya Kofun. .... 25
  - ( 1 ) Correspondence to the Department of the Imperial Household and the Ministry of  
Agriculture and Commerce. .... 25
  - ( 2 ) Chronology before Gowland acquired the artefacts. .... 26
- 3 . Rokuya Kofun in regard to Gowland's survey and research. .... 27
  - ( 1 ) Gowland archive materials held by the British Museum and the Society of Antiquaries  
of London. .... OKUDA Tomoko and TSUCHIYA Takafumi 27
  - ( 2 ) Gowland's research activities. .... OKUDA Tomoko and ISAHAYA Naoto 35
  - ( 3 ) Gowland's analysis and evaluation. .... 37
- 4 . Research histories after the acquisition by the British Museum. .... ISAHAYA Naoto 40
  - ( 1 ) Pre-WWII. .... 40
  - ( 2 ) Post-WWII. .... 42
- 5 . Archive materials relating to Rokuya Kofun. .... 45
  - ( 1 ) Archives held in Japan. .... TSUCHIYA Takafumi 45
  - ( 2 ) Gowland archive materials. ....  
... OKUDA Tomoko, MAEDA Toshio, Luke Edgington-Brown and TSUCHIYA Takafumi 62

## Chapter 3. The survey of Rokuya Kofun and artefacts.

- 1 . Research on Rokuya Kofun by the Gowland Collection Survey Project. ....  
..... ISAHAYA Naoto 84
- 2 . Regarding the name of Rokuya Kofun (excavated 1881). .... 84

3 . Physical characteristics of the mounded tomb. ....	ICHINOSE Kazuo	89
( 1 ) Location. ....		90
( 2 ) Burial Mound. ....		91
( 3 ) Outside and interior structure. ....		91
( 4 ) Regarding the shape of the mound. ....		93
( 5 ) Comparison of illustrations. ....		93
( 6 ) Results. ....		94
4 . Record of the stone burial chamber and location of artefacts. ....		95
( 1 ) Structure of stone burial chamber. ....	OKUDA Tomoko	95
( 2 ) Reconstruction of the original context of the artefacts discovered. ....		
.....	Tomoko OKUDA and ISAHAYA Naoto	97
5 . Artefacts from Rokuya Kofun. ....		98
( 1 ) Summary of artefacts. ....	ISAHAYA Naoto	98
( 2 ) Swords. ....	KIM Woodae and TSUCHIYA Takafumi	99
( 3 ) Horse trappings. ....	ISAHAYA Naoto, KATAYAMA Kentarō and KIM Woodae	103
( 4 ) Beads. ....	TAKEMURA Katsuhito and ISAHAYA Naoto	120
( 5 ) Stoneware. ....	MAEDA Toshio and TOMIYAMA Naoto	121
6 . Related and unrelated artefacts. ....		124
( 1 ) Summary of related and unrelated artefacts. ....	ISAHAYA Naoto	124
( 2 ) Horse trappings. ....	ISAHAYA Naoto, KATAYAMA Kentarō and KIM Woodae	124
( 3 ) Earrings. ....	ISAHAYA Naoto	130
( 4 ) Stoneware. ....	MAEDA Toshio and TOMIYAMA Naoto	131

#### Chapter 4. Discussion.

1 . Archives held in Japan. ....	TSUCHIYA Takafumi	137
2 . Corridor-style horizontal burial chamber. ....	OKUDA Tomoko	140
3 . Swords. ....	KIM Woodae • TSUCHIYA Takafumi	145
4 . Horse trappings. ....	KATAYAMA Kentarō	148
5 . Stoneware. ....	MAEDA Toshio	158

#### Chapter 5. Conclusions

1 . The Gowland Collection Survey Project and Rokuya Kofun. ....	ISAHAYA Naoto	164
2 . The discovery of Rokuya Kofun and subsequent investigation. ....		165
( 1 ) The discovery of Rokuya Kofun. ....		165
( 2 ) Corresponce of the central government to the artefacts recovered from Rokuya Kofun. ....		165
.....		165
( 3 ) Rokuya Kofun in regard to Gowland's survey and research. ....		166
3 . Survey of Rokuya Kofun and artefacts. ....		166
( 1 ) Regarding the name of Rokuya Kofun. ....		166
( 2 ) Overview of Rokuya Kofun. ....		167
( 3 ) Evaluating the date of Rokuya Kofun and its archaeological significance. ....		169



4 . Problems of the future.....	169
English Abstract. ....	173
English Contents. ....	177
Plates.	

## Figures

Figure 1. 宮 A. No.3. Report submitted to the Department of the Imperial Household: Excavation of old tombs at Tamba-koku, Minami kuwada-gun, Rokuya-mura (July). Investigation reports, 14th year of Meiji (1881). (Held by the Imperial Household Agency) .....	21
Figure 2. 英 C2. The Rokuya Mound Cluster, stone burial chambers with stone shelf [No.3(106), No.6(107)]. (Held by the British Museum) .....	33
Figure 3. 英 C7-2. Hand-drawn illustration of pedestal jars with miniature decorative pots on their shoulders. (Held by the British Museum) .....	34
Figure 4. 英 D1. Illustration of horse trappings similar to those recorded in an image in Gowland's 1897 article.(Held by the British Museum) .....	34
Figure 5. Artefacts from Rokuya Kofun published in Gowland's 1897 article. ....	39
Figure 6. Stone burial chamber and horse trappings published in an article by WAKABAYASHI Katsukuni. ....	40
Figure 7. Stone burial chamber published in an article by UMEHARA Sueji. ....	41
Figure 8. Diagrams of artefacts from Rokuya Kofun and related objects published in <i>William Gowland: The Father of Japanese Archaeology</i> . ....	43
Figure 9. Stoneware from Rokuya Kofun published in an article by IKEGAMI Satoru. ....	44
Figure 10. 京 B-1. 'Map of the mound cluster's surrounding area' reprint. (Held by the Kyoto National Museum) .....	57
Figure 11. 京 B-2. 'Kofun distribution map' reprint. (Held by the Kyoto National Museum) .....	57
Figure 12. 京 B-3. 'Plan of burial mound and stone burial chamber' reprint. (Held by the Kyoto National Museum) .....	58
Figure 13. 京 A. 'Diagrams of artefacts 1' reprint ( 1 ). (Held by the Kyoto National Museum) .....	58
Figure 14. 京 A. 'Diagrams of artefacts 1' reprint ( 2 ). (Held by the Kyoto National Museum) .....	59
Figure 15. 京 A. 'Diagrams of artefacts 1' reprint ( 3 ). (Held by the Kyoto National Museum) .....	60
Figure 16. 京 A. 'Diagrams of artefacts 1' reprint ( 4 ). (Held by the Kyoto National Museum) .....	61
Figure 17. 京 B-4. 'Diagrams of artefacts 2' reprint. (Held by the Kyoto National Museum) .....	62
Figure 18. 英 A1-1. 'Kofun distribution map' reprint. (Held by the British Museum) .....	63
Figure 19. 英 A1-2. 'Diagram of Rokuya Kofun burial mound' reprint. (Held by the British Museum) .....	64
Figure 20. 英 A1-3. 'Plan of Rokuya Kofun and stone burial chamber' reprint. (Held by the British Museum) .....	64
Figure 21. 英 B2. 'Map of the mound cluster's surrounding area' reprint. (Held by the British Museum)	

.....	77
Figure 22. 英 B3. 'Kofun distribution map' reprint. (Held by the British Museum)	77
Figure 23. Position of Rokuya Kofun Mound Cluster in the Kameoka basin.	85
Figure 24. Position of Rokuya Kofun (Circa 1972).	86
Figure 25. Position of Rokuya Kofun (Circa 1986).	87
Figure 26. Position of Rokuya Kofun (2002).	87
Figure 27. Position of Rokuya Kofun (2019).	88
Figure 28. Distribution of mound cluster around the Southern foot of Gyōja-san hill.	89
Figure 29. Distribution of mounded tombs in the surrounding area of Rokuya Kofun.	90
Figure 30. Plan of Rokuya Kofun burial mound.	92
Figure 31. Plan of Rokuya Kofun's stone burial chamber.	96
Figure 32. Photograph of artefacts recovered from Rokuya Kofun and other tombs (英 C5 composition). (Held by the British Museum)	99
Figure 33. Technical illustration of swords.	101
Figure 34. Technical illustration of twisted pommel ring and double fish-shaped sword ornament.	102
Figure 35. Detailed photograph of double fish-shaped sword ornament. (Held by the British Museum)	102
Figure 36. Technical illustration of a pair of f-shaped cheek plates attached to either end of a bit.	104
Figure 37. Measured position of the a pair of f-shaped cheek plates attached to either end of a bit.	105
Figure 38. Technical illustration of a pair of octagonal cheek plates attached to either end of a bit.	106
Figure 39. Technical illustration of saddle fittings ( 1 ).	108
Figure 40. Technical illustration of saddle fittings ( 2 ).	109
Figure 41. Technical illustration of saddle fittings ( 3 ).	110
Figure 42. Technical illustration of sword-shaped (halberd-shaped) horse pendants.	111
Figure 43. Technical illustration of pentagonal horse pendants.	112
Figure 44. Technical illustration of cup-shaped crupper strap union.	114
Figure 45. Technical illustration of strap unions ( 1 ).	115
Figure 46. Technical illustration of strap unions ( 2 ).	116
Figure 47. Technical illustration of square ornamental fittings with apertures ( 1 ).	117
Figure 48. Technical illustration of square ornamental fittings with apertures ( 2 ).	118
Figure 49. Technical illustration of fingernail-shaped ornamental fittings.	120
Figure 50. Illustration of beads. (Held by the Kyoto National Museum)	120
Figure 51. Photograph that may correspond to illustration of beads. (Held by the British Museum)	120
Figure 52. Technical illustration of stoneware.	122
Figure 53. Illustration of stoneware storage pot. (Held by the Kyoto National Museum)	123
Figure 54. Technical illustration of ring bit.	125
Figure 55. Reconstruction of ring bit.	126

Figure 56. Technical illustration of stirrup chains. ....	126
Figure 57. Technical illustration of sword-shaped horse pendants. ....	127
Figure 58. Technical illustration of cup-shaped crupper strap union. ....	128
Figure 59. Technical illustration of square ornamental fittings. ....	128
Figure 60. Technical illustration of other horse trappings. ....	129
Figure 61. Photograph of earrings. (Held by the British Museum) ....	130
Figure 62. Technical illustration of earrings. ....	130
Figure 63. Technical illustration of stoneware. ....	131
Figure 64. Stone burial chamber of Rokuya Mound Cluster as recorded in the Gowland archive materials. (Held by the British Museum) ....	140
Figure 65. Stone burial chamber with stone shelf and stone partition from the Kameoka basin. ...	141
Figure 66. Artefacts deposited on the stone shelf within the stone burial chamber. ....	142
Figure 67. Double fish-shaped sword ornament and comparative examples. ....	146
Figure 68. A pair of f-shaped cheek plates attached to either end of a bit and comparative examples. ....	149
Figure 69. Sword-shaped horse pendant and comparative examples. ....	150
Figure 70. Octagonal-shaped cheek plates attached to either end of a bit and comparative examples. ....	151
Figure 71. Pentagonal horse pendant and comparative examples. ....	152
Figure 72. Type 3 of cup-shaped strap union and comparative examples. ....	153
Figure 73. Chronological typology of the horse trappings from Rokuya Kofun. ....	154
Figure 74. Reconstruction of horse harness Set A from Rokuya Kofun. ....	154
Figure 75. Reconstruction of horse harness Set B from Rokuya Kofun. ....	155
Figure 76. Reconstruction of pedestal jars with miniature decorative pots on their shoulders recovered from Rokuya Kofun. ....	158
Figure 77. Pedestal jars with miniature decorative pots on their shoulders excavated from the Kinki region. ....	159

## Tables.

Table 1. Chronological overview of the artefacts from Rokuya Kofun. ....	22
Table 2. List of the Gowland archive materials relating to Rokuya Kofun held by the British Museum. ....	30
Table 3. List of the corridor-style horizontal burial chambers in Rokuya Mound Cluster investigated by Gowland. ....	38
Table 4. Chronology of names given to Rokuya Kofun (excavated 1881). ....	86
Table 5. List of artefacts excavated from Rokuya Kofun. ....	99
Table 6. Measurements of iron swords. ....	100
Table 7. Measurements of a pair of f-shaped cheek plates attached to either end of a bit. ...	105
Table 8. Measurements of sword-shaped horse pendants. ....	111

Table 9. Measurements of pentagonal horse pendants. ....	111
Table 10. Measurements of square ornamental fittings with apertures. ....	119
Table 11. Measurements of fingernail-shaped ornamental fittings. ....	120
Table 12. List of related and unrelated artefacts. ....	124
Table 13. Measurements of stirrup chains. ....	126
Table 14. Measurements of sword-shaped horse pendants. ....	127
Table 15. Measurements of square ornamental fittings. ....	128
Table 16. Measurements of harness fitting hooks. ....	129
Table 17. Measurements of ambiguous metal fittings. ....	129
Table 18. Measurements of earrings. ....	130
Table 19. List of horse trappings recovered from Rokuya Kofun. ....	132
Table 20. List of horse trappings possible related to those from Rokuya Kofun. ....	133
Table 21. Burial goods deposited on the stone shelf of the stone burial chamber tombs. ....	142
Table 22. Examples of segmented horse saddle fittings. ....	153
Table 23. Composition of stoneware from the Kameoka basin. ....	160

## Plates

- Plate 1. Documents relating to Rokuya Kofun (1).  
Plan of kofun at the peak of Chanoki-yama. Cross-section plan of kofun. 京 B-3. (Held by the Kyoto National Museum)
- Plate 2. Documents relating to Rokuya Kofun (2).  
Drawings of stone burial chambers and burial mounds. Plan of the location of artefacts and cross-section of the stone burial chamber. 京 B-3. (Held by the Kyoto National Museum)
- Plate 3. Documents relating to Rokuya Kofun (3).  
Distribution map of kofun. 京 B-2. (Held by the Kyoto National Museum) Distribution map of kofun. 英 B3. (Held by the British Museum)
- Plate 4. Documents relating to Rokuya Kofun (4).  
Map of the mound cluster's surrounding area. 京 B-1. (Held by the Kyoto National Museum)  
Map of the mound cluster's surrounding area. 英 B2. (Held by the British Museum)
- Plate 5. Documents relating to Rokuya Kofun (5).  
Diagrams of artefacts 1. 京 A. (Held by the Kyoto National Museum)
- Plate 6. Documents relating to Rokuya Kofun (6).  
Diagrams of artefacts 1. 京 A. (Held by the Kyoto National Museum)
- Plate 7. Documents relating to Rokuya Kofun (7).  
Diagrams of artefacts 1. 京 A. (Held by the Kyoto National Museum)
- Plate 8. Documents relating to Rokuya Kofun (8).  
Diagrams of artefacts 2. 京 B-4. (Held by the Kyoto National Museum)
- Plate 9. Documents relating to Rokuya Kofun (9).  
Distribution map of kofun. 英 A1-1. Plan of burial mound, stone burial chamber and

- explanation of the original context of the artefacts discoveries. 英 A1-2, A1-4. (Held by the British Museum)
- Plate 10. Documents relating to Rokuya Kofun (10).  
Plan of the burial mound and stone burial chamber. 英 A1-3. Explanation of stone burial chamber and the original context of the artefacts (swords and horse trappings) discoveries from stone burial chamber. 英 A1-5, A1-6. (Held by the British Museum)
- Plate 11. Documents relating to Rokuya Kofun (11).  
Explanation of the artefacts (horse trappings, twisted pommel ring, double fish-shaped sword ornament and beads). 英 A1-7, A1-8. Explanation of the artefacts (stoneware). 英 A1-9, A1-10. (Held by the British Museum)
- Plate 12. Documents relating to Rokuya Kofun (12).  
Stone burial chamber with stone shelf from Rokuya Mound Cluster [Midozuka Kofun (No.1)]. 英 C1-5. Survey map of Midozuka Kofun according to Gowland. 英 C1-1. (Held by the British Museum)
- Plate 13. Documents relating to Rokuya Kofun (13).  
Stone burial chamber with stone shelf from Rokuya Mound Cluster [No.6]. 英 C4-2. Stone burial chamber with stone shelf from Rokuya Mound Cluster [No.3]. 英 C3. (Held by the British Museum)
- Plate 14. Documents relating to Rokuya Kofun (14).  
Photograph showing assemblages of artefacts from Rokuya Kofun and other tombs (英 C5 composition). Photograph showing assemblages of artefacts from Rokuya Kofun and other tombs. Middle left side: 英 C5-2, middle right side: 英 C5-1. Photograph showing assemblages of artefacts from Rokuya Kofun and other tombs. Bottom right side: 英 C7-1. (Held by the British Museum)
- Plate 15. Sword and sword fittings recovered from Rokuya Kofun.  
Sword 33-1, 2. Twisted pommel ring 34-1. Double fish-shaped sword ornament 34-2, 3. (Held by the British Museum)
- Plate 16. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 1 ).  
Horse harness Set A. (Held by the British Museum)
- Plate 17. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 2 ).  
Horse harness Set B. (Held by the British Museum)
- Plate 18. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 3 ).  
A pair of f-shaped cheek plates attached to either end of a bit 36-1. (Held by the British Museum)
- Plate 19. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 4 ).  
A pair of octagonal cheek plates attached to either end of a bit 38-1, 3. (Held by the British Museum)
- Plate 20. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 5 ).  
Sword-shaped horse pendant 42-1~3. (Held by the British Museum)
- Plate 21. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 6 ).  
Sword-shaped horse pendant 42-4, 5. (Held by the British Museum)

- Plate 22. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 7 ).  
 Pentagonal horse pendant 43-2, 5, 6, 7, 9. (Held by the British Museum)
- Plate 23. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 8 ).  
 Saddle fittings 39~41. (Held by the British Museum)
- Plate 24. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 9 ).  
 Cup-shaped crupper strap union 44 and cup-shaped strap union 45-3, 5. (Held by the British Museum)
- Plate 25. Stoneware recovered from Rokuya Kofun ( 1 ).  
 Pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-1, 2, 4, 5. Lid from the pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-3. (Held by the British Museum)
- Plate 26. Stoneware recovered from Rokuya Kofun ( 2 ).  
 Pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-1. Lid from the pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-3. (Held by the British Museum)
- Plate 27. Stoneware recovered from Rokuya Kofun ( 3 ).  
 Lid from the pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-3. Lid of bowl 52-6. Bowl 52-7. Rim sherd of wide mouthed jar 52-8. (Held by the British Museum)
- Plate 28. Distant view of Rokuya Mound Cluster.  
 Seen from the southeast. Seen from the west.
- Plate 29. Burial mound and situation surrounding the stone burial chamber.  
 Burial mound from the northeast. Situation surrounding the stone burial chamber from the south.
- Plate 30. Swords recovered from the Rokuya Kofun.  
 Sword 33-1, 2. (Held by the British Museum)
- Plate 31. Twisted pommel ring and double fish-shaped sword ornament recovered from Rokuya Kofun.  
 Twisted pommel ring 34-1. Upper part of double fish-shaped sword ornament 34-2. Under part of double fish-shaped sword ornament 34-3. (Held by the British Museum)
- Plate 32. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 1 ).  
 A pair of f-shaped cheek plates attached to either end of a bit 36-1. (Held by the British Museum)
- Plate 33. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 2 ).  
 A pair of f-shaped cheek plates attached to either end of a bit 36-1. Rein connection 36-2. (Held by the British Museum)
- Plate 34. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 3 ).  
 A pair of octagonal cheek plates attached to either end of a bit 38-1. (Held by the British Museum)
- Plate 35. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 4 ).  
 A pair of octagonal cheek plates attached to either end of a bit 38-1. Rein connection 38-2. Harness fittings 38-3. (Held by the British Museum)

- Plate 36. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 5 ).  
Saddle fitting (front side) 39-1. Saddle fitting (rear side) 40-2,3, 41-11. (Held by the British Museum)
- Plate 37. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 6 ).  
Saddle fitting (front side) 39-1. Saddle fitting (rear side) 40-2,3, 41-11. Saddle fitting 41-4~10. (Held by the British Museum)
- Plate 38. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 7 ).  
Sword-shaped horse pendant 42-1, 2. (Held by the British Museum)
- Plate 39. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 8 ).  
Sword-shaped horse pendant 42-3, 4. (Held by the British Museum)
- Plate 40. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun ( 9 ).  
Sword-shaped horse pendant 42-5. (Held by the British Museum)
- Plate 41. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (10).  
Sword-shaped horse pendant 43-1~3. (Held by the British Museum)
- Plate 42. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (11).  
Sword-shaped horse pendant 43-4~6. (Held by the British Museum)
- Plate 43. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (12).  
Sword-shaped horse pendant 43-7~9. (Held by the British Museum)
- Plate 44. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (13).  
Pentagonal horse pendant 43-10. Harness fitting hook 43-11. (Held by the British Museum)  
Details of horse trappings. 1 Mouthpiece of a pair of f-shaped cheek plates attached to either end of a bit (36-1). 2 Reverse side of a pair of octagonal cheek plates attached to either end of a bit displaying the fold of the rivet (38-1). 3 Reverse side of saddle fitting displaying the fold of the rivet and remanence of textiles (39-1). 4 Reverse side of pentagonal horse pendant displaying the fold of the rivet (43-4). (Held by the British Museum)
- Plate 45. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (14).  
Cup-shaped crupper strap union 44. (Held by the British Museum)
- Plate 46. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (15).  
Cup-shaped strap union 45-1~3. (Held by the British Museum)
- Plate 47. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (16).  
Cup-shaped strap union 45-4, 5. 46-6. (Held by the British Museum)
- Plate 48. Horse trappings recovered from the Rokuya Kofun (17).  
Cup-shaped strap union 46-7~9. (Held by the British Museum)
- Plate 49. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (18).  
Cup-shaped strap union 46-10, 11. Square ornamental fitting with apertures 47-1~9. 48-10. (Held by the British Museum).
- Plate 50. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (19).  
Square ornamental fitting with apertures 48-11~22. (Held by the British Museum)
- Plate 51. Horse trappings recovered from Rokuya Kofun (20).  
Fingernail-shaped ornamental fitting 49-1~4. (Held by the British Museum)

Details of horse trappings organic remains. 1 Wooden remains on interior of a saddle fitting (41-4). 2 Textile remains adhering to the reverse side of a pentagonal horse pendant (43-7). 3 Fabric adhering to a cup-shaped crupper strap union (44). 4 Connecting part of a cup-shaped crupper strap union (44). 5 Organic materials adhering to square ornamental fitting with apertures (48-19). 6 Organic materials adhering to square ornamental fittings with apertures (48-19). (Held by the British Museum)

Plate 52. Stoneware recovered from Rokuya Kofun ( 1 ).

Pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-1 (J.1, 甲). (Held by the British Museum)

Plate 53. Stoneware recovered from Rokuya Kofun ( 2 ).

Pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-2 (J.3, 丁). (Held by the British Museum)

Plate 54. Stoneware recovered from Rokuya Kofun ( 3 ).

Pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-4 (J.2). (Held by the British Museum)

Plate 55. Stoneware recovered from Rokuya Kofun ( 4 ).

Pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-5 (J.1a, 丙). (Held by the British Museum)

Plate 56. Stoneware recovered from Rokuya Kofun ( 5 ).

Lid from the pedestal jar with miniature decorative pots on their shoulders 52-3 (J.1, 乙). Lid of bowl 52-6 (J.4). Bowl 52-7 (J.4). Rim sherd of wide mouthed jar 52-8. (Held by the British Museum)

Plate 57. Related and unrelated artefacts. Horse harness fittings ( 1 ).

Ring bit 54-1~4 (Recovered from Sasahara Kofun). Stirrup chain 56-1 ~9 (56-9 Recovered from Shibayama Kofun). (Held by the British Museum)

Plate 58. Related and unrelated artefacts. Horse harness fittings ( 2 ).

Sword-shaped horse pendant 57-1, 2 (Recovered from Sasahara Kofun). (Held by the British Museum)

Plate 59. Related and unrelated artefacts. Horse harness fittings ( 3 ).

Sword-shaped horse pendant 57-3 (Recovered from Sasahara Kofun). Cup-shaped strap union 58-1. (Held by the British Museum)

Plate 60. Related and unrelated artefacts. Horse harness fittings ( 4 ).

Square ornamental fitting 59-1~8. Harness fitting 60-1~4. (Held by the British Museum)

Plate 61. Related and unrelated artefacts. Horse harness fittings ( 5 ) and Earrings.

Harness fitting and ambiguous metal fitting 60-5~9. Earring. 62-1~3. (Held by the British Museum)

Plate 62. Related and unrelated artefacts. Stoneware.

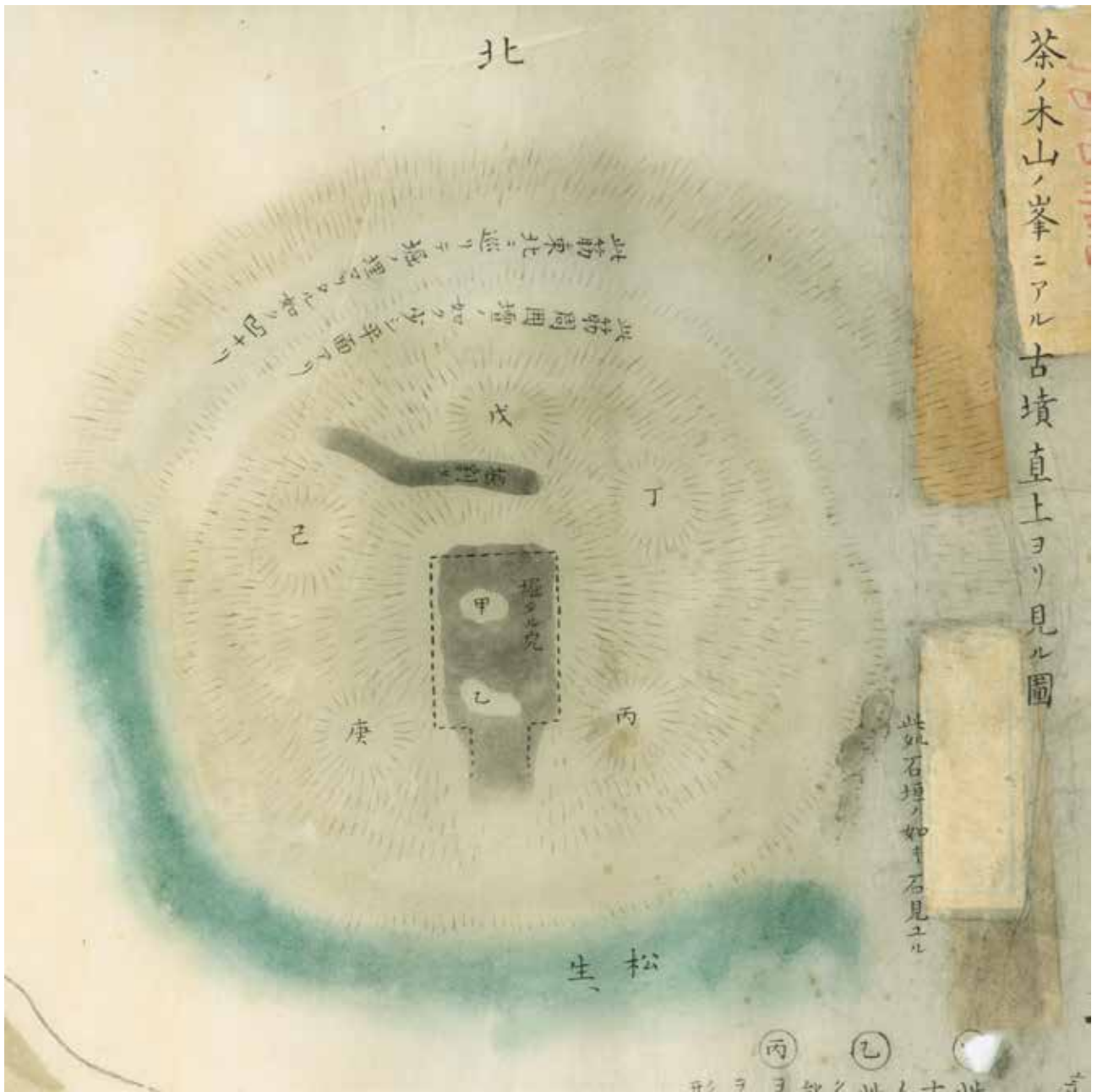
Bowl 63-1. Pedestal bowl 63-2. Foot of pedestal bowl 63-3. Foot of vessel stand 63-4. Body of storage jar 63-5. (Held by the British Museum)

(Translated by Edgington-Brown and SASAKI)

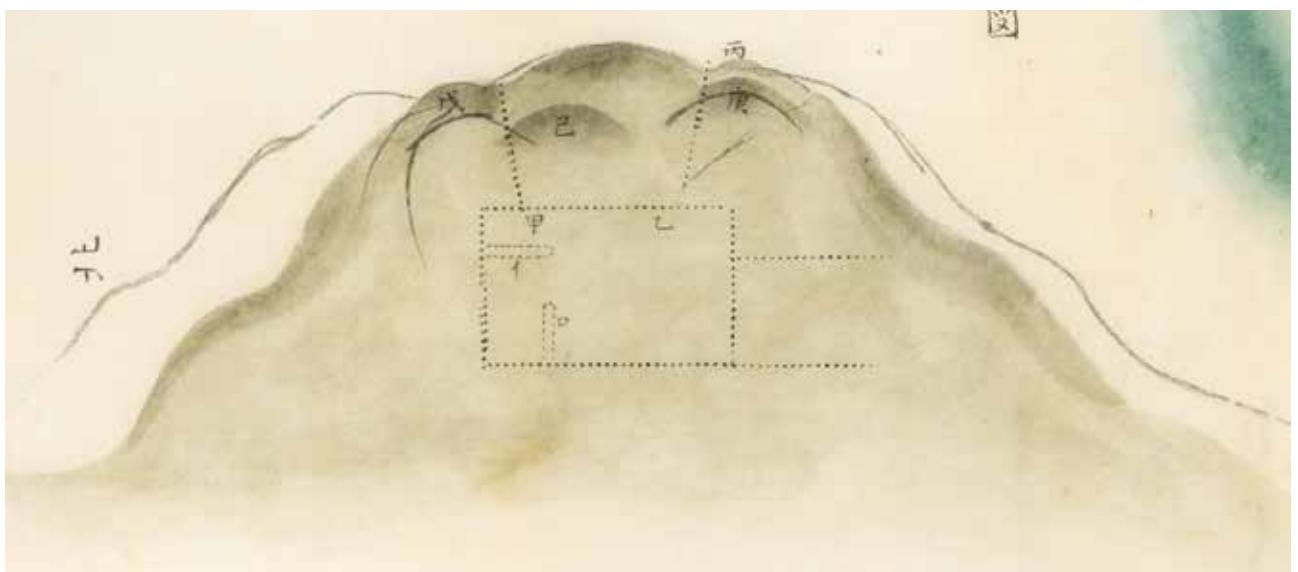


# 図 版

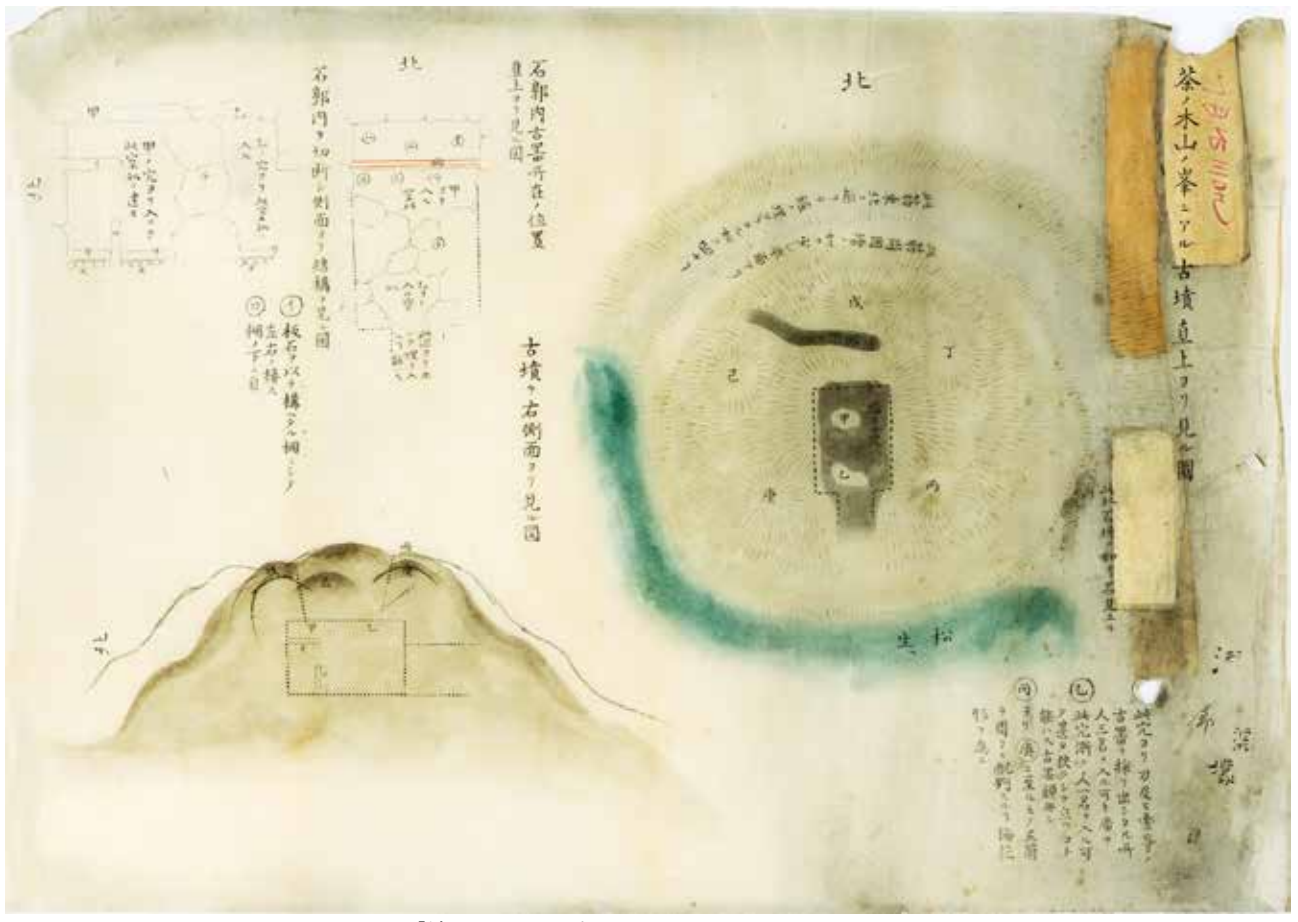




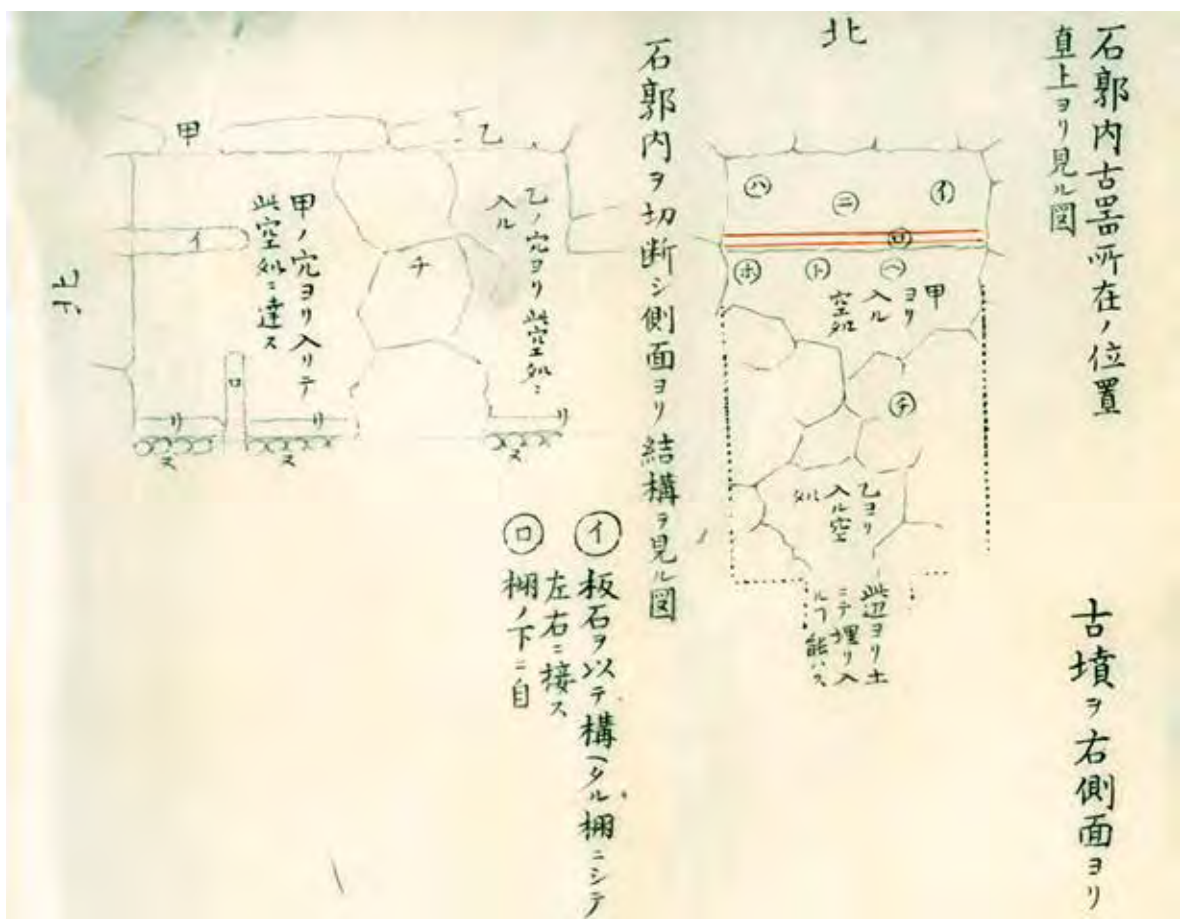
茶ノ木山ノ峯ニアル古墳直上ヨリ見ル圖 (京B-3、京都国立博物館所蔵)



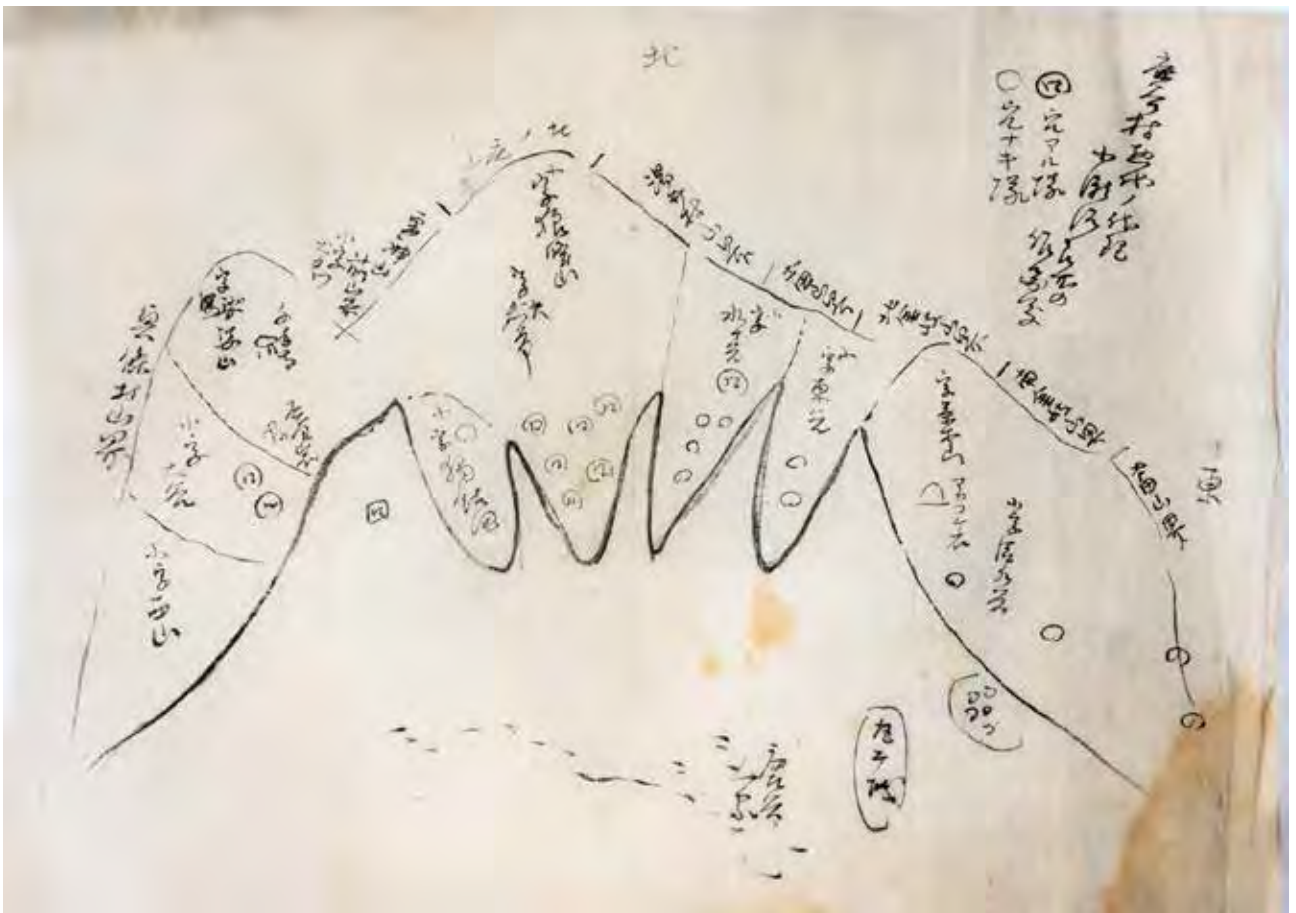
古墳ヲ右側面ヨリ見ル圖 (京B-3、京都国立博物館所蔵)



「墳丘および石室図」(京B-3、京都国立博物館所蔵)



石郭内古器所在ノ位置直上ヨリ見ル圖、石郭内ヲ切斷シ側面ヨリ結構ヲ見ル圖(京B-3、京都国立博物館所蔵)



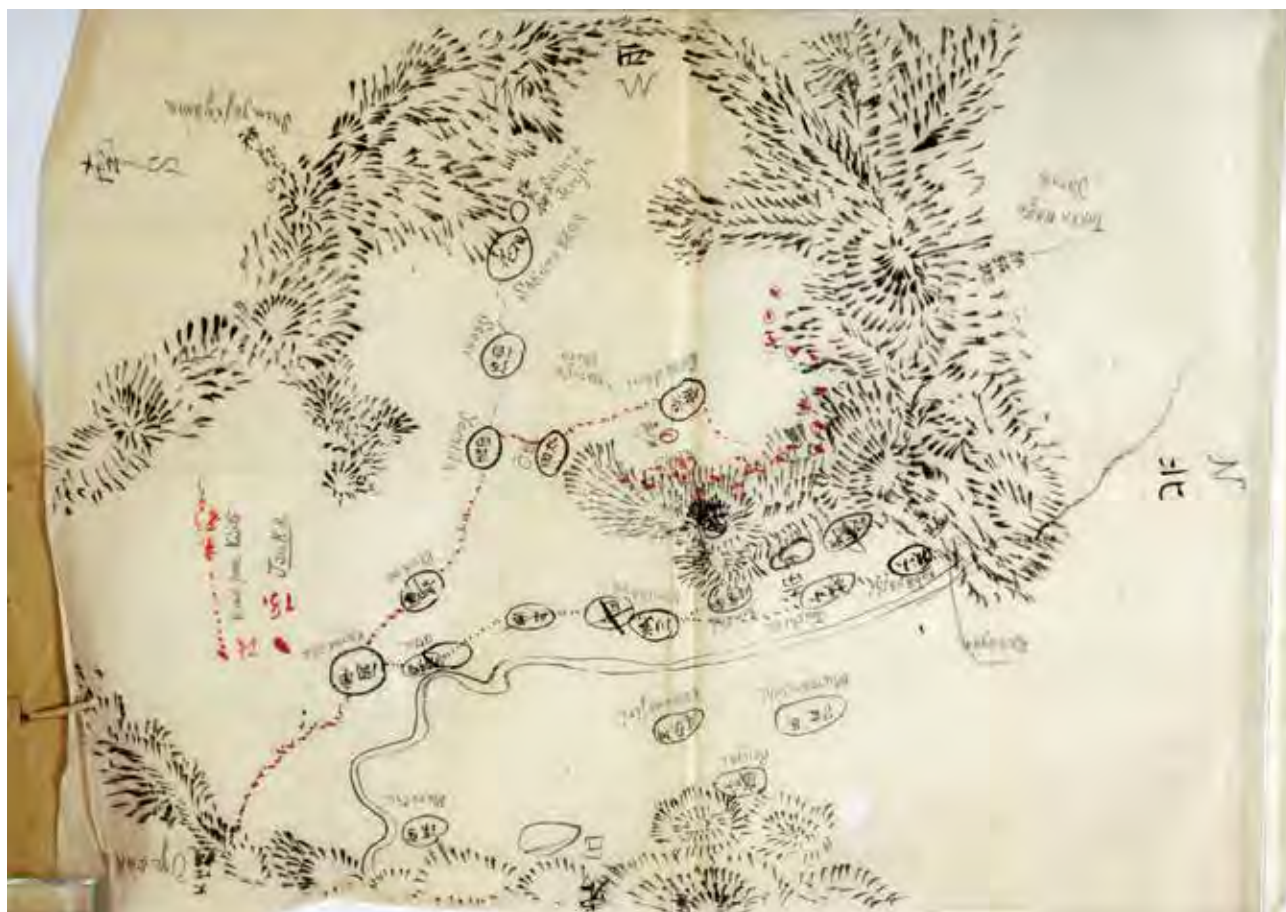
「古墳の分布図」 (京B-2、京都国立博物館所蔵)



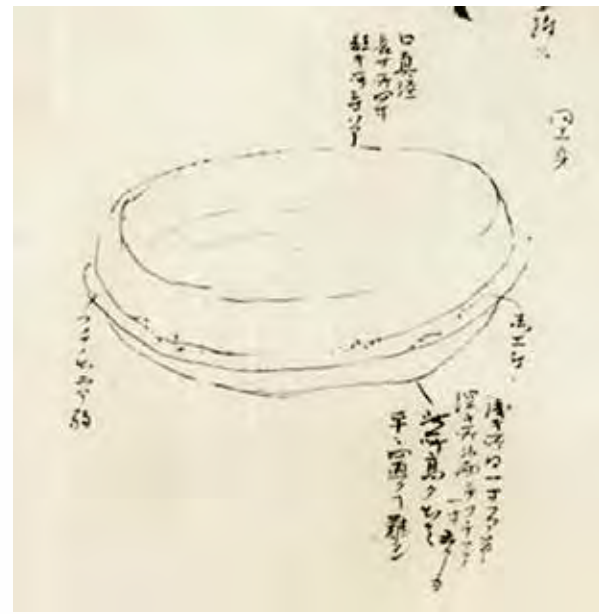
「古墳の分布図」 (英B3、The British Museum 所蔵)



「古墳群までの略地図」(京B-1、京都国立博物館所蔵)



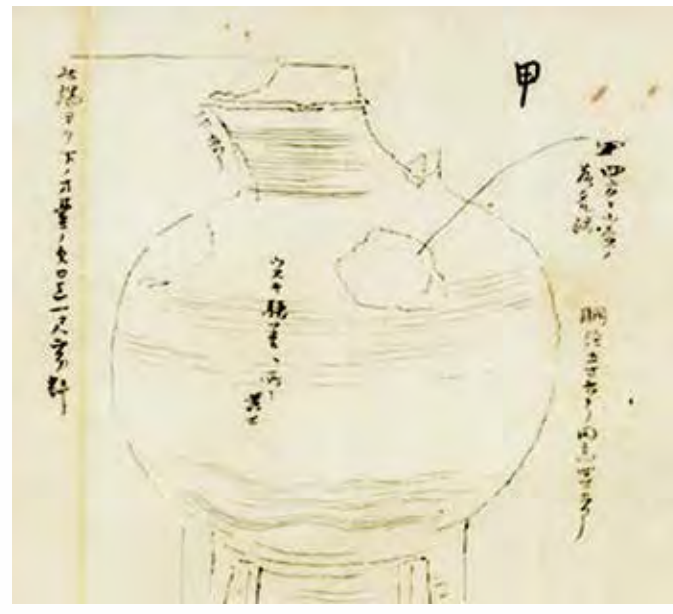
「古墳群までの略地図」(英B2、The British Museum 所蔵)



(部分の拡大)



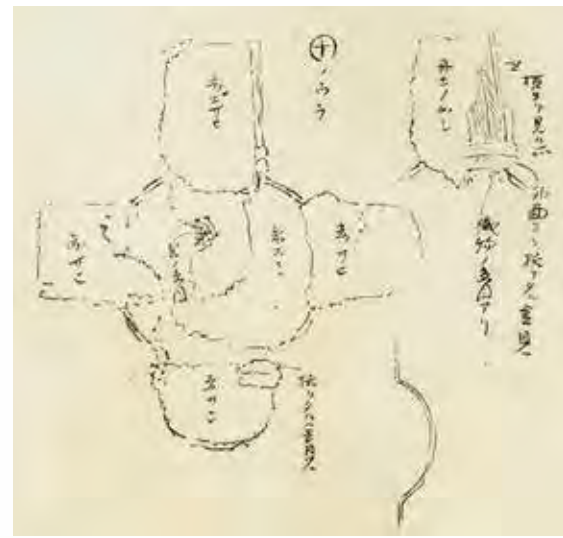
(部分の拡大)



(部分の拡大)



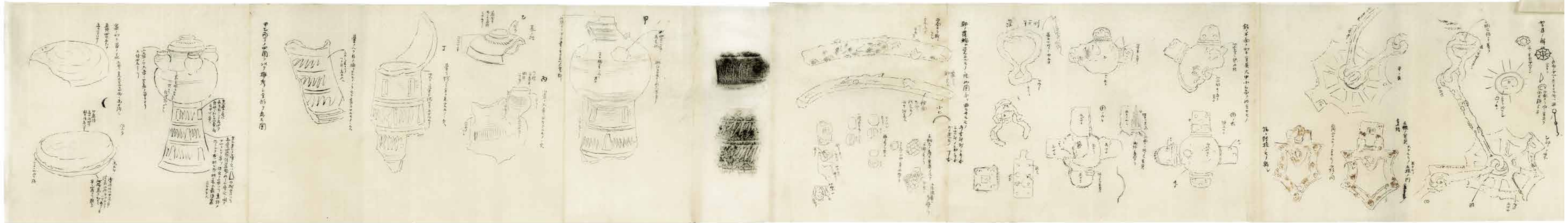
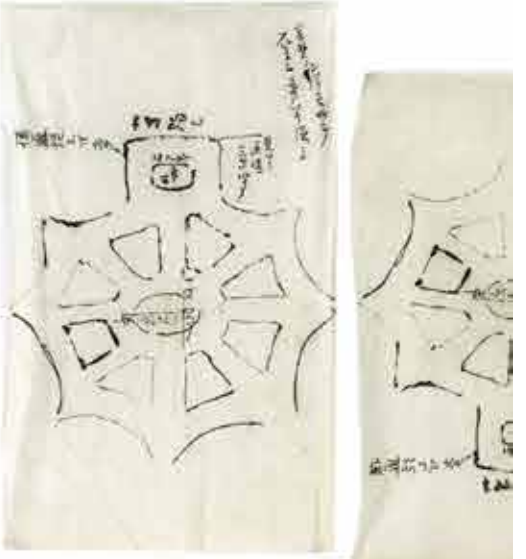
(部分の拡大)



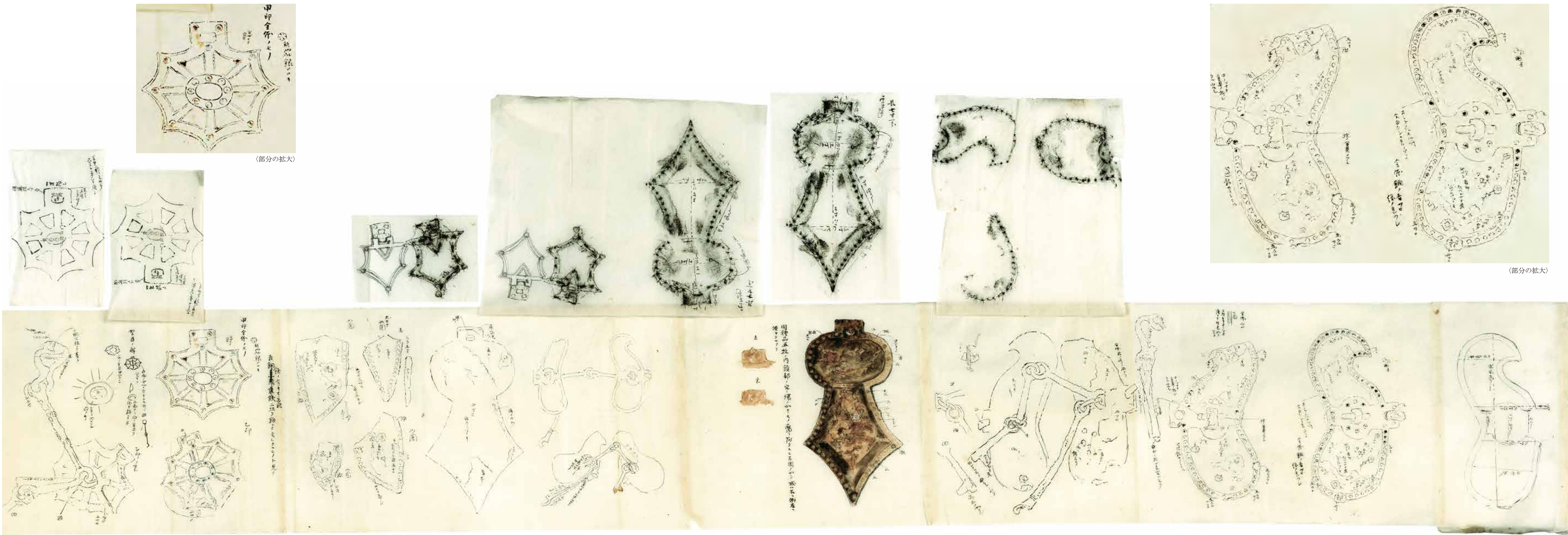
(部分の拡大)



(部分の拡大)



「遺物の図面1」(京A、京都国立博物館所蔵)

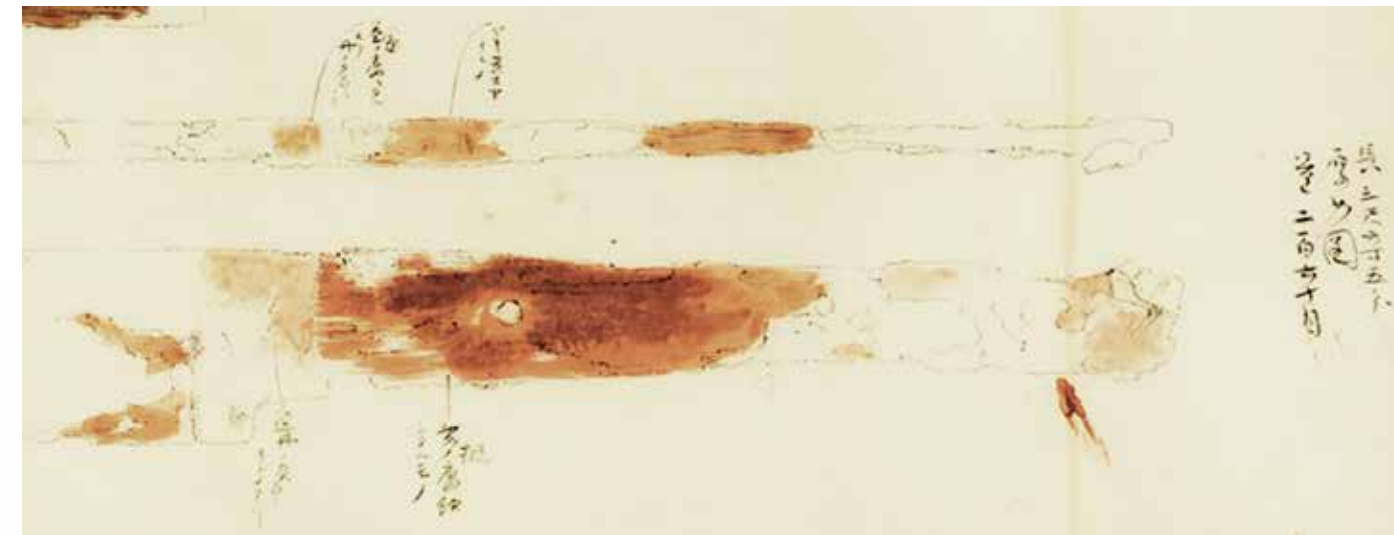


「遺物の図面1」(京A、京都国立博物館所蔵)

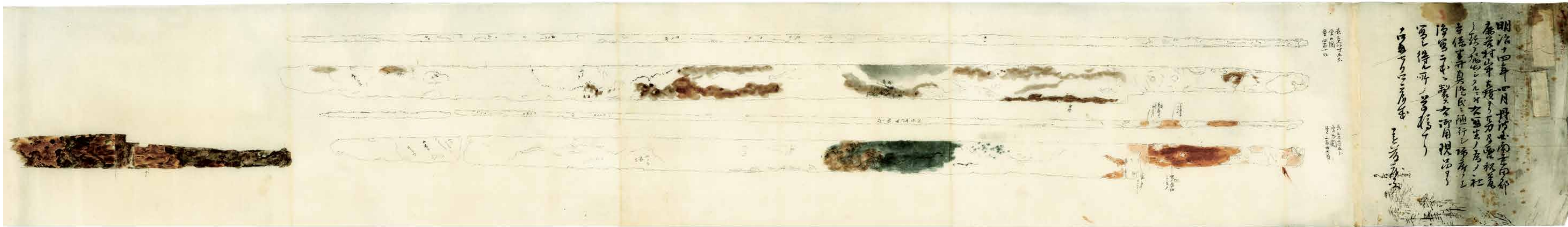




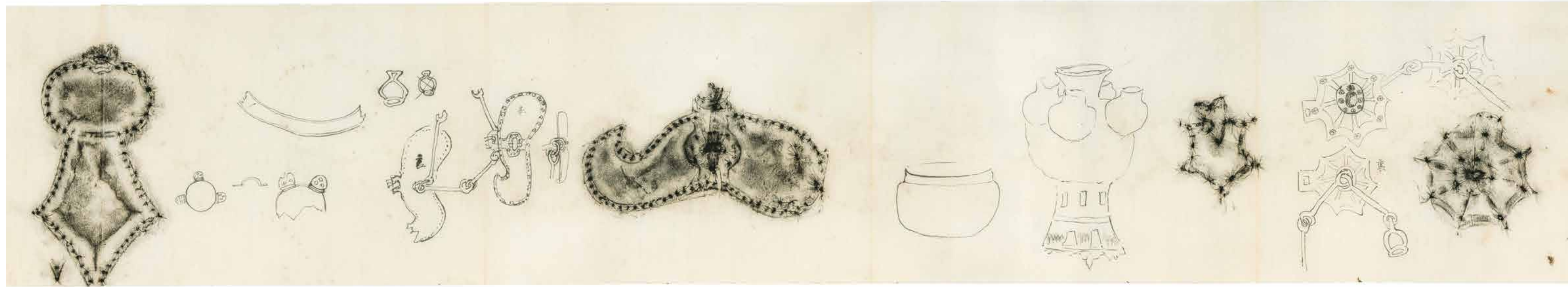
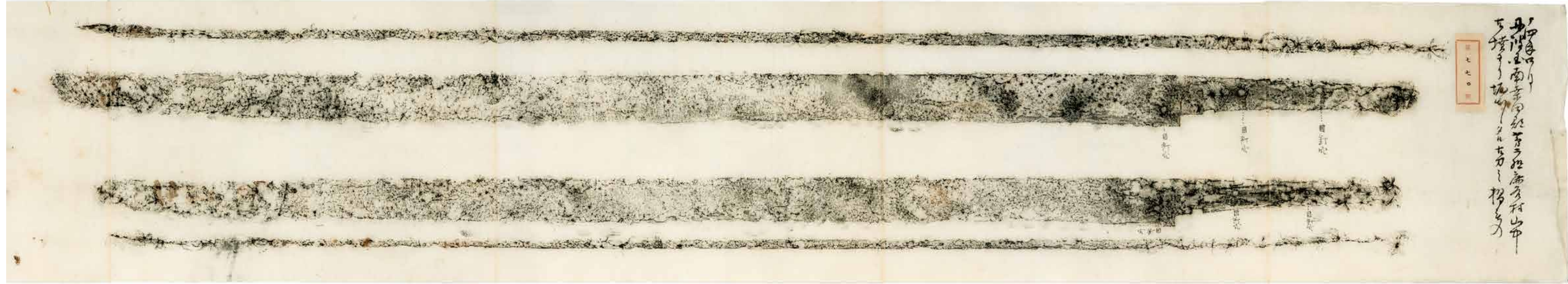
〈部分の拡大〉



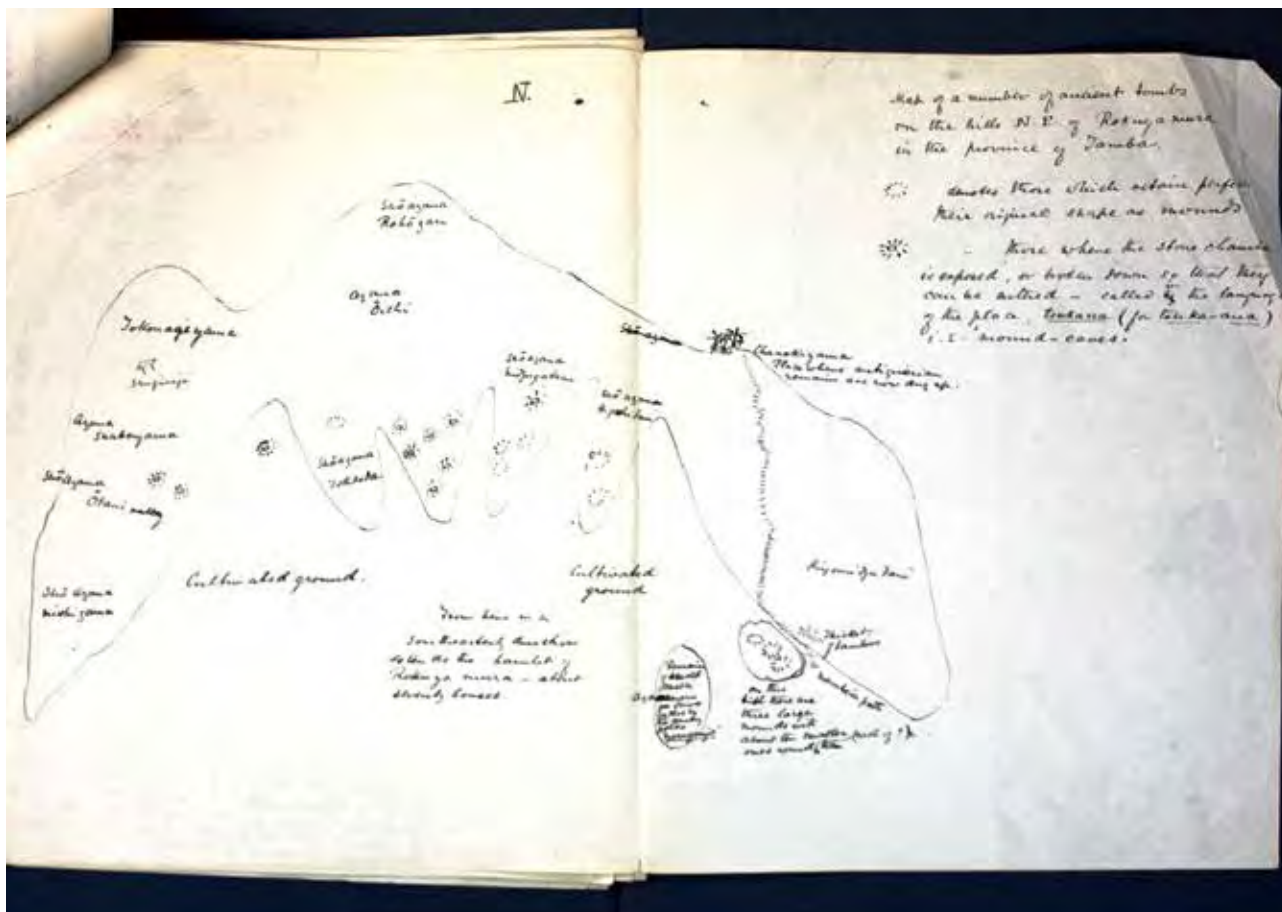
〈部分の拡大〉



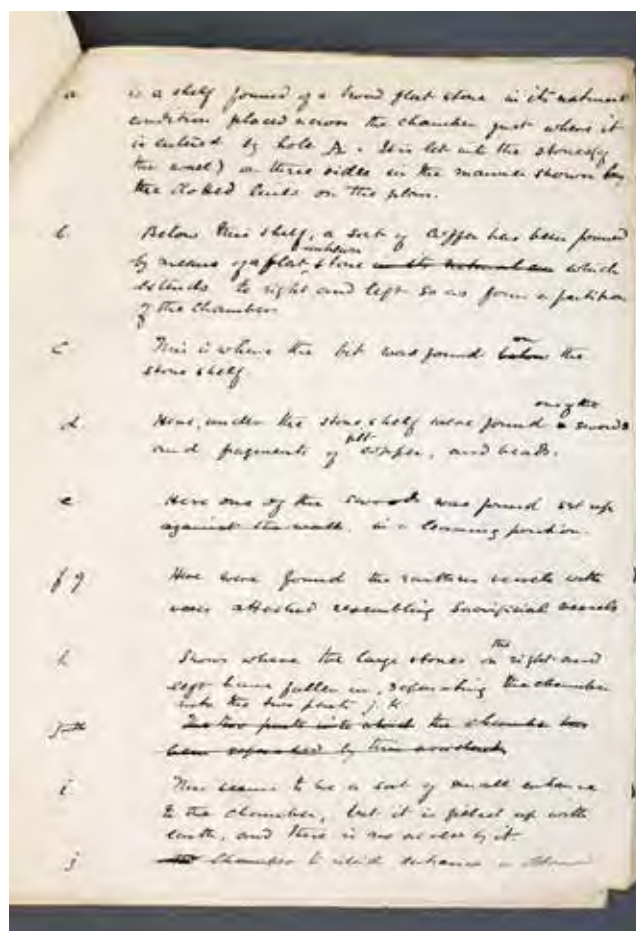
「遺物の図面1」(京A、京都国立博物館所蔵)



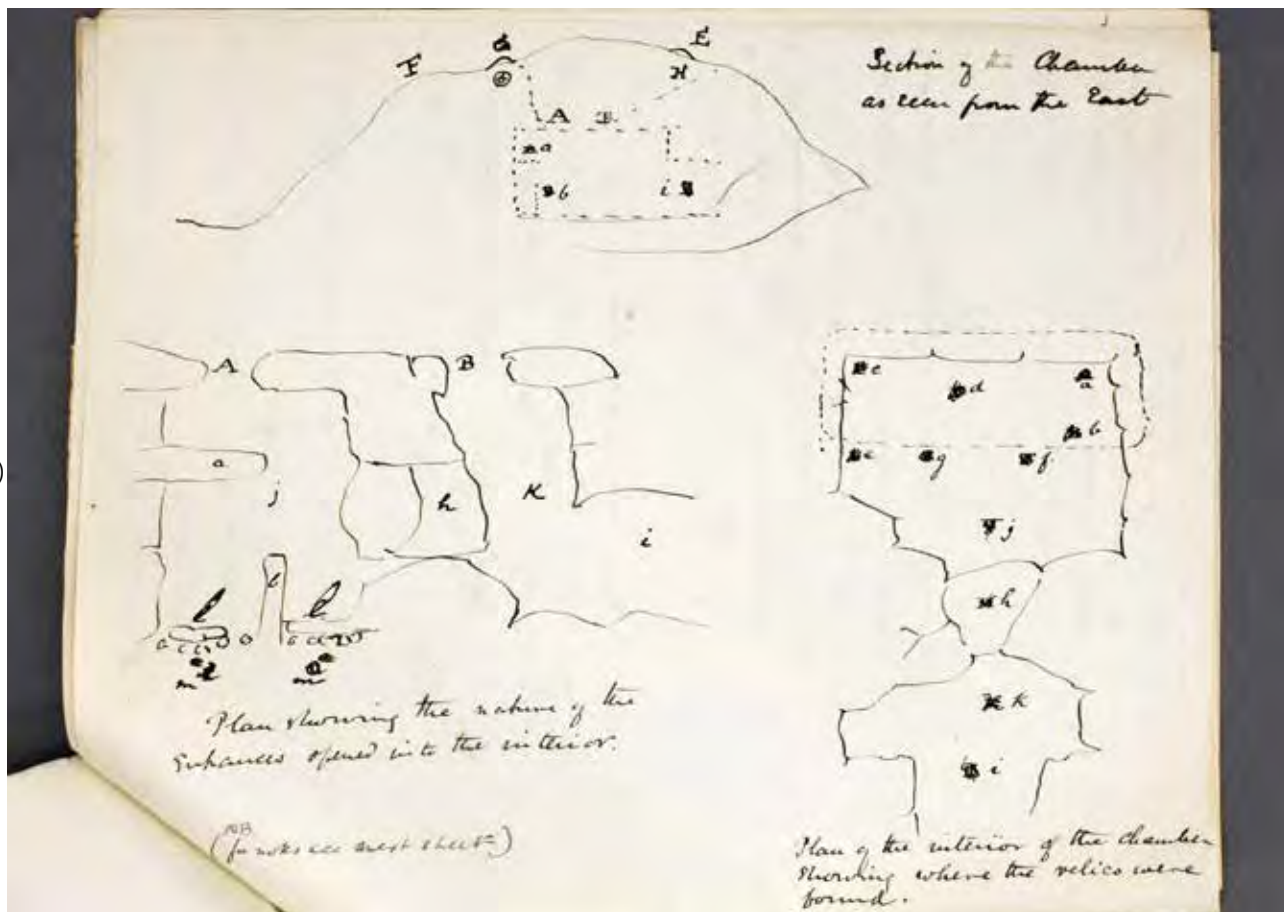
「遺物の図面 2」(京B-4、京都国立博物館所蔵)



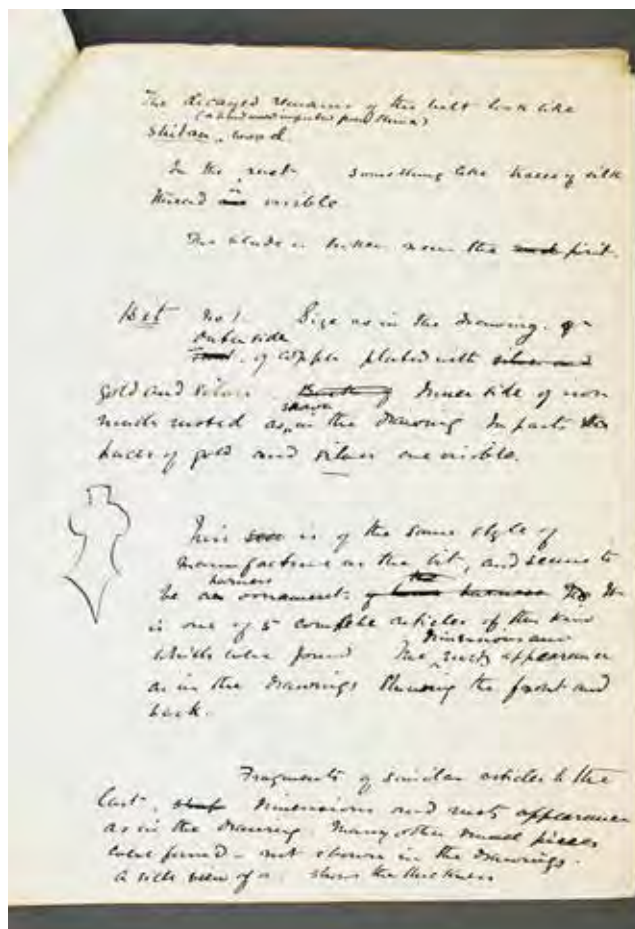
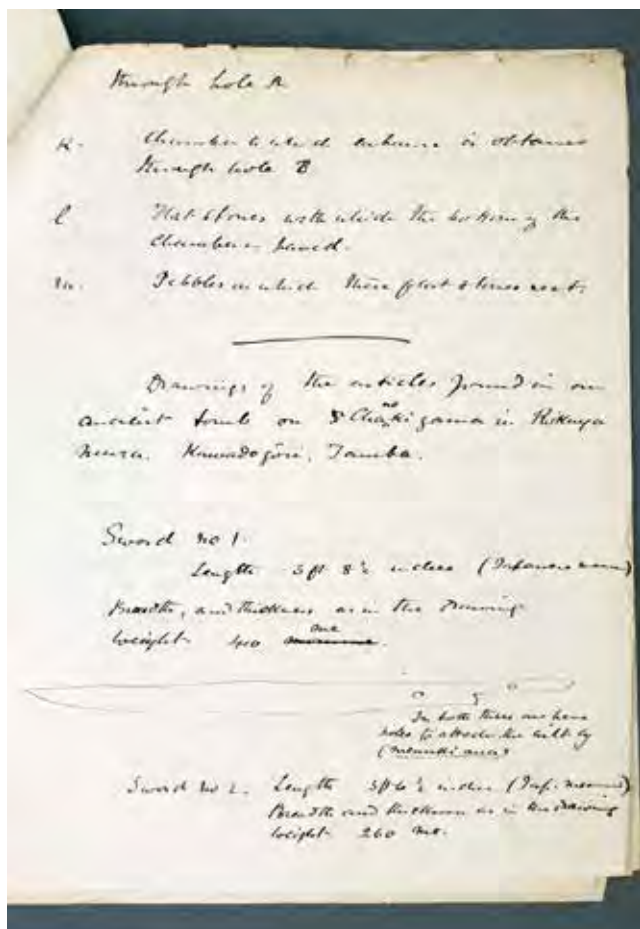
「古墳の分布図」(英A1-1、The British Museum所蔵)



墳丘、横穴式石室各部位と遺物出土状況の説明(英A1-2・A1-4、The British Museum所蔵)



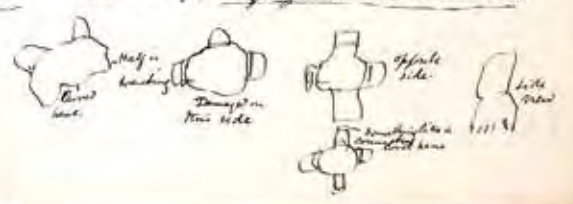
墳丘と横穴式石室図 (英A1-3, The British Museum 所蔵)




横穴式石室各部位と遺物の説明 (鉄刀、馬具) (英A1-5・A1-6, The British Museum 所蔵)

Kit No: 2. The dimensions and rusted appearance <sup>(point back)</sup> e. in the drawing. The harness has similar to the kit shown above. One drawing shows the thickness which varies according to the degree to which it is rusted. <sup>covered from</sup> The post, coloured dark shows also <sup>the same</sup> the copper <sup>parting</sup> has been left.

The following articles seem to belong to the above kit. In all ~~the~~ one of 5 complete articles which have been preserved: the lower is one of 2 smaller articles which have been preserved. Many fragments of similar articles were found. <sup>Some of the fragments</sup> <sup>of the harness</sup> <sup>are shown in the drawing</sup> <sup>and are complete</sup> <sup>They</sup> <sup>are the</sup> <sup>parts</sup> <sup>of a horse saddle cloth.</sup>




<sup>lower</sup>  
3 kind of articles the drawing which is complete.



<sup>lower</sup>  
One of 5 pieces of what seems to have been a saddle <sup>part</sup>.

<sup>to be</sup> <sup>the</sup> <sup>same</sup> <sup>as</sup> <sup>in</sup> <sup>the</sup> <sup>drawing</sup>.



<sup>small</sup>  
A number of gold <sup>shard</sup> paper <sup>of</sup> <sup>the</sup> <sup>same</sup> <sup>metal</sup> <sup>with</sup> <sup>the</sup> <sup>form</sup>, engraved with a fine-scale pattern <sup>is</sup> <sup>as</sup> <sup>in</sup> <sup>the</sup> <sup>drawing</sup>.

① is like a star, but has no hole. <sup>flat</sup> <sup>open</sup>

Two fragments of a dark red head resembling <sup>small</sup> <sup>part</sup> <sup>and</sup> <sup>back</sup> <sup>seam</sup>.

Fragment of a dark red head - front and back views.

Spigot in horn - front back and end view. <sup>is</sup> <sup>covered</sup> <sup>and</sup> <sup>pierced</sup> <sup>with</sup> <sup>a</sup> <sup>hole</sup>.

遺物の説明 (馬具、振り環、双魚佩、玉類など) (英 A1-7・A1-8, The British Museum 所蔵)

Form of a number of spigots resembling fragments of sacrificial bases.

A. There are marked close to small bases have been written off.

breadth of body of base. <sup>about</sup> 5 1/2 inches (top)

height of top 4 1/2 inches.

Total height of form of fragment 1 ft 2 inches <sup>top</sup>.

B. Fragment of lid.

height 1 1/2 inches

height of handle 3 1/2 inches

diameter 3 7/8 inches

C. One of the small bases attached to the body of the larger one.

breadth <sup>of</sup> <sup>width</sup>.

diameter of body 1 7/8 inches

height within 1 7/8 inches

width 1 7/8 inches

D. Fragment showing the form of the lower <sup>off</sup> <sup>from</sup> <sup>the</sup> <sup>lower</sup> <sup>part</sup> <sup>of</sup> <sup>the</sup> <sup>body</sup> <sup>to</sup> <sup>the</sup> <sup>form</sup> <sup>width</sup> <sup>5 1/2</sup> <sup>inches</sup> <sup>from</sup> <sup>the</sup> <sup>top</sup>.

Spigots reconstructed from the above form fragments.

Fragment of a similar vessel with holes pierced in it, but with a different <sup>lower</sup> <sup>part</sup>.

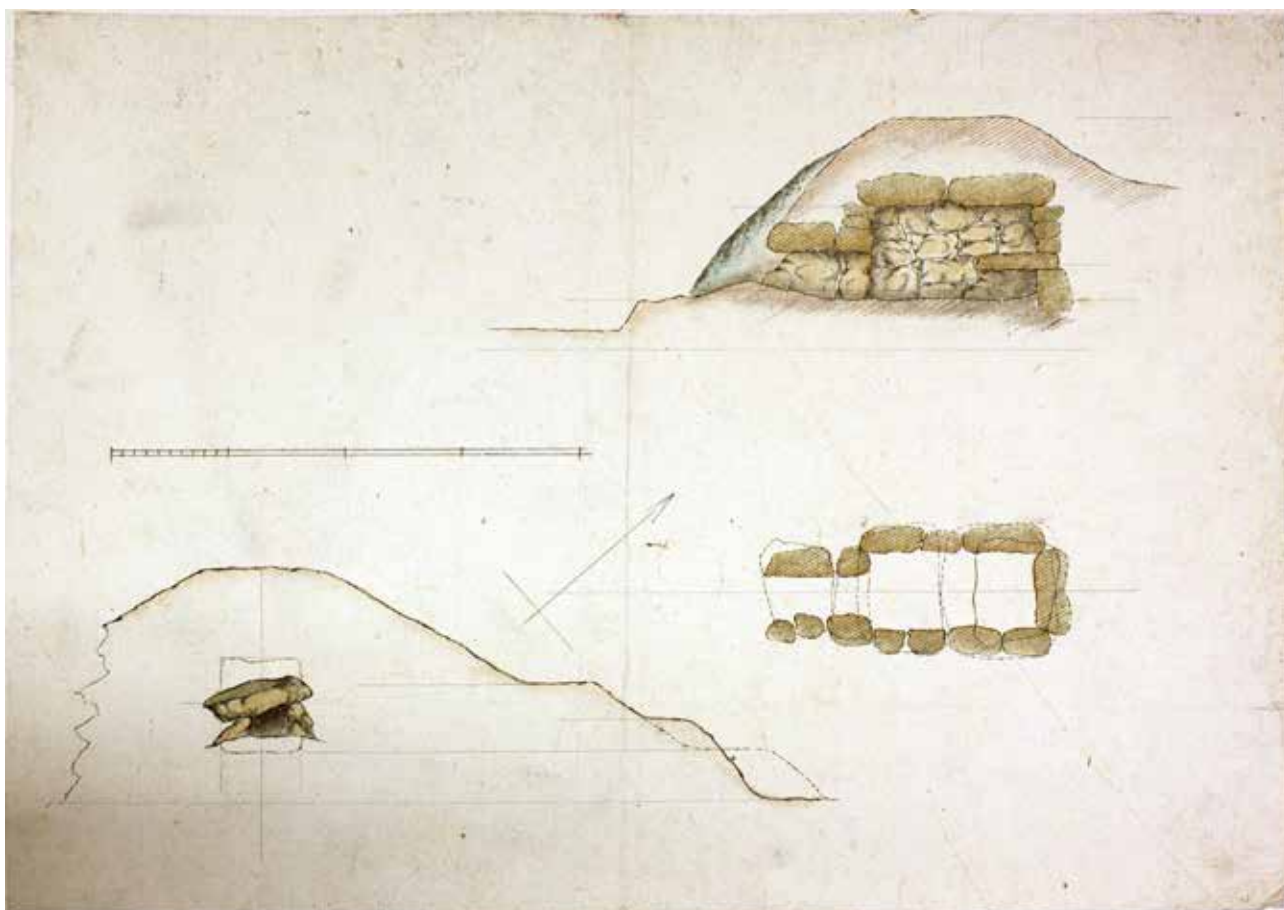
Drawing of what seems a <sup>lower</sup> <sup>part</sup> <sup>of</sup> <sup>the</sup> <sup>same</sup> <sup>as</sup> <sup>above</sup>.

<sup>body</sup> <sup>(above)</sup> <sup>lid</sup> <sup>(below)</sup>

遺物の説明 (須恵器) (英 A1-9・A1-10, The British Museum 所蔵)



鹿谷古墳群の石棚を持つ横穴式石室 [Midozuka (No. 1)] (英 C1-5、The British Museum 所蔵)



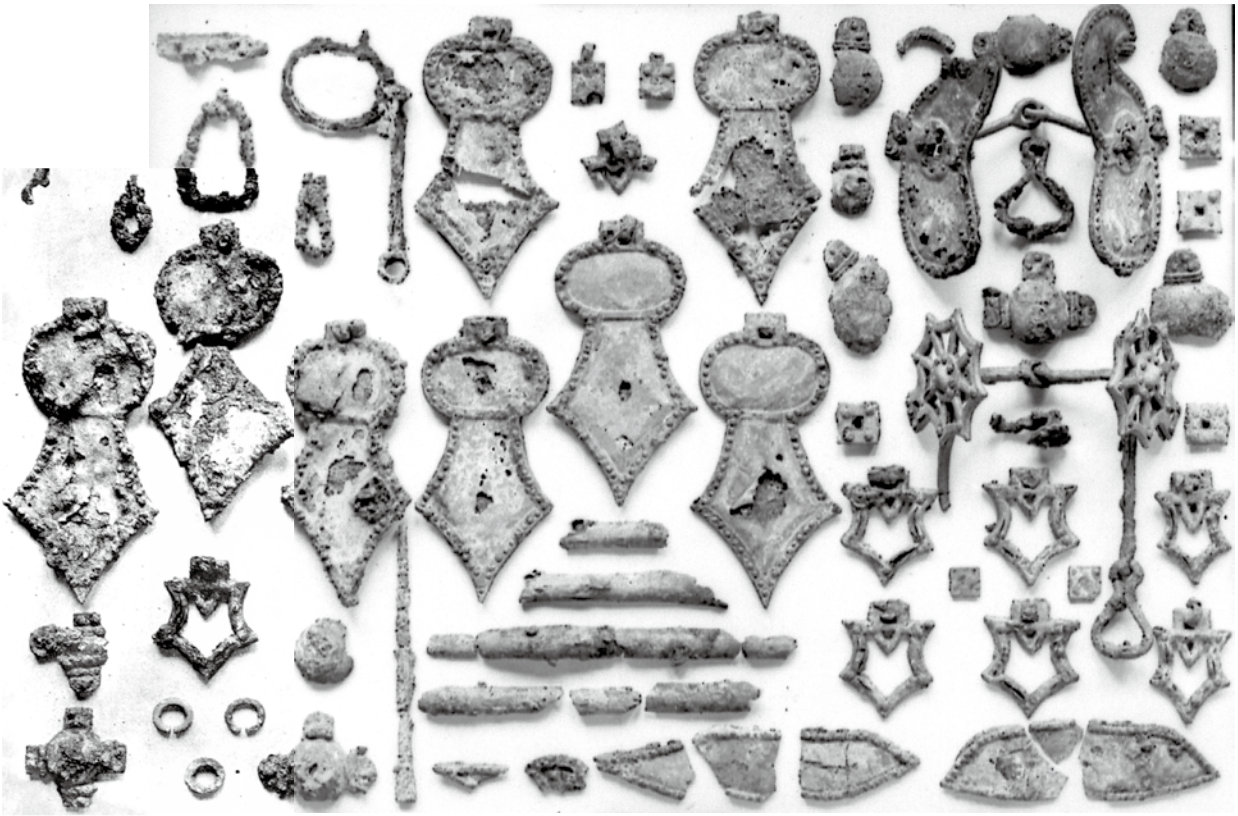
ゴーランドによる Midozuka 古墳の測量図 (英 C1-1、The British Museum 所蔵)



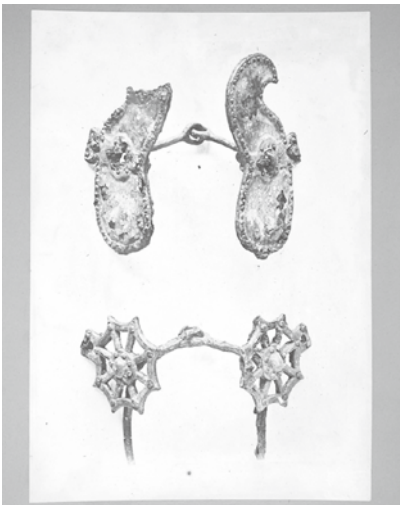
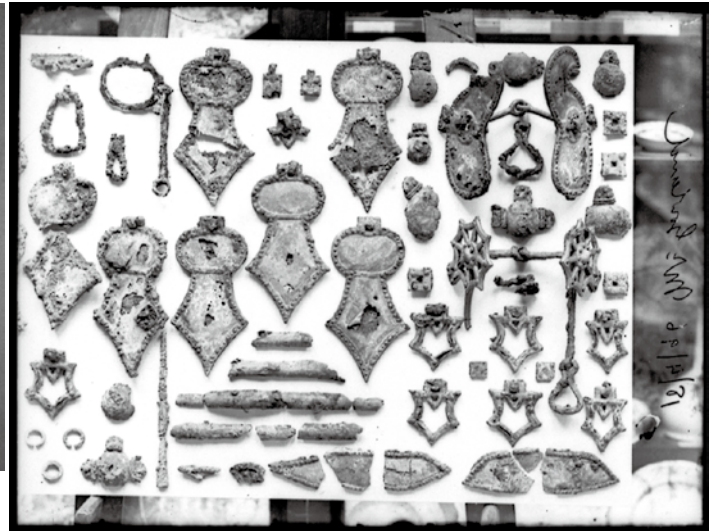
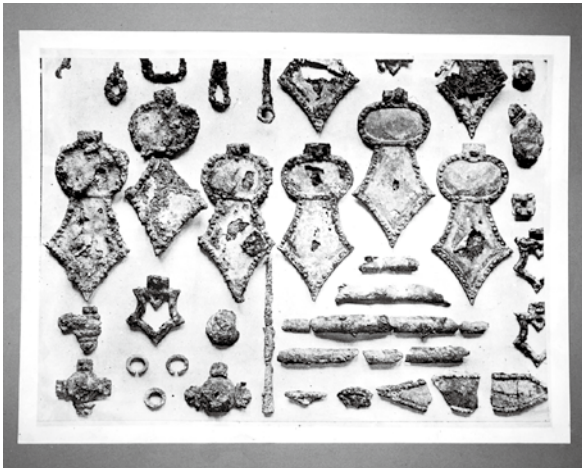
鹿谷古墳群の石棚を持つ横穴式石室 [No. 6] (英C4-2、The British Museum 所蔵)



鹿谷古墳群の石棚を持つ横穴式石室 [No. 3] (英C3、The British Museum 所蔵)



鹿谷古墳ほか出土遺物集合写真 (英C5合成、The British Museum 所蔵)



鹿谷古墳ほか出土遺物集合写真の一部 (中左: 英C5-2、中右: 英C5-1のボジ、The British Museum 所蔵)

鹿谷古墳ほか出土遺物写真 (下左: 英C6-2、下右: 英C7-1のボジ、The British Museum 所蔵)





33-1



33-2

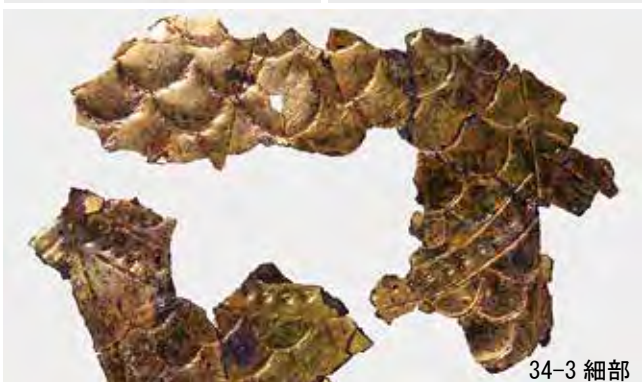


34-1

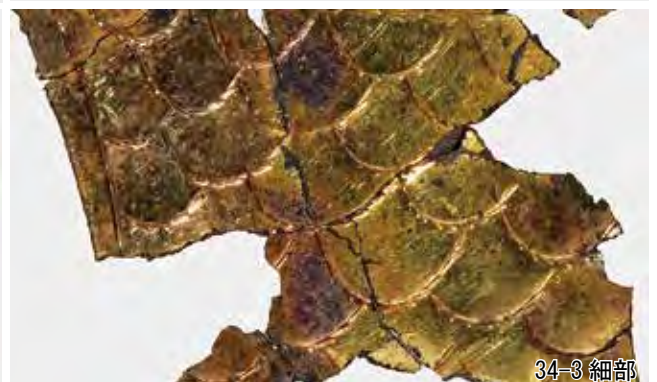


34-2

34-3



34-3 細部



34-3 細部

鉄刀 33-1・2 振り環 34-1 双魚佩 34-2・3、細部 (The British Museum 所蔵)



馬具Aセット (The British Museum 所蔵)



馬具Bセット (The British Museum 所蔵)





八角形鏡板轡 38-1・3 (The British Museum 所蔵)



42-1 42-2 42-3  
劍菱形杏葉 42-1 ~ 3 (The British Museum 所蔵)



42-4



42-5



42-1 裏面



42-2 裏面



42-3 裏面



42-5 裏面

剣菱形杏葉 42-4・5、斜めから・細部 (The British Museum 所蔵)



43-2



43-6



43-5



43-9



43-7



43-7 裏面





鞍金具 39 ~ 41 (The British Museum 所蔵)



44



45-3



45-5



44 爪形脚



44 花文

鉢状雲珠 44 鉢状辻金具 45-3・5、細部 (The British Museum 所蔵)



52-4

52-1・3

52-2



52-5

台付子持壺 52-1・2・4・5 蓋 52-3 (The British Museum 所蔵)



台付子持壺 52-1 蓋 52-3 (The British Museum 所蔵)



52-3



52-8



52-6



52-8 内面



52-7

台付子持壺蓋 52-3 杯蓋 52-6 杯身 52-7 広口壺口縁部 52-8 (The British Museum 所蔵)



南東から



西から



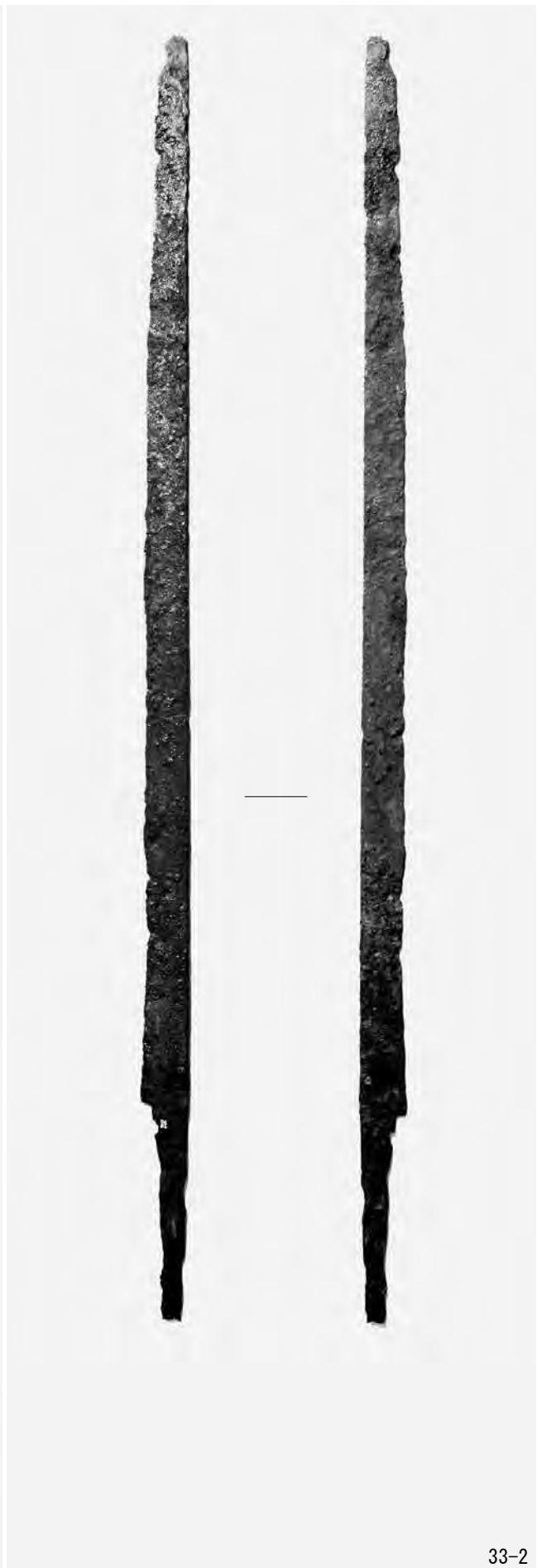
墳丘 北東から



石室付近 南から



33-1



33-2

鉄刀 33-1・2 (The British Museum 所蔵)





34-1



34-2



34-3

振り環 34-1 双魚佩上部金具 34-2 双魚佩魚形金具 34-3 (The British Museum 所蔵)



36-1

f 字形鏡板轡 36-1 (The British Museum 所藏)

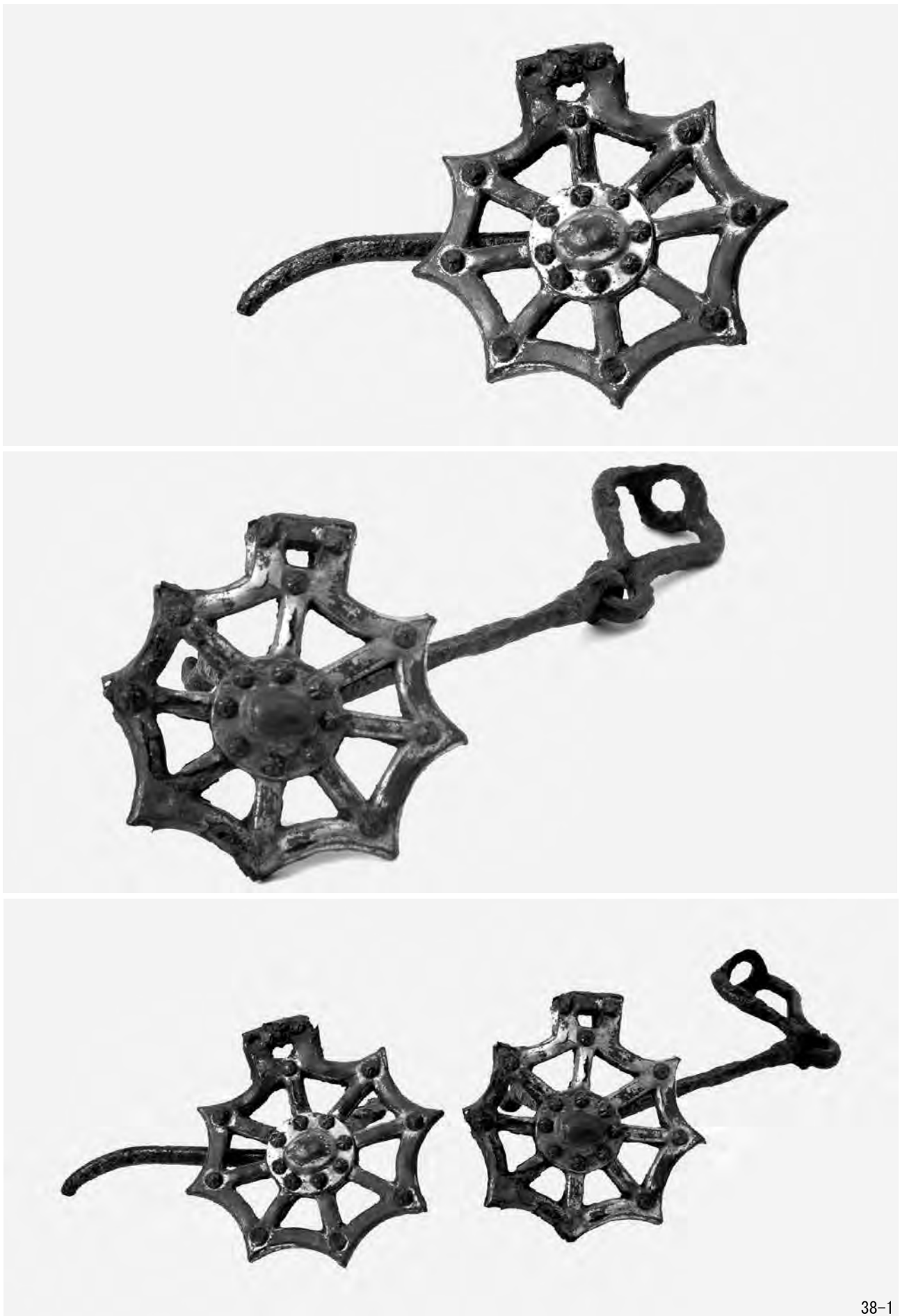


36-2



36-1

f 字形鏡板轡 36-1 引手壺 36-2 (The British Museum 所蔵)



八角形鏡板轡 38-1 (The British Museum 所蔵)



38-1



38-3



38-2



38-1

八角形鏡板轡 38-1 引手壺 38-2 吊金具 38-3 (The British Museum 所蔵)



39-1

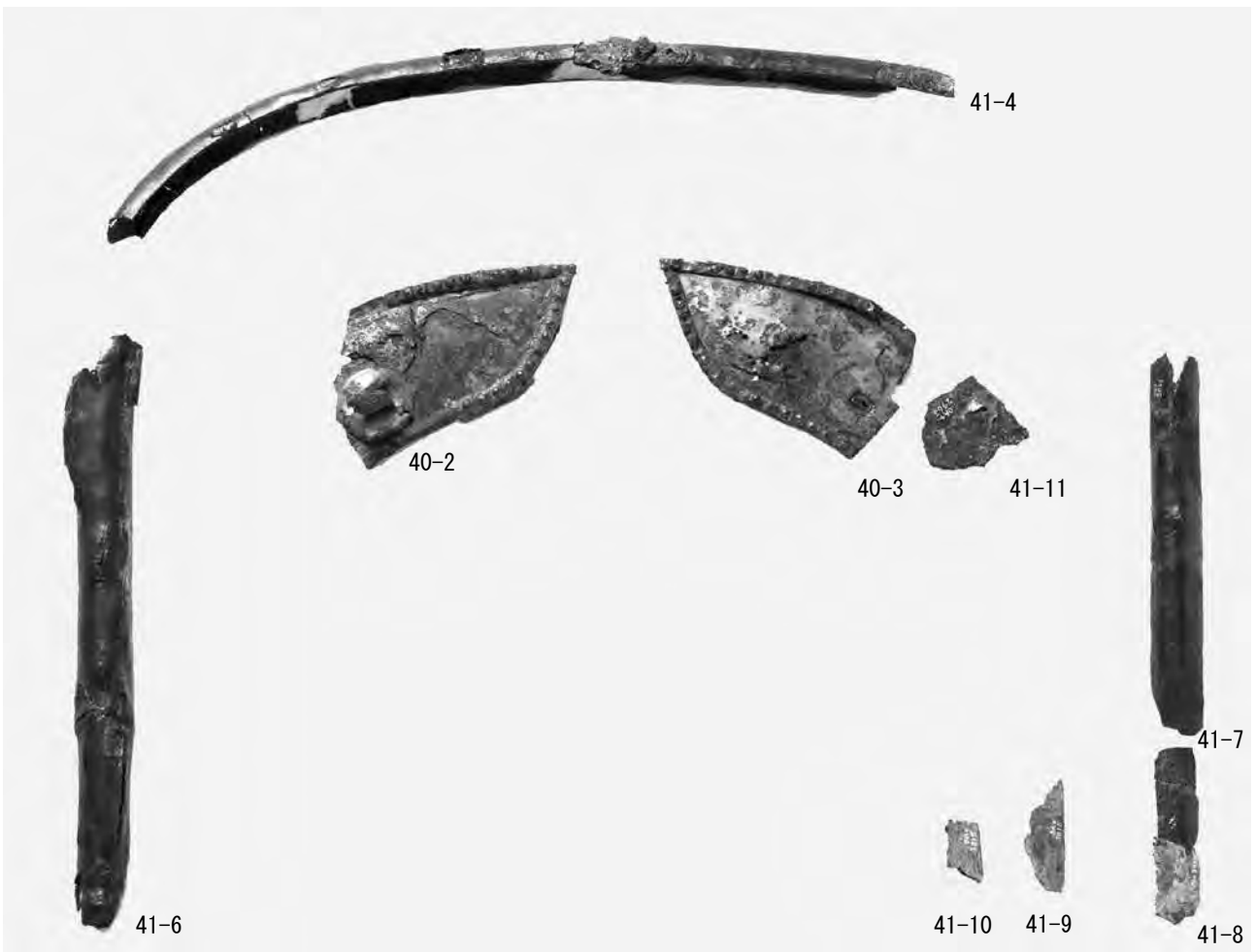
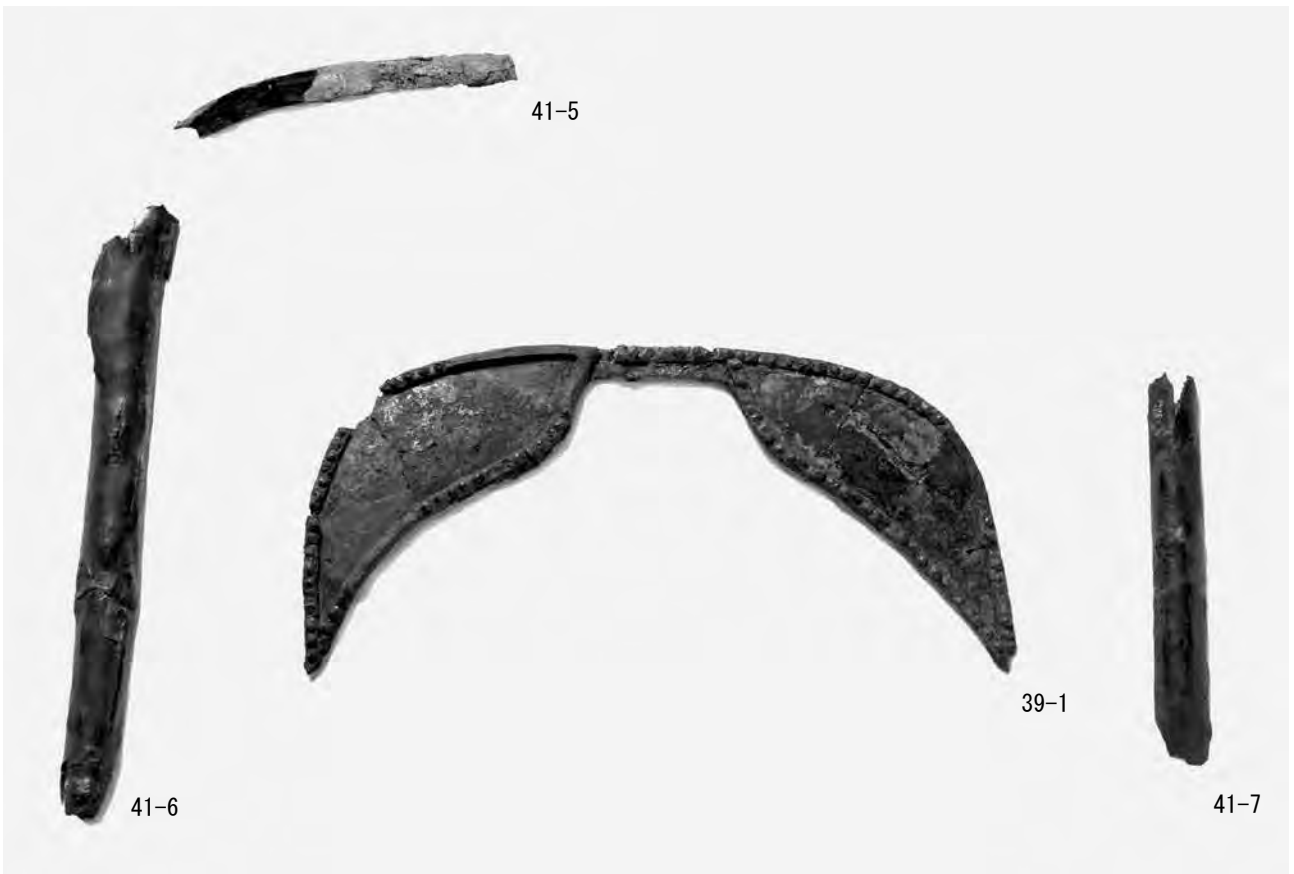


40-3

40-2

41-11

洲浜金具・磯金具（前輪側） 39-1 磯金具（後輪側） 40-2・3、41-11（The British Museum 所蔵）



洲浜金具・磯金具（前輪側）39-1 磯金具（後輪側）40-2・3、41-11 覆輪 41-4～10（The British Museum 所蔵）



42-1



42-2

劍菱形杏葉 42-1・2 (The British Museum 所蔵)





42-3



42-4

劍菱形杏葉 42-3・4 (The British Museum 所藏)



42-5



42-1  
裏面



42-2 裏面



42-3 裏面



42-5 裏面

劍菱形杏葉 42-5、斜めから (The British Museum 所蔵)



43-1



43-2



43-3

五角形杏葉 43-1 ~ 3 (The British Museum 所蔵)



43-4

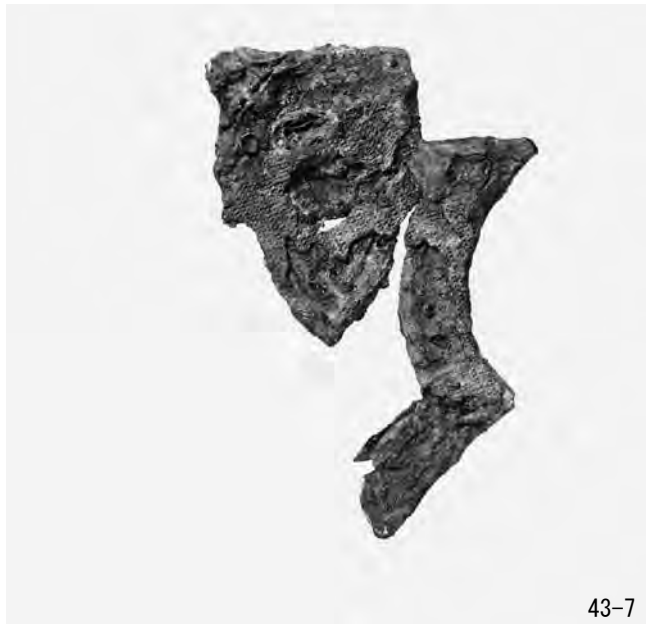


43-5



43-6

五角形杏葉 43-4 ~ 6 (The British Museum 所蔵)



43-7

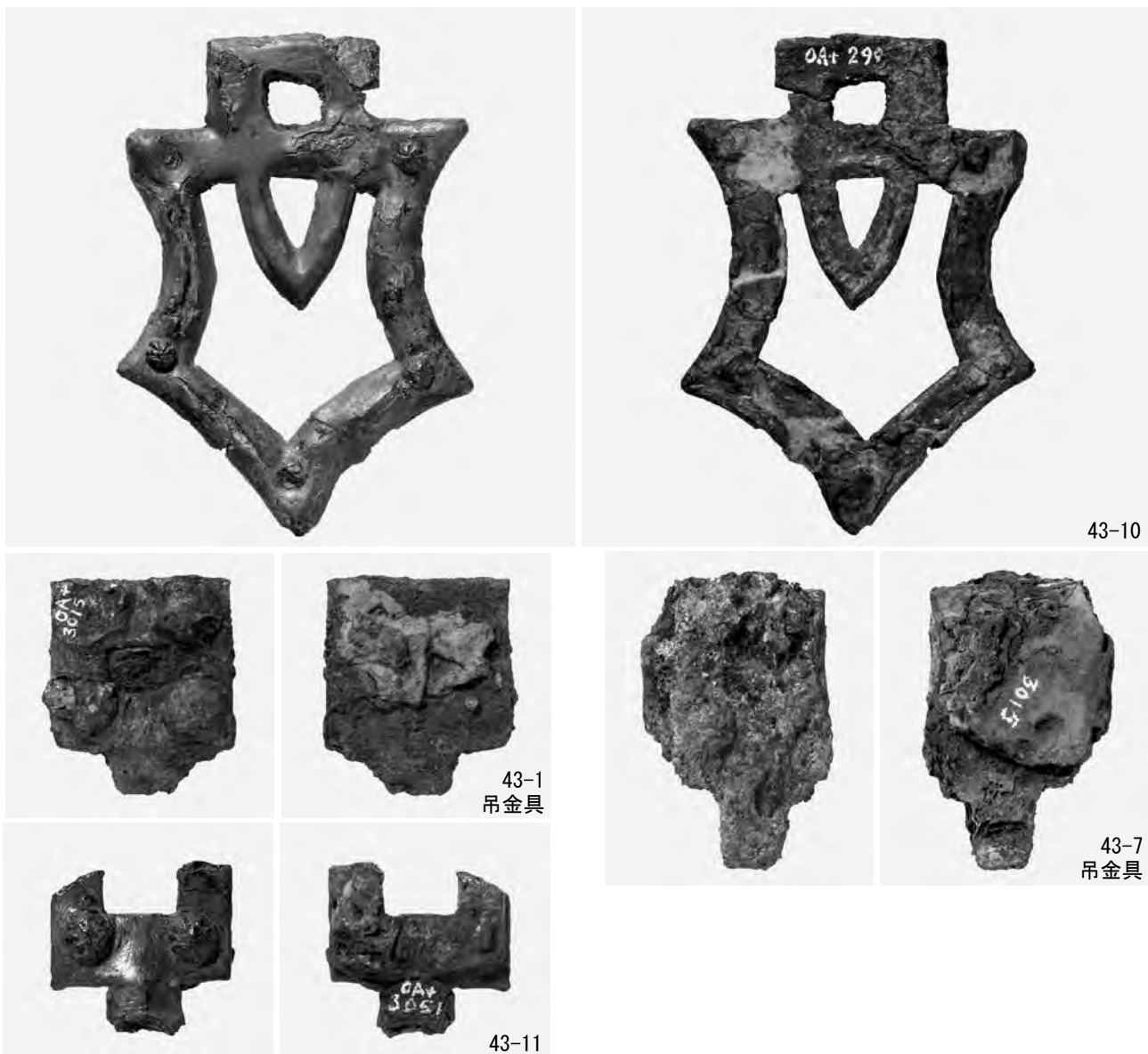


43-8



43-9

五角形杏葉 43-7 ~ 9 (The British Museum 所蔵)

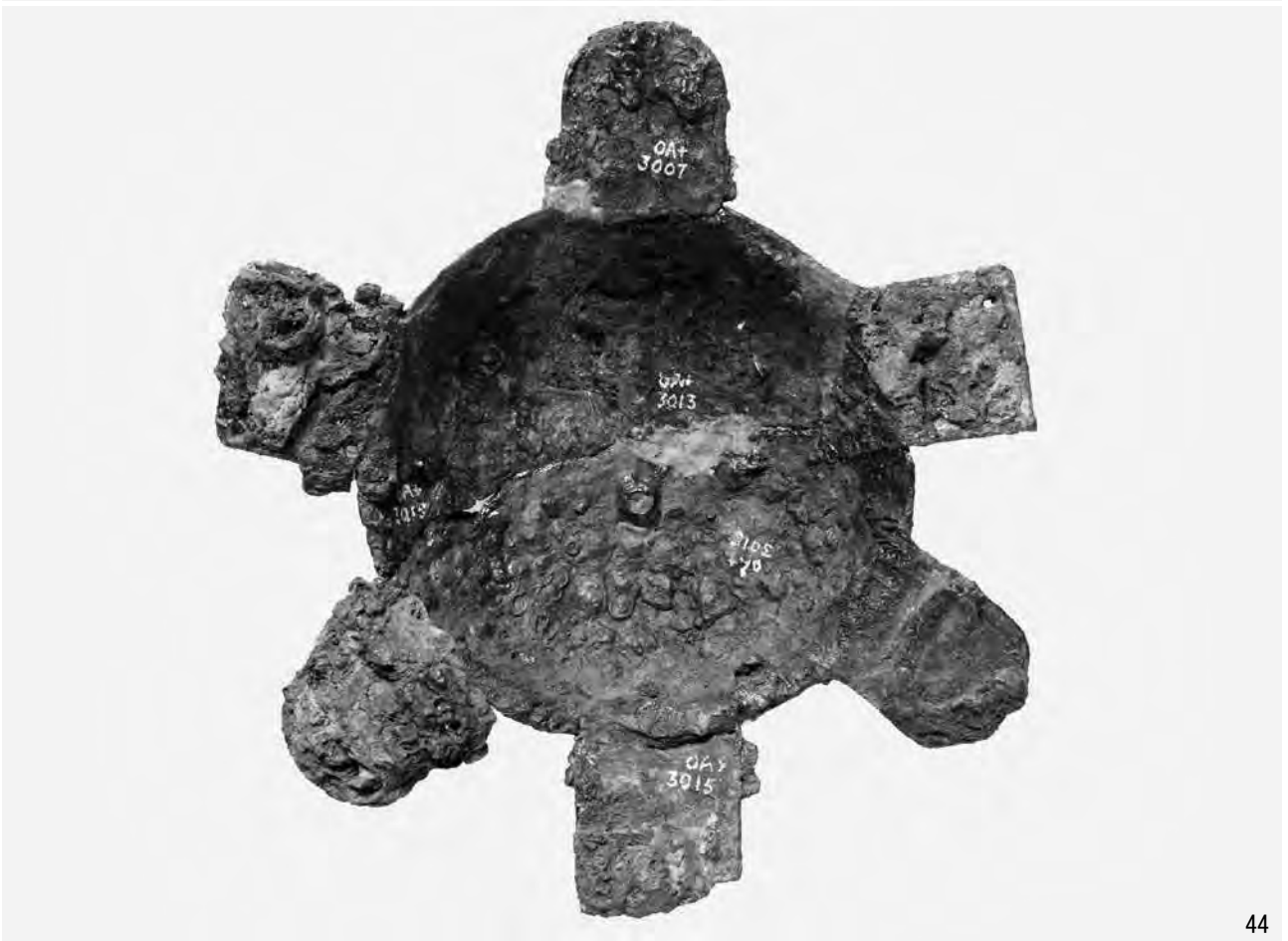


五角形杏葉 43-10 43-1・7 吊金具 吊金具 43-11 (The British Museum 所蔵)

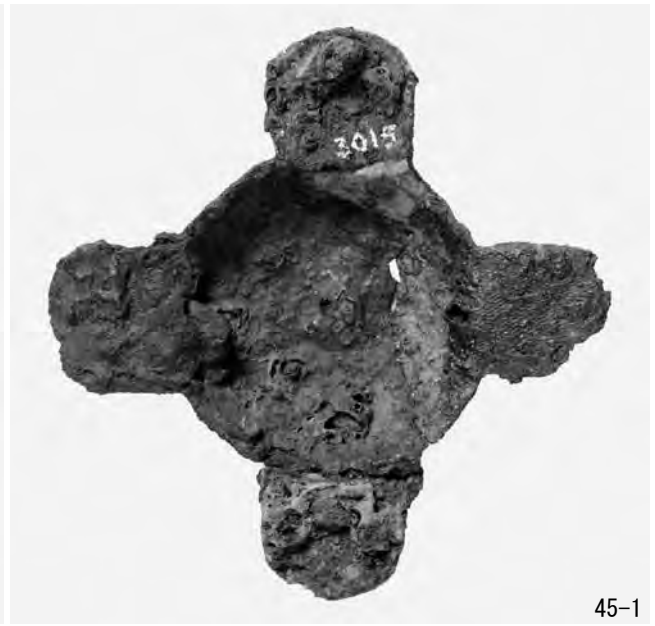


馬具細部 (The British Museum 所蔵)

1 f字形鏡板轡銜(36-1) 2 八角形鏡板裏側(38-1) 3 磯金具鉸脚の折り曲げ・織物(39-1) 4 五角形杏葉鉸脚の折り曲げ(43-4)



鉢状雲珠 44 (The British Museum 所蔵)



45-1



45-2



45-3

鉢状辻金具 45-1 ~ 3 (The British Museum 所蔵)





45-4



45-5



46-6

鉢状辻金具 45-4・5 46-6 (The British Museum 所蔵)



46-7

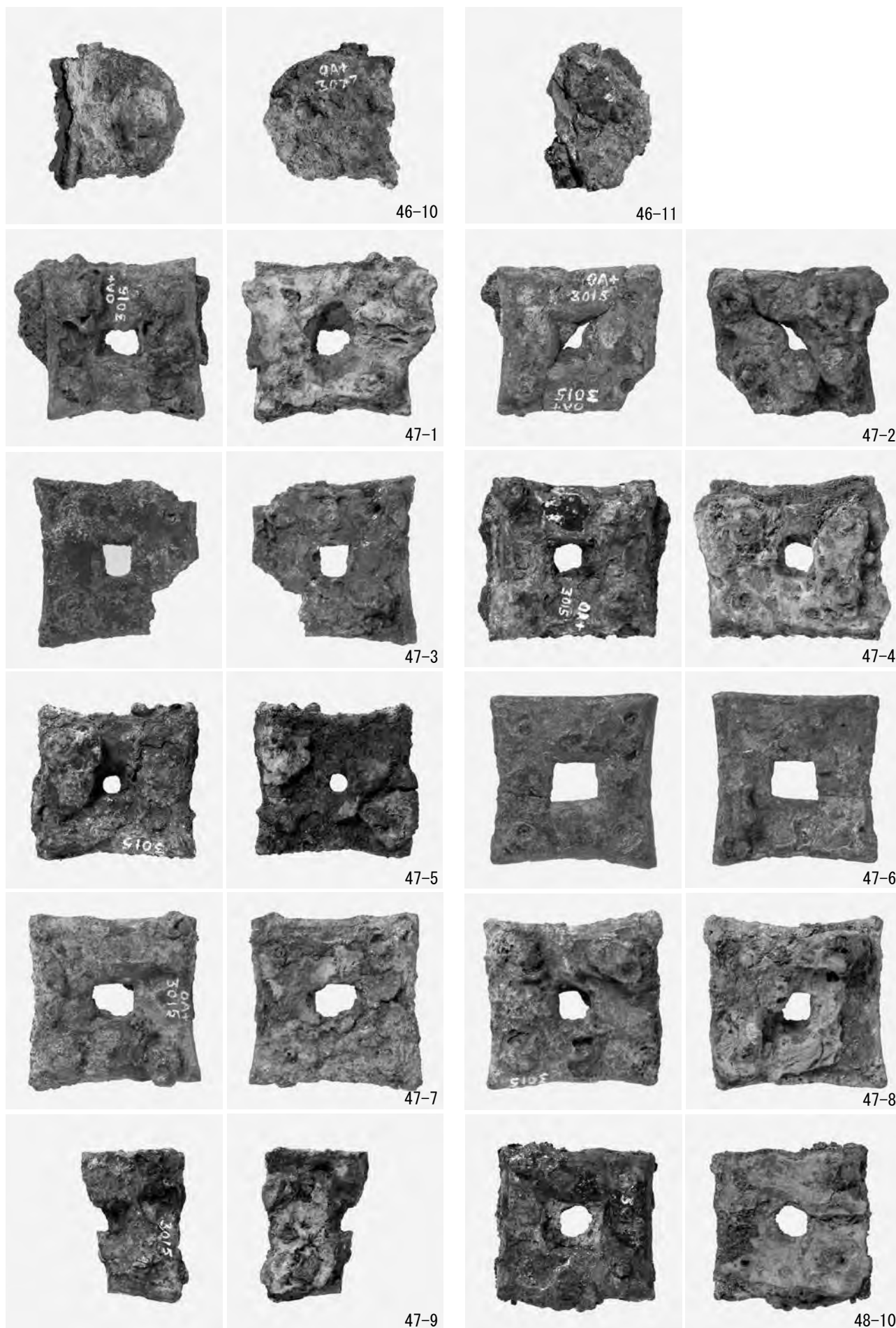


46-8

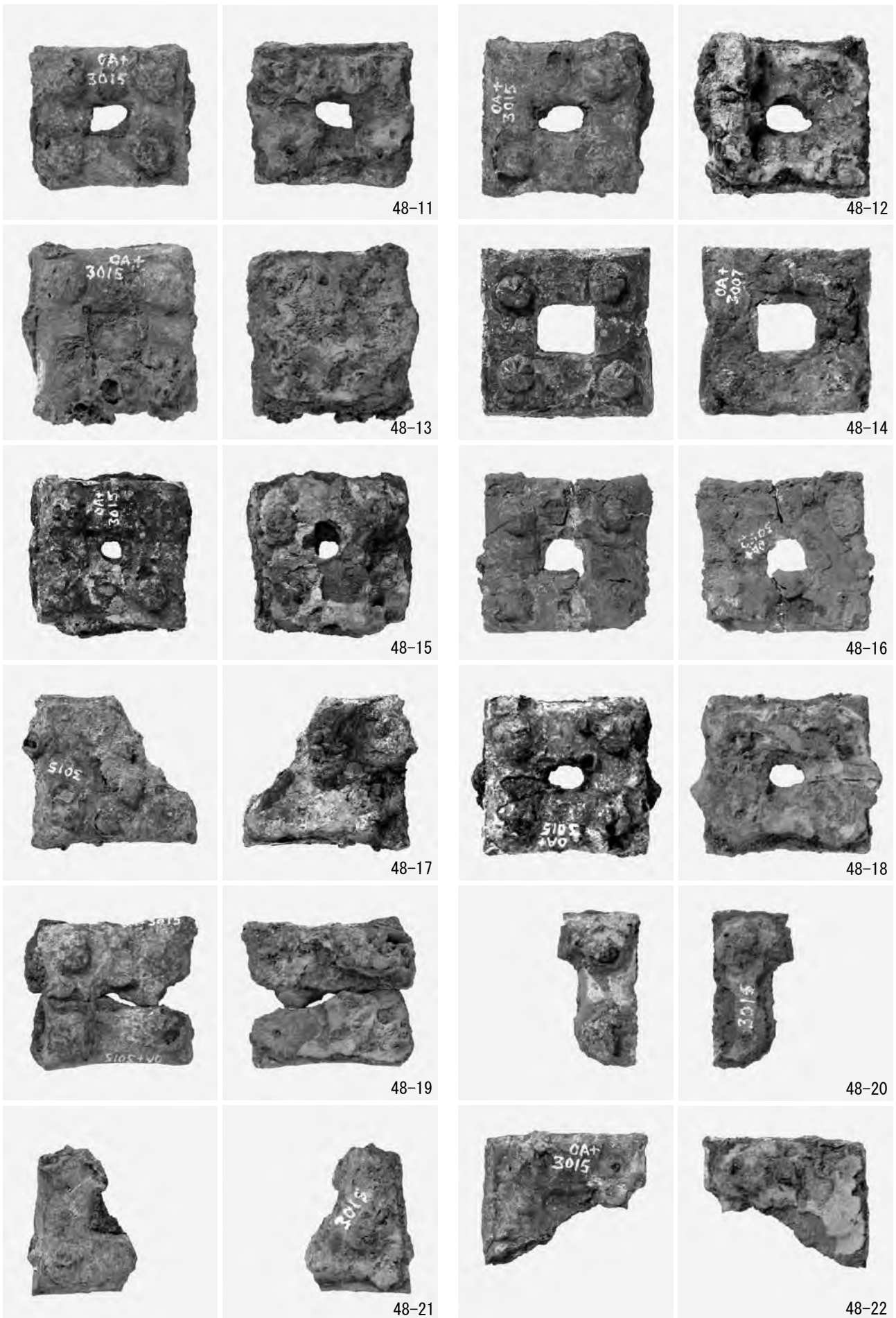


46-9

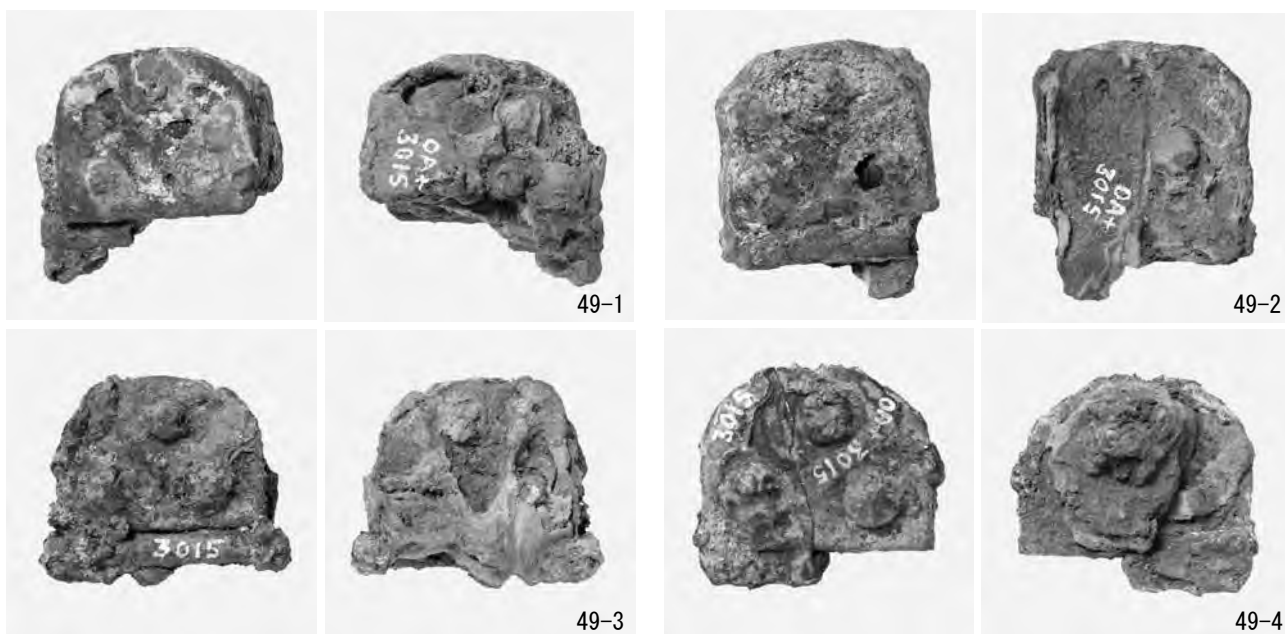
鉢状辻金具 46-7 ~ 9 (The British Museum 所蔵)



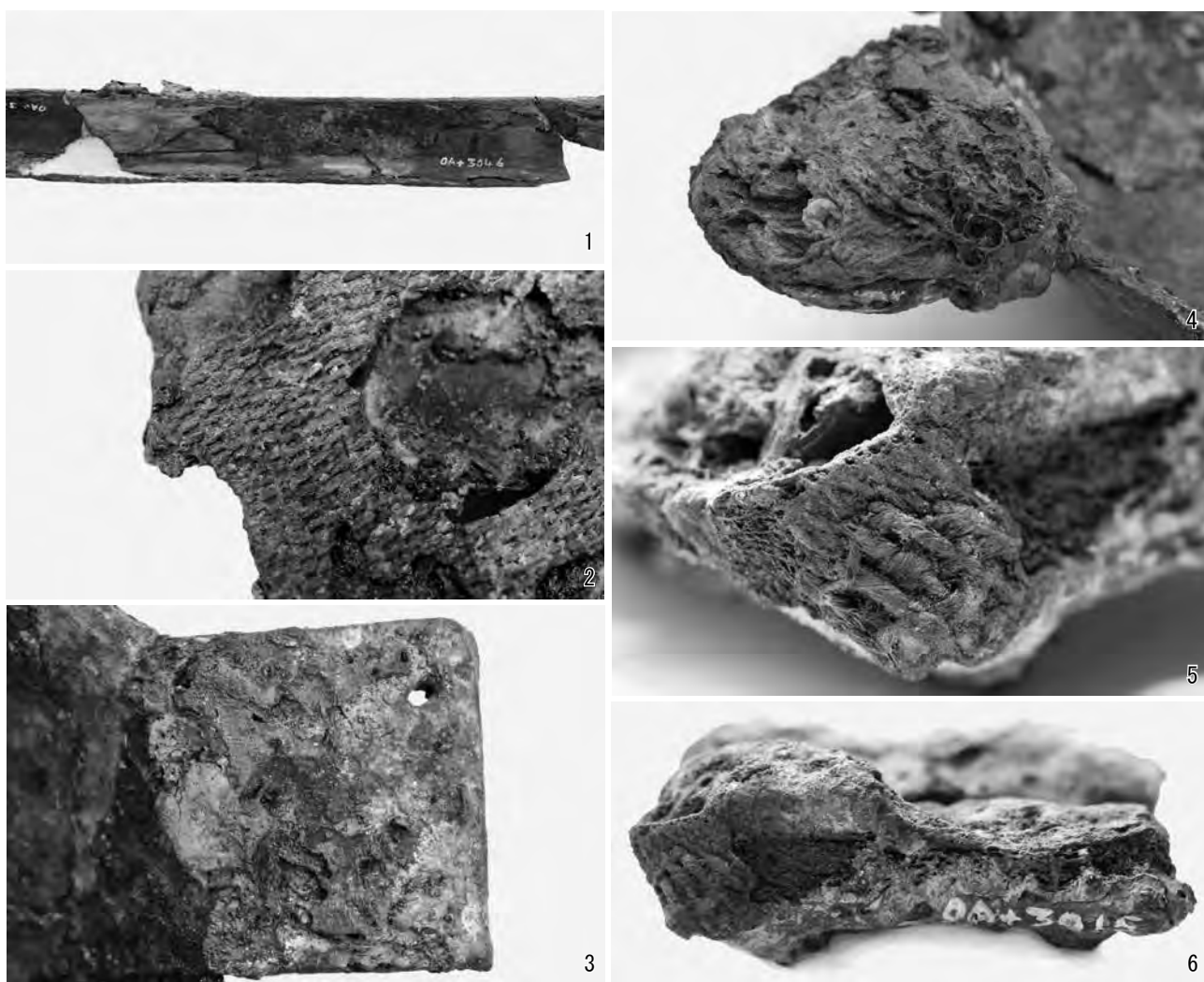
鉢状辻金具 46-10・11 透入方形飾金具 47-1～9 48-10 (The British Museum 所蔵)



透入方形飾金具 48-11 ~ 22 (The British Museum 所蔵)



爪形飾金具 49-1～4 (The British Museum 所蔵)



馬具の有機質細部 (The British Museum 所蔵)

- 1 覆輪内面の木質 (41-4) 2 五角形杏葉裏面の織物 (43-7) 3 鉢状雲珠の繫の織物 (44) 4 鉢状雲珠の繫 (44)  
 5 透入方形飾金具の縁飾 (48-19) 6 透入方形飾金具の別材巻繫と縁飾 (48-19)



52-1

台付子持壺 52-1 (J.1・甲) (The British Museum 所蔵)



52-2

台付子持壺 52-2 (J.3・丁) (The British Museum 所蔵)









52-3



52-8

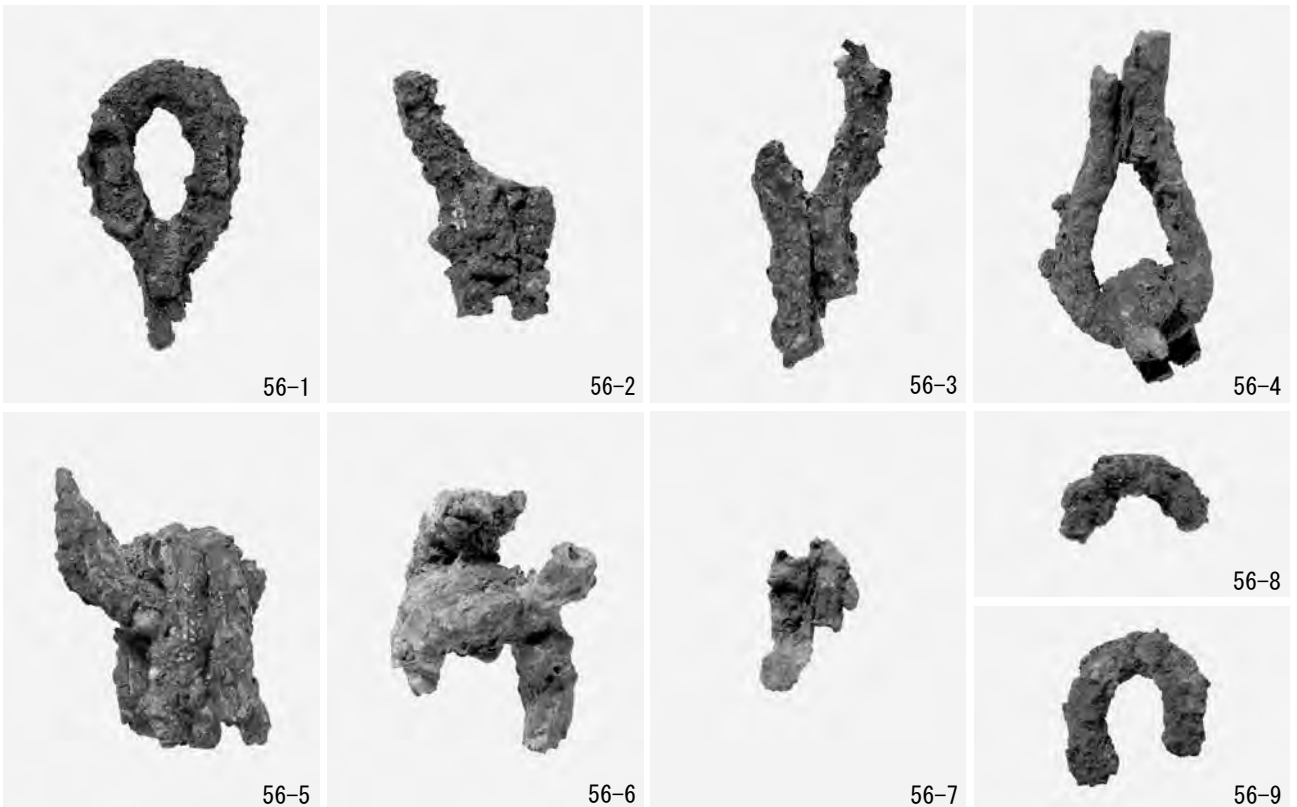
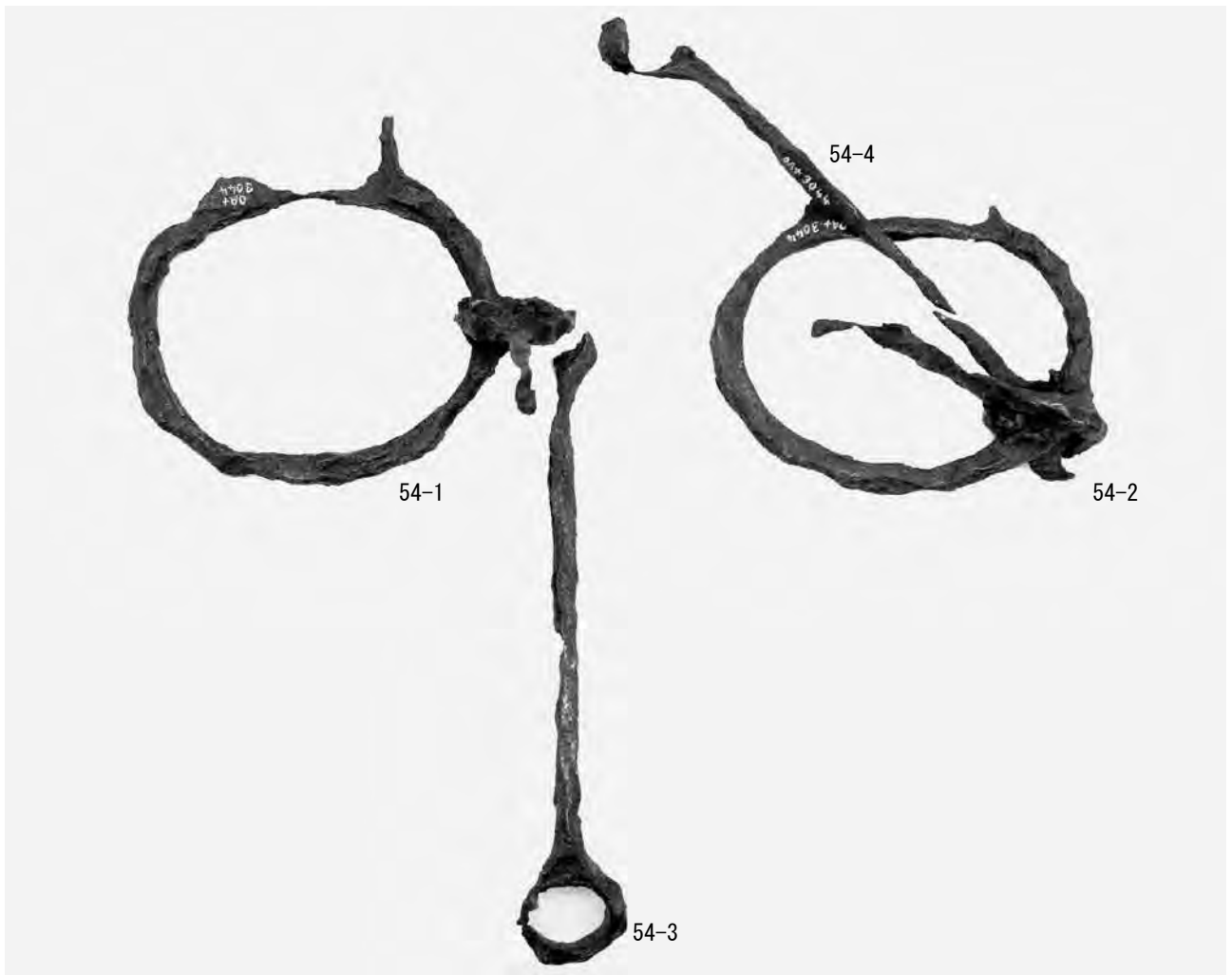


52-6



52-7

台付子持壺蓋 52-3 (J.1・乙) 杯蓋 52-6 (J.4) 杯身 52-7 (J.4) 広口壺口縁部 52-8 (The British Museum 所蔵)



素環轡 54-1 ~ 4 (笹原古墳出土か) 銕鞅 56-1 ~ 9 (56-9は芝山古墳出土か) (The British Museum 所蔵)



劍菱形杏葉 57-1・2 (笹原古墳出土か) (The British Museum 所蔵)

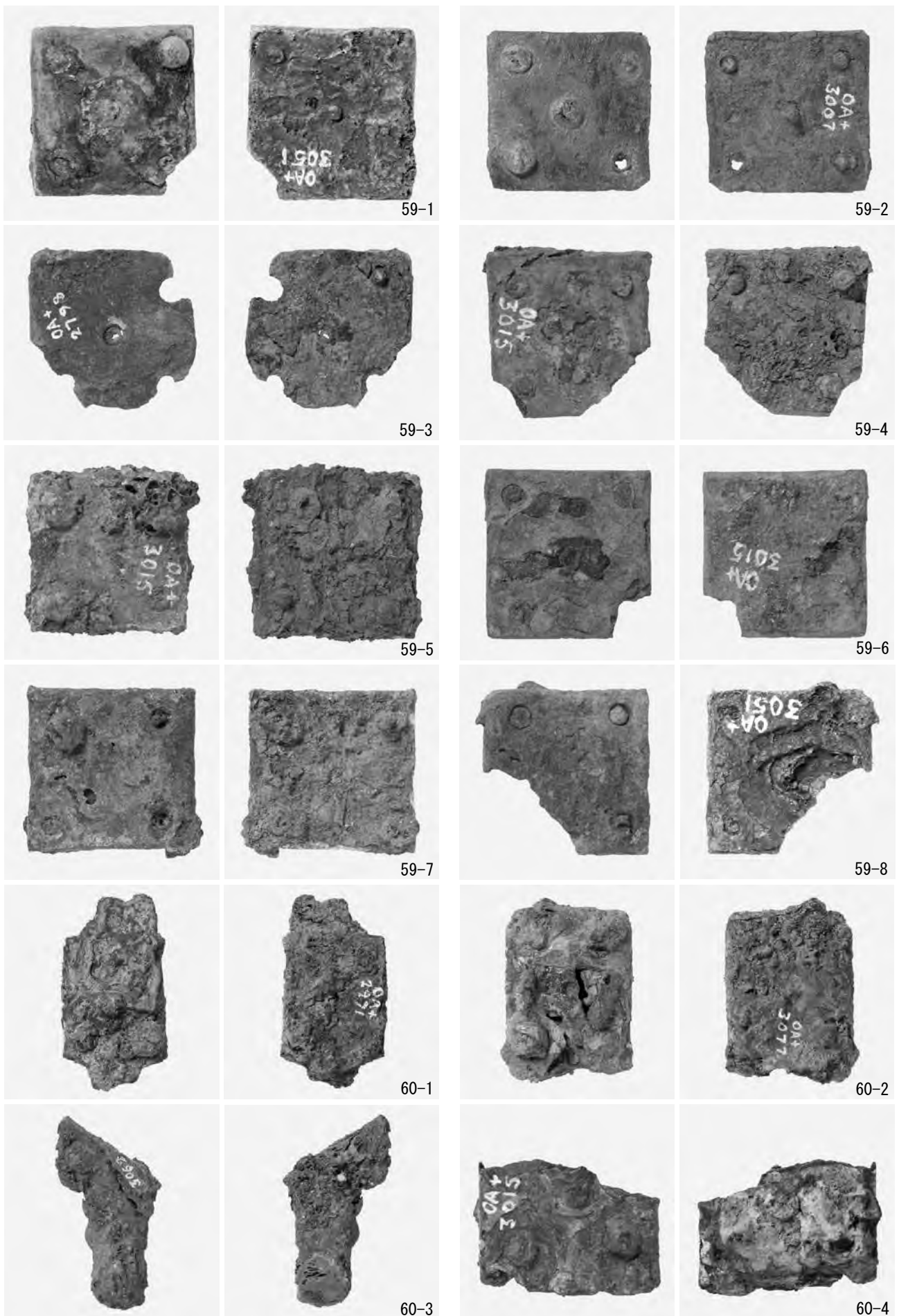


57-3

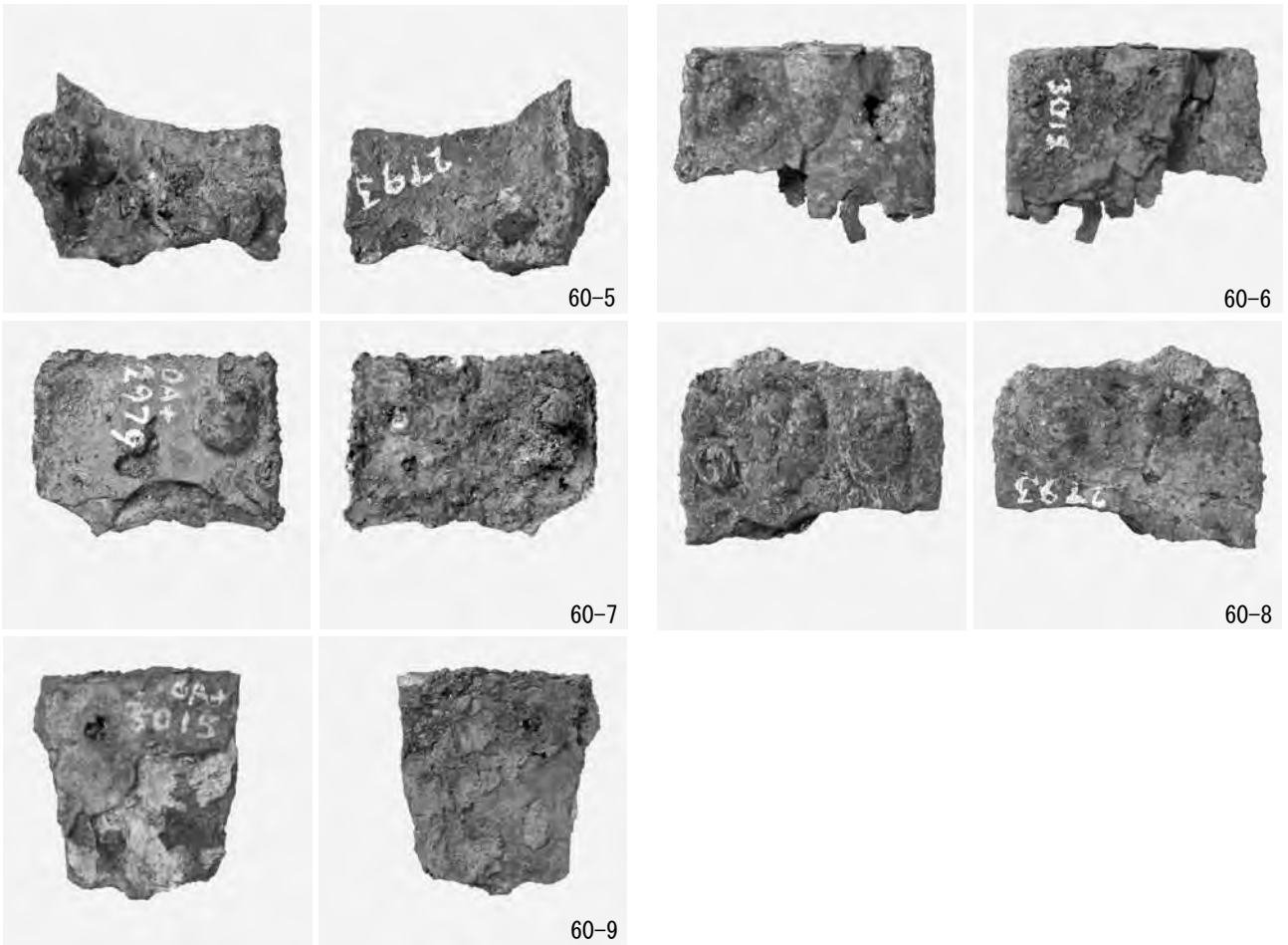


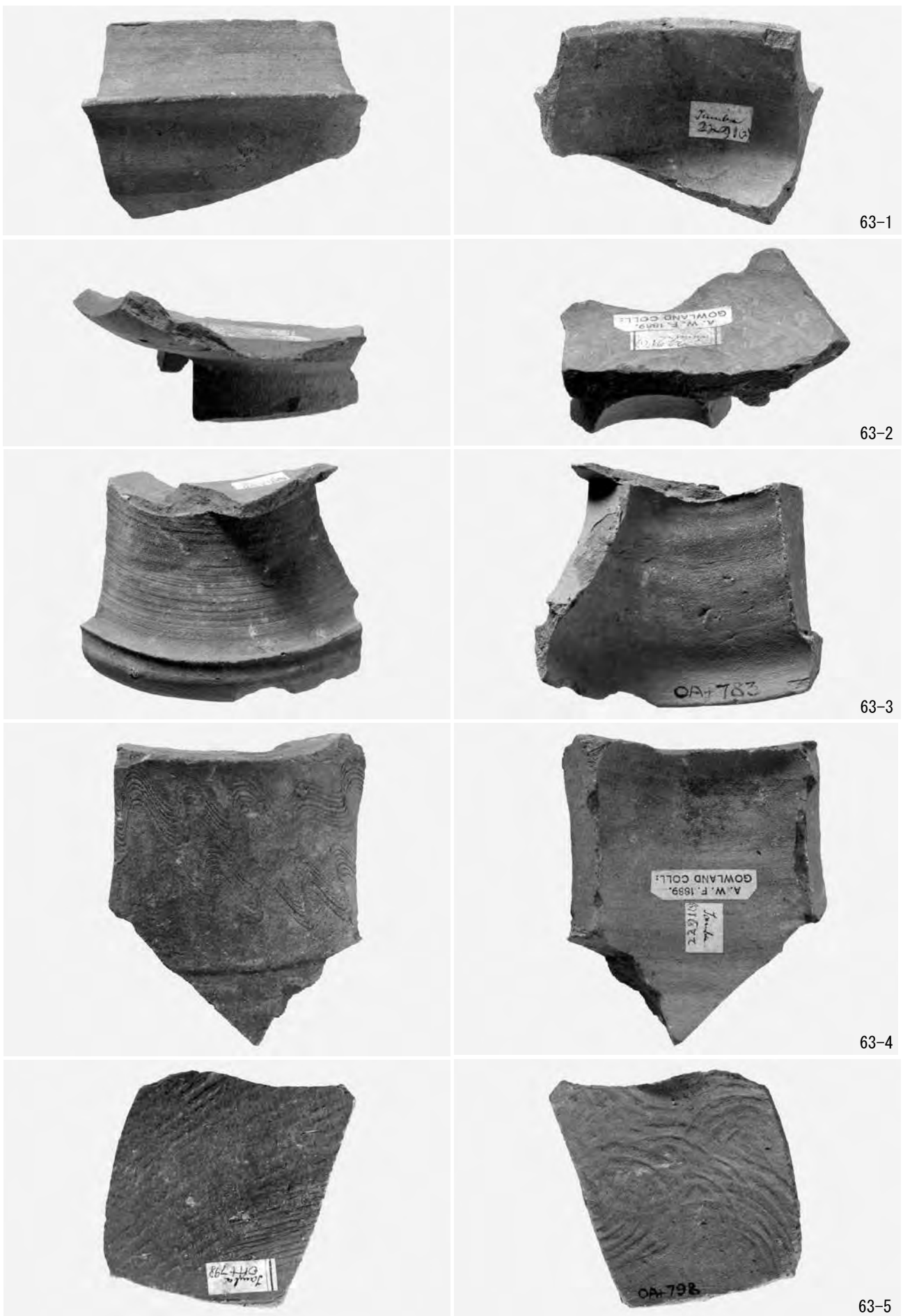
58-1

劍菱形杏葉 57-3 (笹原古墳出土カ) 鉢状辻金具 58-1 (The British Museum 所蔵)



方形飾金具 59-1 ~ 8 吊金具 60-1 ~ 4 (The British Museum 所蔵)





杯身 63-1 高杯杯部 63-2 高杯脚部 63-3 器台脚部 63-4 甕胴部 63-5 (The British Museum 所蔵)



京都府亀岡市

# 鹿谷古墳の研究

ーゴーランド調査古墳の研究2ー

ゴーランド・コレクション調査研究報告書 第2号

発行年月日	2019年3月
発行	ゴーランド・コレクション調査プロジェクト (代表 一瀬和夫 京都橘大学文学部教授) 〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 京都橘大学
印刷	株式会社 明新社 〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地